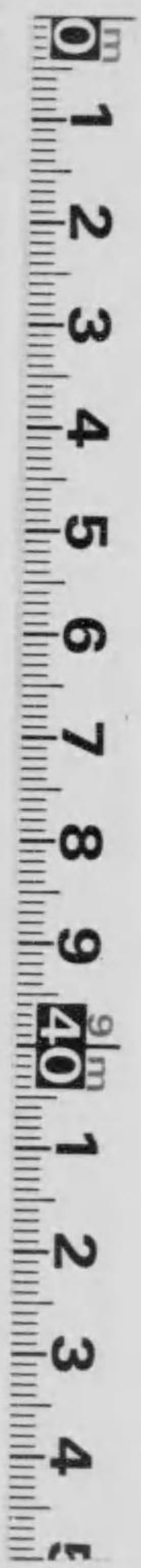


523  
I-55  
⑦



始



2591

523  
I-55

E-23  
22-1

東京帝國大學教授工學博士 伊東忠太序  
內務技師 工學士 井上一之著  
工手學校講師

# 西洋建築史

東京 中央工學會

大正  
14. 4. 8  
丙亥

12744  
自序

建築學を學ぶ者にたり、建築史の概要を會得することは極めて必要なり。然れども未だ良書の以て研學の資たるに足るものなし。著者爰に鑑みる所あり、公務の餘暇に稿を起し西洋建築史の概要を述べて、些か初學者に便する所あらんとす。

著者素より淺學菲才、豈に敢て此の期待に副ふを期せんや。然りと雖も有識の士、深く其の材能を藏して世に表すなくんば、何れの日か能く此の弊を救ふを得ん。是れ著者をして其の才を付り、力を度るに遑あらしめざる所以なり。

内容杜撰、引用淺薄、且つ繁簡其の當を得ず、本書に改良の餘地極めて多きを信ず。幸に識者の指摘を受くるを得ば、著者の光榮之に過ぎざるなり。

本書編纂に當り、恩師東京帝國大學教授工學博士伊東忠太先生が、公務の繁なるにも拘らず序文を賜はりしことは、著者の深く光榮とする所にして特に之を記し、謹んで感謝の意を表す。

大正十四年三月一日

東京市外目黒に於て

井上 一之

自序

18-752

### 凡 例

- 一 本書は工手學校、工藝學校、工業學校、高等工業學校、其の他の諸學校に於ける教科書用、参考書用に充つる目的を以て編纂したるものなれど、其の他の目的に用ふるも妨なからんことを期せり。
- 一 本書には、多數の寫眞、圖面を挿入して讀者の興味を喚起し、其の記憶に便ならしめんことを努めたり。
- 一 本書に用ひたる譯語は、建築學會編纂建築語彙に従へり。
- 一 本書には、つとめて原語を挿入せり。更らに進んで建築史を研究せんとする士にとりて、多大の便宜ありと信ず。
- 一 本書を教科書として採用せられたる場合は、圖面中にある原語について、教官の方々が學生、生徒に説明せられんことを望む。
- 一 本書に引用又は参考したる書名は次の如し。各著者に對し深く感謝す。

Durum and others, Handbuch der Architektur.

凡 例

- Ferguson, History of Architecture in all Countries.
- Fletcher and Flecher, A History of Architecture.
- Gwilt, Encyclopedia of Architecture.
- Hanlin, A History of Architecture.
- Kimball and Edgell, A History of Architecture.
- Lübke, Geschichte der Architektur.
- Simpson, A History of Architectural Development.
- Surgis and Frothingham, History of Architecture.
- Wynne, Architecture.
- 伊東博士 西洋建築史講義
- 建築學會 英和建築語彙

# 西洋建築史 目次

## 緒論

- 一 建築物……………一
- 二 建築史……………一
- 三 建築様式……………二
- 四 建築構造の原理……………二
- 五 建築史の分類……………三
- 第一 原始建築……………三
- 六 原始建築……………四

## 第二 埃及建築

- 七 概説……………四
- 八 地理……………七
- 九 氣候……………七
- 一〇 建築材料……………八
- 一一 宗教、哲學、政治……………九
- 一二 埃及の興廢……………一〇
- 一三 スフィンクス……………二
- 一四 マスタバ及びピラミッド……………三

一五 オペリスク……………一五  
 一六 コロス……………一六  
 一七 神 殿……………一六  
 一八 墳 墓……………二二  
 一九 埃及建築の特色……………三三

第三 西亞細亞建築

二〇 概 説……………三五  
 (一) バビロン建築……………三六  
 二一 バビロンの文明……………三六  
 二二 神 殿……………三六  
 (二) アッシリア建築……………三七  
 二三 アッシリアの文明……………三七  
 二四 宮 殿……………三七

(三) ペルシア建築……………三九  
 二五 ペルシアの文明……………三九  
 二六 宮 殿……………三九  
 二七 墳 墓……………三〇  
 二八 亞細亞建築の特色……………三一  
 (四) 猶太建築……………三三  
 二九 概 説……………三三  
 三〇 猶太建築の特色……………三三

第四 希臘建築

三一 概 説……………三四  
 三二 地 理……………三四  
 三三 氣候及び建築材料……………三五  
 三四 風俗及び宗教……………三五

三五 希臘建築の各時代……………三七  
 (一) 前期ヘレネス時代……………三七  
 三六 クノッスの宮殿……………三六  
 三七 城壁及び石牆……………三九  
 三八 アトレウスの墳墓……………四〇  
 三九 獅子門……………四〇  
 (二) ヘレネス時代……………四〇  
 四〇 オーダー……………四〇  
 四一 ドリツク式……………四一  
 四二 アイオニア式……………四二  
 四三 コリンス式……………四三  
 四四 神殿の形式……………四四  
 四五 神殿の構造……………四六  
 四六 線 形……………五一

四七 裝飾模様と彩色……………五一  
 四八 バルテノン神殿……………五一  
 四九 デュース・オリンピアスの神殿……………五二  
 五〇 エレクテオン神殿……………五二  
 五一 リシクラテスの司樂紀念塔……………五三  
 五二 劇場及び奏樂場……………五三  
 五三 競走場及び競馬場……………五三  
 五四 アゴラ(市場)及びストア(柱廊)……………五九  
 五五 プロピレー……………五九  
 五六 墳 墓……………六〇  
 五七 宮殿及び住宅……………六〇  
 五八 希臘建築の特色……………六一

第五 エトルリア建築

五九 概 説……………六  
 六〇 神 殿……………六  
 六一 墳 墓……………六  
 六二 エトルリア建築の特色……………六

第六〇羅馬建築

六三 概 説……………六  
 六四 地理及び氣候……………六  
 六五 建築材料……………六  
 六六 伊太利の統一……………六  
 六七 羅馬のオーダー……………六  
 六八 オーダーの使用法……………六  
 六九 アークード……………六  
 七〇 穹窿構造法……………六

七一 壁體の構造……………六  
 七二 装 飾……………七  
 七三 神 殿……………七  
 七四 グエスタの神殿……………七  
 七五 パンテオン……………七  
 七六 フオラム……………七  
 七七 バシリカ……………七  
 七八 浴 場……………七  
 七九 娛樂場……………七  
 八〇 凱旋門及び記念柱……………七  
 八一 墳 墓……………七  
 八二 宮殿及び住宅……………七  
 八三 水道、橋梁及び道路……………七  
 八四 噴 泉……………七

八五 羅馬建築の特色……………八

第七 初期基督教建築

八六 概 説……………九  
 八七 宗教及び政治……………九  
 八八 バシリカ教會堂……………九  
 八九 洗禮堂……………九  
 九〇 墳 墓……………九  
 九一 シリア建築……………九  
 九二 初期基督教建築の特色……………九

第八 ビザンチン建築

九三 概 説……………九  
 九四 地理、氣候……………九  
 目 次……………九

九五 建築材料……………一〇  
 九六 構 造……………一〇  
 九七 圓 蓋……………一〇  
 九八 装 飾……………一〇  
 九九 プラン……………一〇  
 一〇〇 教會堂……………一〇  
 一〇一 ビザンチン式の波及……………一〇  
 一〇二 ビザンチン建築の特色……………一〇

第九 サラセン建築

一〇三 概 説……………一一  
 一〇四 サラセン帝國の興廢……………一一  
 一〇五 サラセンの文化……………一一  
 一〇六 建築材料……………一一

一〇七 宗教建築……………二四

一〇八 非宗教建築……………二五

一〇九 アラビア・サラセン……………二六

一一〇 シリア・サラセン……………二六

一一一 埃及サラセン……………二七

一一二 西班牙サラセン……………二八

一一三 波斯サラセン……………二九

一一四 土古サラセン……………二九

一一五 印度サラセン……………三〇

一一六 サラセン建築の特色……………三四

第十 ローマネスク建築

一一七 概 説……………二六

(一) 伊太利ローマネスク……………二六

一一八 伊太利ローマネスク……………二七

一一九 中央伊太利……………二七

一二〇 北部伊太利……………二七

一二一 南部伊太利及びシシリー……………二七

一二二 伊太利ローマネスクの特色……………二七

(二) 佛蘭西ローマネスク……………二六

一二三 佛蘭西ローマネスク……………二六

一二四 南部佛蘭西……………二七

一二五 北部佛蘭西……………二七

一二六 佛蘭西ローマネスクの特色……………二六

(三) 獨逸ローマネスク……………二四

一二七 獨逸ローマネスク……………二四

一二八 獨逸ローマネスクの特色……………二四

(四) 英吉利ローマネクス……………二五

一二九 英吉利ローマネスク……………二五

一三〇 アングロ・サクソン式建築……………二五

一三一 アングロ・サクソン式の特色……………二五

一三二 ノルマン式建築……………二五

一三三 ノルマン式建築の特色……………二五

一三四 ローマネスク穹窿造……………二五

一三五 ローマネスク建築の特色……………二五

一三六 僧房建築……………二五

第十一 ゴシック建築

一三七 概 説……………二五

(一) 英吉利ゴシック……………二五

一三八 英吉利ゴシック……………二五

一三九 古英期に於ける特色……………二五

一四〇 古英期の實例……………二五

一四一 盛飾期に於ける特色……………二六

一四二 盛飾期の實例……………二六

一四三 垂直期に於ける特色……………二六

一四四 垂直期の實例……………二六

一四五 僧房建築……………二六

一四六 城 塞……………二六

(二) 佛蘭西ゴシック……………二六

一四七 佛蘭西ゴシック……………二六

一四八 大 寺……………二七

一四九 僧房建築……………二七

一五〇 城 塞……………二七

一五一 其他の建築物……………二七

一五二 佛蘭西ゴシックの特色……………二七



(三) 獨逸ゴシック……………一八二

一五三 獨逸ゴシック……………一八二

一五四 大 寺……………一八三

一五五 獨逸ゴシックの特色……………一八五

(四) 伊太利ゴシック……………一八七

一五六 伊太利ゴシック……………一八七

一五七 伊太利ゴシックの實例……………一八七

一五八 伊太利ゴシックの特色……………一八七

(五) 西班牙ゴシック……………一八七

一五九 西班牙ゴシック……………一八七

一六〇 大 寺……………一八七

一六一 西班牙ゴシックの特色……………一八七

(六) 白耳義及び和蘭ゴシック……………一八七

一六二 白耳義及び和蘭ゴシック……………一八七

一六三 白耳義ゴシックの實例……………一九七

一六四 白耳義及び和蘭ゴシックの特色……………一九九

一六五 ゴシック建築の特色……………二〇〇

第十二 レネーサンス建築

一六六 概 説……………二〇三

一六七 レネーサンス運動……………二〇三

(一) 伊太利レネーサンス……………二〇四

一六八 伊太利レネーサンス……………二〇四

一六九 フロレンス派……………二〇五

一七〇 羅馬派……………二〇八

一七一 ロココ式……………二一四

一七二 ヴェニス派……………二一五

一七三 ヴイチエンザ及びヴェロナ……………二一八

一七四 ミラン及びジェノア……………二一九

一七五 伊太利レネーサンスの特色……………二二〇

(二) 佛蘭西レネーサンス……………二二五

一七六 佛蘭西レネーサンス……………二二五

一七七 非宗教建築……………二二六

一七八 宗教建築……………二二七

一七九 佛蘭西レネーサンスの特色……………二二七

(三) 獨逸レネーサンス……………二三六

一八〇 獨逸レネーサンス……………二三六

一八一 非宗教建築……………二三七

一八二 宗教建築……………二三七

一八三 獨逸レネーサンスの特色……………二三八

(四) 白耳義及び和蘭レネーサ

ニス……………二四四

一八四 白耳義及び和蘭レネーサンス……………二四四

一八五 實 例……………二四四

一八六 白耳義及び和蘭レネーサンスの特色……………二四五

(五) 西班牙レネーサンス……………二四七

一八七 西班牙レネーサンス……………二四七

一八八 實 例……………二四九

一八九 西班牙レネーサンスの特色……………二五二

(六) 英吉利レネーサンス……………二五二

一九〇 英吉利レネーサンス……………二五三

一九一 エリザベス及びジャコブ期……………二五四

一九二 實 例……………二五六

一九三 エリザベス及びジャコブ期……………二五六

の特色……………二九

一九四 アンダロ・クラシック期……………二六〇

一九五 實 例……………二六四

一九六 女王アン及びジョージ期……………二六五

一九七 實 例……………二六六

一九八 アンダロ・クラシック期並に  
女王アン及びジョージ期の特  
色……………二六九

一九九 ヴィクトリア初期……………二七〇

二〇〇 實 例……………二七一

二〇一 ヴィクトリア末期……………二七二

二〇二 實 例……………二七三

二〇三 ヴィクトリア初期及び末期の  
特色……………二七三

二〇四 レネーサンス建築の特色……………二七五

第十三 米國建築

二〇五 概 説……………二七六

二〇六 殖民地時代……………二七六

二〇七 實 例……………二七八

二〇八 初期共和政治時代……………二七九

二〇九 實 例……………二八〇

二一〇 覺醒時代……………二八二

二一一 實 例……………二八二

二一二 現 代……………二八三

第十四 現代建築

二一三 概 説……………二八三

二一四 現代建築の各派……………二八

二一五 現代建築の發達の原因……………二八五

二一六 都市計劃、建築條令、住宅  
問題其他……………二八五

目次 (終)

# 西洋建築史

工學士 井上一之著



建築物とは地上に固定せられた構成物を謂ひ、次の三つの要素を有するものである。

## 二 建築史 A history of architecture

建築史とは人類が建築物を造りてより現今に至るまでのその進歩發達について記録したもの

西洋建築史

で、これは多くの文献と遺物とを基として研究せられるものである。

三 建築様式 Architectural style

建築様式とは種々の時代に於ける種々の國民が造つた多くの建築物の間に存する一つの纏つた形式手法を謂ふのである。

建築様式はその發生の原因を(一)自然的と(二)人爲的との二つに大別して考へることが出来る。(一)は(イ)地理 (ロ)氣候 (ハ)建築材料に關するもので、(二)は(イ)國民の風俗、習慣、性癖 (ロ)宗教、哲學 (ハ)政治、經濟 (ニ)外國文化の攝取、同化 (ホ)その強制等に關するものである。これ等をフーガッソンの『様式の要素』と謂ふ。  
Ferguson Factors of style

四 構造の原理 Structural Principles

構造の原理は次の五つに大別することが出来る。

- (一) 楣 Lintel
- (二) 拱又は穹窿 Arch or vault
- (三) 持送り Corbel
- (四) 結構 Truss

(五) 一體法 Cohesive Construction

五 建築史の分類

建築史は次ぎの三つに分類して研究するのが便利である。

- (一) 西洋建築史
- (二) 東洋建築史
- (三) 日本建築史

以下西洋建築史についてその大要を述べる。

第一 原始建築 Prehistoric Architecture.

六 原始建築

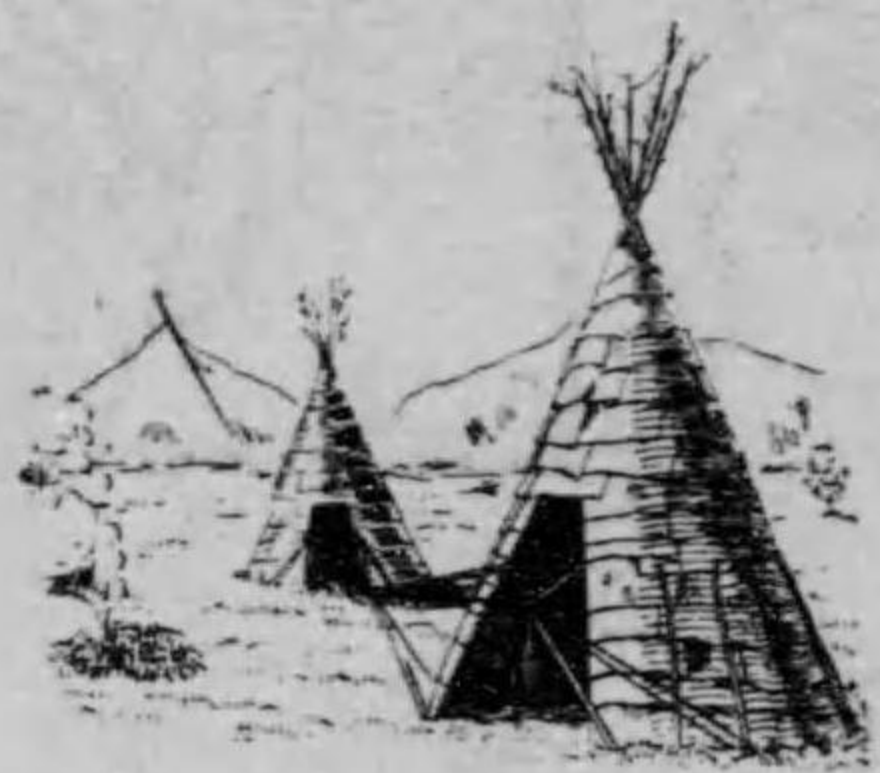
人類の祖先の住居については審かでないが洞穴又は岩窟の中に住んだ時代があつたと考へられて居る。其の後地上に住むやうになつても木の小屋、藁小屋、天幕（第一圖）の類がその住居であつた。

原始建築（第二圖）は考古學的には興味に富んで居るが、建築學的にはその價值が乏しいといふべき。

第二 埃及建築 Egyptian Architecture

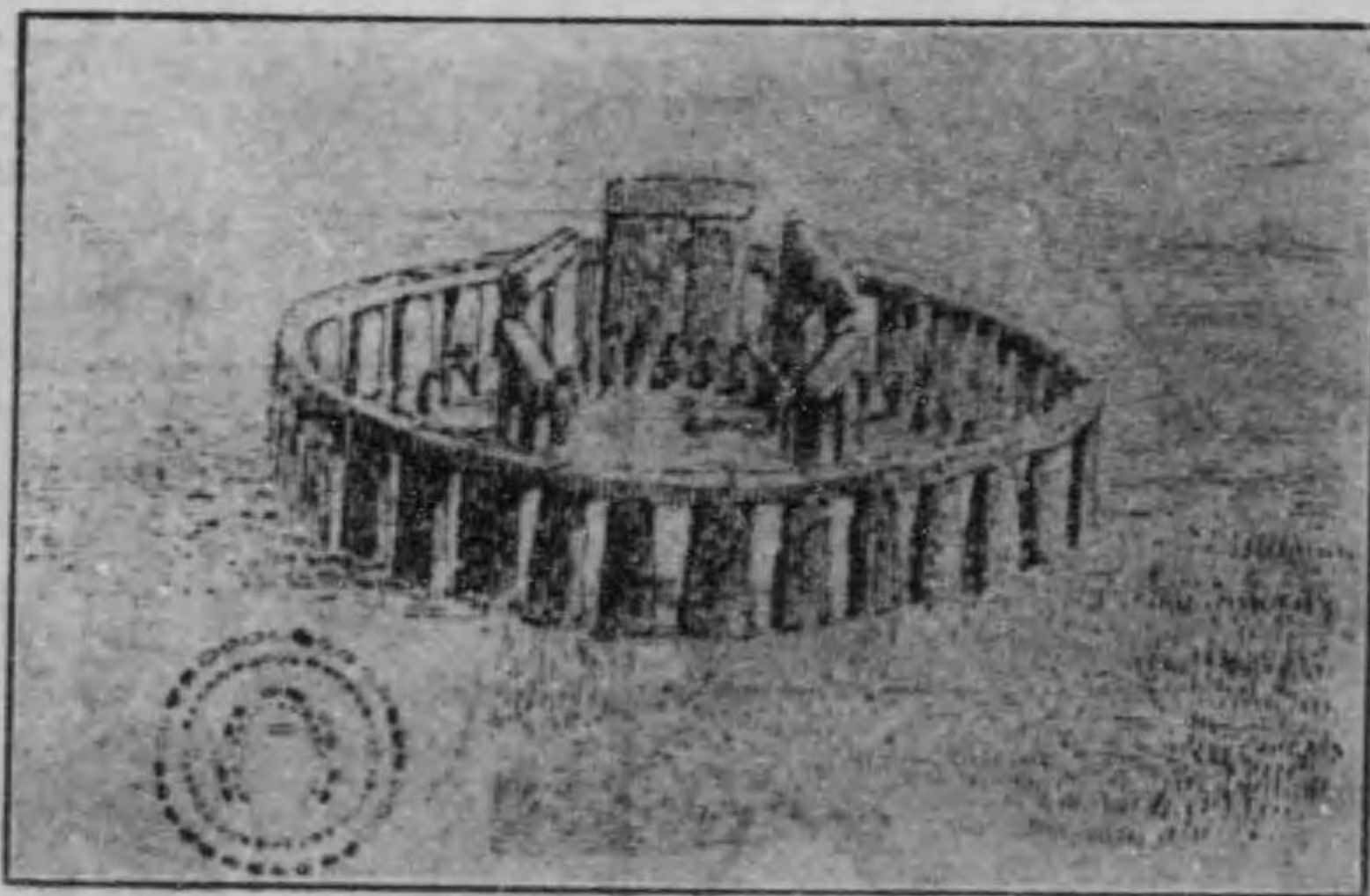
七 概説

第一圖



天幕 Tent. (原始建築の例)

第二圖



ストーンヘンジ Stonehenge. (原始建築の例)

人類最古の文明は概ね大河の流域に起つた。支那の文明が黄河の岸に、印度の文明が恒河々畔に發した如く、西洋文明は實にナイルの流域である埃及と、チグリス、ユウフラテス兩河の流域であるメソポタミア地方に發した。



西洋建築史

いま埃及建築を述べるに當りファラオガツソンの様式の要素に従つて次に説明しよう。

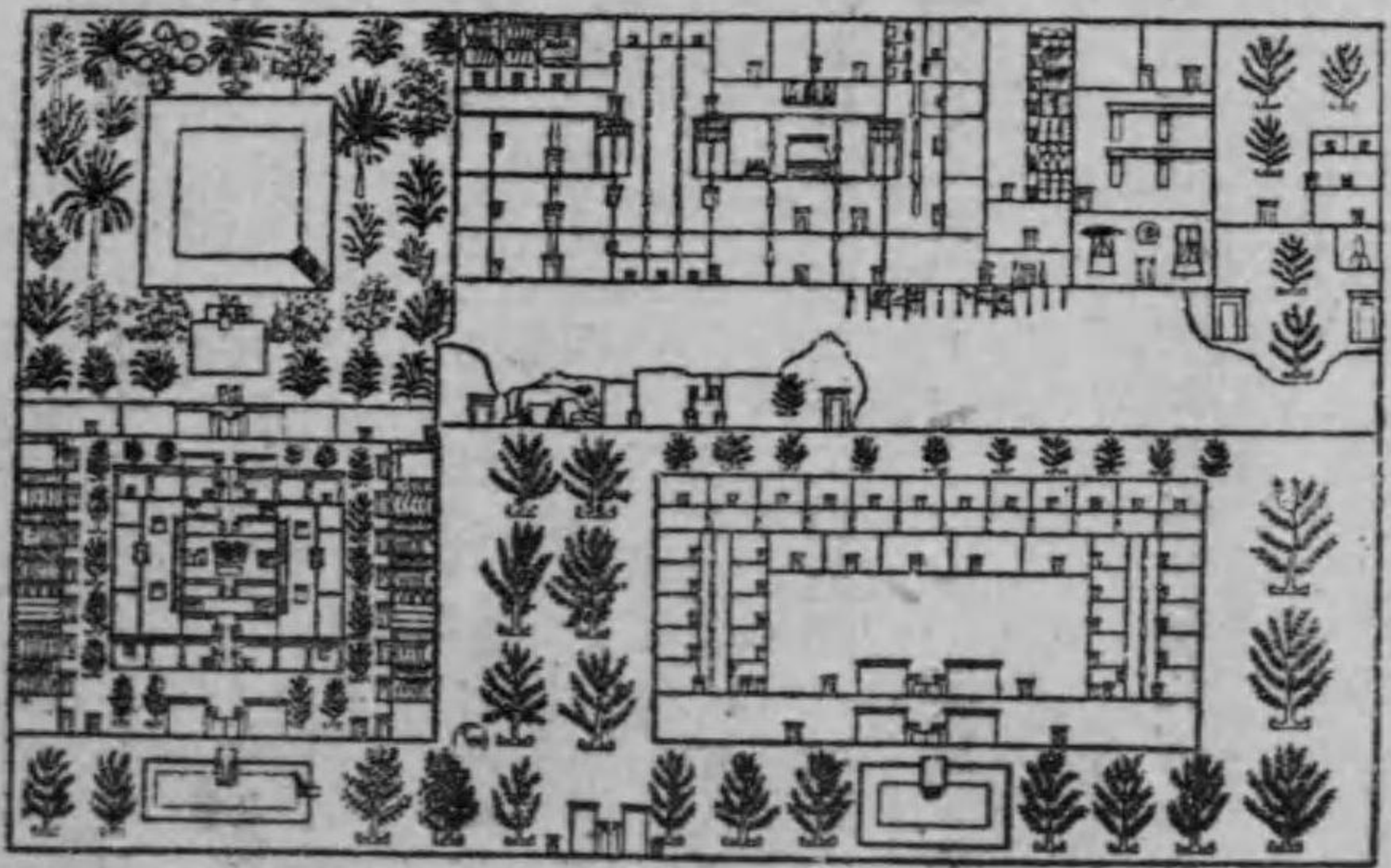
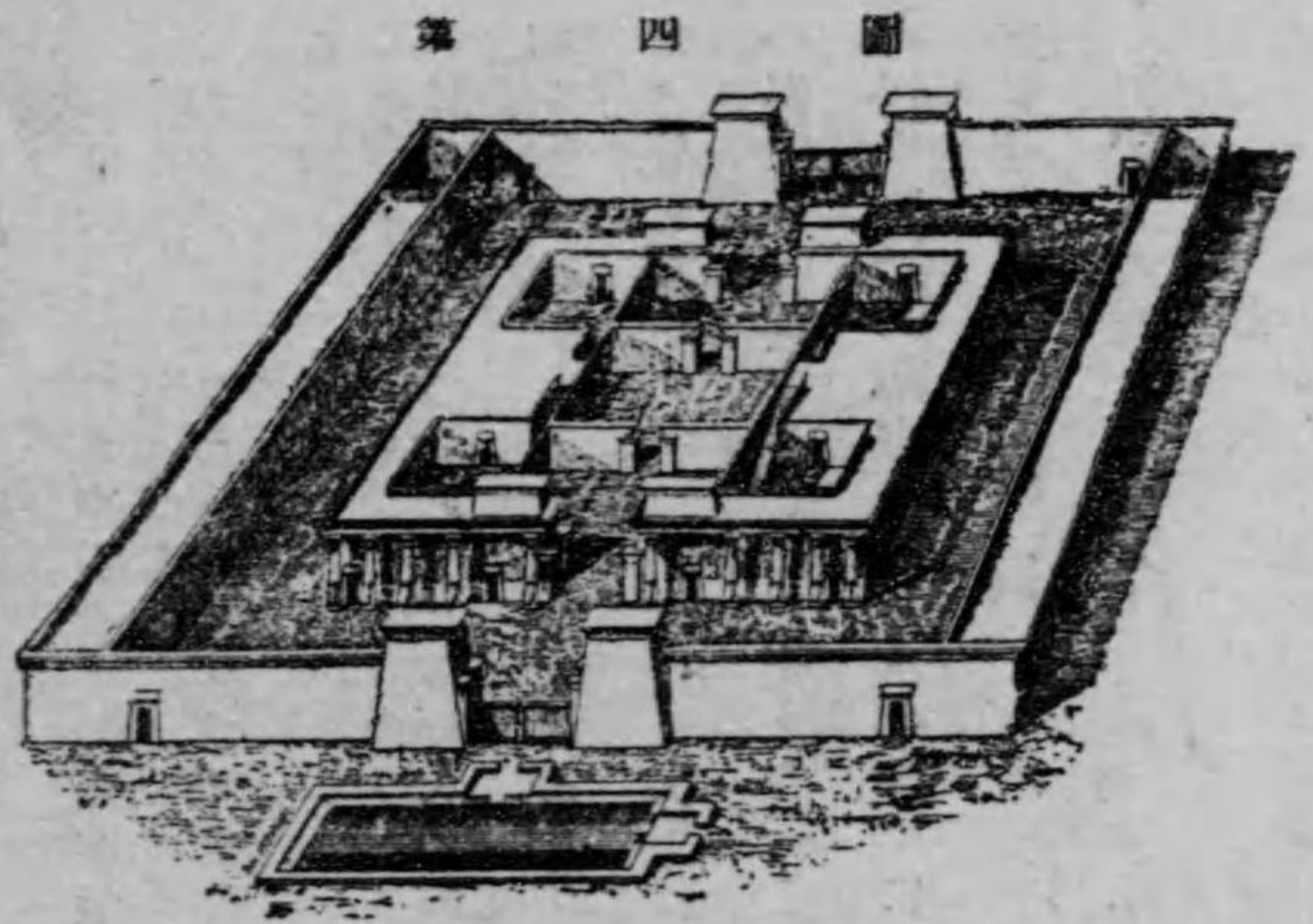
八 地理

一地方に於ける建築はその地理的條件によつて決定せらるることが多い。これは民族の居住する土地の特性が固有の生活形式を作り、それが民族の習育にまで影響感化を及ぼすからである。

埃及はサハラ、アラビア兩大砂漠の中間に位するけれど、ナイル河が貫流する爲め、毎年夏期上流アビシニア地方に起る豪雨の爲め河水は定期氾濫をなし、兩岸數里に亘り沃土を沈澱した。故に減水の後には面積二千方里に亘る狭長なる沃土帯を形成し殆んど肥料を施さずして多額の穀物を收穫することが出来た。これが埃及に於て夙に農業開け國家の成立を見た所以で、太古以來埃及の都市はナイルの沿岸に建設せられ、ピラミッド、神殿、墳墓等の遺物は皆ここに發見せられる。(第三圖)

九 氣候

埃及の建築が雄大にして優美ならざるは實にその地理的影響に依るものである。氣候は建築の形式に重大なる關係を有するものである。埃及の氣候は一年を通じ炎熱で全



エジプトの建物とその平面圖

埃及の太古に於ける建築材料は泥である。これはナイル河の氾濫に依つて得られたもので、

霜雪を見ない許りでなく暴風、雨、霧も稀である。故にその建築は一般に窓小さく屋根は陸である。(第四圖)

一〇 建築材料  
建築はその材料が木材なるか煉瓦或は石なるかに依りて様式を決定せらるるものである。

後に乾燥煉瓦、石が使用せられた。

埃及は北部に石灰岩、中部に砂岩、南部に花崗岩を多量に産出した。この耐久的材料は埃及の建築様式に大なる影響を與へた。即ち建築は殆んど直線的で、壁厚く、ごつしりとして居る。今日尙ほ多くの遺物が殘存する理由も亦此の材料の性質に原因するものである。埃及には建築に適する種類の木材は殆んどなかつた。

一一 宗教、哲學、政治

宗教と建築とが密接なる關係を有することは埃及について到る處にこれを見ることが出来る。

埃及人はハム種に屬し國王をファラオと云ひ其の權力は絶對無限で官僚政治を行ひ現神として崇敬せられた。僧侶、士族、平民の階級があり、就中僧侶は其の勢力強く官吏、教師、裁判官を兼ねた。埃及人は日月星辰の自然現象を神として崇拜し最上神は太陽でカルナクの神殿は之を祀つたものである。其他鷹、鱈、獅子等の動物を崇拜した。宗教上の儀式は神秘的でこれは墳墓並に神殿について見ても解る通り埃及建築の一大特性である。埃及人は靈魂不滅を信じ死後或る時期に靈魂が再び元の死骸に復歸するものと信じて居たため遺骸を保存してミイラ

となした。國王は其の墳墓としてピラミッドをつくり又後にリビアの岩窟に穴を穿ちて遺骸を藏した。埃及人にとつては住宅は一時的の假寓に過ぎず墳墓こそは永遠の住處であつたのである。

第五圖



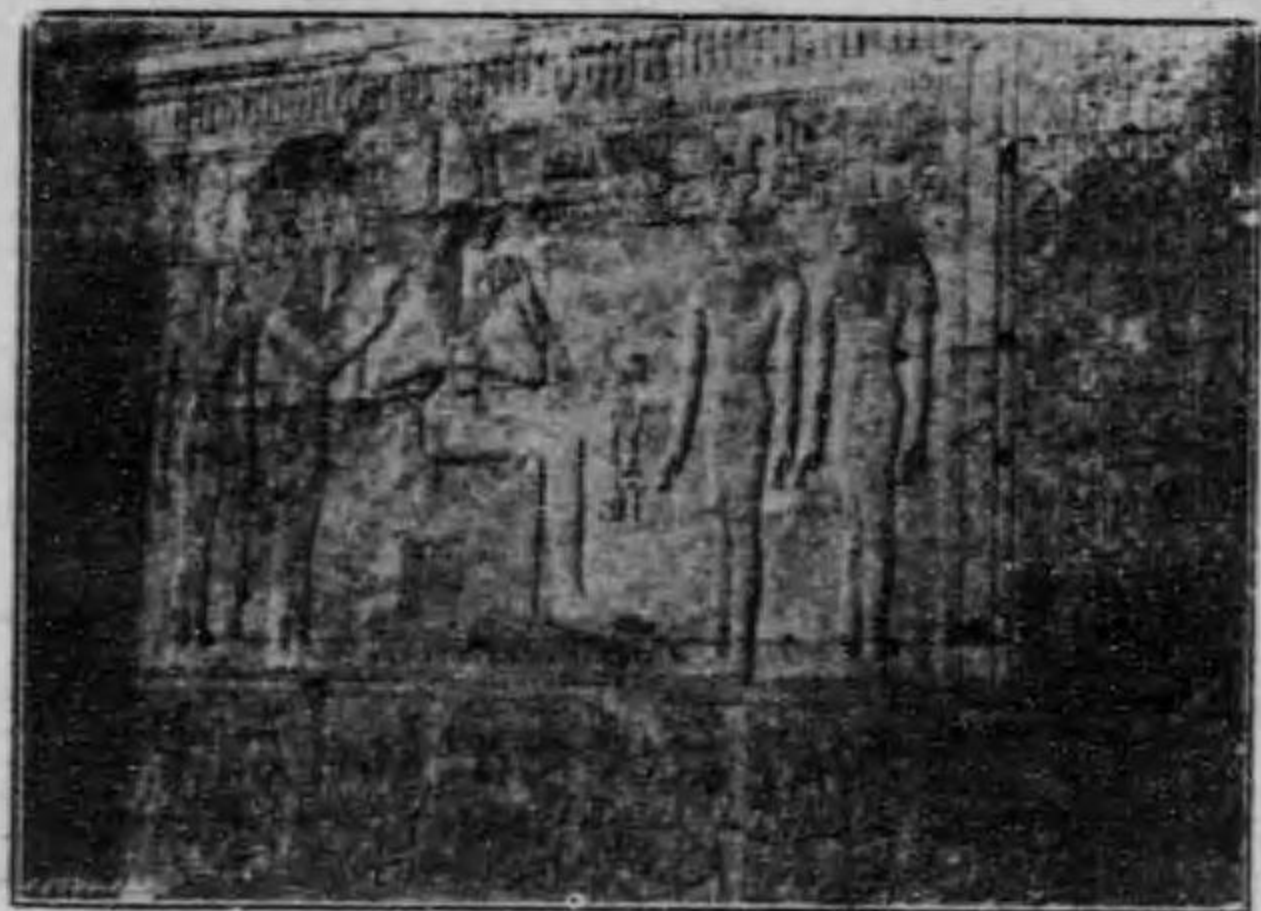
ベニハツサン Beni-Hassan の壁畫

埃及には殆んど降雨なく且つ期を定めてナイル河が氾濫した爲め星學風に起り一年が三百六十五日四分の一なることを知り太陽曆を用ひた。數學、哲學、醫學も亦進歩し文學はパピラスより製した紙即ちパピリによつて保存せられた。埃及の文字はヒエログリフイクと云ひ象形文字である。この他繪畫(第五圖)、彫刻(第六圖)、建築、土木などの術が大いに發達して居た。

一 埃及の興

埃及の建國は明かでないが紀元前四千年以上に遡ることが出来る。其の後三十王朝を経て紀元前三百三十二年に至るまで繼續した。第一王朝より第十王朝まで(紀元前四七七年より二八二年迄)を太古帝國と呼び都はメンファイスで、第四王朝の時ピラミッドの建築始まり最大を以て名あるギゼーのピラミッドはクフ王の

第六圖



セチ神殿 Seti's Temple の壁畫と浮彫

遺骸を納めたものである。第十一王朝より第十六王朝まで(紀元前二八二年より一七三八年迄)を中古帝國と呼び多數の建築が建造せられた繁榮時代でヒクソスの時代もこの中に含まれる。第十七王朝より第二十王朝まで(紀元前一七三八年より九五〇年迄)を近古帝國と呼び都はテーベスで多くの壯大なる建築がカルナク、ルクソル其他に建造せられ、ラメゼー一世が樹立した第十九王朝(紀元前一四〇〇年より一三六六年迄)は實に埃及美術の最盛期であつた。第二十一王朝より第三十王朝まで(紀元前九五〇年より三三二年迄)を後期埃及時代と呼び第二十六王朝のとき埃及はベルシャの征服する所となり(紀元前五二七年)、次いで紀元前三三二年にギリシャのアレキサンダー大王は埃及をベルシャより奪つた。紀元前



三三二二年より紀元六四〇年迄を希臘羅馬時代と呼ぶので紀元前三二二年後埃及はローマ帝國の一部となつたのである。

〇三 スフィンクス The Sphinx.

スフィンクスは胸體が獅子、首は牛、女王、鷲又は羊(第七圖)などで、天然の岩石を刻んで作り、多くは神殿又は墳墓の前に一對にして置かれたものである。

ギゼーの大ピラミッドの前に立つ大スフィンクスは高さ六十五呎長さ百八十八呎あつて世界最大の彫刻である。

(第八圖)

一四 マスタバ及びピラミッド The Mastabas and Pyramids.

マスタバは最古の墳墓で(第九圖)恐らく初期の墓穴の上粗造の石積み積み重ねたものに起因して出来たものである。内部は次の三つに分れて居る。



カルナークの羊頭スフィンクス

第七圖

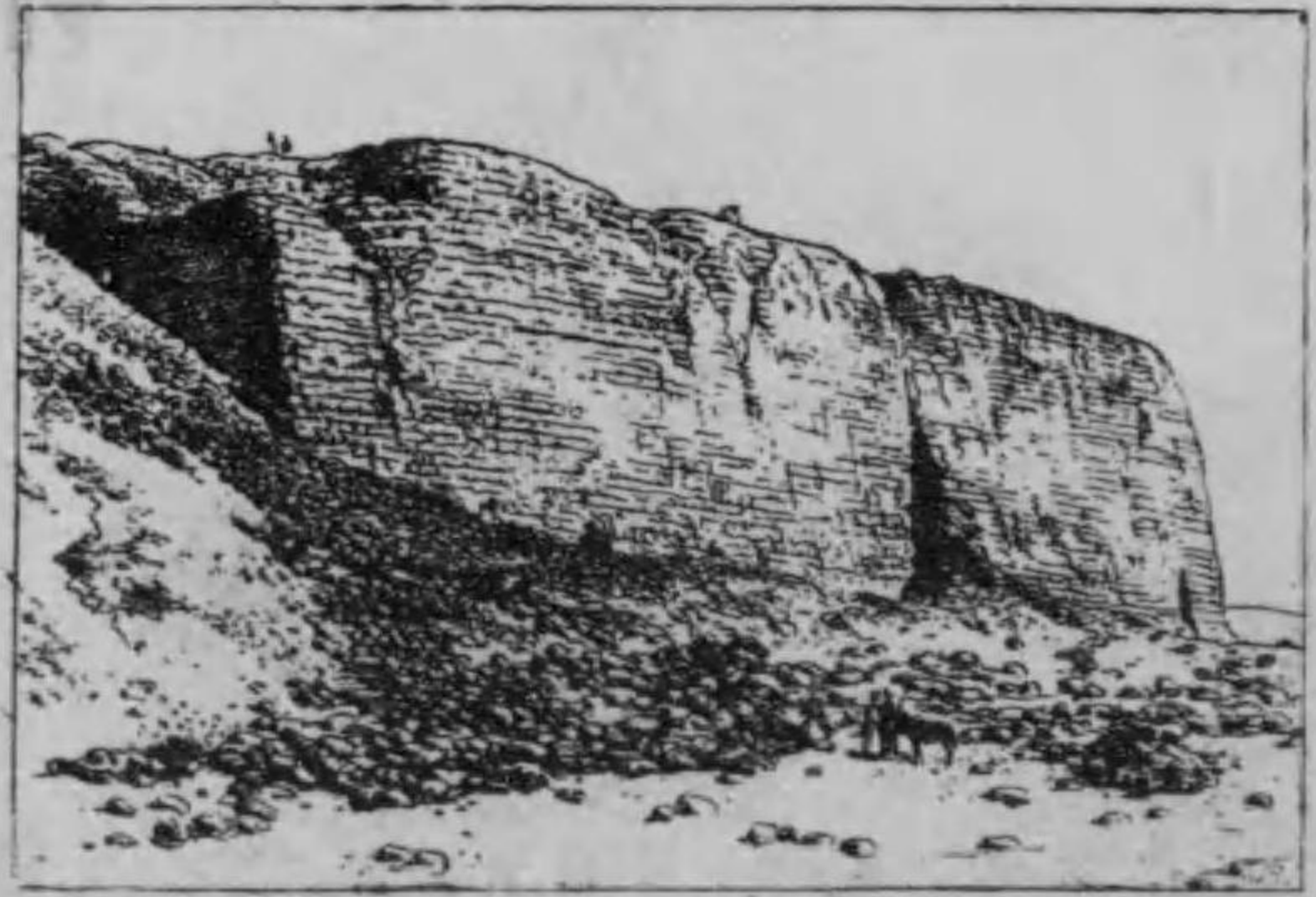
第八圖



ギゼーの大ピラミッドと大スフィンクス

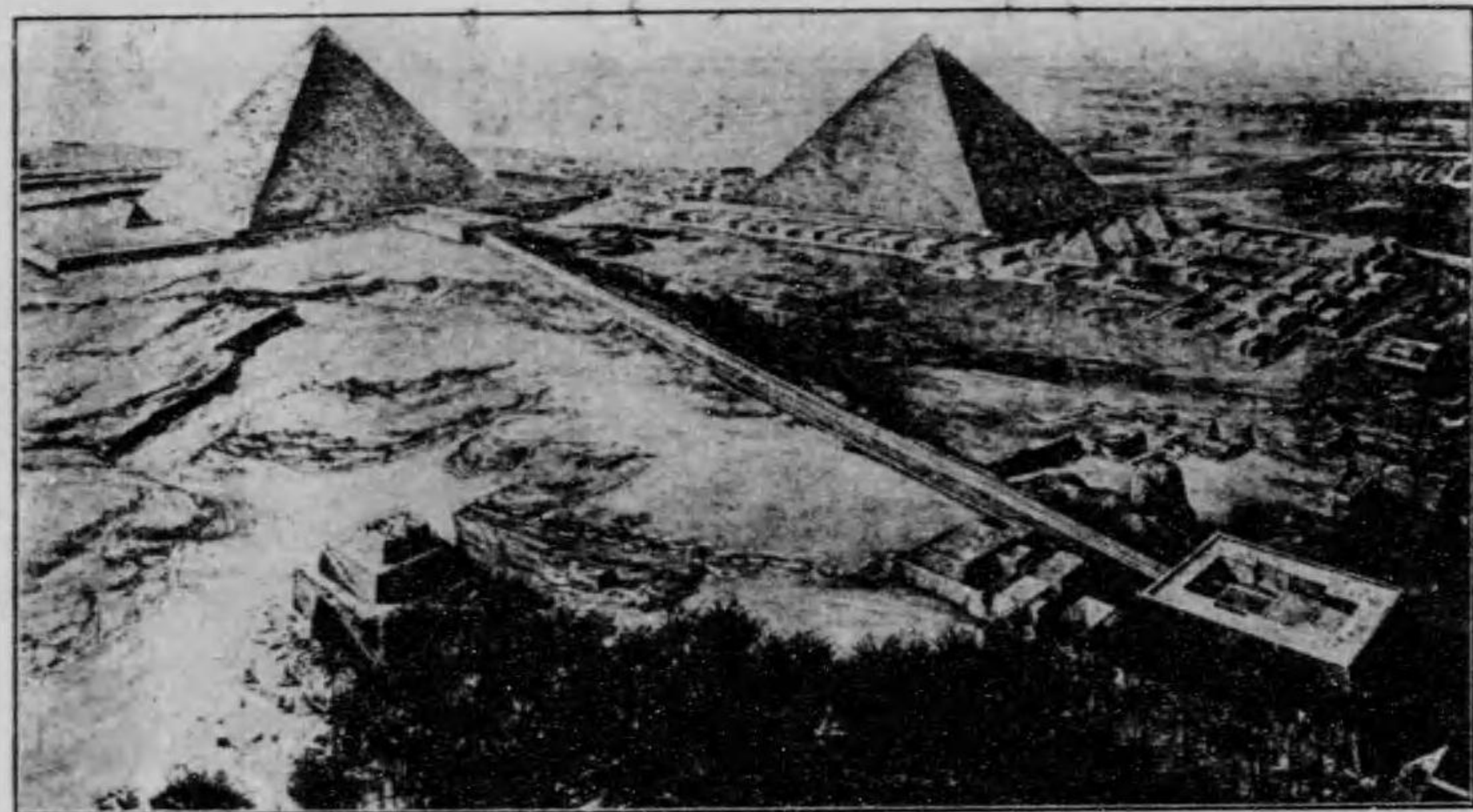
(一) 外室 (二) 内部密室 (三) 穿井  
穿井は非常に深くここより石棺を安置する室に通じて居る。マスタバが變化してピラミッド

第九圖



馬其達マスタバ

となつたものと云はれて居る、第十圖



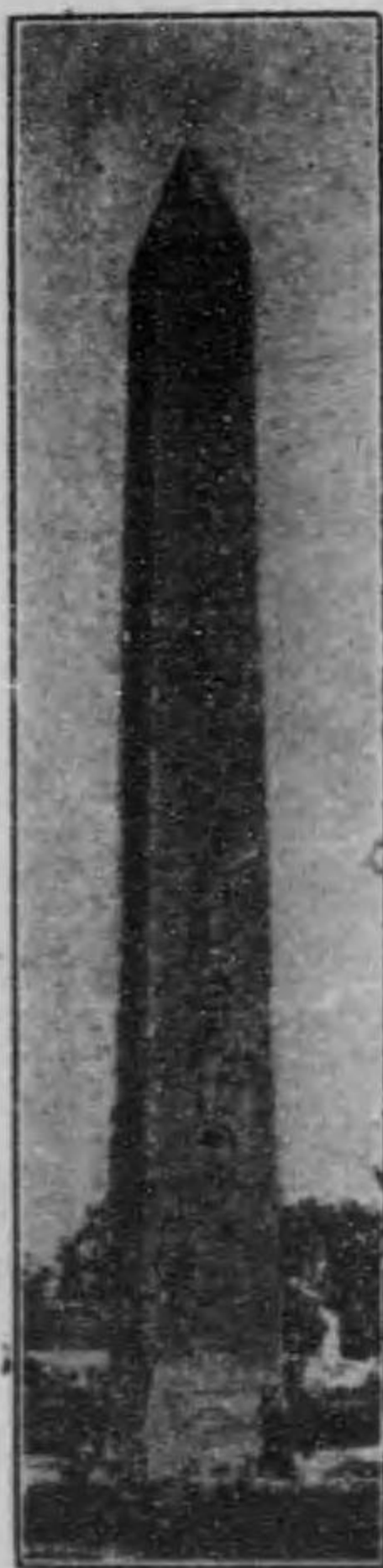
第十二圖 ケフロンとケオプスのピラミッド

ケオプスのピラミッド(第十二圖)はグラウンが正方形で一辺の長さ二三三米、高さ一四六・五二米、傾斜角度五一度五〇分、石材は花崗岩でその十個の大き一米角である。紀元前三七三三年より三七〇〇年迄に造られたものである。

この外にケフロン(紀元前三七〇〇年—三六六六年)(第十二圖)及びミケリノス(紀元前三六六六年—三六〇〇年)のピラミッドが著名である。

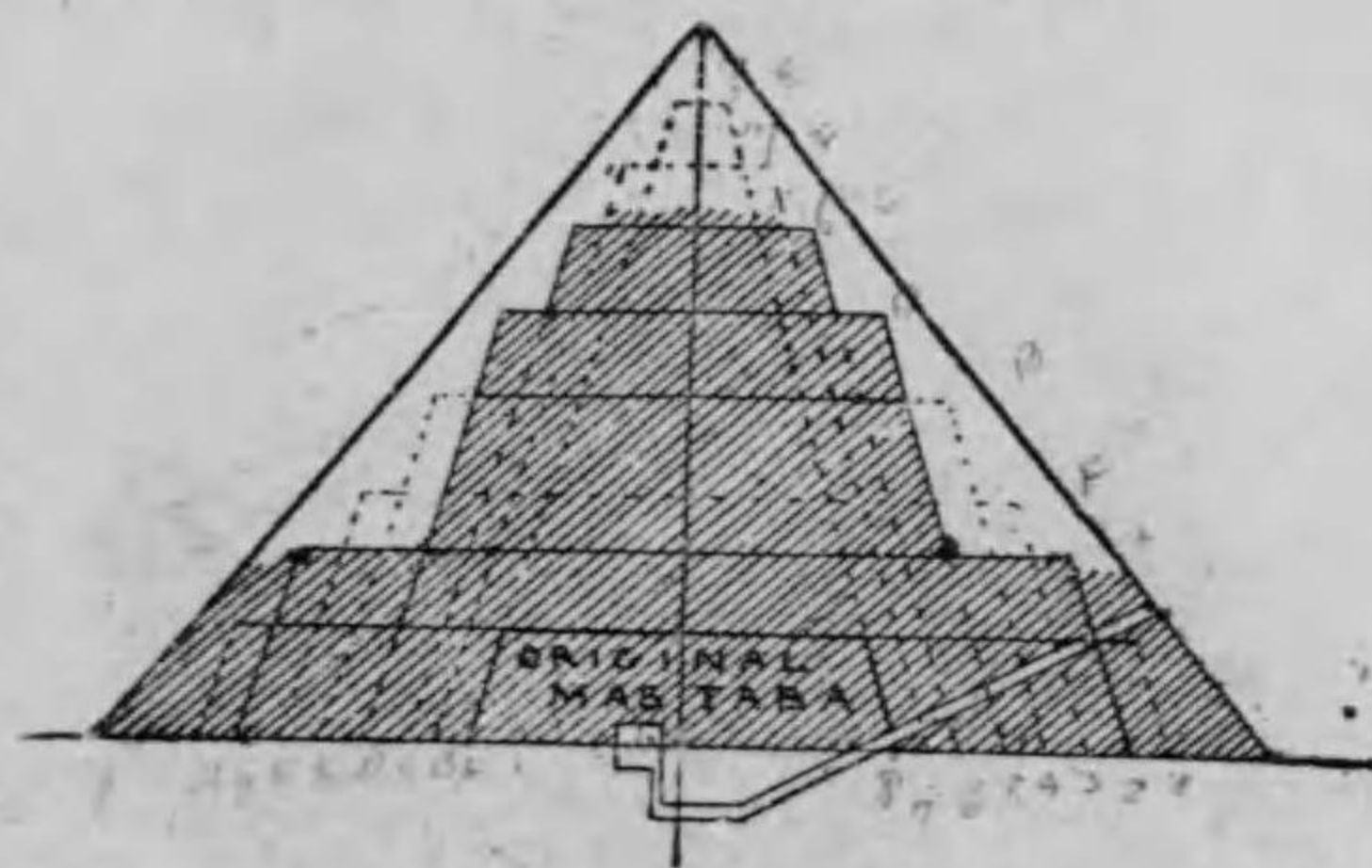
一五 オベリスケ Obelisk

オベリスケ(第十三圖)は一本石でつくつた長い柱



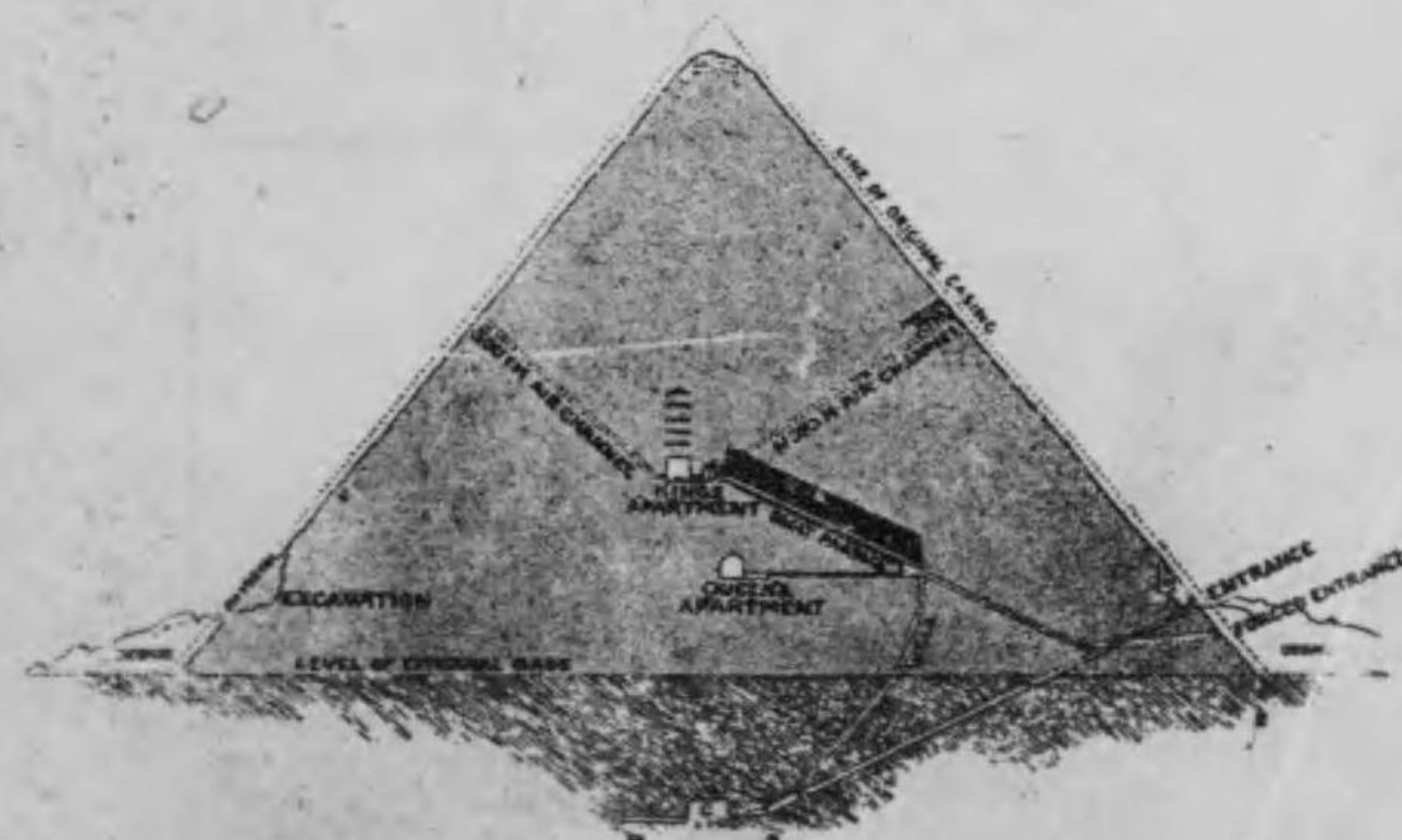
第十三圖 ヘリオポリスのオベリスケ

第十圖



マスタバよりピラミッドに変化せるを示す

第十一圖



大ピラミッドの縦断面圖

ピラミッドは國王の墳墓で石を疊んで造り中に棺を入れを室がある。(第十一圖)

第十四圖



メムノンのコロス The Colossi of Memnon

一六

で神殿の前に一對にして立てられたものであ  
る。正方形のプランで四面共その中央部に於て  
幾分膨み、上に延びるに従ひ次第に細くなり頂  
上はピラミッド形である。現存せるものの中で  
最大なるものは羅馬にあつて高さ百四呎、基底  
の大き九呎、ローマ皇帝がエジプトより移した  
ものである。

一六 コロス The Colossi.

コロスは神殿の前に立てた巨像で、神殿の中  
につくり又は柱につくりつけにしたもの等があ  
る。

メムナウス・コロスが最大で高さ六十九呎三  
吋ある。(第十四圖)  
Memnonous Colossi

一七 神殿 Temple.

神殿はその周囲を厚き壁にて圍み正面にパイロン(門) (第十五圖) がある。門を入れば中庭  
(第十六圖) があり柱が三方に立つて居る。更らに進むとハイポスタイル(多柱室) (第十七圖) が  
ある。

第十五圖



エドフ Edfu のパイロン (旗竿を立てる溝に注意せよ)

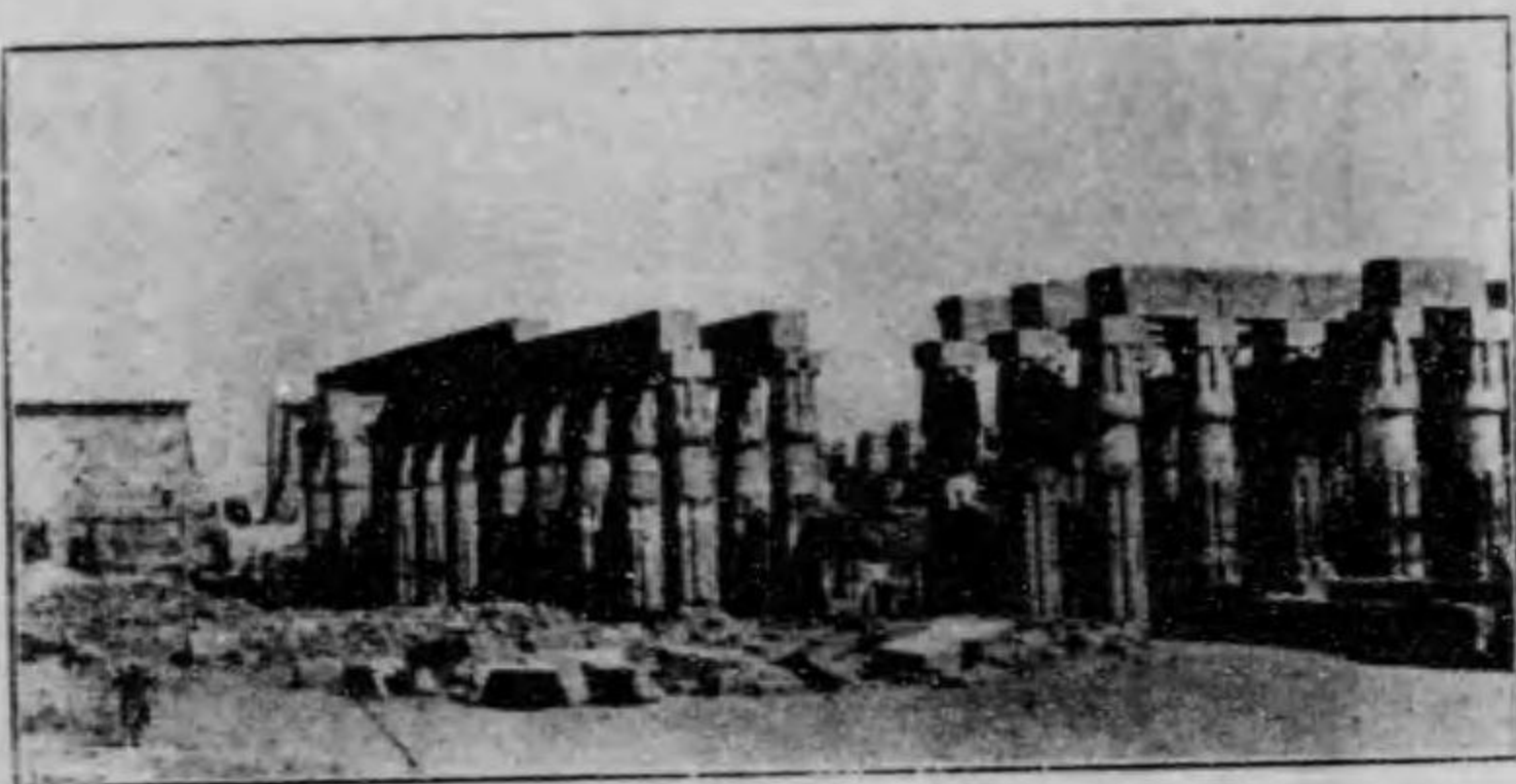
第十六圖



中庭 (コロスに注意せよ)

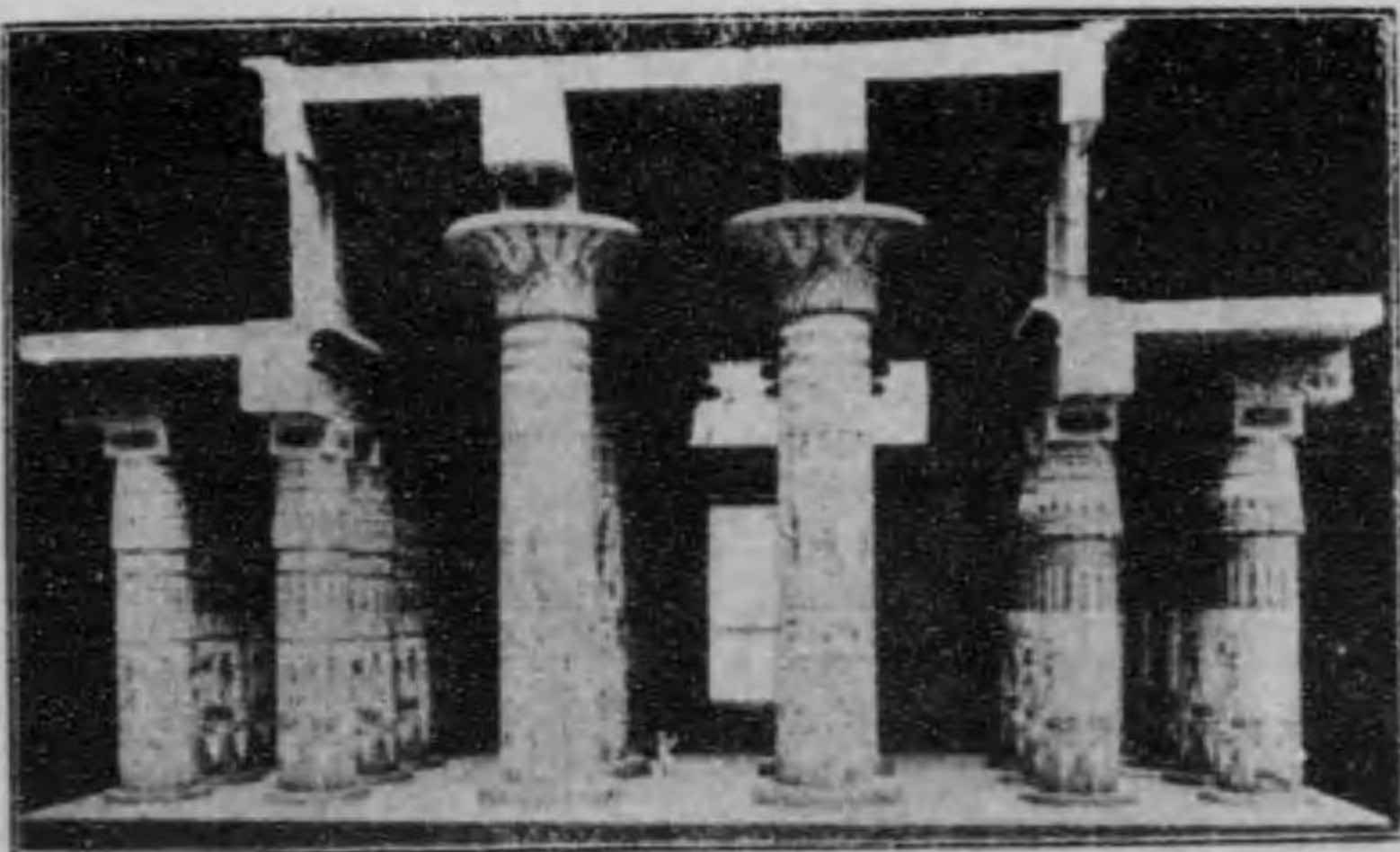
一七

第十七圖



ハイボスタイル

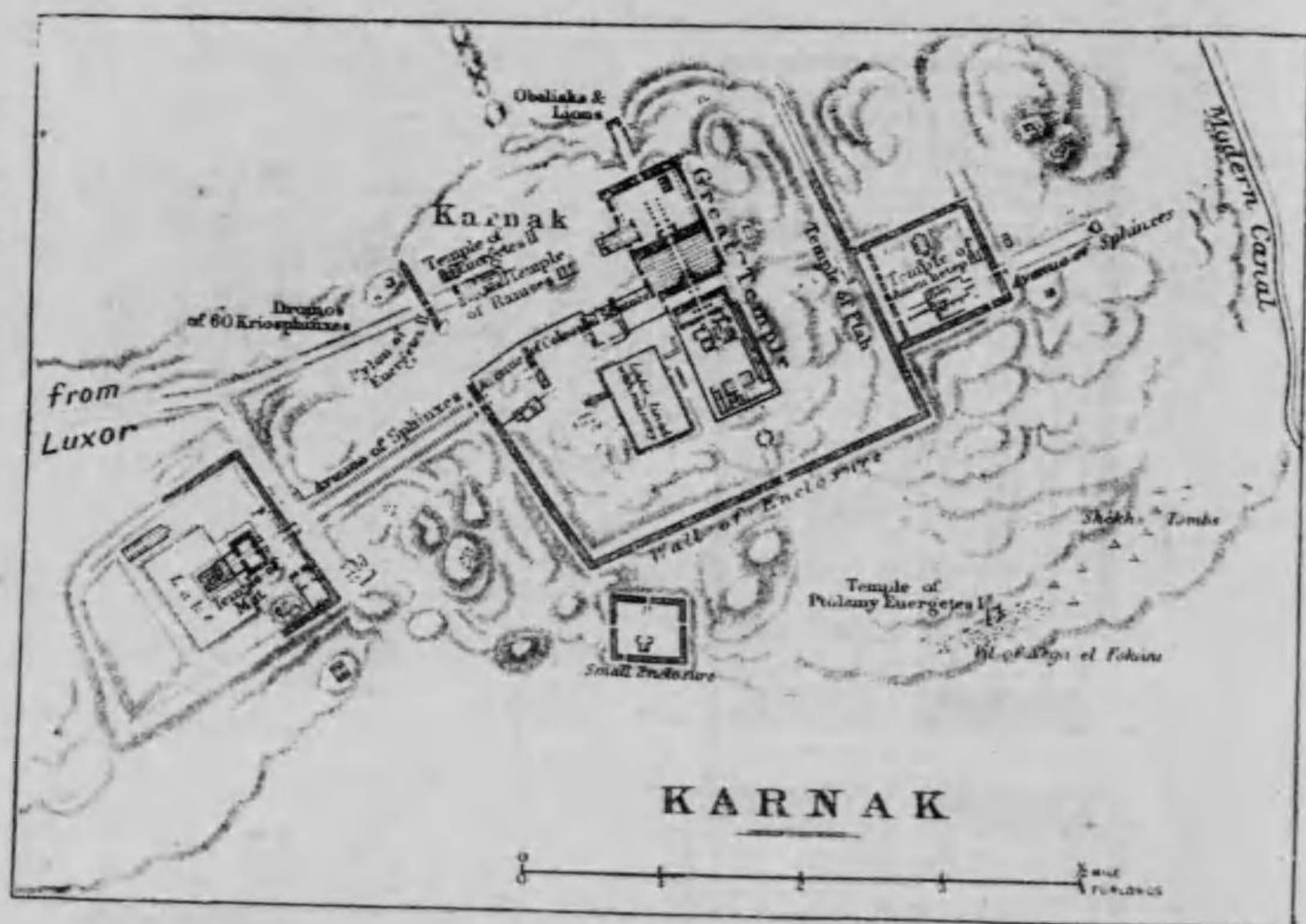
第十八圖



カルナクのアモン大神殿のハイボスタイルと  
クリヤストロイ(模型)

あり次ぎに本尊を安置する内陣がある。尙ほその後に小さい暗間及び多くの部屋がある。その  
プランは長方形で光線は中庭と多柱室の柱高の相違に依つて出来た上部のクリヤストロイ(第  
十八圖)から採るやうになつて居

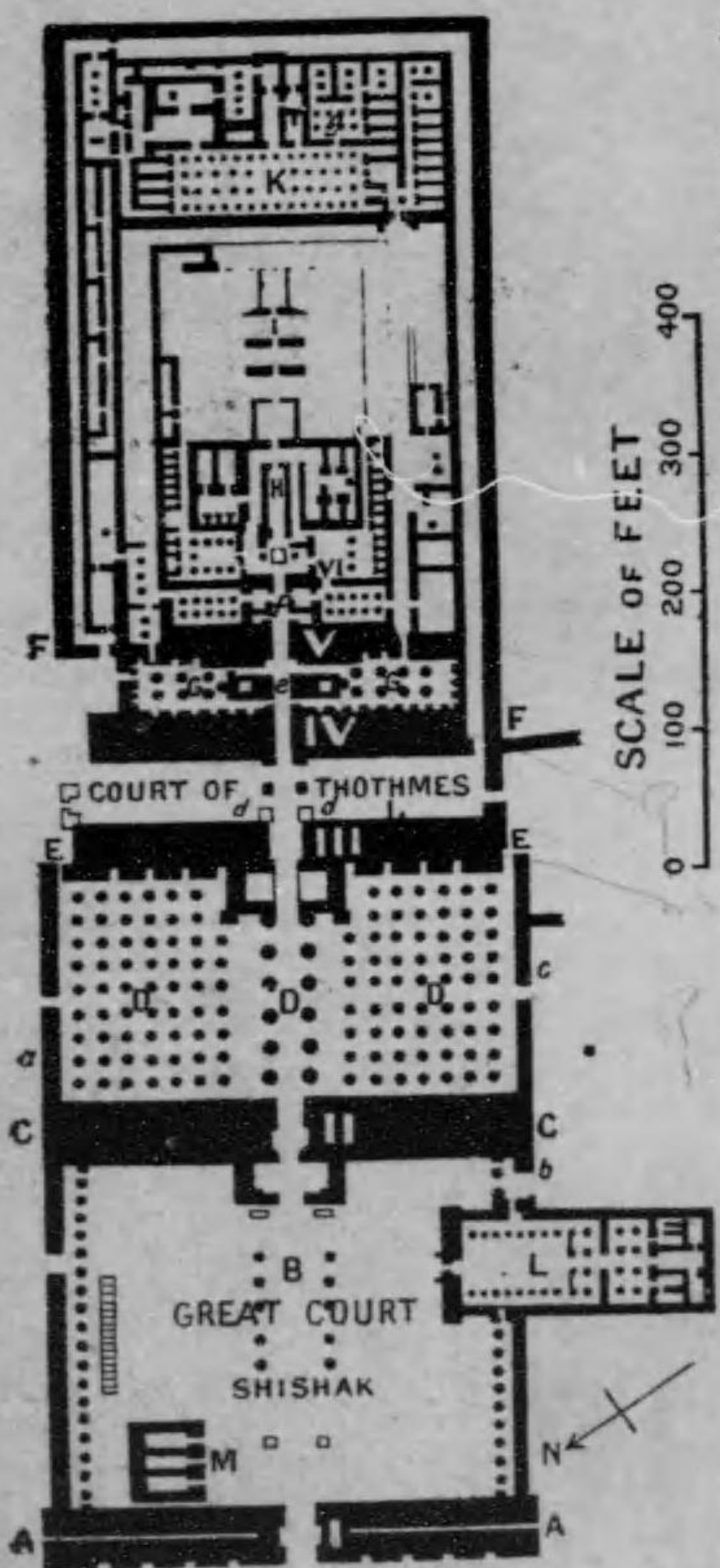
第十九圖



カ ル ナ ク

十八圖)から採るやうになつて居  
る。  
カルナク(第十九圖)のアモン  
大神殿(第二十圖)はそのプランに  
於て世界最大の建築で側面の長さ  
一二〇〇呎、幅三六呎、多柱室に  
ある柱の高さは六九呎直徑一一呎  
五分の三、世界最大の柱である。  
第十二王朝より計畫せられ第二十  
王朝の時に完成したもので祭神は  
サン・ロットである。  
此の外ルクソル(第二十一圖)、  
エドフなど神殿の實例は少くな  
い。

第二十圖



- A A. Pylon I (Ptolomaic).
- B. Taharka's colonnade.
- C. Pylon II (Rameses I).
- DD. Hypostyle Hall of Seti and Rameses II.
- E E. Pylon III (Amenhetep III).
- F F. Circuit Wall (Rameses II).
- G G. Osiride Hall (Thothmes I).
- H. Sanctuary and Hatshepsut's chambers.
- I. Space with remains of XIIth dynasty.
- K. Building of Thothmes III.
- L. Temple of Rameses III.
- M. " Seti II.
- a. Wall reliefs of Seti I.
- b. Porch and reliefs of XXIInd dynasty.
- c. Reliefs of Rameses II.
- dd. Obelisks of Thothmes III.
- e. Obelisks of Hatshepsut.
- f. Hall of Records, constructed in the earlier fore-hall.
- g. Hall with polygonal columns.

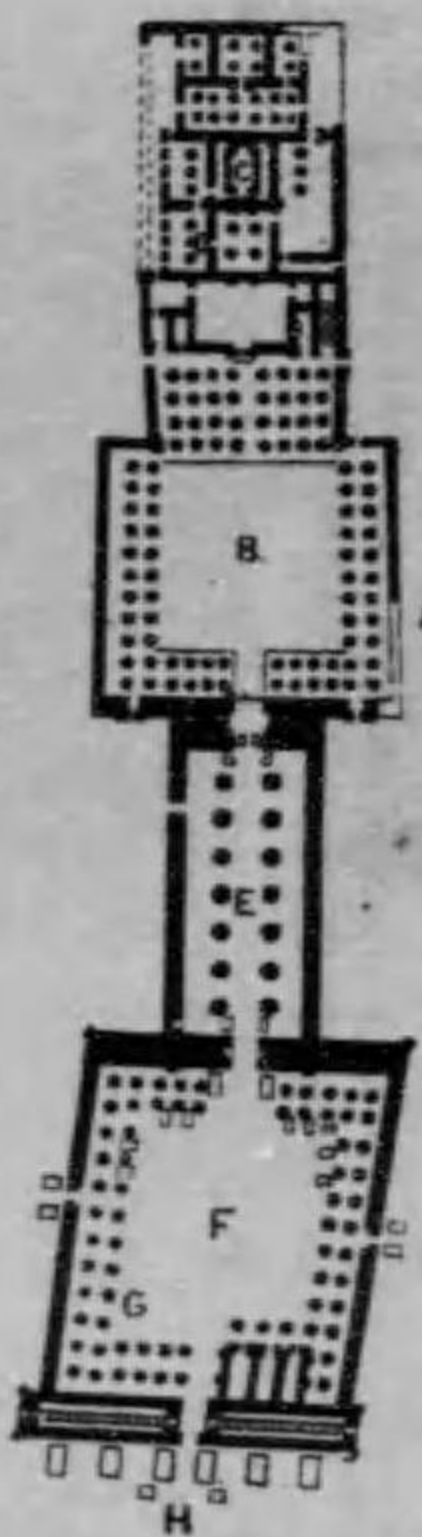
PLAN OF THE GREAT TEMPLE OF AMEN

アモン大神殿の平面圖

一八墳墓 Tomb.

中古以後の墳墓は岩石を切り込んで部屋をつくり中にミイラを棺に入れて納めた。ベニ・ハフサンの墳墓はこの例である。  
 Hassan  
 Beni-Hassan

第二十一圖



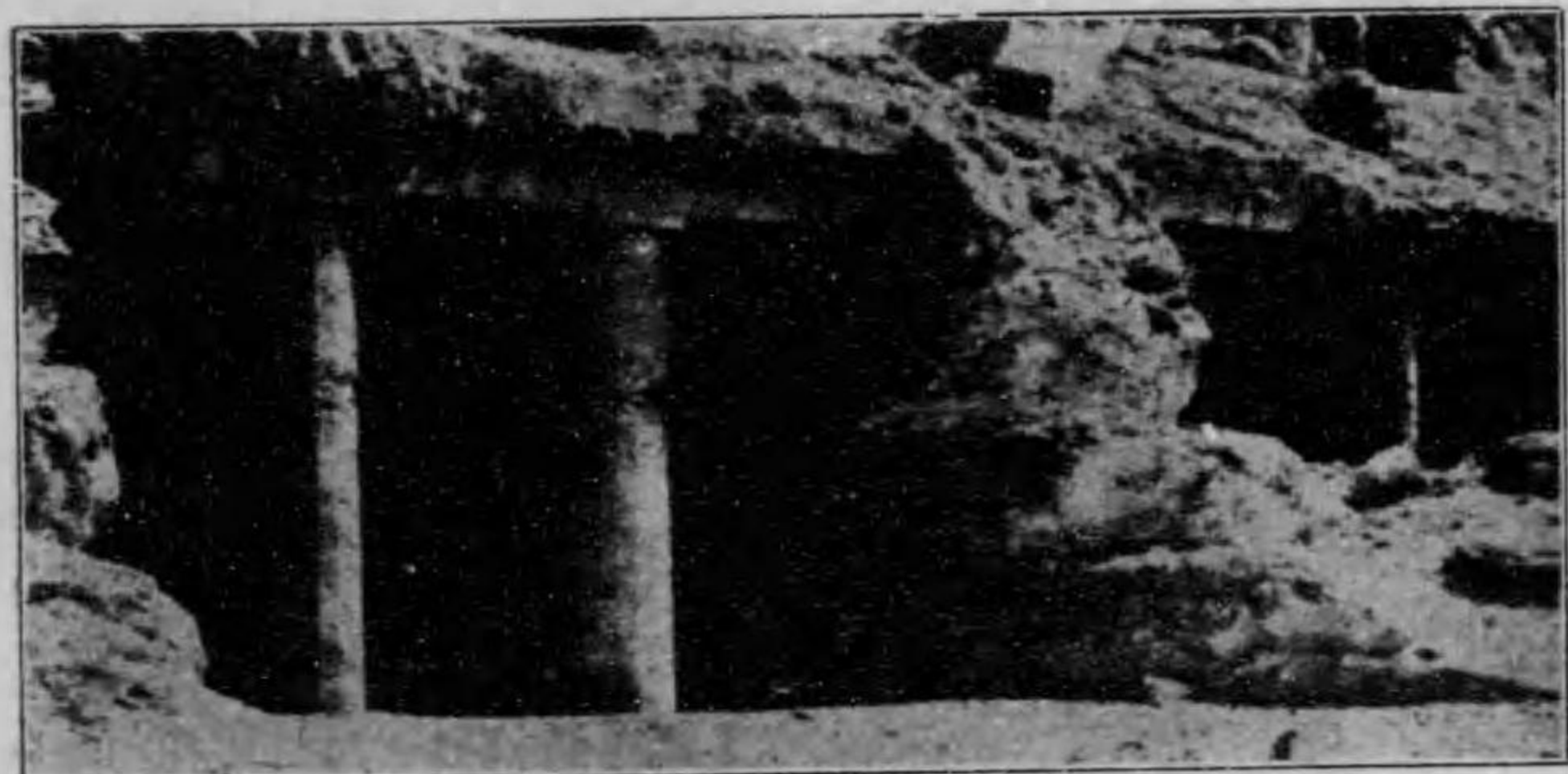
ルクソールの神殿の平面圖

三十九の墓がある。第三番のクネムヘテツプの墓の入口には(第二十一圖)十六面角の柱が二本立つて居る。これは後に述べるギリシアのドーリック・オーダーの原型と考へられるも  
 Order

ので、柱は浅き溝影と胴張とを有して居る。更らに後世の墳墓は岩石を迷宮的に切り込んでつくり(第二十二圖)最後に棺を安置する室をつくつた。テーベスの墳墓はこの例である。  
 Thebes

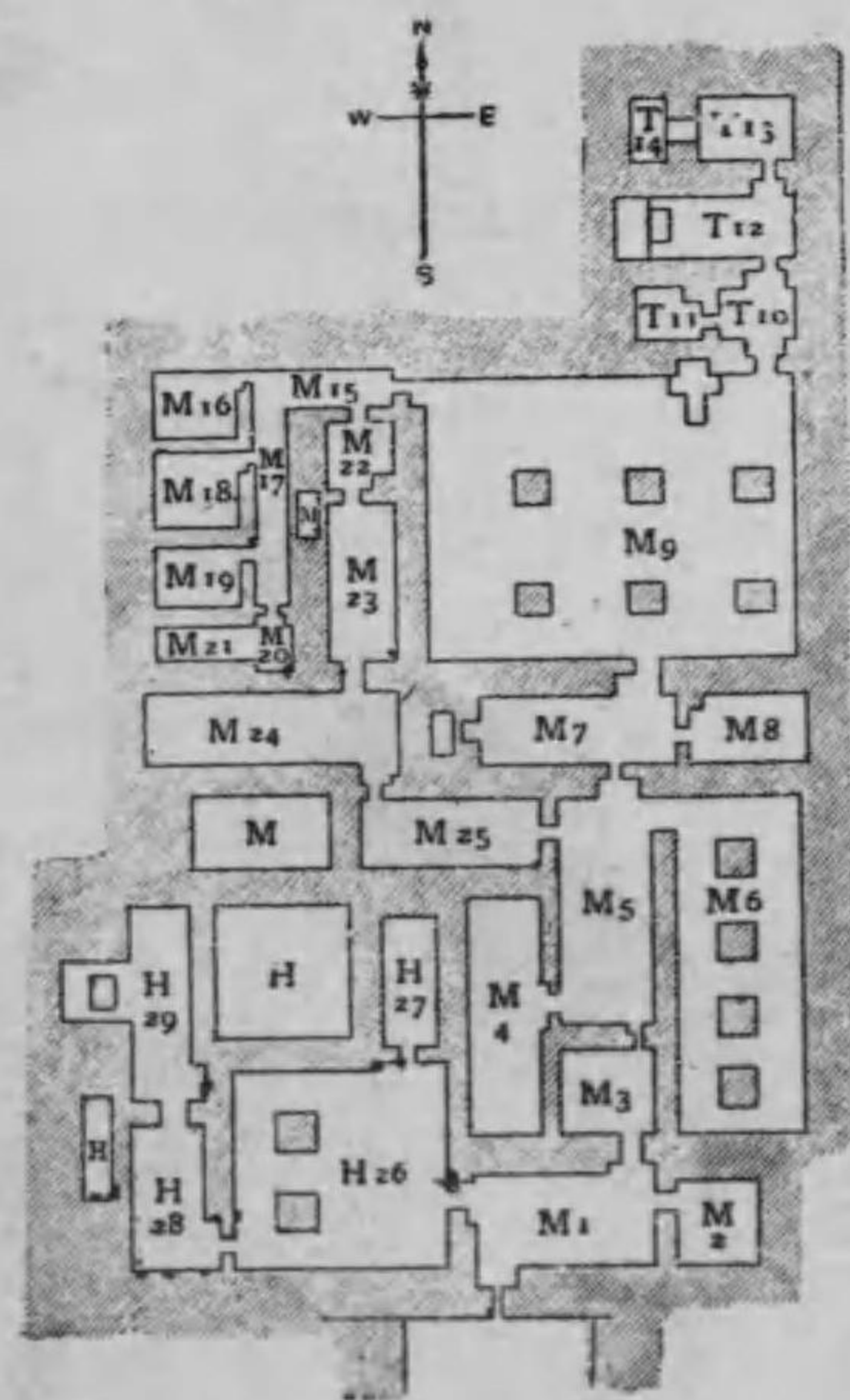
テーベスの墳墓は第十九王朝より第二十王朝までの間に完成したもので、岩石を切り込んで造つた通路に聯絡する多くの室があり壁面には繪がある。

第二十二圖



メネツサンの墓の入り

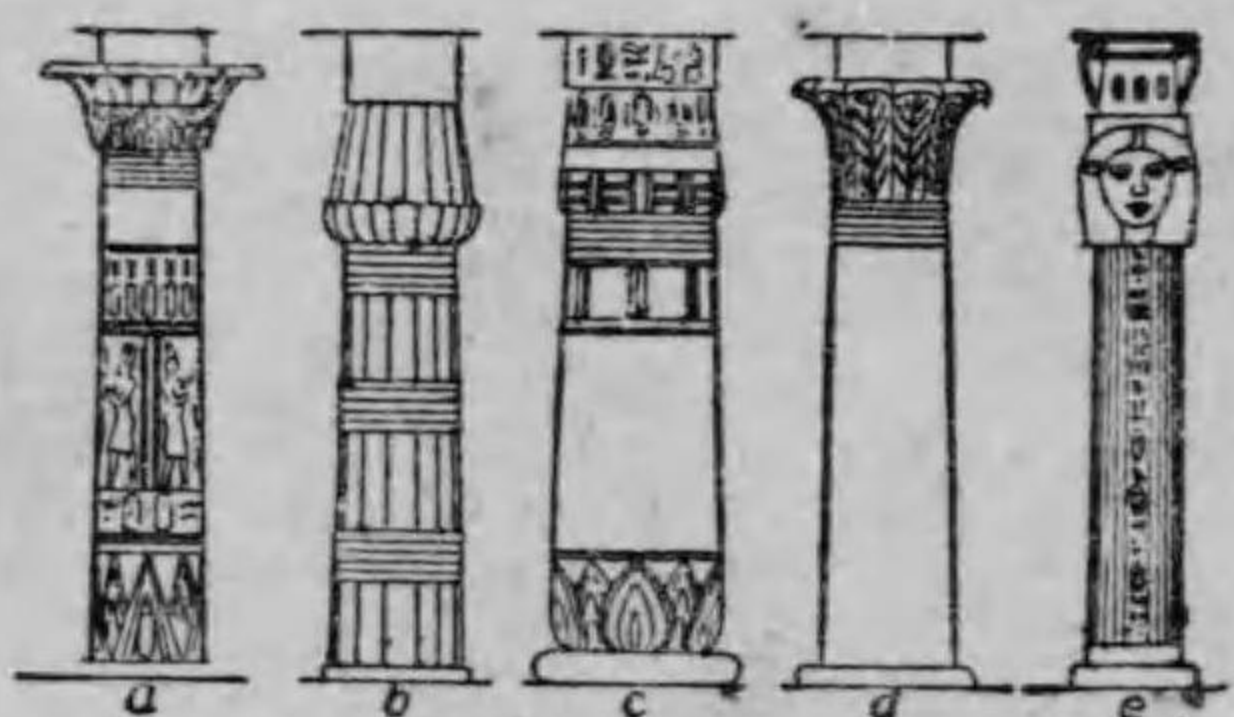
第二十二圖 迷宮的墳墓(メレルカの墓)



一九 埃及建築の特色

埃及建築は木の建築より發達して石の建築となつたもので、もごロータス(蓮) *Palm* (棕櫚) 等を縦横に組み立てて泥土を塗つて壁、屋根等をつくつたもの、如く、この木造建築の手法を石造建築に移して居る事實を至る處に認めることが出来る。

第二十三圖

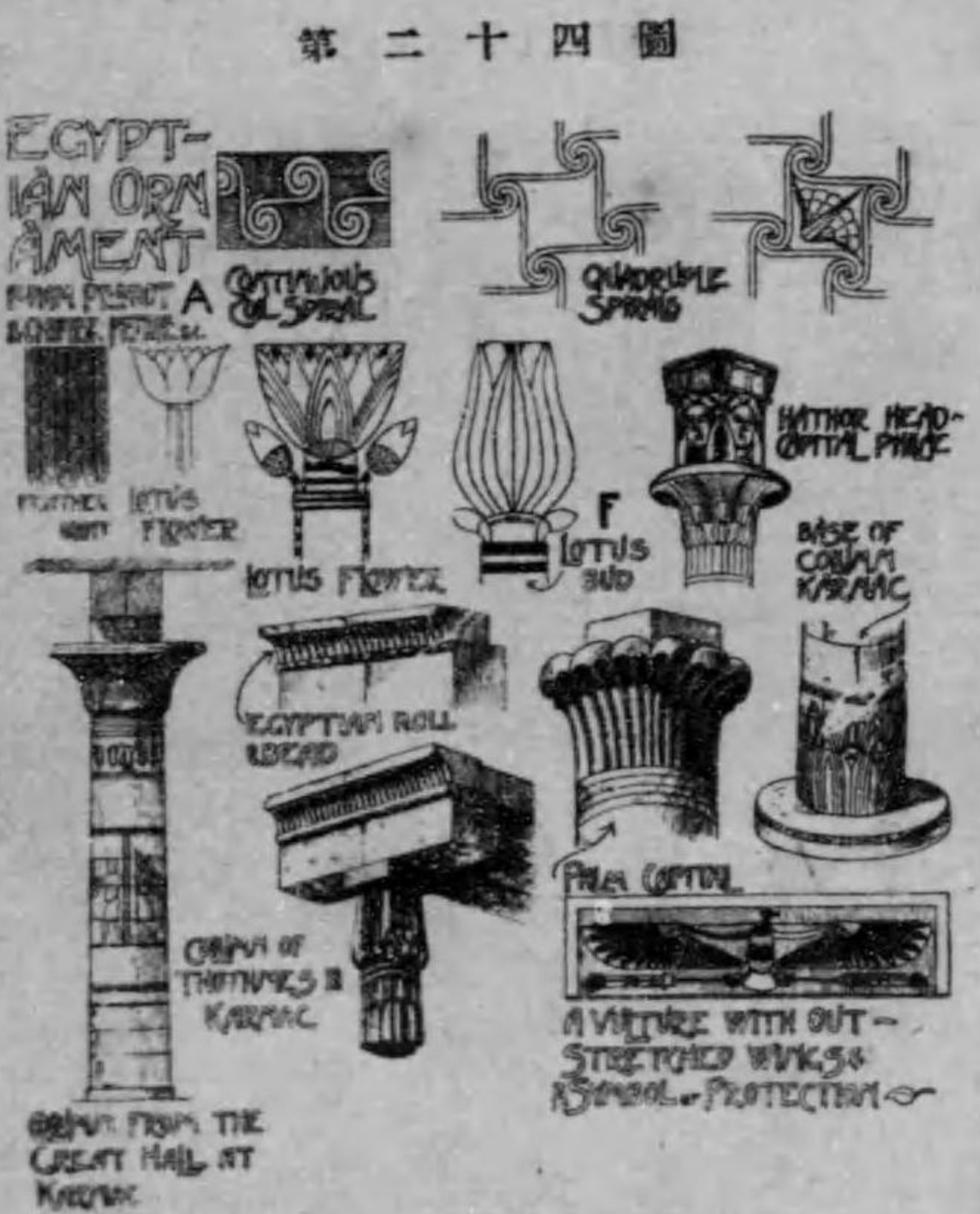


各種の柱

(一) 柱 柱にはパピルス、ロータス、バルム及び椰子が應用せられ(第二十三圖)、イシスの頭首が柱頭に用ひられたものがあり、又四角、八角の柱が用ひられた。柱は古き時代のもの程太く短く柱の間隔少く、後世に至るに従つて細く長く柱の間隔が大である。埃及建築では柱は建築物の外部に存在しない。

(二) 裝飾模様 模様には彩色を施し何れも強い原色が用ひられ、模様の種類は極めて多く、動物、植物、幾何模様、象徴模様、便化模様等(第二十四圖)である。

(三) 壁は頗る厚く主として花崗岩造又は煉瓦造で殆んど直線形をなし、外面には浮彫と象形文字を刻み内部には彩色裝飾を施したものが多し。



埃及の裝飾

- (四) 開口 Opening 開口は四角形で且に大きな楣が架けてある。埃及建築は楣式建築 The Architecture of the United Intel System と稱することが出来る。
- (五) 屋根 屋根は周囲の壁とこれと並んで立つ柱に大盤石を架してつくつたもので平坦である。
- (六) 線型 Mouldings 線型はその種類極めて少くピールド(玉縁)ホロー(虚面)が用ひられて居る。これらは組合つて蛇腹となり、パイロン及び壁の上部に用ひられて居る。

居る。

第三 西亞細亞建築

Western Asiatic Architecture.

二〇 概説



バビロン及びヘルシア

チグリス・ユウフラテス兩河の下流地方をメソポタミア Tigris Euphrates Mesopotamia と云ひ、地味肥沃にして夙に文化が開けた(第二十五圖)。ウル、ラルサ、バビロン等の都邑が早より河畔に起つたが、紀元前三八〇〇年頃バビロン人は附近を統一して大國となり、王ハンムラビの時はバビロンの全盛時代で商工業が大きいに進んだ。其後國勢次第に衰へて遂に植民地アッシリアの爲めに滅ばされた。 Assyria

た。後その版圖は東イラン高原より西リビア沙漠に至り、北アルメニア山地より南ベルシャ灣頭に及び、古代文明諸國を掩有せる一大帝國を成したがこれ又ベルシアの爲めに滅ばされた。

故に西亞細亞建築は大體に於てこれを次の三時代に分つことが出来る。

- (一) バビロン時代 (紀元前四〇〇〇年—一二九〇年)
- (二) アッシリア時代 (紀元前一二九〇年—五三八年)
- (三) ペルシア時代 (紀元前五三八年—三三三年)

以下各時代の建築について述べる。

一) バビロン建築 Babylonian Architecture.

二) ペルシアの文明

バビロン人はアラビア地方より移住せるセム種で、太陽及び月などの天體、風及び雷などの自然力を崇拜した。國內には木材及び石材が乏しいため建築には泥土を固め天日に乾してつくつた乾燥煉瓦を使用した。文字は楔形文字でこれはアッシリア、ペルシアに傳はり古代東方諸國研究の好資料となつて居る。星學が大いに發達した。

三) 神殿

神殿は多く七級の段をなしこの段を繞つて斜面の道が頂上に達して居る。段は屢々七曜に象つて各級を異つた色の瓦でつくられた。其の頂上では祭司が火を燃して祭祀を行ひ同時に天體

欠



# 欠

輪繫は實にアッシリアより採用したものと一般に考へられて居る。此意味に於て埃及建築及び西亞細亞建築は頗る興味深いものと云はねばならぬ。

## (四) 猶太建築 Jewish Architecture.

### 二九 概 説

埃及、バビロン兩國の間に介在せる二小民族を、ヘブライ人及びフェニキア人といふ。ヘブライ人はもとバビロンに居住したが、紀元前二千年頃アブラハムの時、西の方パレスチナに移住して農牧に従事した。其後凶年に遭ひて埃及に移つたが一神教を固執して虐待を受け紀元前一三二〇年頃モーセに率ひられて埃及を脱し後パレスチナの故地に歸つた。

ヘブライ人は夙に十二部族に分れ團結力が乏しかつたが、ダビッド王の時四方を征服して都をイエルサレムに奠め位を其子ソロモンに傳へ、ソロモンは北隣のフェニキアと結んで良材を得、國都にイエホバの殿堂及び王宮を營み大いに通商を行ひ國勢が極めて盛んであつた。ソロモンの死後十部族は北部にイスラエル國を建て、南部の二部族はソロモンの遺子を奉じて猶太國を建て、この兩國は相争ひて國勢次第に衰へた。

### 三〇 猶太建築の特色

猶太建築の遺跡はエルサレム附近にあるが貴重なものは極めて乏しく、パイプル等に依りてこれを考ふるに埃及建築と殆んど同一のもの、如くキドロン谷にある通稱アブサロムの墳墓はピラミッドの變形とも見るべき圓錐形をなし軒の線形は埃及特有のものであるがその柱はア  
イオニア式である。Lyca リキア地方にある墳墓には、アイオニア式の柱頭の原型と、考へらるる形  
のものが有り尚ほDental デンタル、Peitment ペチメントを頂いて居るものがある。  
これを要するにヘブライ人は固有の建築を有しなかつたのである。

#### 第四 希臘建築 Greek Architecture.

##### 三一 概説

建築様式がファীগツソンの『様式の要素』に因る事は既に述べた通りであるが、古典時代の前期としての希臘が當時既に完全な藝術的發展を遂げた素因も亦この『様式の要素』による。  
Classical Period

##### 三二 地理

希臘は巴爾幹半島の南端に位し(第三十圖)域内ピンヅスの支脈が縦横に走つて農耕地に乏し  
き爲め、人口の増加に伴ひ次第に航海、通商、植民の業に従事した。蓋し希臘は歐洲中最も海

第三十圖



岸線長く良港に富み、東方多島海上には大小の島嶼が基布して小亞細亞に至る飛石の觀を呈し、西にイオニア諸島がありて伊利、シシリー島に近いためである。この地理上先進諸國の文明を攝取するに都合よき地位にあつたことが優秀な建築様式の發達に影響して居ることは疑ふ可らざる事實である。

##### 三三 氣候及び建築材料

希臘の氣候は溫和にして風土の美と相俟て希臘人に豊富なる美感を發達せしむるに與つて力があり、尚ほ加ふるに美しくしき大理石の産出に富みしことは建築及び彫刻に妙技を振ふに極めて適當であつた。

##### 三四 風俗、宗教

希臘とは羅馬人の稱呼グレキアより轉じたもので、もとヘルラスといひ其の住民をヘレネス  
 (Troica) Hellenes  
 と呼んだ。ヘレネスの先住人又は祖先と考へらるるものにペラスギといふ人種がある。希臘人  
 はアリア人種一派でアカイア、エオリア、<sup>Paragi</sup>オニア、<sup>Ionians</sup>ドリアの四族より成り、就中イオニ  
 ア、<sup>Aryani</sup>ドリア二族が最も顯れた。植民地は黒海、地中海の沿岸各所に設けられドリア人の建設せ  
 る<sup>Dorians</sup>ビザンチウム、シラクサ、イオニア人の建設せるネアポリス、マシリアが最も有名である。  
 希臘人は自由獨立を愛し、其の屬する猫額大の小都市に據りて相闘争し、嘗て全土の統一を  
 見たことがない。然れども血族、言語及び宗教を同ふする故一國民たるの觀念を失ふに至ら  
 ず、時に及んで協同一致した。其の宗教は詩人が神話に基いて美化したもので、東方諸國に見る  
 如き神秘妖怪的の分子少く、神は多くの點に於て人間に近く唯稍々超越せる相違がある。主な  
 る神をオリンピアの<sup>Olympia</sup>十二神といひ、諸神の神殿を中心として祭祀其他の爲め其の地方都市の聯  
 合を見ることがある。祭典には其の氏子等四方より集つて餘興として競技會を行ふので其の最  
 も有名なるをオリンピア競技會といふ。オリンピアは希臘の主神ゼウス(ジュピター)を祀り四  
 年毎に行はるる祭典には本國人と植民地人とを間はず皆之に参拜し、祭典後盛大なる大競技會  
 が行はれ、優勝者は其の名譽を表彰せられ、神前に其の像を建つることを得、從て文藝美術の發

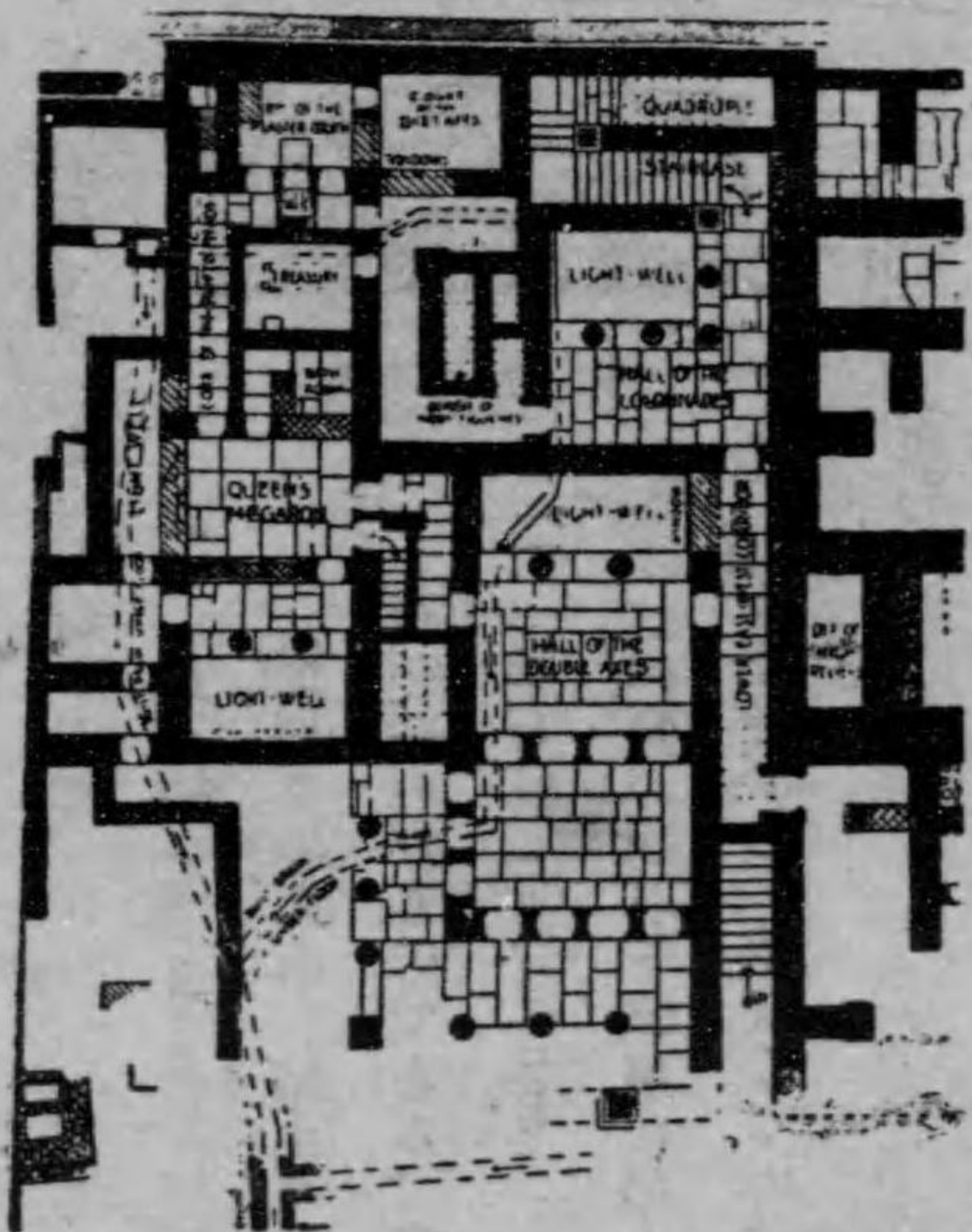
展に資せしことが尠くない。

三五 希臘建築の各時代

希臘建築は次の二時代に分けるの  
が便利である。

- (一) 前期ヘレネス時代の建築  
Pre-Hellenic Period
- (二) ヘレネス時代の建築(古典  
建築) Hellenic Period  
(Classic Architecture)
- (一) 前期ヘレネス時代  
紀元前三〇〇〇年—七〇  
〇年頃

第三十一圖



クノソスの宮殿の一部平面圖

三六 クノソスの宮殿 The Palace of Knossos

クノソスの宮殿(第三十一圖)は多数の室、中庭、柱廊及び階段を有する大規模のもので、少

くとも紀元前二千年頃の建築にかゝる。現在は全く廢墟となつて居るが、クレトの繪畫によりその柱は下方に細くなり、第三十四圖の如き柱頭を有したものと考へられて居る。

三七 城壁及び石牆 Fortifications and walls

すべて石積で次の如き三種がある。

(一) 巨石積 Cyclopean

荒切りの大石 粘土モルタルを用ひて積み、大石間の空隙には小石を詰めたものである。實例はアルゴス、チリンス等に在る。

Argos Tiryns

(二) 整石積 Rectangular

四角の切石を整層に積んだものである。然しながら同層内の堅目地は必ずしも垂直でない。實例は蜂巢狀墳墓の入口の通路に見るこ

Tholos

とが出来る。

(三) 多角石積 Polygonal

多角形の石を切り合せて積んだものである。(第三十二圖)實例はマイセネのアクロポリスの壁に見ることが出来る。

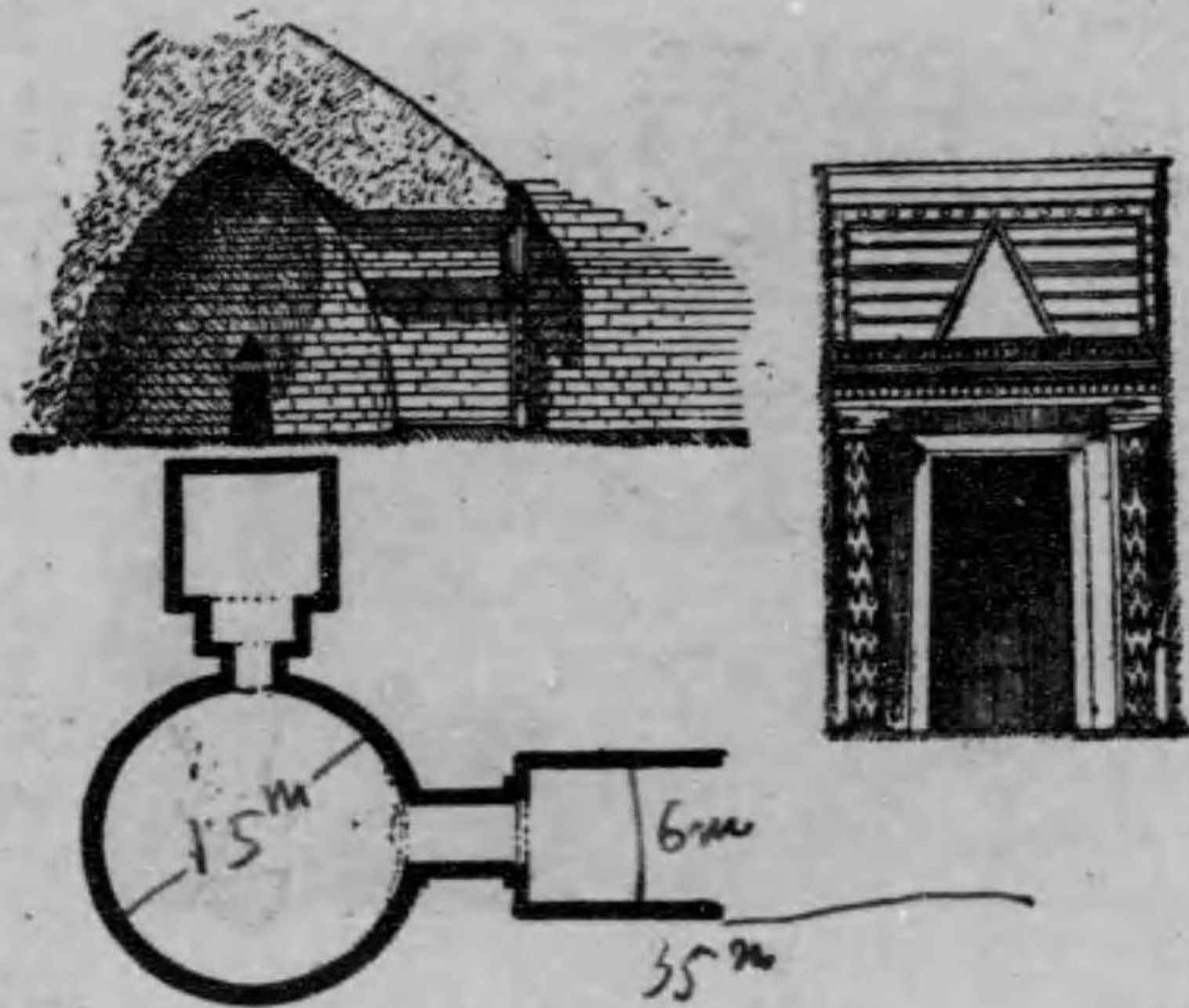
Mycenae Acropolis

第三十二圖



多角石積

第三十三圖



アトレウスの墳墓と其の入口

尚ほ以上の石積の外に種々の變形が用ひられた。

(一) 持出し積 Corbels

實例は蜂巢狀墳墓の入口の上部、マイセネのアトレウスの寶庫に於ける如き丸屋根風の屋根に見ることが出来る。

(二) 斜石石積 Inclined Blocks

斜面石を積み重ね合掌形の口をつつたものである。例へばデロスのアポロの右廟の如くである。

Delos Apollo

(三) 拱積 Arches

實例としてはナイダスの巨石積拱、ミアデスの拱形門等がある。

三八 アトレウスの墳墓 Tholos of Atreus

マイセネにあるアトレウスの寶庫(第三十三圖)は蜂巢狀に造られた墳墓で三部分より成つて

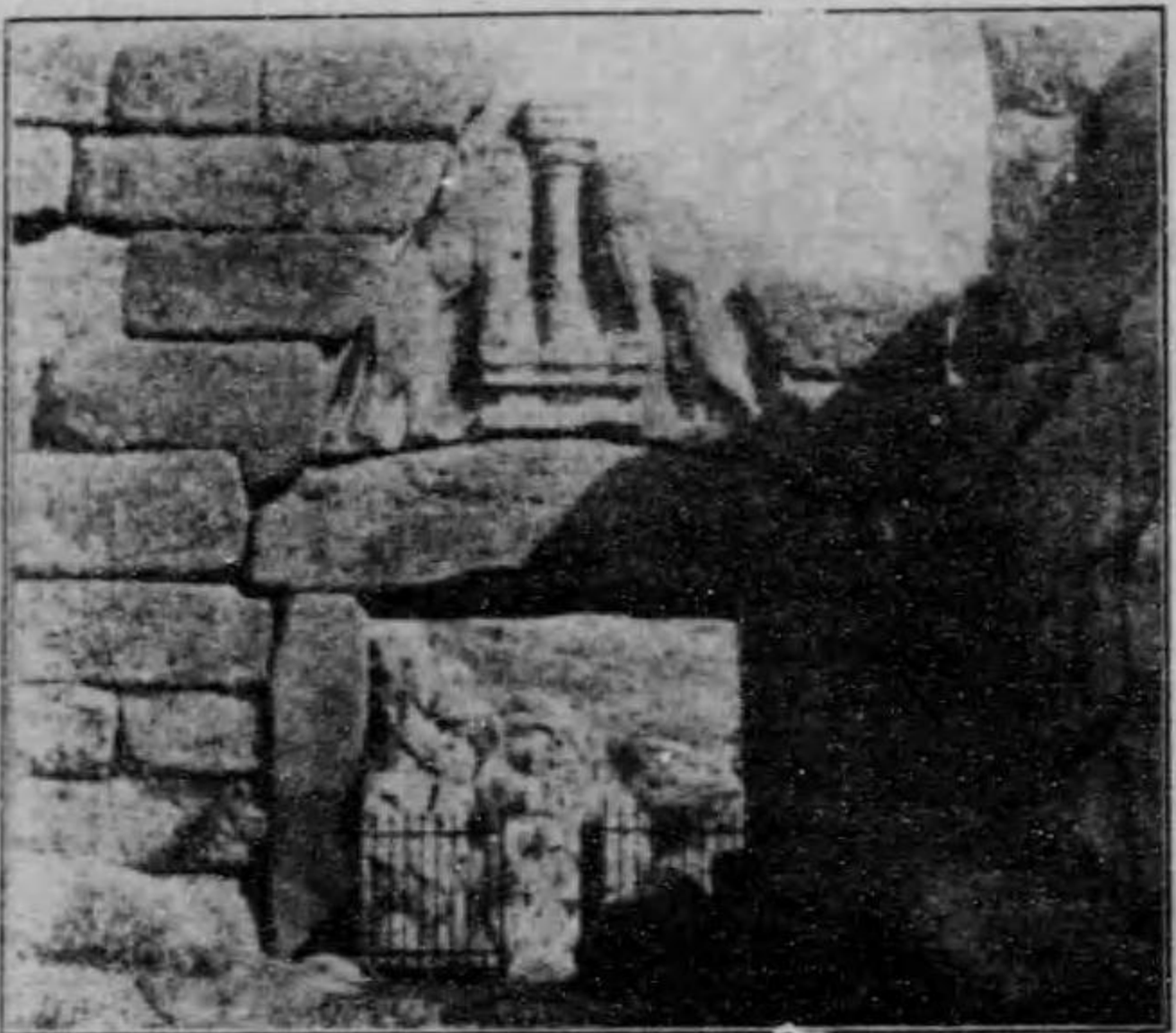
Mycenae 西洋建築史

居る。即ち主要の部屋はその断面が蜜蜂の巢の如く穹窿形に持出積につくられ、その前方に整石積の廊下、奥に納棺の暗黒の室がある。その特色は入口の左右に半圓の片蓋柱を立て上部に

大なる石楣を架し持出積の荷受拱があることである。その拱の裝飾、片蓋柱の形等は時代の特徴を最もよく表はしたものである。

三九 獅子門 The Gate of Lions

獅子門はマイセネ宮城の第一の城門で(第三十四圖)整石積石壁を以て圍まれ入口の上部に大石楣を据へ、上に持出し積にて拱の形をつくり、その中間三角形にアルカイトクの石彫を挿入してある。即ち一本の柱に對の獅子が立つて居る形で、柱は神靈を



第三十四圖

獅子門

表はし、獅子は之を守護せる形である。その柱は既に述べた如くマイセネ式を表はして居る。

(二) ヘレネス時代 紀元前七〇〇年—一四六年

四〇 オーダー The Orders

希臘の古典建築を發達せしめたものは、ドリア人とイオニア人である。ドリア人及びイオニア人は各特色ある異なるオーダーを造つた。これをドリア式、又イオニア式と名づける。尙ほこの外にコリンス式と名づけるものがあり、これらを希臘の三オーダーと呼ぶ。

オーダーとは基礎、柱身、柱頭を有する柱と、この柱が支ゆる軒部とを含めた典型を稱するので、實に希臘建築に於て始めて之を見るものである。後に羅馬人もこれを襲用し且つオーダーの數を増して主要なる形式とした。後に述べるレネッサンスの建築は勿論、近世建築に於ても尙ほ尊重してこれを利用したもので、建築には切り離すことの出來ぬ典型である。

三オーダーは其の柱頭の形、柱、軒部の鈞合恰好によつてこれを區別することが出来る。又オーダーに類し女像柱がある。これは柱の代りに女像彫刻を以てせるものでエレクテオンPropylonのものが著名である。Erechtheion

四一 ドリック式 The Doric Order

最も古く且つ最も簡素剛健で男性的の特色を有して居る。(第三十五圖)ベニ・ハッサンの實例に徴し、この原型を埃及に在りと考ふる人が多い。木柱、木梁及び木造小屋構造の形式を具へて居ることは事實でアバカス、アーキトレブ、トライグライフ、及びガツタ等は其の證據

西洋建築史

Abacus

Architrave

Triglyph

Gutta

四一

として見られて居る。

(一) 礎盤 Base

礎盤なく、普通三段階の石壇の上に、直接立つて居る。

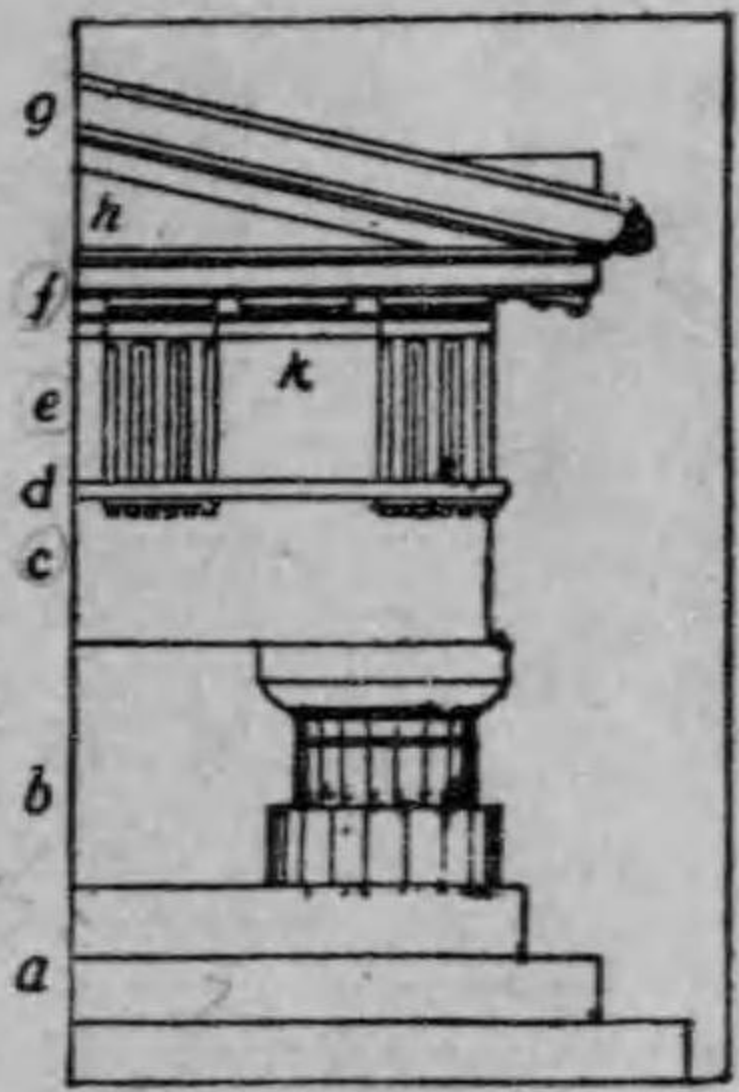


四二

(二) 柱身 Shaft

フロポーションは太く低い。高さは径の四倍乃至五倍半で、頂部が細く胴張が附いて居る。概して二十條の浅い溝影があり、その溝の縁は鋭い稜角をなして居る。

第三十五圖



ドリツク・オーダー

- a, Crepidoma, or Stylobate;
- b, Column; c, Architrave;
- d, Taenia; e, Frieze; f, Horizontal cornice; g, Raking cornice;
- h, Tympanum of pediment;
- k, Metope.

(三) 柱頭 Capital

四角の頂板の下に逆饅頭形を受け、下部にアニレットの平線が附いて居る。エキナスの曲線の性質でこの時代を識別することが出来る。隆盛期のものが最も力強い曲線

る。

を出して居る。

(四) エンタブレチュア Entablature

軒部はアーキトリーブ、フリイズ、コルニースの三部に分れ、アーキトリーブは平面で、フリイズは縦にトライグリフとメトープとを交互に有して居る。トライグリフは二本の堅溝と両端半分の堅溝とを附け、メトープは多くの薄肉の彫刻を入れて裝飾せられて居る。コルニースの下にはミユチュールとガツテが並んで居る。

(五) ペディメント Pediment

ティンパナムと稱せらるる三角形の壁面には普通彫刻裝飾を施し彩色を加へて居る。ドリフ式建築の主なる實例は希臘、シシリー及び南伊太利に發見せられる。

四二 アイオニア式 The Ionic Order

其の特色は螺旋又は渦卷の柱頭を有して居ること(第三十六圖)、之は埃及の蓮蕾又は山羊の角の形より變化し、アツシリアを経て、小亞細亞に於ける木柱に連鎖を有してゐること明である。ドリツク式に比較して稍女性的である。

(一) 礎盤

礎盤のプランは圓形で、アチツク礎盤が出来たのは後世である。

Attic Base

(二) 柱身

稍細長く、柱頭と礎盤とを入れて普通下部の直徑の約九倍の高さを有し、胴張がある。二十四の半圓狀の溝影を具へ、細い平縁を以て分界せられて居るが、ドリツク式程縁が鋭くない。

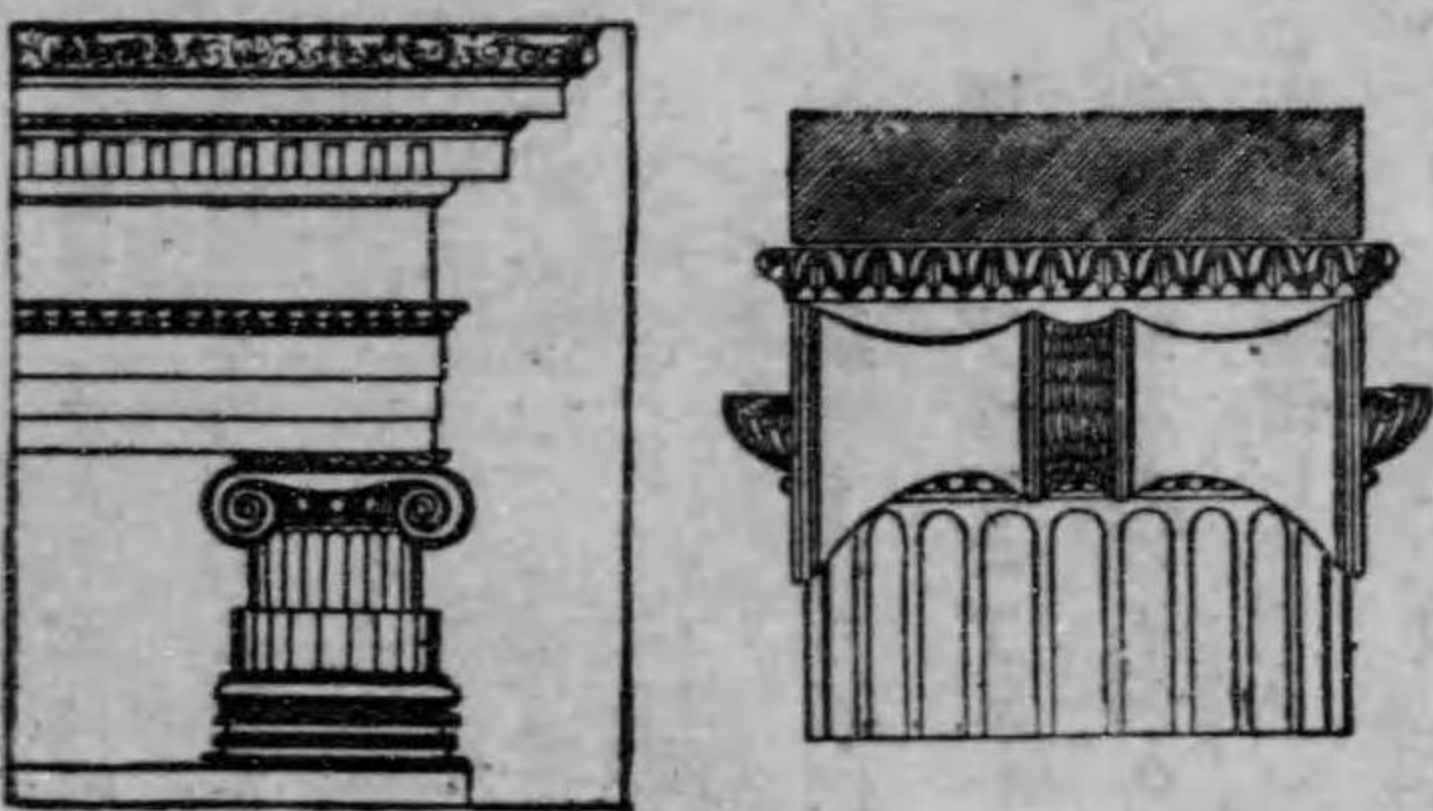
(三) 柱頭

渦卷形を有するのが特色である。普通前後に並んで居るが、隅柱の場合には三方正面となり、又時には四方に取付けたものもある。渦卷形の間には、鼻と矢の根、玉縁がある。

(四) エンタプレチユア

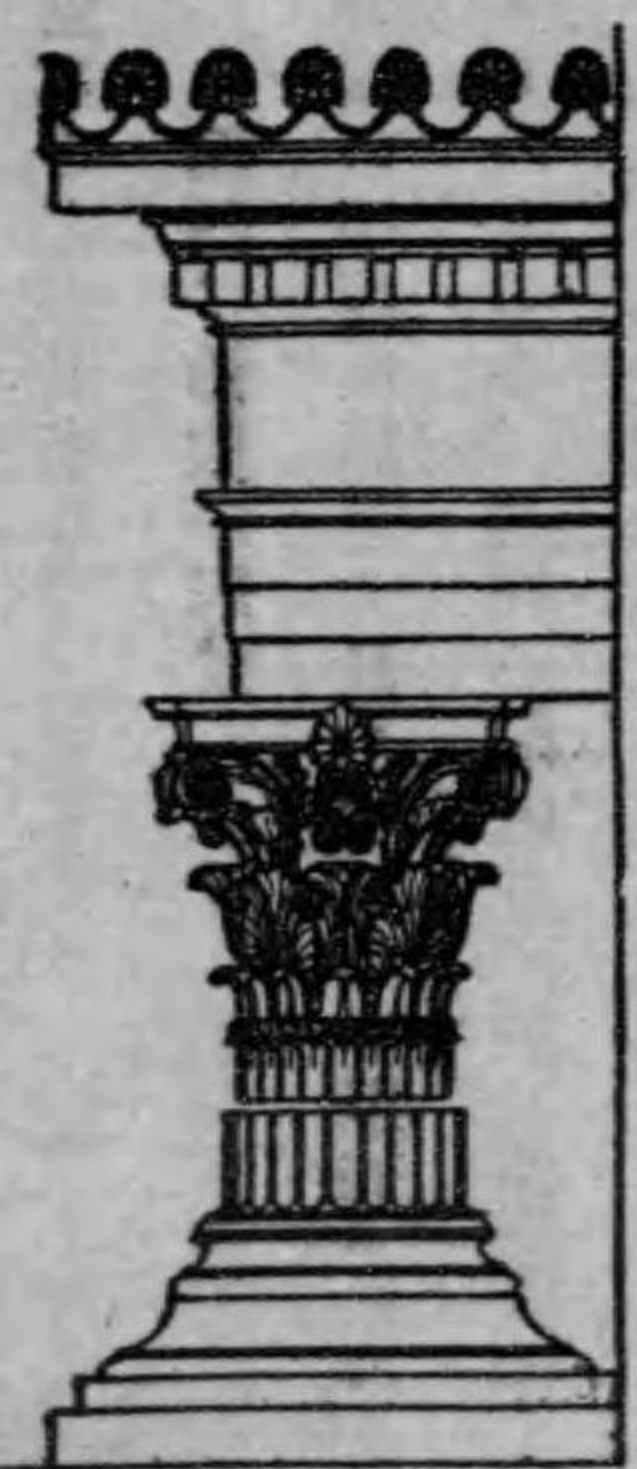
三部に分つこと及びその名稱共ドリツク式と同様である。只アーキトレイオは普通三段の表面より出来て、フリーズは、イグリスとメトリブが無く、之に代はるに浮

第三十六圖



アイオニック・オーダーとその側面圖

第三十七圖



コリンシアン・オーダー

四三 コリンヌ式 The Corinthian Order

コリンヌ式はアイオニア式よりも一層繊細華美で(第三十七圖)、希臘では餘り多く使用せられなかつた。柱は礎盤と柱身とが大體は於てアイオニア式に似、高さは柱頭をも入れて普通直徑の約十倍、石壇の上に立つことは他のオーダーと同様である。特色あるものはその柱頭で、

彫又は唐草彫刻を有して居る。コルニースはミユチユールの代りに、種の遺影とも見らるべき種木鼻縁形を附し、上には稍複雑な縁形を具へ、屢々忍冬唐草の薄肉彫にて飾られて居る。

Dentile Molding

(五) ベチメント

ティンパナムには普通彫刻裝飾を缺いて居る。

六) 裝飾

薄肉、唐草等主として彫刻裝飾を施し、彩色することが少い。アイオニア式建築の主なる實例は希臘及び小亞細亞に存在して居る。

アイオニア式よりも一層脊が高くその輪廓は倒鐘形でこれにアカンサスの葉が八葉づつ二段に彫刻してある外に八本の莖が上段の葉の間から出て、その先に縮葉を頂き、更に大小二個の渦巻が出て、大なるものは頂板の四隅を支へ、中央の小渦巻は葉状の裝飾を支へて居る。

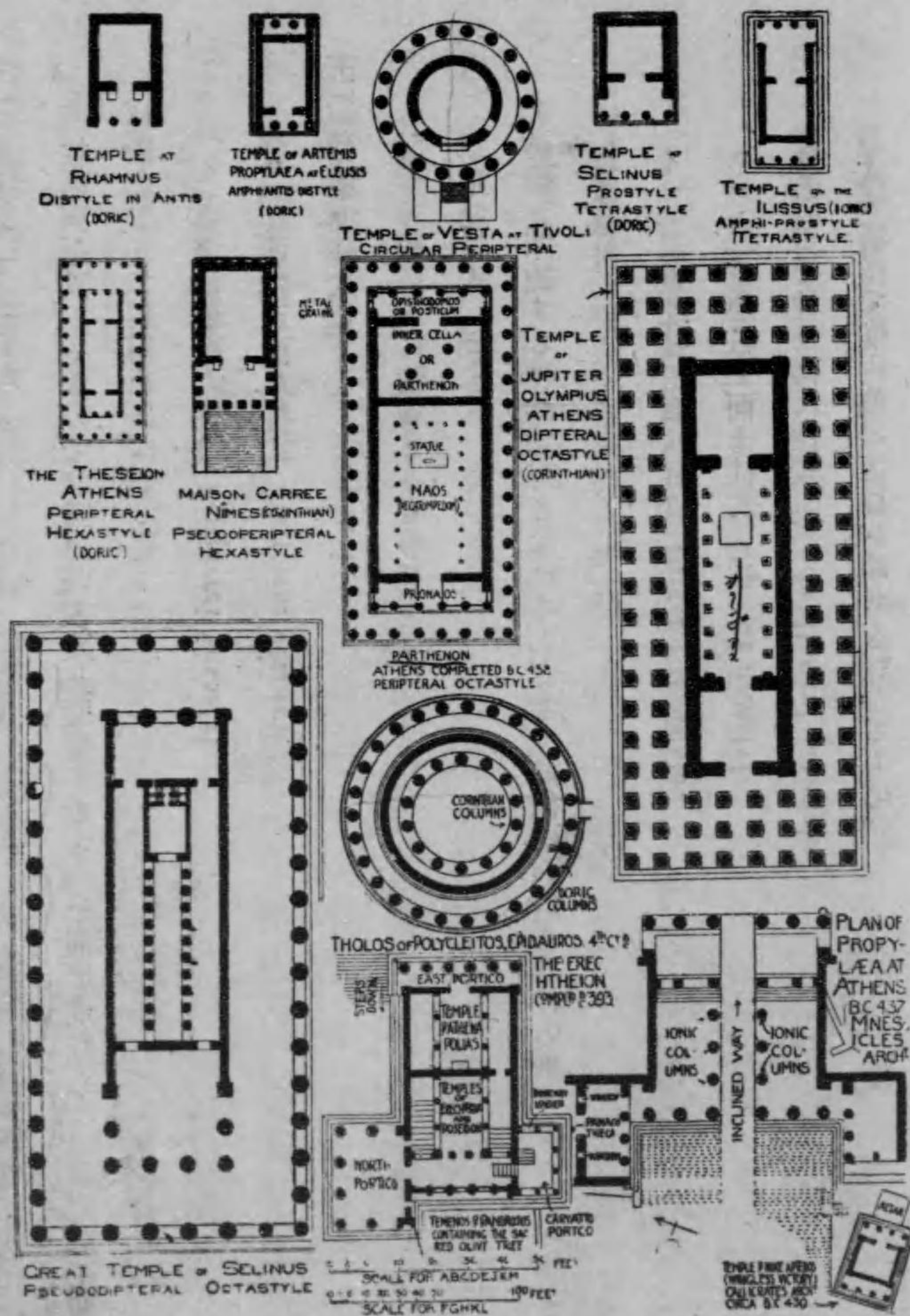
コリンス 建築の主なる實例は雅典の風見塔、リシクラテスの紀念塔(第四十四圖)等について見ることが出来る。

四四 神殿の形式

神殿の平面は簡單で且つ對照形で矩形をなすのが普通であるが稀に圓形、八角形、不整形をなすものもある。其柱の配置方、數及距離に依つて次の如き名稱が定つて居る(第三十八圖)。

- (一) 双柱式(前面又は後面) Di-style in Antis at one end or both ends.
- (二) 兩壁端柱の間に二本の柱を具ふるもので、前面又は後面にあるもの。  
Antis 前面四柱式 Prostyle Tetrastyle
- (三) 前後兩面の柱廊を關に各四本の柱を有するもの。  
Antis 後面四柱式 Amphiprostyle Tetrastyle

第三十八圖



神殿の各形式



(四) 連柱式 Peripteral

柱の列を設くるもので、圓形の本殿を圍繞するものを圓形連柱式といふ。又正面の柱數によりて名稱を異にして居る。  
*Peripteral circular*

(イ) 連柱正面六柱式 *Peripteral hexastyle*

(ロ) 連柱正面八柱式 *Peripteral octastyle*

(五) 變態連柱式 *Pseudo-Peripteral*

柱が本殿の壁に附着せるもの。

(六) 二重連柱式 *Dipteral*

神殿を圍繞する柱が二列となれるもので、前後兩面にある柱の數によりて名稱を異にして居る。

(イ) 二重連柱正面八柱式 *Dipteral octastyle*

(ロ) 二重連柱正面十柱式 *Dipteral decastyle*

(七) 變態二重連柱正面八柱式 *Pseudo-dipteral octastyle*

前式と同様で唯内側の連柱が略せられたるもの。

(八) 八角式 *Octagonal*

(九) 不規則式 *Irregular Planning*

四五 神殿の構造

材料は主として良質の大理石で、又普通の石材をも使用し、接合部には屢々鐵の膝を用ひて居る。その構造は堅固で、モルタルなしに積み上げ、壁面を平に磨き、屢々彩色を加へて居る。多く一階建である。建築の形態は一般に三つの部分より成つて居る。

(一) 腰積

スタイロバートと稱する普通三段の階段形又は台座の如き腰積を有して居る。  
*Stylobate*

(二) 柱

柱は礎盤、柱身、柱頭の三つに分けることが出来る。柱身には溝彫を有して居る。

(三) エンタブレチュア

エンタブレチュアは更にアーキトレヴ、フリーズ、コルニースの三部に分けることが出来る。

建物の前後兩正面の柱の上の部分は兩下屋根の終尾に依つて出来る三角形のペヂメントとな

り、普通彫刻が納めてある。尙ほ棟の前後及び軒先には頂飾及び軒先飾(第四十一圖)を据えてある。多くの神殿は窓がないの。採光は屋根に隠匿せられてあるクリアストリイに依る。或場合

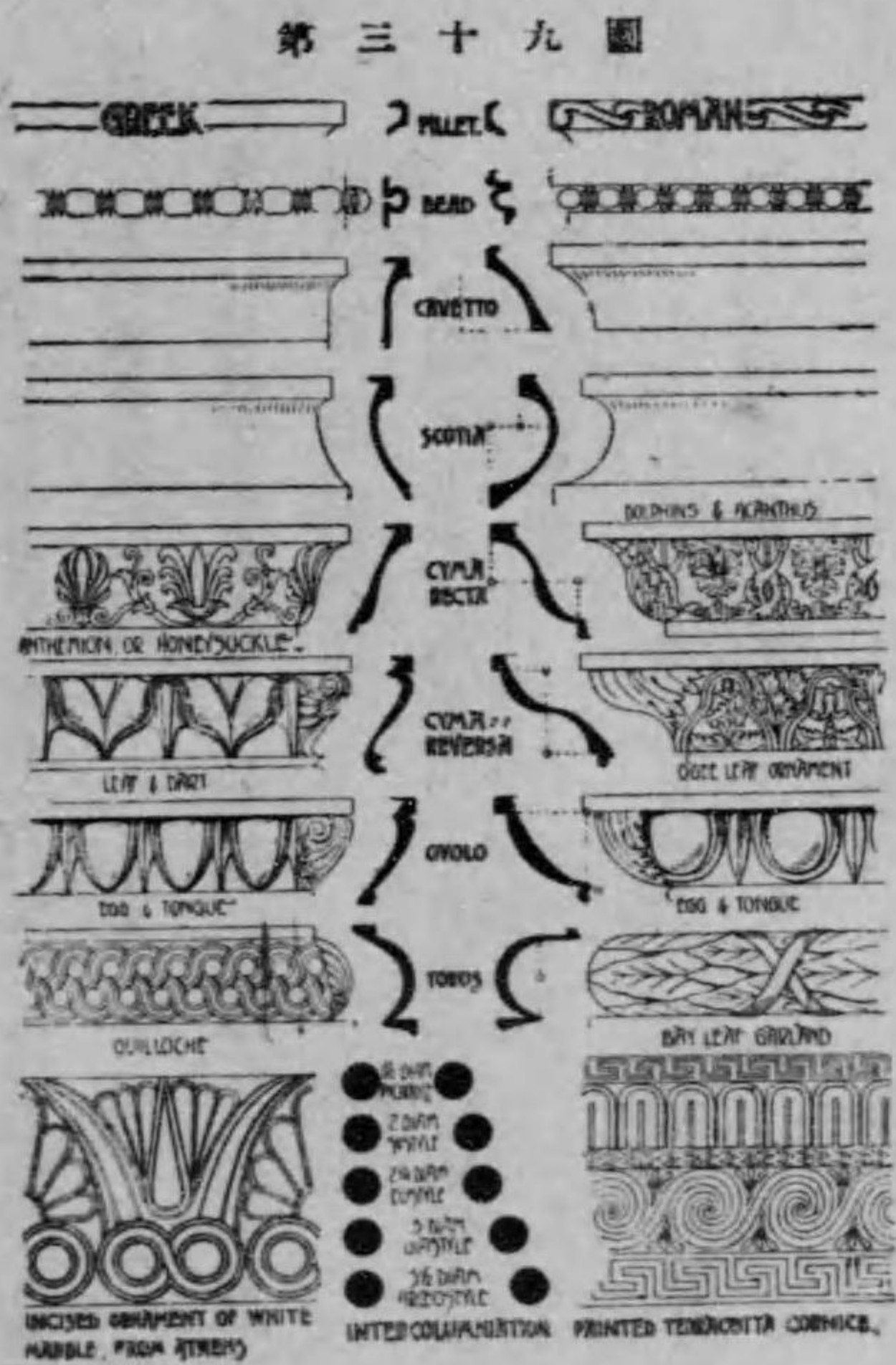
には天窓を有するものがある。

四六 線形 Moulding

希臘の線形は精巧と繊細な輪廊を有することがその特徴で、

後世建築の手本とせられて居る。この原因は美しくしき晴れた空と緻密な大理石とに依るものと考へられて居る。

線形の種類は大體次の如くで



ギリシア及びローマの線形の比較

あるが(第三十九圖)屢々これ等線形に適當せる裝飾を附して使用して居る。

線形

裝飾

(一) 平線 Fillet

\* \* \*

(二) 玉線 Bead

數珠子飾 Bead Reel

(三) 大玉線 Torus

輪繫飾 Guilloche

(四) 卵狀線形 Ovoid

飾舌卵 Egg and Dart

(五) 饅頭線形 Echinus

輪狀平線 Annulet

(六) 小剝線形 Cavetto

\* \*

(七) 大剝線形 Scotia

\* \*

(八) 表反曲 Cyma-recta

忍冬模様 Anthemion

(九) 裏反曲 Cyma-reversa

葉鏃飾 Leaf and Dart

(十) コロナ Corona

\* \*

(十一) 鳥嘴線形 Bird's Beak

\* \*

四七 裝飾模様と彩色

裝飾模様の中で主要なるものはアカンサスの葉と渦卷で種々の變化を加へて居る。忍冬模様も亦使用せられて居る。 *Palmette or honeysuckle*

彫刻は建築と共に最高の發達を遂げ、建築の各部、墓碑等に廣く應用せられて極めて好く調

和して居る。

彩色も亦一般に用ひられ殊にドリック式建築の内外に加へられて居る。黄、赤、青等の外に緑、金などが用ひられた。

四八 パルテノン神廟（紀元前四五四年—四三八年） The Parthenon

アセナ Aeolus アクロポリスの中央に建つ大建築で（第四十圖）（第四十一圖）、ドリック式の代表であるばかりでなく希臘建築の模範である。建築家はカリクラテス及びクテヌス、彫刻家はフ

イテアス、畫家はポリグノトスで、ペリクレスの治下最隆期の建築である。

ペリクレス Pericles プラテンは正面八柱連柱式で、側柱十七本を有して居る。外觀は前後にペヂメントを頂き、三段のスタイロバートの上に立ち、全部ペンテタコノ白大理石造で宏壯且つ崇高を極めて居る。

ペンテタコノ Pentateicous プロポーションの秀逸と細部の精巧とに特色を有する外、眼の錯覺に對する修正に備ふるため

柱の胴張、内方への傾斜、隅柱の距離の短縮、軒、臺壇等の水平線を微は凸曲線につくるなど後世建築家の範とするところが多く、又彫刻、彩色裝飾は建築と良く調和して驚くべき技能を示して居る。（第三十八圖参照）

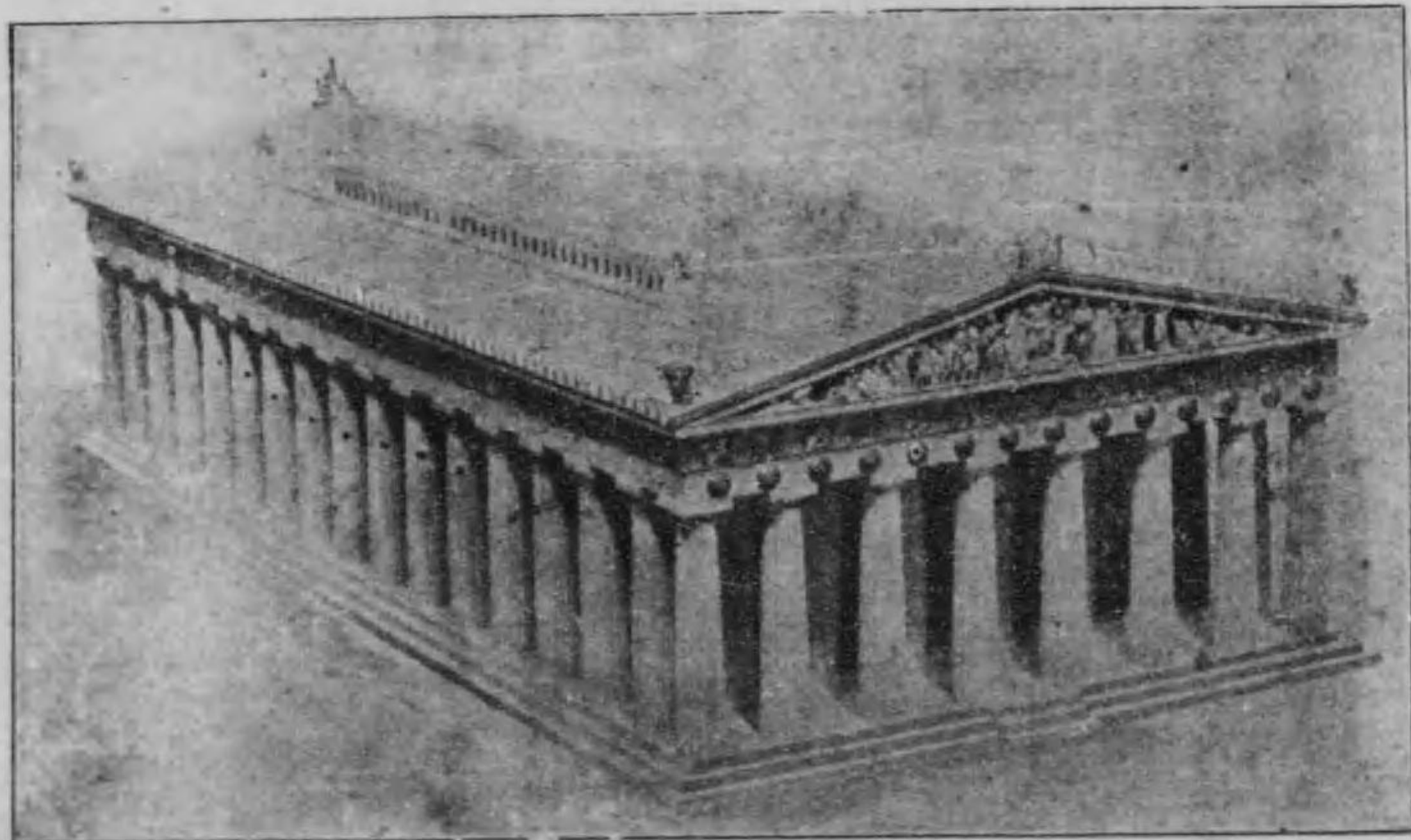
四九 チュース・オリンピアスの神殿（紀元前四八〇年） The Temple of Zeus Olympius

第四十圖



パルテノン

第四十一圖



パルテノンの模型

エレクテオン

アグリジエンタムに在り、ドリツク式である。希臘神殿中第二の大きを有して居る。ブランは變態連柱隔離式で、半柱は前後両面に七本、兩側面に十四本あるが、直徑十三呎といふ非常に大きなもので、内側の部分は扁平の片蓋柱となつて居る。

五〇 エレクテオン神殿 (紀元前四二〇年—三九三年)

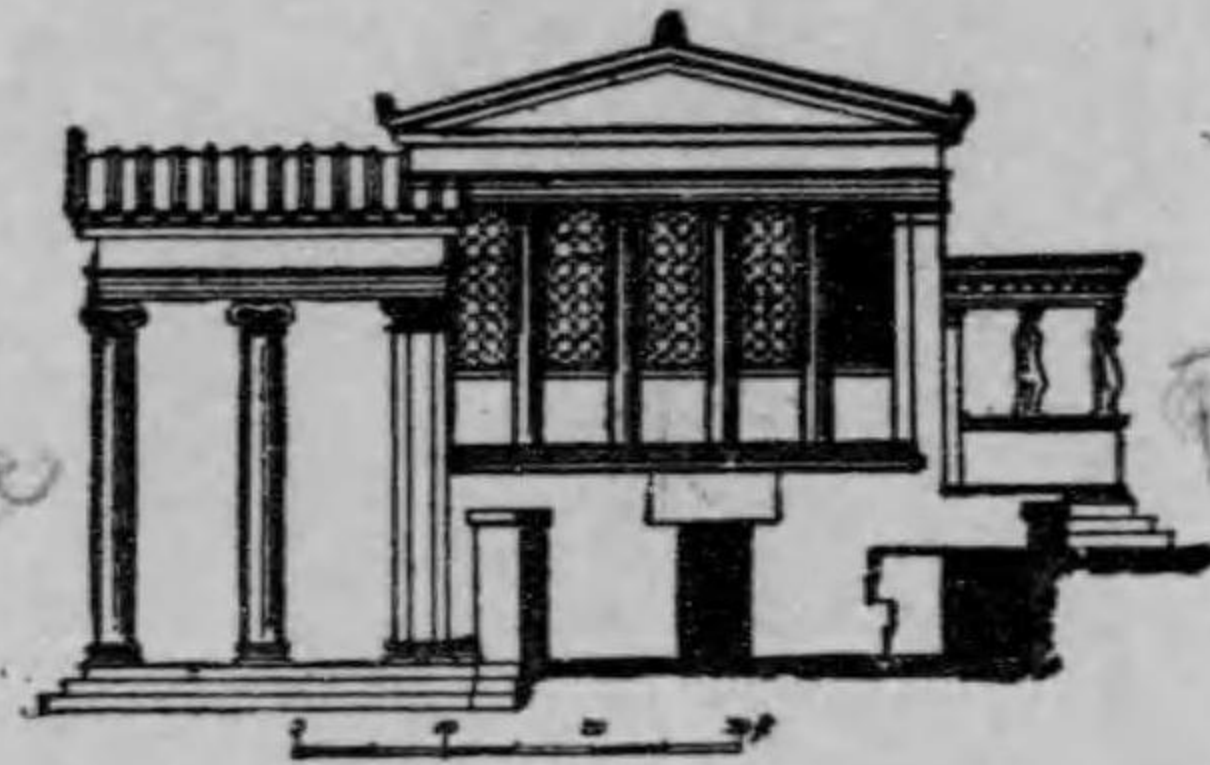
アクトロリスのナルテノアの北方に位する不規則式ブランの建築で(第四十二圖)(第四十三圖)アイオニア式の模範である。室内は度さが六十一呎三吋に三十一呎六吋で、神殿は建物の側面に柱廊がないので無柱神殿と呼ばれて居る。設計の違つた柱廊が三箇所ある。即ち東はアイオニア式六柱玄關、北はアイオニア式四柱玄關、南は女像柱玄關で、高さ七呎九吋、服装を着けた婦人彫刻像柱が六本ある。

五一 リシクラテスの司業紀念塔 (紀元前三三五年—三三四年)

コリンス式は希臘人には餘り愛用せられなかつた。従つてコリンス式神殿の遺跡は極めて稀である。

リシクラテスの司業紀念塔(第四十四圖)は小塔建築で台座の上に立ち六本のコリンス式柱を以て圍繞し丸屋根を頂き、其の頂上をアカンサネの葉の渦巻で飾つた美しい紀念建築である。

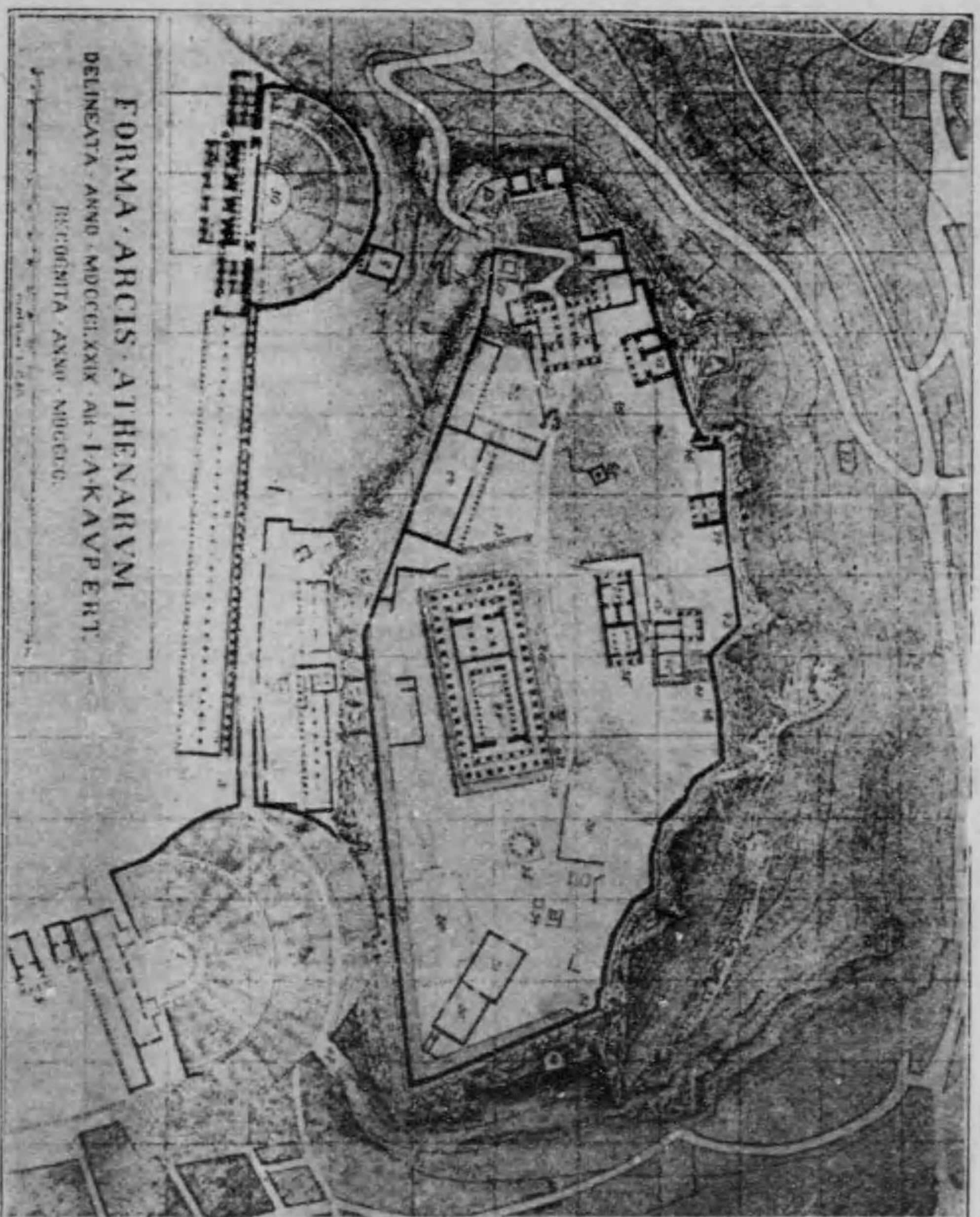
第四十二圖



エレクテオン神殿の復舊圖



エレクテオン神殿



- 1) Theater of Dionysus
- (19) Temple of Athena Nike
- (33) Old Temple of Athena
- (9) Stoa of Eumenes
- (20) Propylaea
- (40) Erechtheum
- (10) Odeion of Horodes Atticus
- (28) Parthenon

テアトロニキアの平面圖

五一 劇場及び音楽場 Theatres and Odeons.

劇場は普通丘陵の斜面を利用して観覧席を造り、低き部分に奏樂部と舞台を設け、すべて石造にて無屋蓋である。劇場は次の三部分より成つて居る(第四十五圖)。

- (一) 観覧席 プランは普通半圓より大きく、約三分の二圓である。斜に地を削つて大理石の雑段席を設けてある。

- (二) オーケストラ 観覧席に圍まれた圓心の部分に平坦な空地を残り、大理石又はモザイク

リシクラテスの司樂記念塔



第四十四圖

ックを敷てオーケストラ席とし、中央には像を立て又は祭壇を設けてある。

- (三) 舞台 舞台は物語場と呼ばれ、観覧席に對し、オーケストラ席を挟んで長方形の建築

物をつくり、中に物語場と樂屋とがある。列柱を立て彫刻を施し莊嚴なものもある。

エピダウロスの劇場は最も大きく且つ美しく、割合によく保存せられて居る。全劇場の直径は三百八十呎で、圓形のオーケストラ席の直径は約六十六呎である。座席は中間の通路にて

上下に二分せられ、上部は二十列、下部は三十二列をなし、

其の間を二十四段の階段が下より上に向つて半徑の如く放射状に貫いて居る。

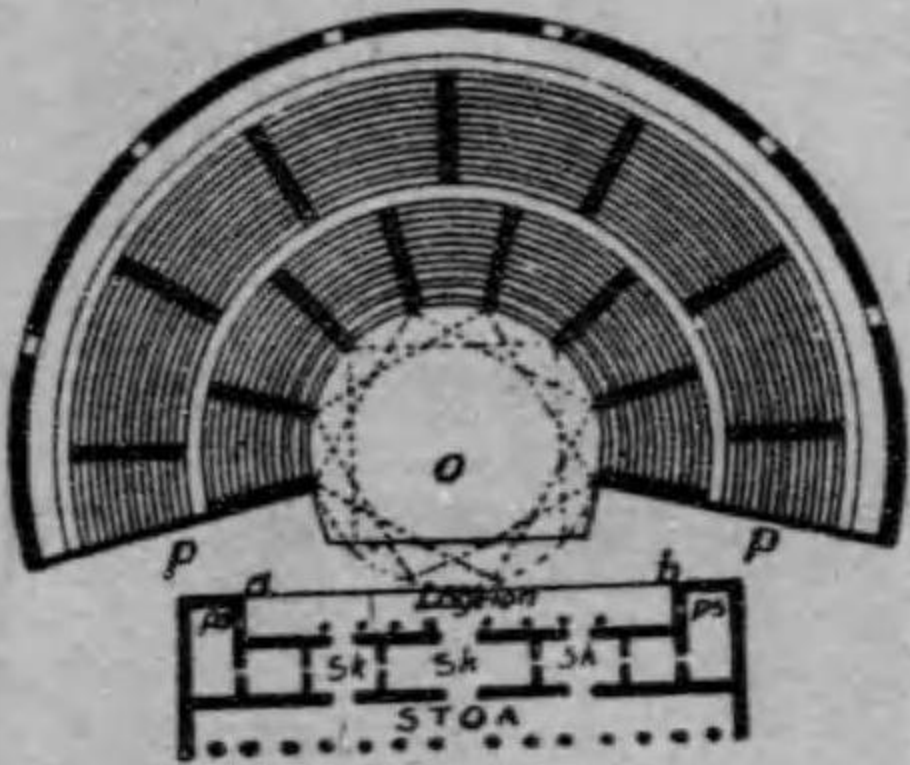
オデオンは其の形式が劇場と全く同じく、只規模が小である。

五三 競走場及び競馬場 Station and Hippodrome

競走場及び競馬場は殆んど同種類のもので後者は其の規模の異なるものである。丘陵を利用して觀覽席を設けたことは劇場と同様で、只長方形の一端を半圓形とし、一方を出入口及び出發場となし、三方を雜段席として居る。雅典のスタディオンは優に四五萬人を容れ、紀元前三三一年の起工にかゝつて居る。

五四 アゴラ(市場及びストア、柱廊) Agora and Stoa

第四十五圖



ギリシアの劇場

アゴラは市場等の爲めに設けられた無屋蓋の集合所で、その大なる空地の周圍に吹抜柱廊を繞らし、遊歩又は會合の用に供し、大抵神殿、パンシカ、競走場等の公共建築物の前に設けられ、ストアはこれ等公共建築物を連鎖する通路である。オリンピアの反響柱廊は有名である。

五五 プロピレー Propylaea

プロピレーはアクトポリス其の他神境、神苑等の入口に正門として建設せられたものである。アゼンスのプロピレーはペリクレス時代の建築家ネシクルスの建築にかゝり、ドリツク式の不規則なプランをなして居る。

五六 墳墓 Tombs

墳墓には次の五種がある。

- (一) 埃及のピラミッドの如く堂々たる記念建築物
- (二) 岩石の中に穴を穿ち棺を入れたもの
- (三) 墓標石を用ひたる小墳墓

ハリカーナッスのマウソレウムは(第四十六圖)マウソロス王のために建立した最も著名の墳墓で、方形の基壇の上に立つ墓室は、周圍にアイオニア式柱を繞らし、屋根は方形屋根で、屋

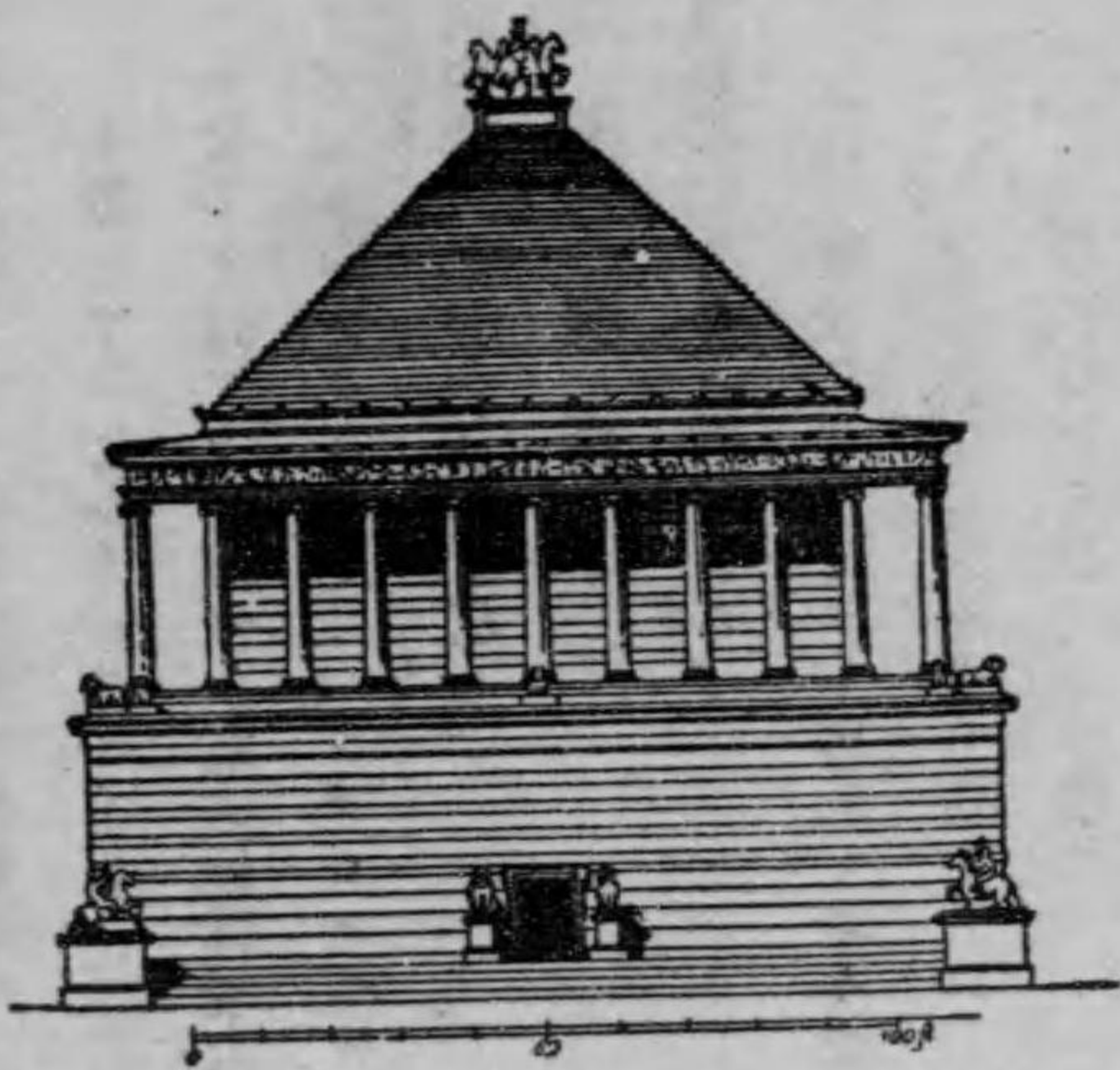
頂にはもと大理石彫の四頭馬車と群像の飾があつた。

五七 宮殿及び住宅 The Palaces and Domestic Buildings

クノッスのマイノス王の宮殿は中央の細長き中庭を圍んで建てられた多層建築で、階子段によつて昇降せられた。紀元前約二〇〇〇年頃の建築である。

住宅は正しく碁盤形に區劃せられた街路に面して長方形に建てられ、玄関を入ると中庭があり、その中庭の周圍に部屋が配置せられ、その構造様式等は伊太利に在るポンペイ市の住宅と似たものである。これらに依つて見ると當時既に都市計畫が行は

第四十六圖



マウソレアム(ハリカーナッスに於ける)

れて居たことが知られる。

五八 希臘建築の特色

希臘建築には特色が多い。次ぎはその主なるものについて述べて見やう。

- (一) プラン プランは簡單で、概して對照形である。圓形の配置も用ひられた。
- (二) 柱 オーダーは最も特色あるものである。コリンス式は希臘人には滅多に使用せられなかつたことは既に述べた通りである。
- (三) 壁體 壁の構造は精密且つ堅固で、モルタルを使用しなかつた爲めその目地は巧妙を極めた。材料には大理石が用ひられた。
- (四) 開口 希臘建築は楣式に屬する。開口には楣を架したためその形は四角である。
- (五) 線型 線型については既に述べた通りである。
- (六) 裝飾模様 裝飾模様としては忍冬、葡萄唐草、アカンサス、蕁等の植物模様、グリン、フイン、ドルフイン等の動物模様、及び幾何學的模様が使用せられた。

第五 エトルリア建築 Etruscan Architecture

五九 概説

エトルリア人は羅馬が未だ隆盛とならぬ以前の、中部伊太利の先住民で、特殊の文化を有

1921. 7. 10

し、羅馬の建築、彫刻、繪畫等に甚大なる影響を與へて居る。

六〇 神殿

プランは多く方形をなし、柱の間隔は大きく其の柱の上には木造台輪があつた。セラはジュピター、ミネルヴァ及びジュノーの像を安置する三室に分かれ、大體に於て希臘の殿堂に類似して居る。  
Cella Jupiter  
Minerva Juno

六一 墳墓

墳墓には二種ある。

(一) 墓標を立てたもの  
Tumuli

(二) 石窟墳墓

往々内部に棺室及び壁畫を有し、構造も東洋建築の影響を受けたと考へらるゝものがある。

六二 エトルリア建築の特色

構造上特色が多い。都市の周壁に多角形組石積のものがあり、半圓拱を用ひたクロアカ、マキシマの大暗渠がある。壁は非常に構造堅固で、モルタルを用ひずに大なる石を積んで居る。  
Cloaca  
Maxima  
拱の利用は特に著名である。

第六 羅馬建築 Roman Architecture

六三 概説

第四十七圖



羅馬帝國

羅馬建築はエトルリア建築の後に起つたものでエトルリア建築の構造に希臘建築の美術を結合せしめた所謂複合様式であるが、良く固有の國民性に同化し特色を發揮するに至つた。後に復興式建築の标本となり、希臘建築と共に古典建築として後世人の研究の的となつて居る。

六四 地理及び氣候

伊太利半島は海岸線短く、海上に散在する島嶼も多くない(第四十七圖)。半島内にはアペニン山脈がその一端より他端に走り、至る處山地に富んで居るが希臘に於ける如く小谿谷に分割せられて居ない。従て羅馬人は希臘

人の如く海國の民とはならず、又當時知られた世界の各方面に殖民を送らなかつた。その位置



は却て歐羅巴大陸に學藝を傳播する役目を果すに適當して居た。

伊太利の氣候は北部は溫暖で、中部は尙ほ一層溫和であるが南部は殆んど熱帶風である。

六五 建築材料

建築材料として主として使用せられたものは、混凝土、大理石、煉瓦、テラコッタ、及び各種の石である。混凝土は羅馬地方に厚い層をなして存在せる火山灰に、石灰石を混して造つたもので、大理石は多く張付として使用せられた。

六六 伊太利の統一

上古伊太利半島にはラチン人、ガリア人、エトルリア人、ウンブリア人、サビニウム人、サムニウム人及び希臘人ありて各々一方に割據した。この内ガリア人はケルト族で北方に住し未開の蠻民であつた。エトルリア人は夙に希臘人と交通し一定の文化に達した。ウンブリア人、サビニウム人及びサムニウム人は、ラチン人と同種であつて、就中、サムニウム人はエトルリア衰頽後一時勢力があつた。此外南部に希臘殖民地があつた。

羅馬の建國は明かでないが、元とチベル河畔の丘上に、ラチン人、サビニウム人、エトルリア人の建てた三部落が合して、一市を成したものの様である。羅馬市がラチウムに於て巔然頭

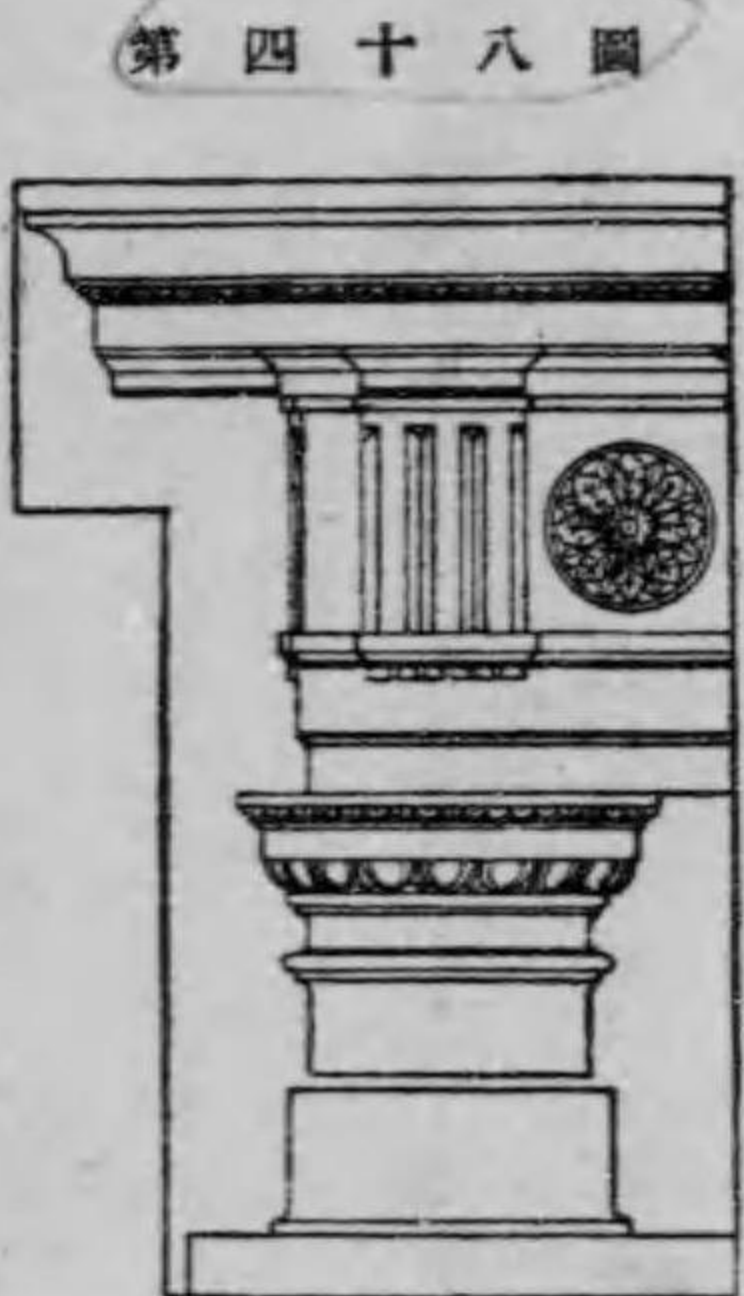
角を顯はすに至つたのは、其地が要害で且つ農産地を控へ、交通の便に富んだ爲めである。此故に羅馬は幾くもなくして附近の諸部落を征服した。

羅馬建國は紀元前七五〇年で、最初の王をロムルスと云ひ、以後選舉王制となり、貴族會があつて王を選舉し、元老院があつて之を補佐し、凡て六王があつたが、最後の王が暴政を行ふに及んで、紀元前五〇九年に王政を廢して共和制となし、毎年貴族の中より統領二人を互選して、行政、司法及び軍務を總裁せしめ、又國家危急の際には統領は一人の獨裁官を任命して、六ヶ月を限り文武の大權を行ふことを得しめた。

國初より羅馬には貴族、平民の二階級ありて、兩者の軋轢が絶へなかつたが、紀元前三〇〇年頃には貴族、平民の權利略、同等となつて多年の紛争は全く跡を絶ち、上下協力して外敵に當ることを得た。

是より先き羅馬人は北方の強敵たるエトルリア人と連年干戈を交へたが紀元前四世紀の初に至り遂に之を征服した。既にしてガリアの蠻族が大舉して侵入し、羅馬人之を防いで敗れたので大金を與へて退去せしめた。新興の羅馬に取りこれは實に一大打撃であつたが羅馬人は爾後銳意恢復を圖り、幾くもなくして市は再建せられ羅馬亦興り力を南方の徑略に用ふることを得

た。  
 後サムニウムを屈服し、ガリア人の再侵を撃退し、南端の希臘殖民市タレンツムを伐ち、  
 他の希臘殖民市も亦降り、紀元前二六六年には北方ガリアの地を除く伊太利半島の全部を  
 した。



ドリツク・オーダー(ローマ)

溝彫無く、柱頭のエキナスは四分圓の形となり、アネレットを省き、  
 稍下つて玉縁を加へて居る。  
 Echinus  
 Anulet

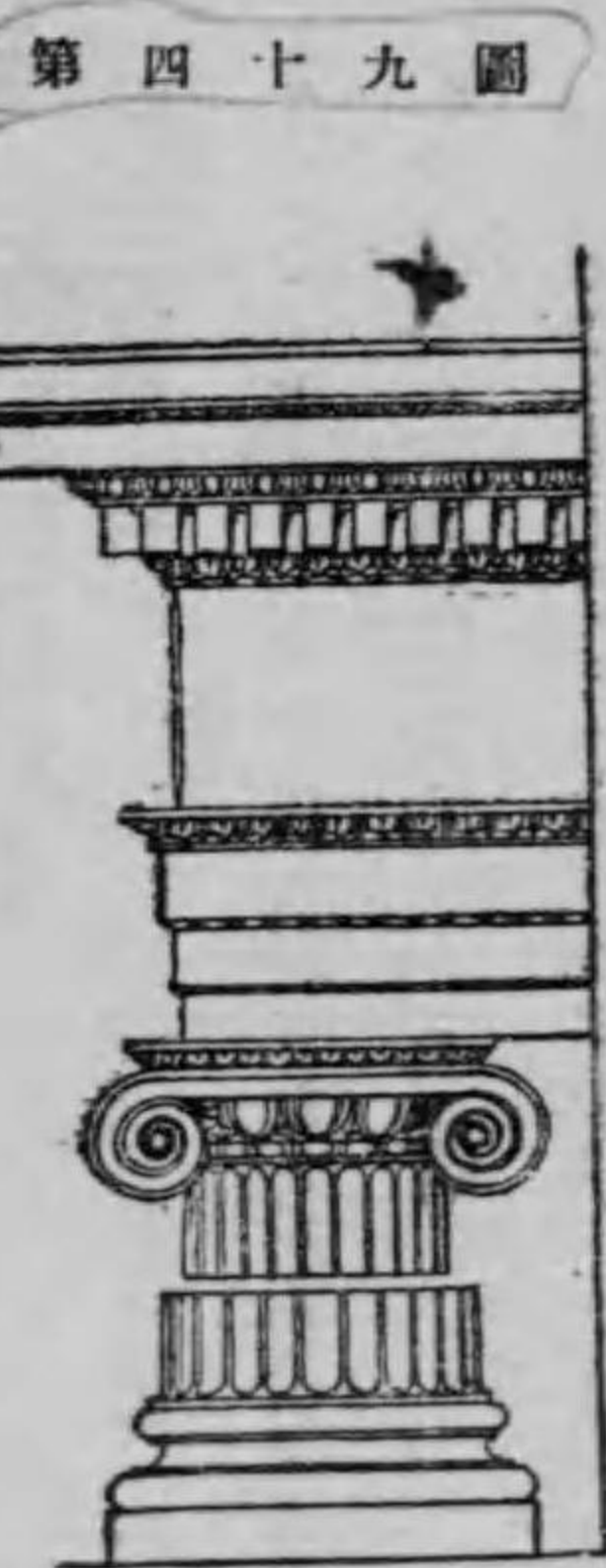
(二) ドリア式 希臘のものに比較して餘程纖細となる(第四十八圖)。礎盤を附し大體タ  
 スカン式と同様で、溝彫を省くこともある。トライグライフは建物の隅でも常に柱の  
 Triglyph

六七 羅馬のオーダー The Roman Orders

希臘の三オーダーの外に尚ほ、タスカン、  
 Tuscan  
 コンポジットの二オーダーが加へられた。  
 Composite

(一) タスカン式 羅馬ドリア式と呼ぶ人  
 もある。ドリア式を簡單にした如き  
 ものである。簡單な礎盤を附け、柱身には

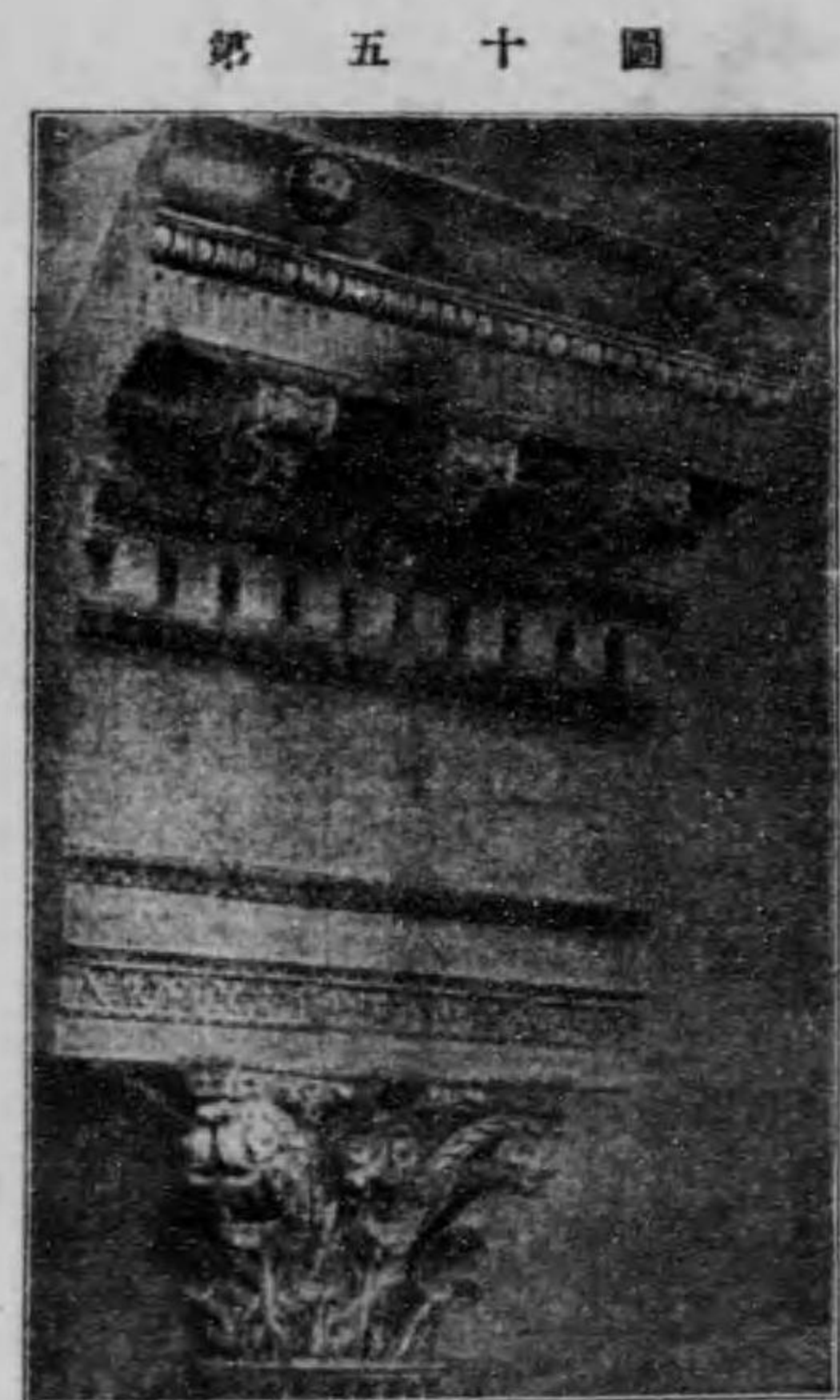
中心に位置を占めて居る。



第四十九圖

アイオニツク・オーダー(ローマ)

(三) アイオニア式 柱頭の四方に  
 渦卷形が附き四方正面の形を具  
 へて居る(第四十九圖)。軒部は  
 一層華麗となり、蛇腹下に屢々  
 持送形を有して居る。



第五十圖

コリンシアン・オーダー(ローマ)

(四) コリンス式 非常に好んで多  
 く使用せられて居る(第五十圖)  
 柱頭はアカンサスの葉を巻いて  
 飾つ居るが、その葉は寫生的の  
 ものが多く、中には橄欖葉を用  
 ひて居るものがある。軒部もフ  
 リーズに蔓卷唐草又は小供の浮  
 彫等の裝飾を加へ艶麗である。  
 Frieze

(五) コンポジット式 コリンス式の上部に更にアイオニア式の渦巻形を加へた形式のもので、一層複雑のものとなつたが大體に於てはコリンス式と同様である。

六八 オーダーの使用法 Use of the Orders

羅馬人は各階毎にオーダーを重複して使用することを始めた。此の風は後に復興期建築等に

應用せられて居る。その用ひ方は

常に簡單なオーダーを下階に、複

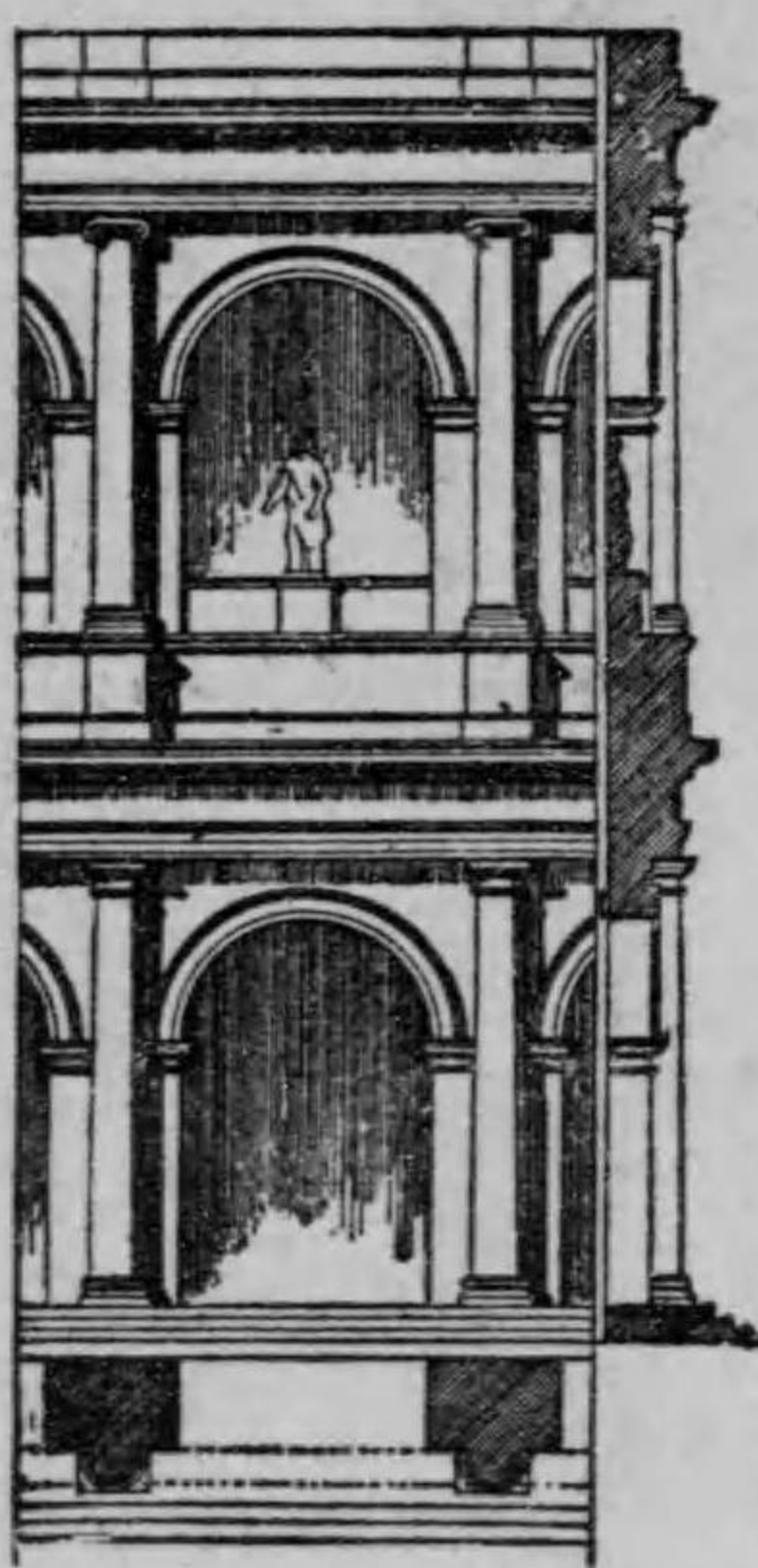
雑なオーダーを上階に順次に重ね

て居る。

六九 アークード Arcades

アーケードとは拱を連続させた

第五十一圖



アーケード (ローマ)

もので(第五十一圖)羅馬に特有なものである。

○ 穹窿構造法 Vaulting

穹窿は拱と共にエトルリア建築より學んだもので、これには次ぎの種類がある(第五十二圖)。

(一) 半圓形又は筒形穹窿 The semicircular or wagon-headed vault.

蔽はんとする四角形の二邊の上に直接かけるもので充分厚き壁を有する部屋に使用せられて居る。

(一) 交叉穹窿 The cross vault.

正方形の間を掩ふに用ひられ 廊下及び長方形の室

は之を數區に分けて用ひられた。半圓形穹窿の交叉し

たものである。

(二) 圓蓋 The dome

穹窿構造法が應用せられた爲め、一般に張間を増大し外

部に構造用の柱の必要なく、プランも矩形等に制限せらる

ることなく、圓形のものが増加した。

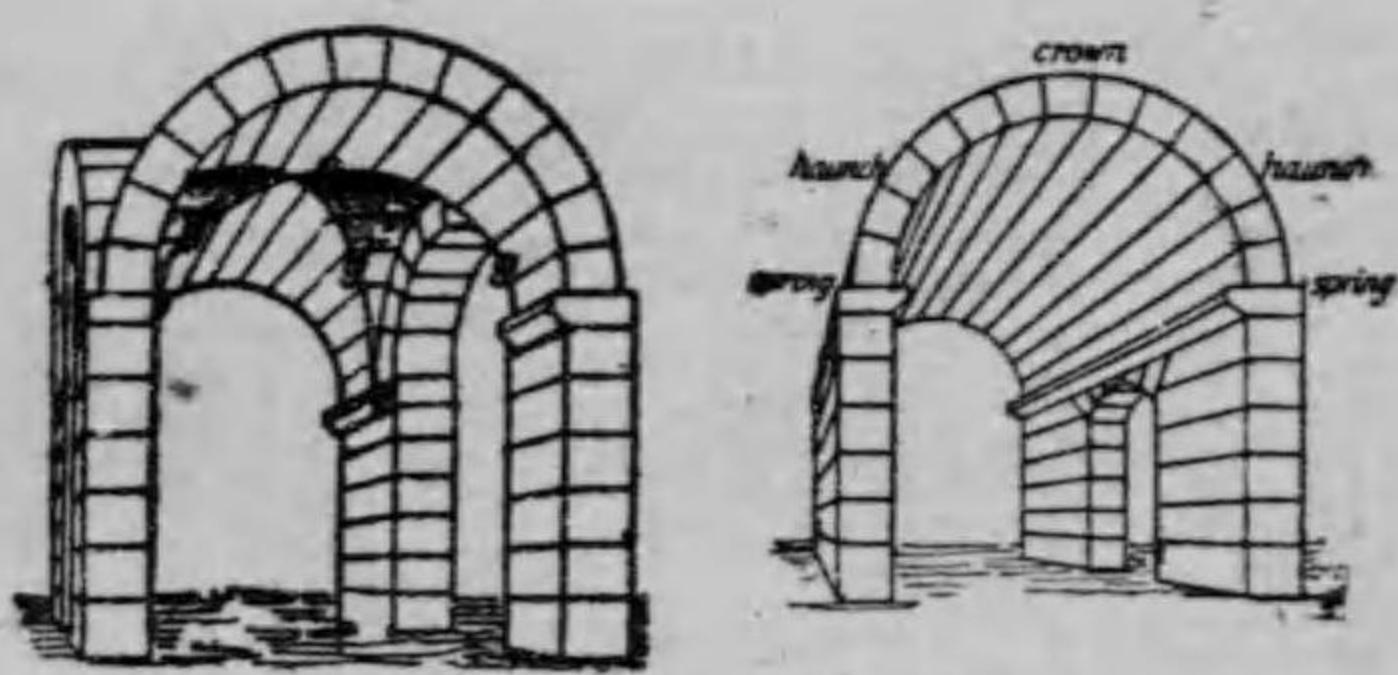
七一 壁體の構造

壁體の構造法には二種ある。(一)角石積法で目地にモルタル

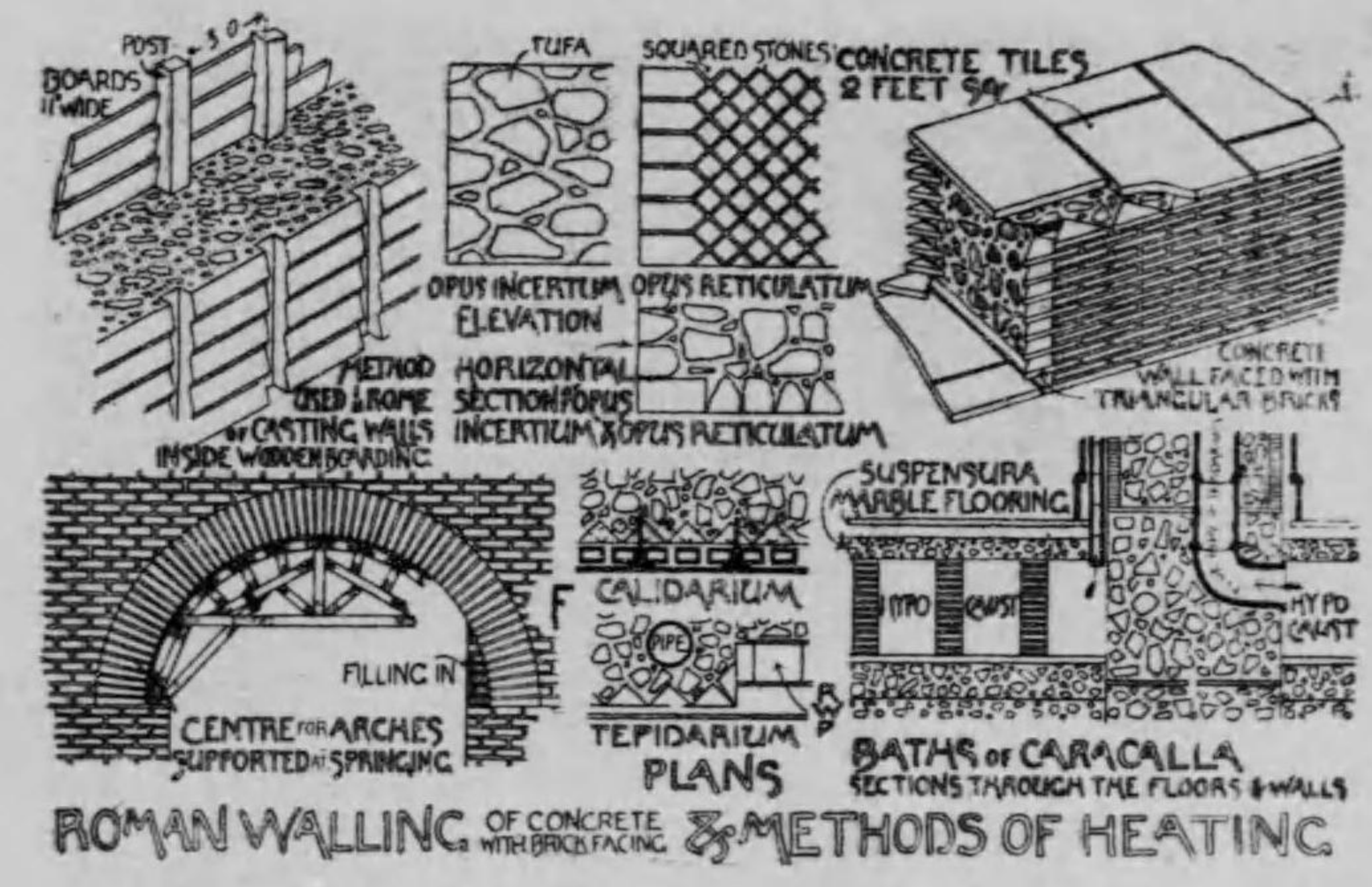
のあることもないこともあるが、何れの場合にも屢々太柄又は膝を以て安全に止められた。

(二)混凝土を以て壁體を造る方法で、化粧を施すことも、施さないこともある。更らにこれに

第五十二圖



穹窿構造



壁の構造

は次ぎの四種がある、第五十三圖)。

- (一) オーバス・インセルタム Opus incertum. 最も古き種類で、心に不規則の石塊を入れたものである。
- (二) オーバス・レチキュラタム Opus reticulatum. 表面に方形の小石片を入れ、目地を筋違に入れたものである。
- (三) オーバス・ラテリタム Opus lateritium. 三角形の厚一吋半程の煉瓦を並べたものである。
- (四) オーバス・ミクスタム Opus mixtum.

七〇

第五十四圖



ローマの彫刻裝飾

煉瓦の張付に加入別に一定の間隔に凝灰石の帯を入れたものである。

無化粧凝灰土は基礎工事に、化粧凝灰土は壁體に用ひられた。

七二 裝飾 Decoration

壁面には大理石が張付けられ(第五十四圖)、又セメント及び漆喰塗が内外の上塗として使用せられた。

希臘より將來した多數の彫像を据へる爲めに壁面には龕が穿たれた。

建物の内部は多く色彩を用ひて華美な壁畫裝飾が行はれ、其の種類にはスタツコ、フレスコ、テンペラ、假漆繪、蠟畫等がある。床には幾何學的模様の色大理石の象嵌及び寫生風唐草のモザイク等が使用せられた。

七三 神殿

神殿は大體に於て、これを(一)周圍に柱廊を繞らさざる變態連柱式と(二)連柱式圓堂若くは

柱を繞らさざるもの二つに分つことが出来る。

更らにその種類を區別すれば次の如くである。

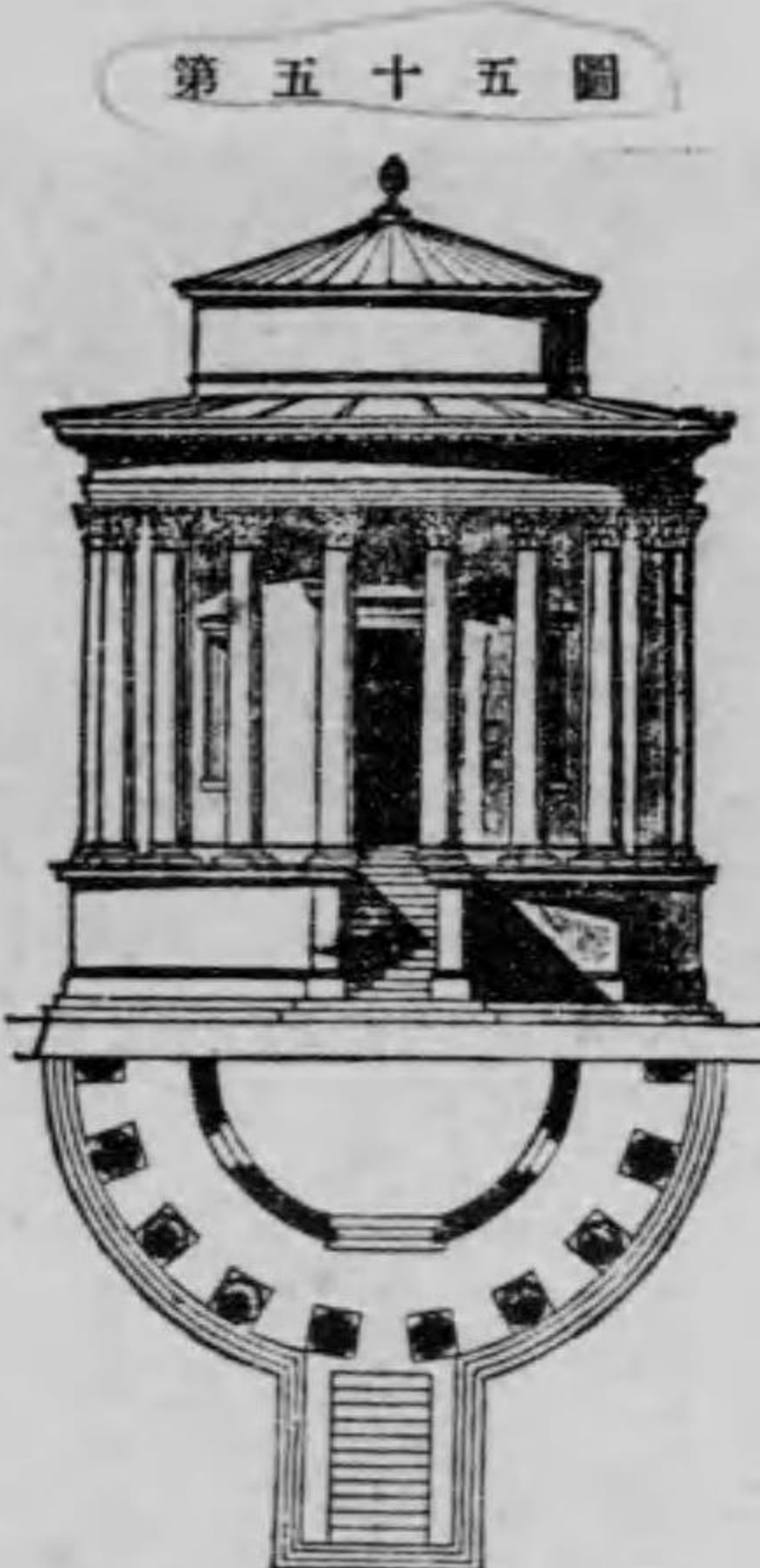
(一) 本堂の前に柱廊を深く出すもの  
Portico

(二) 腰積を高く造り柱廊を  
關の前に階段を取るもの

(三) 圓堂

七四 ヴェスタの神殿 (羅馬及びチヴオリ)  
Temple of Vesta  
Rome and Tivoli

羅馬のヴェスタ神殿は連柱式圓堂で、チヴオリに在るもの (第十五圖) と同形式である。崖の上に立つ爲めに稍希臘風のプロポーションを有して居る。殊に柱頭が美しく意匠せられて居る爲めに著名である。



第五十五圖

チヴオリの圓堂  
Tivoli - Temple of Vesta

エトルリア式の三室殿堂の後方にハドリア朝の時代に圓堂を増築したもので二時代に屬して

七五 パンテオン (羅馬) Pantheon

エトルリア式の三室殿堂の後方にハドリア朝の時代に圓堂を増築したもので二時代に屬して  
Hadrian  
Colina  
Pantheon  
Rounded

居る (第五十六圖)。

玄關は赤色花崗岩及び黒大理石造で、エトルリア式を残し、圓堂は壁體及び圓蓋はコンクリート造で、中央に丸形天窓を開いて居る。元は圓蓋を

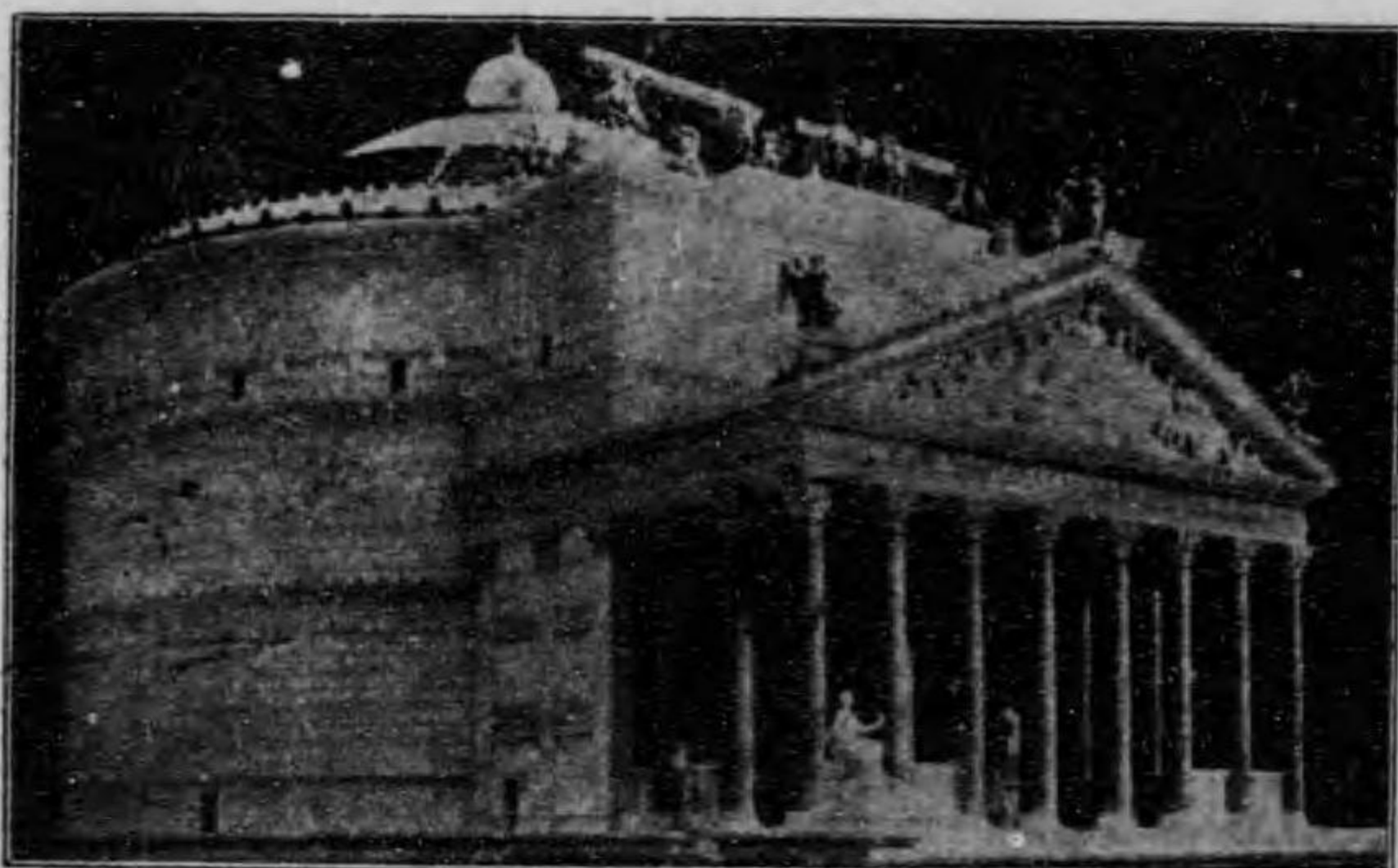
黄金鍍金の青銅瓦にて被ふたもので、玄關扉及び框は當時の儘の青銅製である。

圓堂は内法直徑百四十二呎六吋、堂内の高さも之に等しい。壁の厚さは二十呎、八個の大なる入込が設けてある (第五十七圖)。その一は出入口で、殘餘の七個の内、三個は半圓形、他の四個は長方形のプランを有して居る。是等の入込の前には夫々二本の柱を立て、その上に補助拱が架してある。

玄關はコリンス式八柱廊玄關で、間口百十呎、奥行は中央で六十呎である。

七六 フォラム Forum

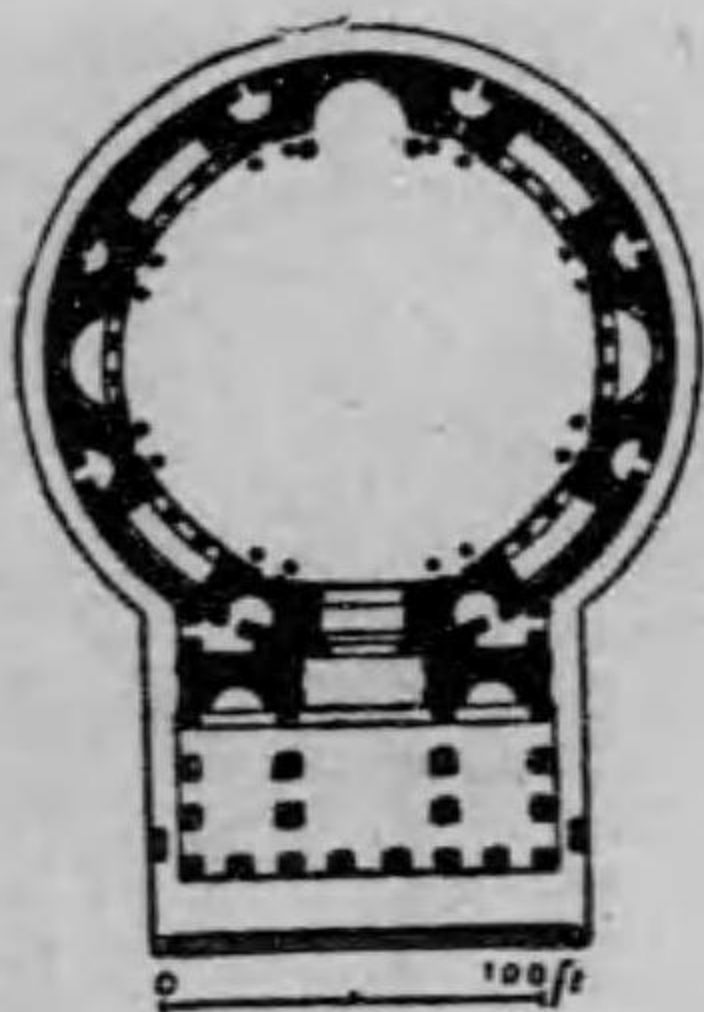
第五十六圖



パンテオンの模型

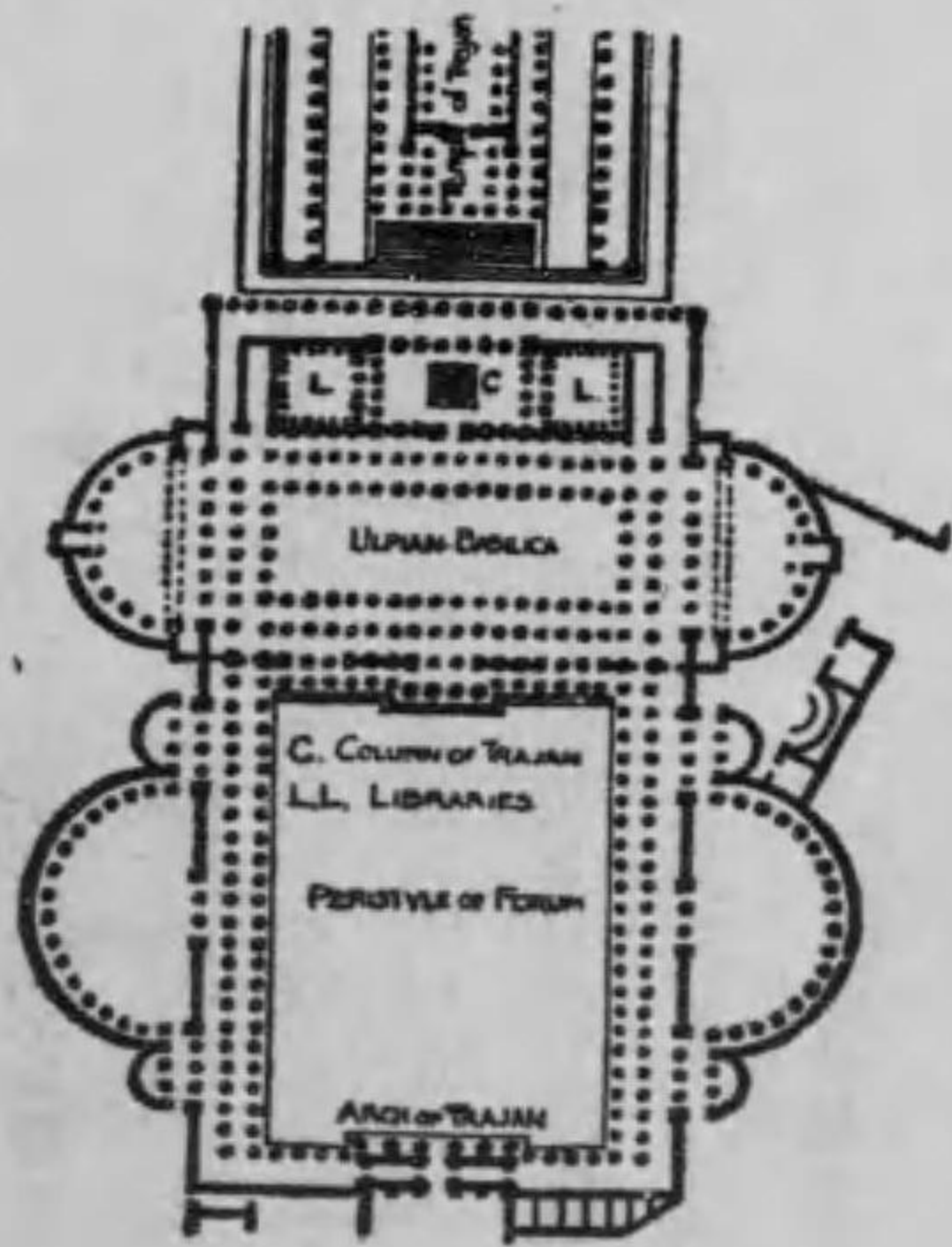
フォラムは公衆の集會場又は市場に供せられた所で、其附近又は周圍には神殿、柱廊、バシリカ等の公共建築物、宮殿等が建てられた(第五十八圖)。羅馬フォラム、トラジヤン・フォラム等が有名である。  
 Forum Magnum, or Forum Romanum, Forum of Trajan

第五十七圖



パンテノンの平面圖

第五十八圖



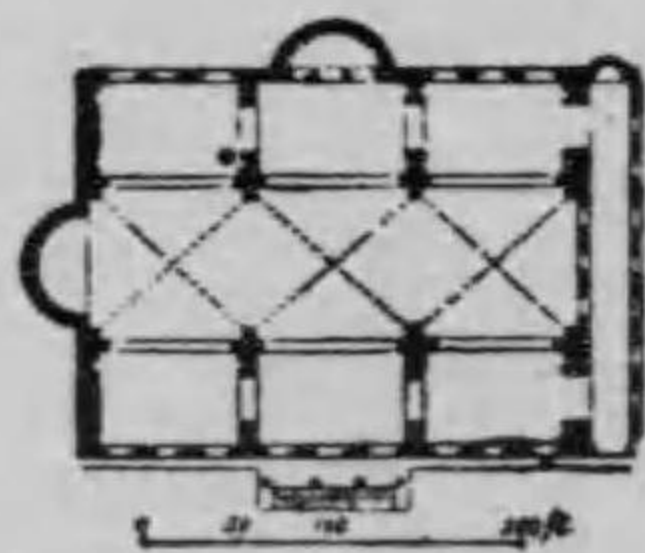
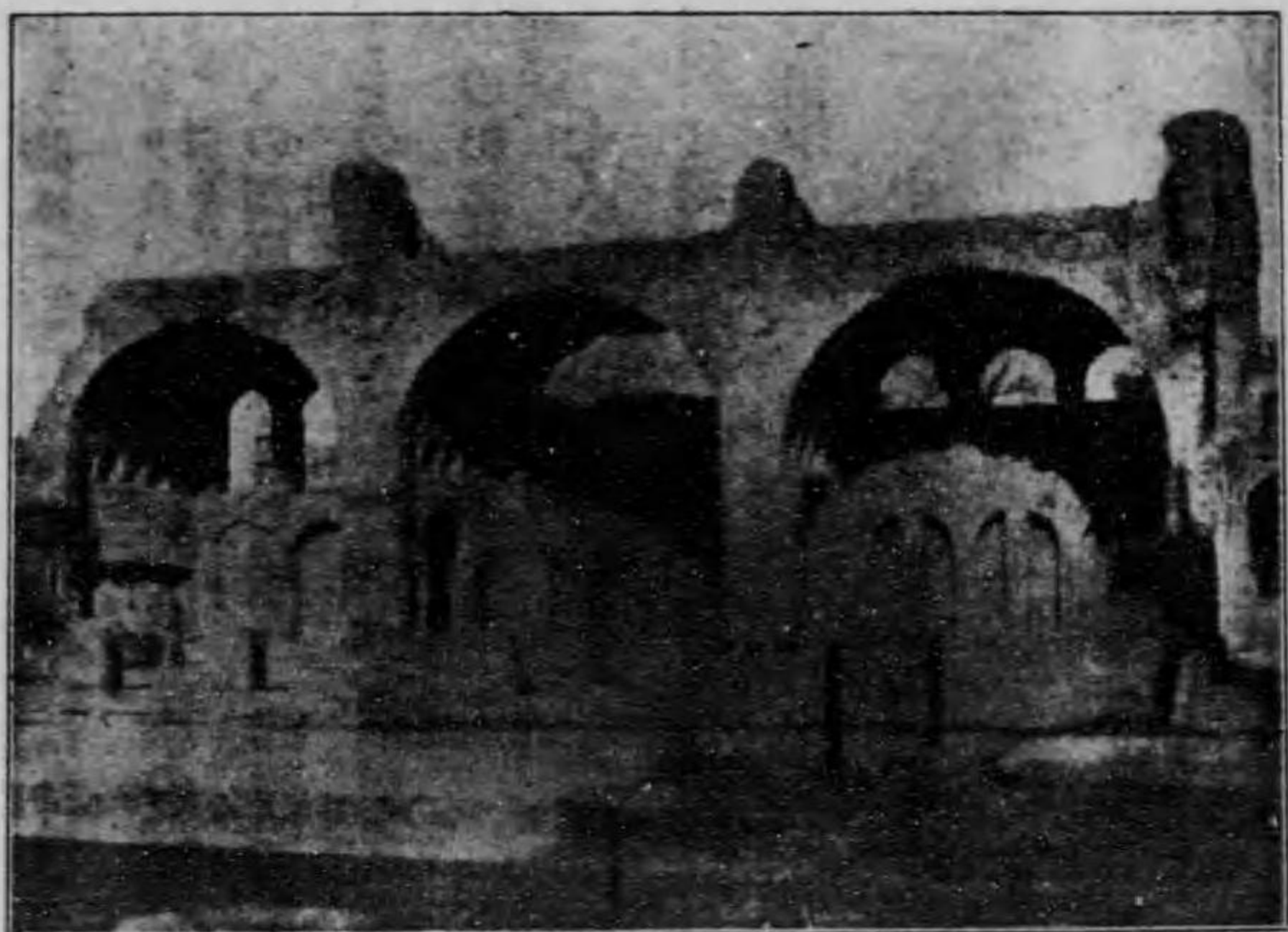
トラジヤンのフォラムとバシリカ

七七 バシリカ Basilica

バシリカは裁判所及び商業取引所として建設せられたものであるが、次期に於て基督教が國教として許された時此のバシリカを流用して基督教會堂となした。この意味に於て古典建築よ

り基督教建築へ移る連鎖として興味深いものである。(第五十九圖)

第五十九圖



コンスタンチンのバシリカ

柱を以て仕切られて居る。後陣の周圍に列をなして陪席法官の席が設けられ、左右の席よりも

普通のプランは長方形で、長さは幅の二倍乃至三倍、柱の縦列が二列或は四列に全建築物を貫通して居るので、三廊乃至五廊に分れて居る。出入口は側面又は正面にあり、法官席は出入口でない方の上段の上に、普通半圓形の後陣に在るが、後陣の一部は建物の主部と

一段高くなつた中央に裁判監督官の席があり、後陣の前には祭壇がある。  
建築物は一般に木造屋根に掩はれて居る。

パシリカ、ウルピアは木造屋根の好例で、幅八十七呎の中央の身廊と幅各二十三呎九吋の二側部の側廊とに分れて居る。建物の前後兩端には、階段に依て昇降すべき小高き半圓形の後陣とその前面に犠牲を供へる祭壇があつた。このパシリカに隣接して反対側に有名なるトラヂヤンの記念柱が立つて居る。  
Atrium  
Column  
Thermae

浴場と稱するも一種の俱樂部、娛樂場の如きものである。設備上大體これを三つに分けると出来る。

(一) 中央廊 A Great central block

この部分は浴場として設計せられたもので、入浴の方法は現代の土耳其風呂に似て居る。  
脱衣室、温浴室、熱湯浴室、蒸風呂、冷水游泳浴場、香料化粧室、毬戯室、圖書室、小劇場  
Apothyrium Tepidarium Caldarium Laconicum Frigidarium  
In funtium Sphaeristerium  
等が設けられた。

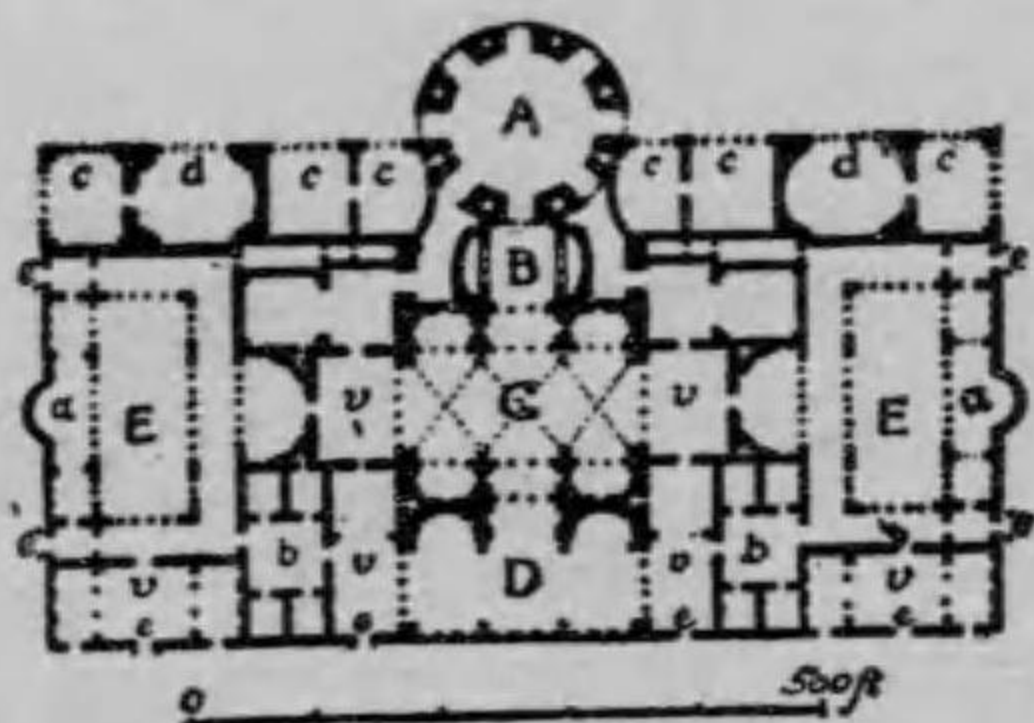
(二) 大廣場 A large open space

中央廊の周圍に在る廣場で、屢々競技場として設計せられ、高き觀覽席が設けられた。又種々の運動、遊戯を行ふ爲めにも使用せられた。

(三) 外廊の長屋

An outer ring of apartments  
講堂其他の室より成り、外部の長屋は屢々店舗として賃貸せられた。

第六十圖



カラカラの浴場

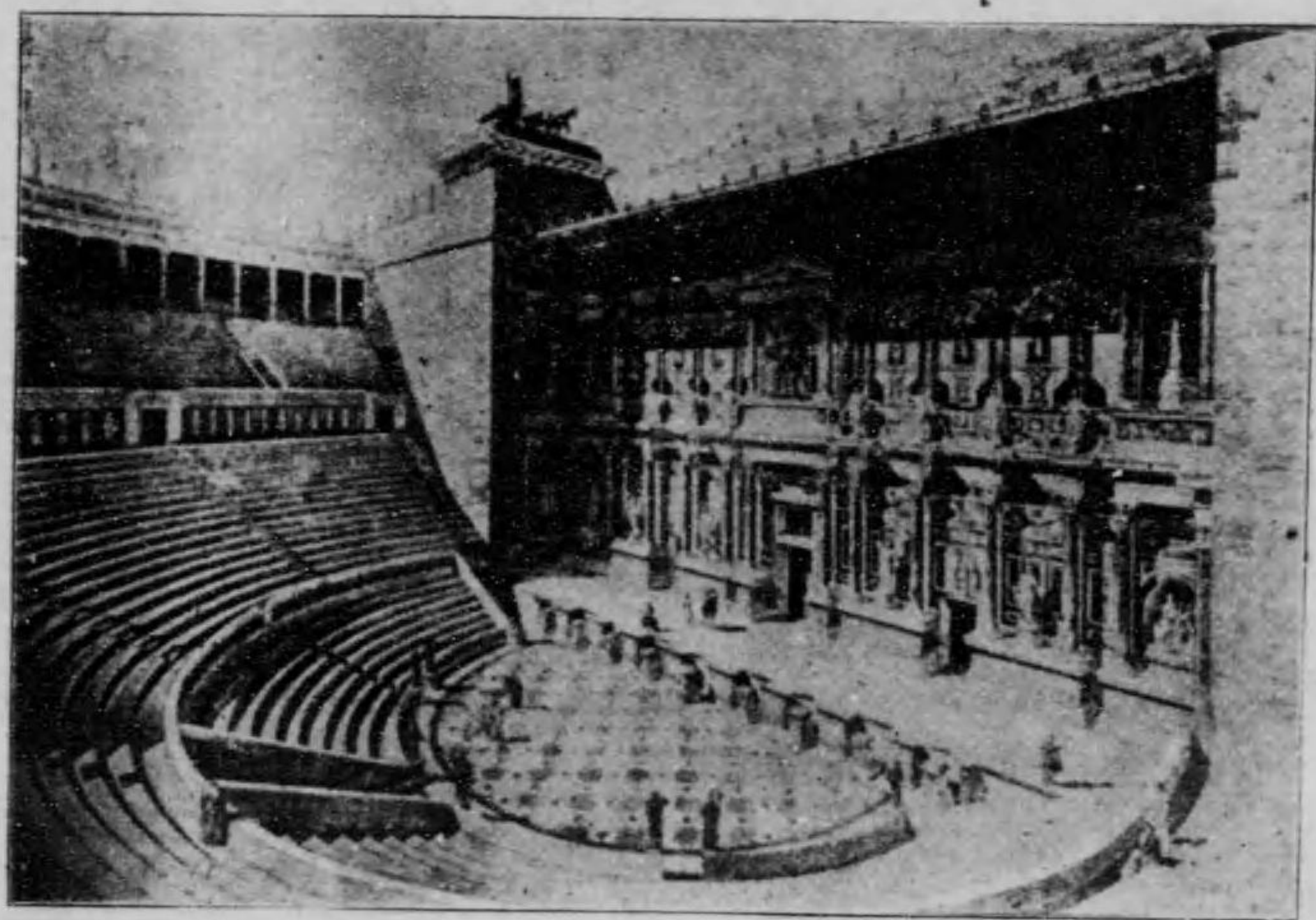
A, Caldarium, or Hot Bath; B, Intermediate Chamber; C, Tepidarium, or Warm Bath; D, Frigidarium, or Cold Bath; E, Peristyles; a, Gymnastic Rooms; b, Dressing Rooms; c, Cooling Rooms; d, Small Courts; e, Entrances; v, Vestibules.

カラカラの浴場(第六十圖)は羅馬に残る最大且つ壯麗なるもので千九百人の浴客を容れたと云はれて居る。現今荒廢に歸して居るが壁面、床等の一部があり、鉛管等も残つて居る。

七九 娛樂場 Places of Amusement.

娛樂場としては劇場、闘技場、競馬場、等がある。其の設備は大體に於て類似し、離段式の觀覽席の前面で、劇又は競技を演ずるもので、其の目的によりプランを大體次の三つに大別す

第六十一圖



劇場

ることが出来る。

- (一) 半圓形 (劇場)
- (二) 圓形又は楕圓形 (闘技場)
- (三) 長方形の一端に半圓形あるもの (競馬場)

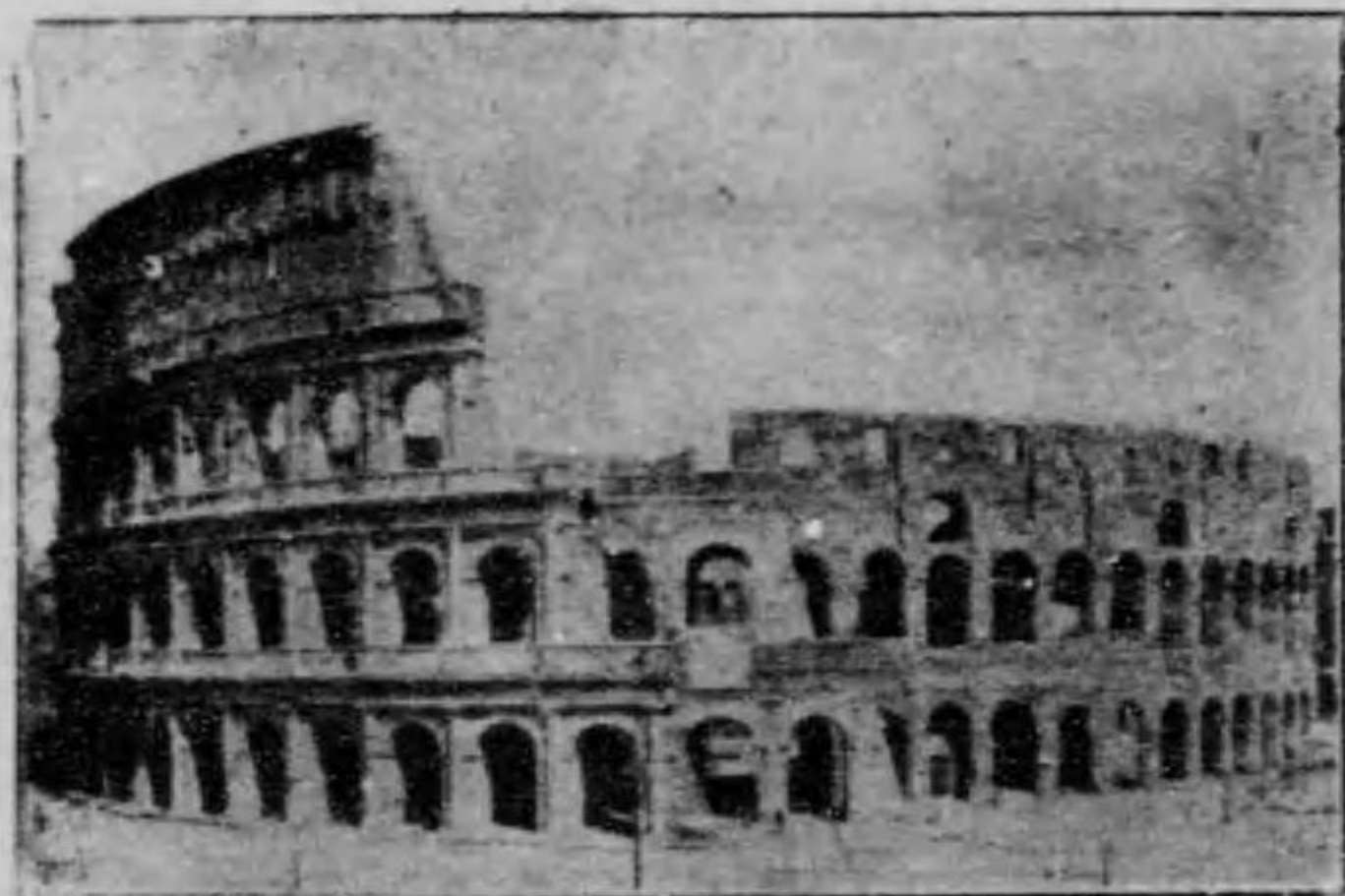
劇場(第六十一圖)は、略ギリシアのものと類似して居るが、平地につくられた點が異つて居る。観覧席は半圓形を成し、舞臺は間口が廣い。最初の劇場は紀元前一四五にマムミアスに依て建てられ、木造であつた。  
Mummius

ローマのマルセラス劇場、南佛蘭西のオランゼの劇場など著名である。  
Theatre of Marcellus  
Theatre at Orange

闘技場は多く楕圓形をなし、周圍に數段

數階の観覧席を設け、劍士の決闘、勇士と猛獸の戦等を行つたところで、羅馬人特有の建築である。

第六十二圖



ローマのコロッセアム

る大建築である。外部は四階より成り、第一階より第三階までは夫々タスカン、アイオニア及びコリンシヤンの半柱を以

コロッセアム(第六十二圖)は最も重要な實例

で、紀元七〇年にベスパシアン帝の起工に係り、

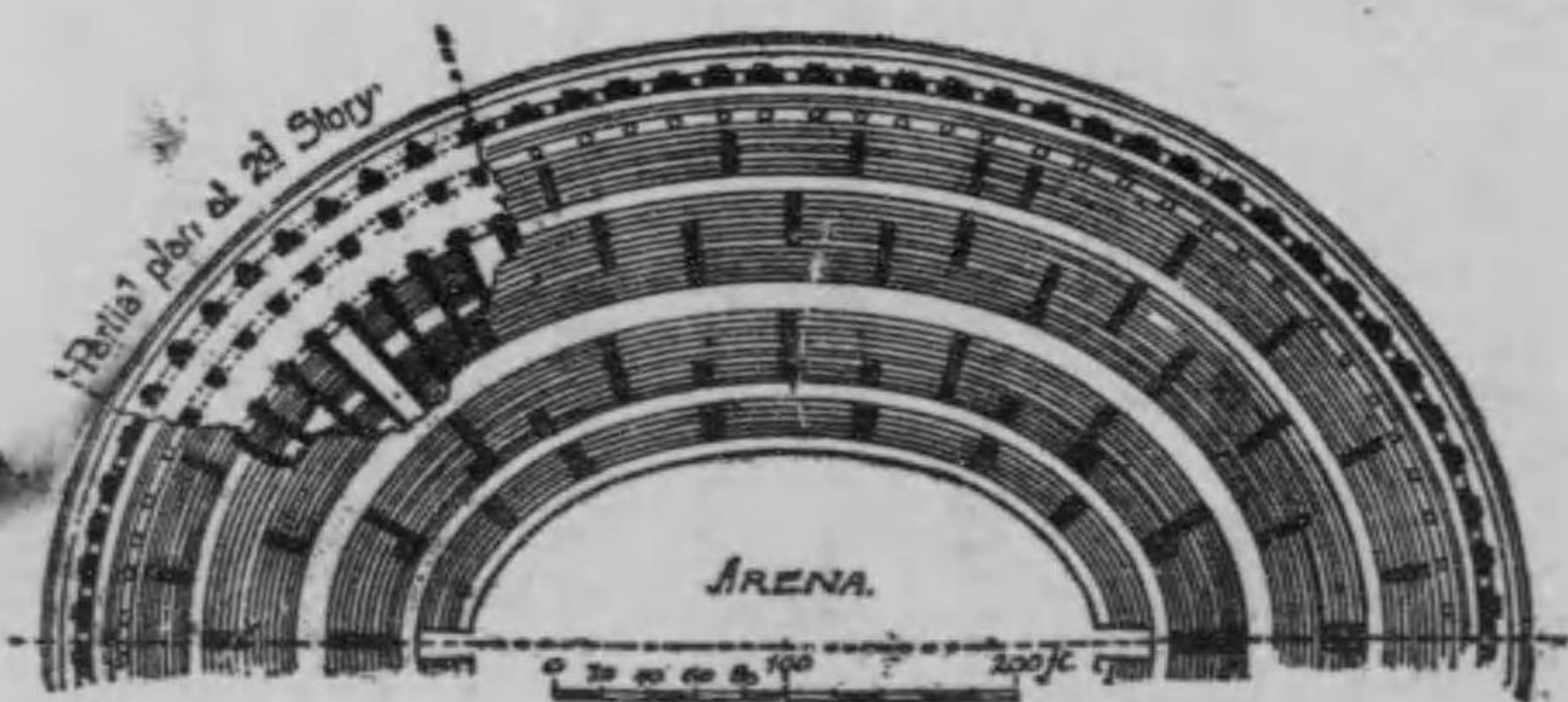
八二年に竣工したもので、其のプラン(第六十

三圖)は六百二十呎及び

五百十三呎の軸を有つ大楕圓形をなし、高さ百八

十呎、八萬七千人を容れ

第六十三圖



コロッセアムの平面圖(半分を示す)

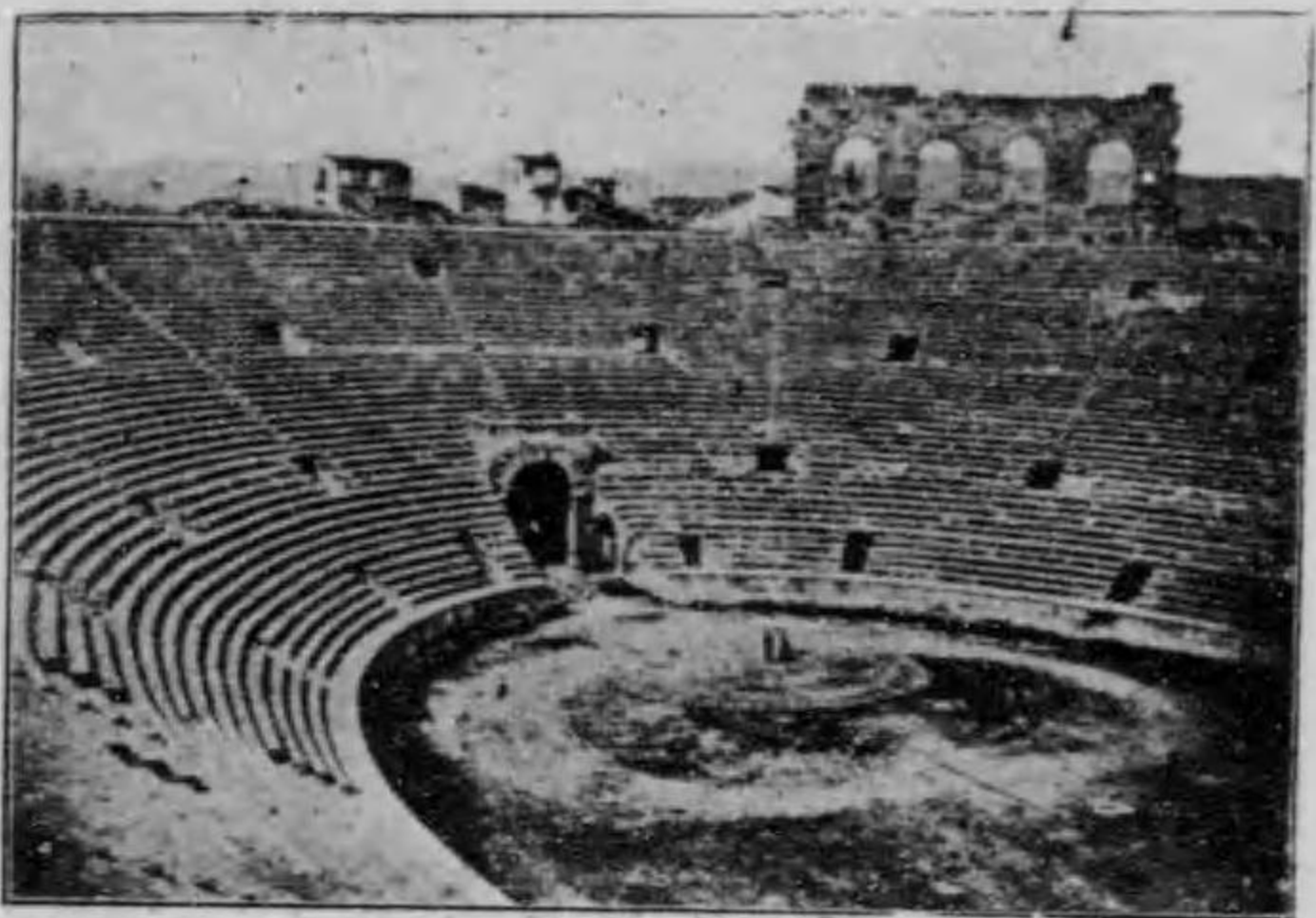


て飾り、異なるオーダーを各階に用ひて其間にアーケードを取つた好参考である。第四階には  
コリンシアンCorinthianの細い柱がある。石造建築で尙ほその表面には内外とも全部大理石が貼りつけら  
れたのであるが、後世に石山としてその石材は他に多く  
流用せられた。  
a stone quarry

此の外ヴェローナの闘技場Verona第六十四圖が有名である。

競馬場は馬車若くは馬の競走を行ふ處で、羅馬附近の  
サーカス・マクセンチアスThe Circus Maximusが有名である。プランは兩端  
が圓形の長方形の土間で、土間の周圍には數列に大理石  
造の座席が設けられて居る。紀元三二一年の建設で現今  
はその一部が僅かに残存するに過ぎぬ。

八〇 凱旋門及び紀念柱 *Triumphal Arches and Columns*



ヴェローナの闘技場

第六十四圖

凱旋門は戰捷紀念の目的で建てられたもので (一) 單拱式 (二) 三拱式の二様がある。

三拱式の場合には中央の拱が左右の拱よりも大きく、單拱式はその兩端に、三拱式はその

The single-arched type The three-arched type

第六十五圖



タイタスの凱旋門

兩端並に拱間に、コリンシアン式若くはコムボ  
ジット式の柱が立つて居る。拱は拱基の上に置  
かれ、軒蛇腹の上には屋階をつくり、門は内外  
とも彫像及び戰爭に因んだ浮彫を以て裝飾せら  
れて居る。  
impost

羅馬のタイタスの凱旋門 第六十五圖は單拱  
式の例で、紀  
The Arch of Titus

元七〇年のイエルサレム陥落を紀念したもので 拱の兩側に  
コンボジット式Compositeの柱を立て、その形態恰好が美しくつくら  
れて居る。

羅馬のコンスタンチンの凱旋門The Arch of Constantine (第六十六圖) は三拱式の例  
で、紀元三二二年にコンスタンチンの戰捷を紀念する爲めに  
建設せられたもので、コリンス式柱を用ひ屋階の上にはもと  
四頭二輪馬車、馬及び彫像があつた。

第六十六圖



コンスタンチンの凱旋門

記念柱は多く一本の柱形で、ドリア式を用ひ上に神像を頂き柱の周囲には記念に因んだ浮彫をしてある。

トラジアン<sup>Trajan's Column</sup>の記念柱はトラジアンのパシリカと同時に建てられたもので、十六呎八吋平方、高さ十八呎の壇上に立つ白大理石造のオーマ・ドリツク・オーダーである。柱は脚部に於て直

徑十二呎、その全高百四十七呎で、内部には螺旋形の大理石造階段が設けてある。

海軍記念柱(第六十七圖)は海軍の勝利を記念する爲めに立てられたものでロストラ即ち鹵獲した船首が裝飾として用ひられて居る。

海軍記念柱(第六十七圖)は海軍の勝利を記念する爲めに立てられたものでロストラ即ち鹵獲した船首が裝飾として用ひられて居る。

した船首が裝飾として用ひられて居る。

第六十七圖



海軍記念柱

八 墳墓 Tombs

羅馬人固有の墳墓は發達を見ず、其形式はエトルリアの影響を受けたもので大體次の三種に大別することが出来る。

(一) 納骨堂 Columbaria 地下の窖内に龕を穿ち骨壺、石棺を納めたもので、今日塚窖として知られて居る。

(二) 紀念墳墓 Monumental tombs

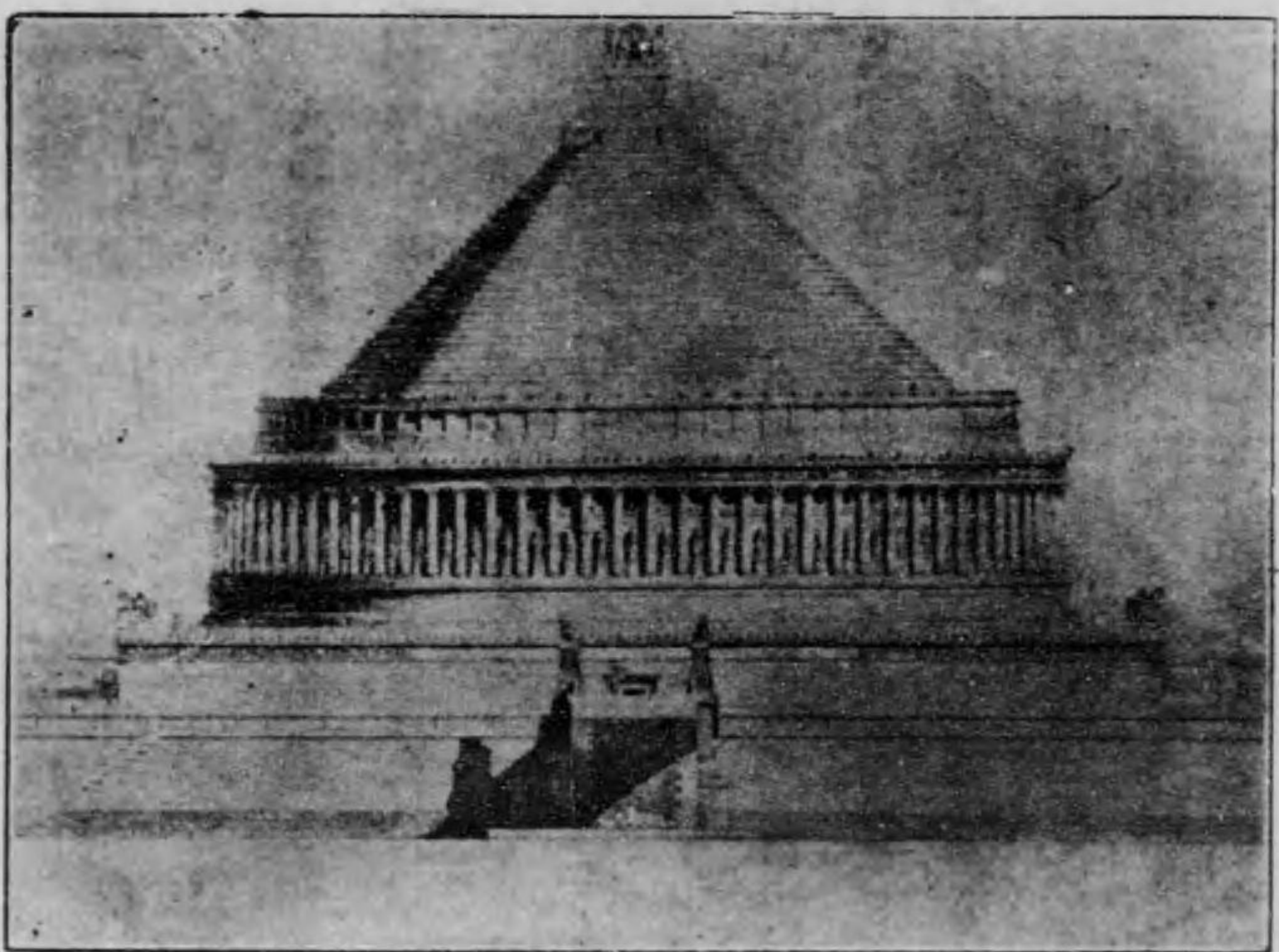
四角又は圓形の塔形で何れも四角の壇上に置かれて居る。金字塔墓も亦此の一種と見られる。

羅馬のセチリア・メテルラの墳墓は百呎平方の壇上に立つ直徑九十四呎の圓形の墳墓で、現在は聖アンジェロの城となつて居る。

ハドリアンの廟(第六十八圖)は直徑二百三十呎、高さ百四十呎の大圓塔を有して居る。

セスチアスの塔は金字塔形の例で、白大理石を以て化粧した

第六十八圖



ハドリアンの廟

セスチアスの塔は金字塔形の例で、白大理石を以て化粧した

八四

（三）小墳墓 *Smaller Tombs* 種々の形があり、石棺形、殿堂形、祭壇形、塔形等がある。ボンベイの墳墓街はその例である。

八二 宮殿及び住宅 *Palaces and Dwellings.*

宮殿は今は廢墟となつて居るが尙ほ夫れに依つて當時の宮殿が如何に大規模であつたかを想像することが出来る。ダルマチアのスパラトに在るダイオクレシヤンの宮殿（第六十九圖）は『家の中の市』と名づけられた程廣大なもので、當時のスパラト市の大部分をこの宮殿が占めて居た。もとのプランは方形に近く九エーカー半の面積を占め、その四隅に方塔、北東西三面の中央の門の兩側に八角塔、方塔と八角塔との中間に更に小塔があつた。此の三方の門内には柱廊を有する幅三十六呎の通路が延び、中央に於て會した。北の二區は恐らく賓客及び主なる宮内官の爲めに當てられた處で、南の一區は全部宮殿に用ひられ、この内にジュピターの神殿、エミキュラピアスの神殿及び浴場が含まれて居た。

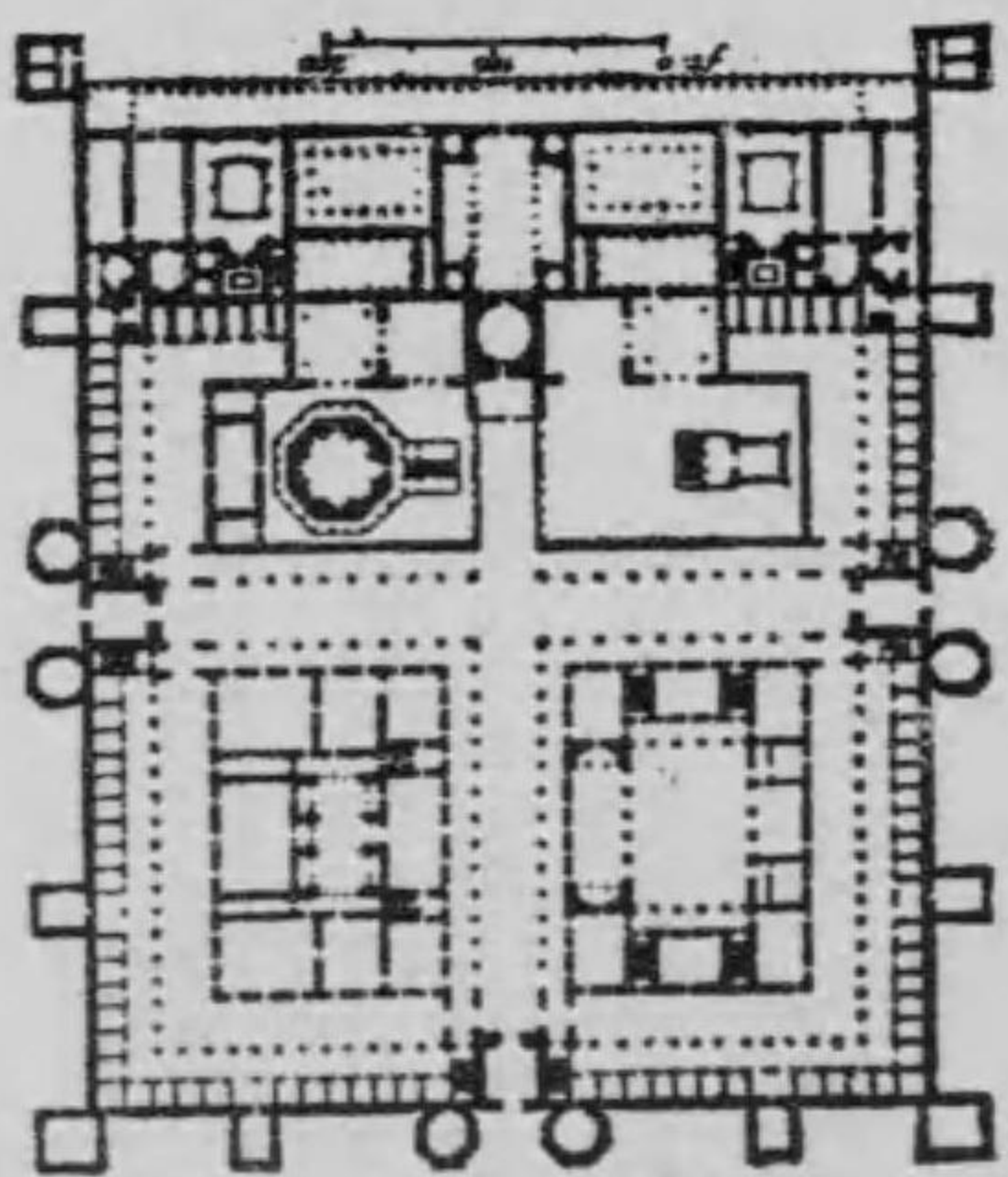
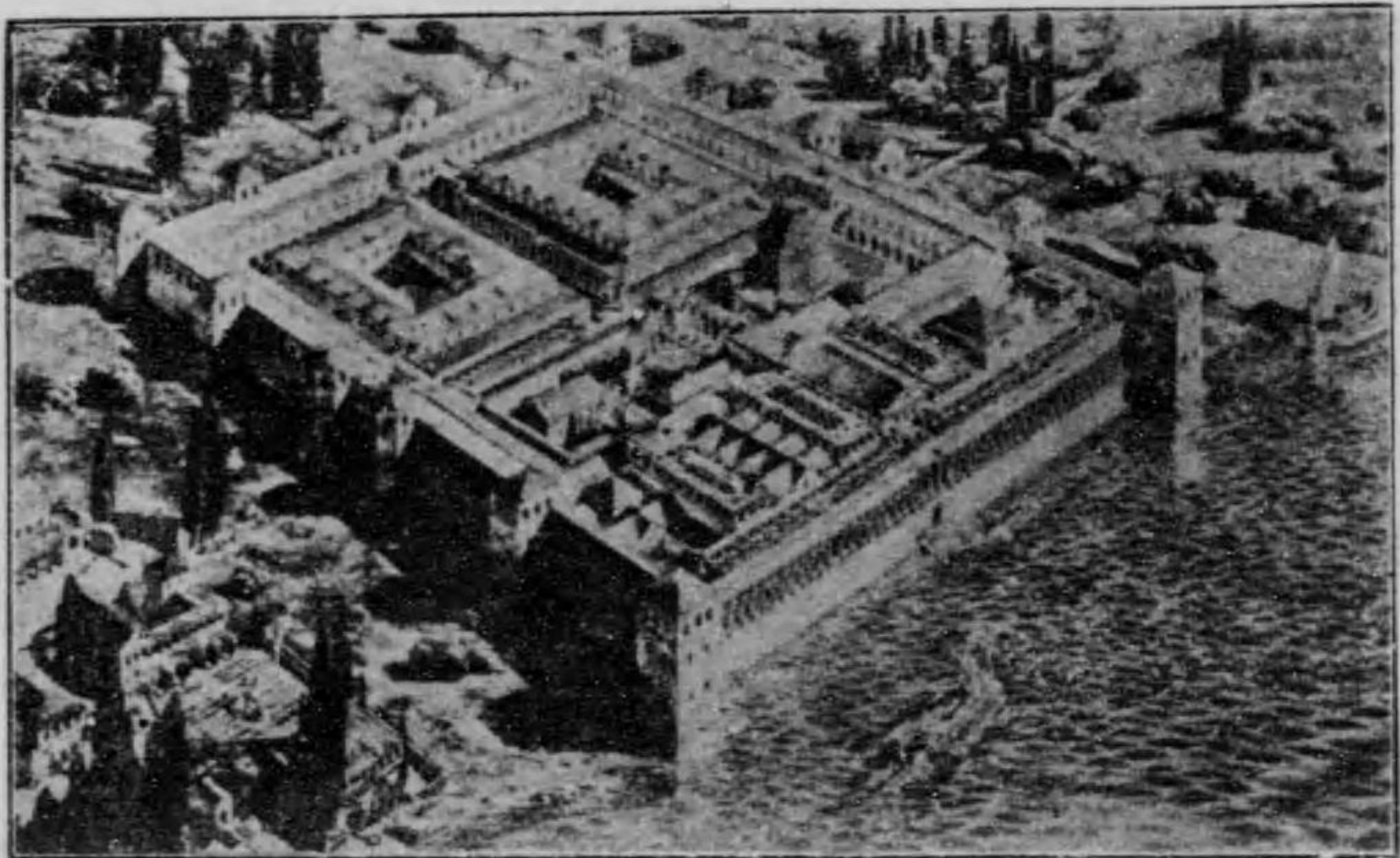
宮殿の一種にヴィラ（別荘）と稱するものがある。これは山又は海岸の勝景の地に設けられたもので、眺望を取り入れ、庭園を作つた宏大なものである。チボリのハドリアのヴィラ（第七

十圖）は其の例である。

住宅はこれを（一）私宅 *Domus* （二）長屋の二つに分つことが出来る。

私宅は多く街路に面して入口を設け入口の兩側の街路に面する家の前面は店舗として賃貸せられた。

第六十九圖



ダイオクレシヤンの宮殿

第七十圖

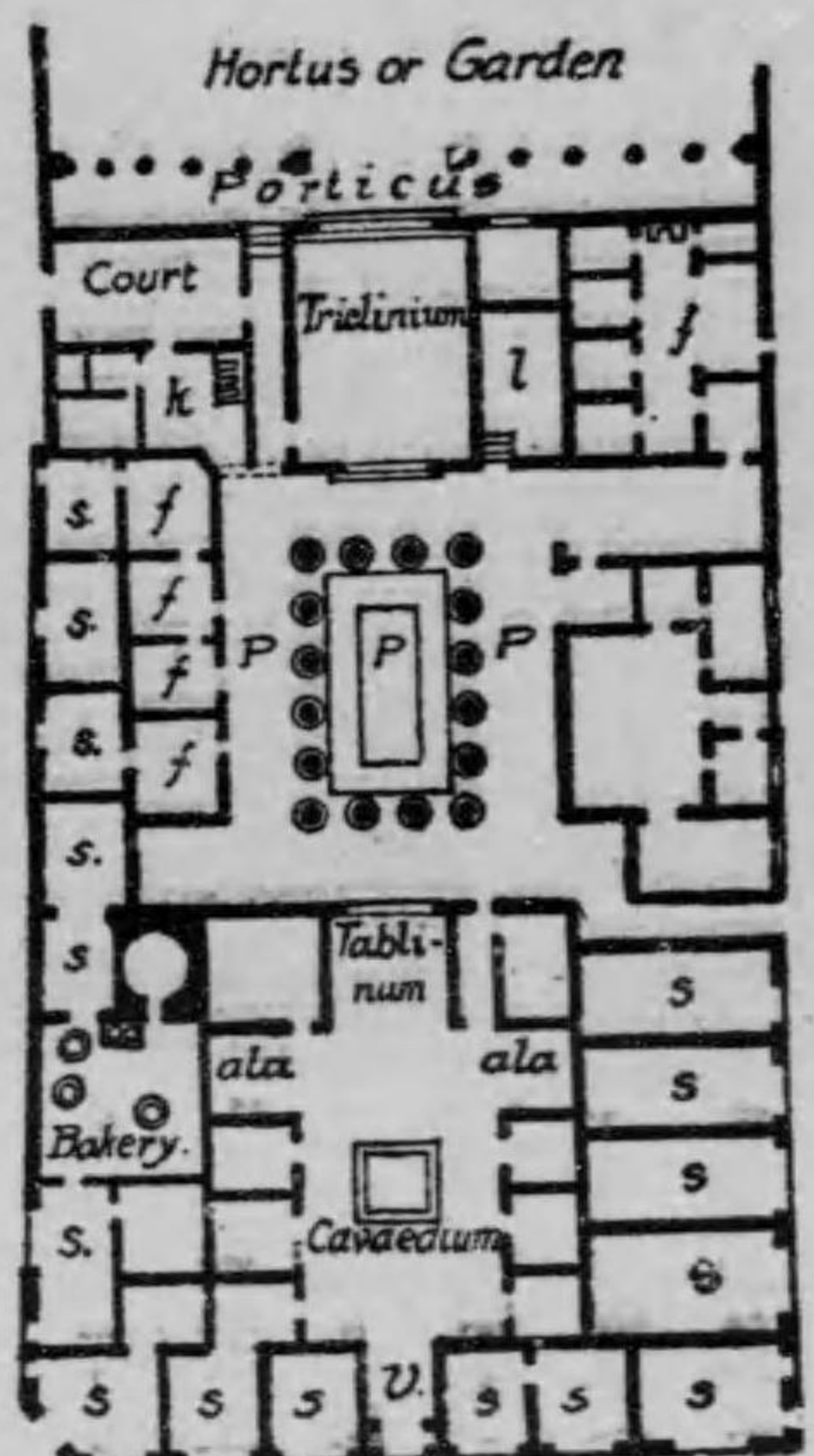


パドリアのザイラ

玄関を入ると中庭がある。使用人の部屋等は  
 Vestibule Atrium  
 この周囲に配置せられ、家族用の部屋はその  
 奥に取られた。其處には列柱庭がありその周  
 圍に寢室、食堂等が配置せられ、奥の部分は更  
 らに庭に面した。中庭及び列柱庭は天井の中  
 央を開いて野天となし周圍に葺卸し屋根をつ  
 くり、雨水はその下にある水槽に受けた。家  
 の内部は、床には色々のモザイク又は大理石  
 石象嵌を、壁にはモザイク又はフレスコの  
 裝飾を盛んに施して極めて美しいものであつ  
 た。ポンペイのパンサの家(第七十一圖)はこ  
 の例である。  
 Pompeii The House of Faun

長屋は數階建のテネメントで現今のものと  
 類似して居たやうである。

第七十一圖



s, Shops; v, Vestibule; f, Family Rooms;  
 k, Kitchen; l, Lararium; P, P, P, Peri-  
 styles.

パンサの家

割合に狭く普通八呎より  
 十五呎、大通りでも二十  
 四呎位である。凡て石敷  
 となし兩側には五尺幅位  
 の歩道が設けてある。店  
 舗、住宅は此の街路に面  
 して並び、多く平家建で  
 あるが發掘の結果二階、

ポンペイは紀元七十九年のベスピアス火山の噴火に依つて埋没せられたのであるが近年に至  
 り發掘せられ、その遺跡は希臘末期の住宅と殆んど同一であると信せられて居る。希臘羅馬式  
 の市街で、十字形の大路の端に市門があり、更らに小道路が碁盤形に通じて居る。街路の幅は  
 Graeco-Roman

三階等のある事が知られた。水道の設備も完備し、當時都市計畫が行はれた事を示す興味深い  
 遺跡である。

水道、橋梁及び道路 Adeduct, Bridge and Road

第七十二圖



ボン・ブ・ガル

羅馬人が浴場、噴泉、宮殿、住宅等に要する多量の上水を、遠隔の水源地より引くために大規模の計畫を立てたことは、その廢跡を見てこれを想像する事が出来る。

ニーム附近のボン・ブ・ガル(第七十二圖)は *Nîmes The Pont du Gard* 延長二十五哩の水道の一部をなすもので、長さ約九百呎、ガル河上百八十呎の高さに、豁谷を横斷する三層の拱の上に水道を架してある。

橋梁(第七十三圖)は簡單堅固に造られ、拱を用ひて居る。洪水等に抵抗するため拱臺に孔を穿ち、橋上の道路は一般に平坦である。

リミニの橋梁は五拱より成り、最もよく保存せられて居る例である。  
*The Bridge at Rimini*

道路は羅馬帝國當時、各地に向つて十一路線

の大道路が放射狀に造られ、南佛其他に其の跡が残つて居る。

八四 噴泉 Fountains

噴泉は羅馬人特有のものでこれを(一)公設(二)私設に區別することが出来る。その意匠

は頗る優雅で、多く彫像を以て裝飾せられた。

公設噴泉は其數極めて多く數百に達した。池又は吹上 *Lacus* *Fontaines* として設計せられ、大理石柱と彫像とを以て飾られた。

私設噴泉も多亦數に存在し、主として家の中庭又は庭園に設けられ其の意匠は多種多様である。ボンペイに發見せられたものは硝子及びモザイクの羽目を有する壁龕に獅子頭を裝飾して、その口から水を噴出せしめたものである。

八五 羅馬建築の特色

羅馬建築はこれを混凝土造拱式建築といふことが出来る。希臘建築が美を主眼として、プローションの秀麗に重きを置いたに比較して羅馬建築は主として實用的に造られ、希臘の三つ

第七十三圖



セント・マルチンの橋

第七十五圖



アカンサスの葉飾の比較

(右)ローマ(左)ギリシア

初期基督教建築はゴシック建築に移る過渡期の建築である。その建築は多く古建築を破壊してその材料を運び、柱やエレタブレチアの一部分を利用し或はパンリカを用途変更したもので、建築的には比較的價値が乏しいのであるが、これよりローマネスク建築が起り、次いでゴシック建築に變り十一世紀後

the BC 600 the Constantinian 大帝 - 1st century

第七

初期基督教建築

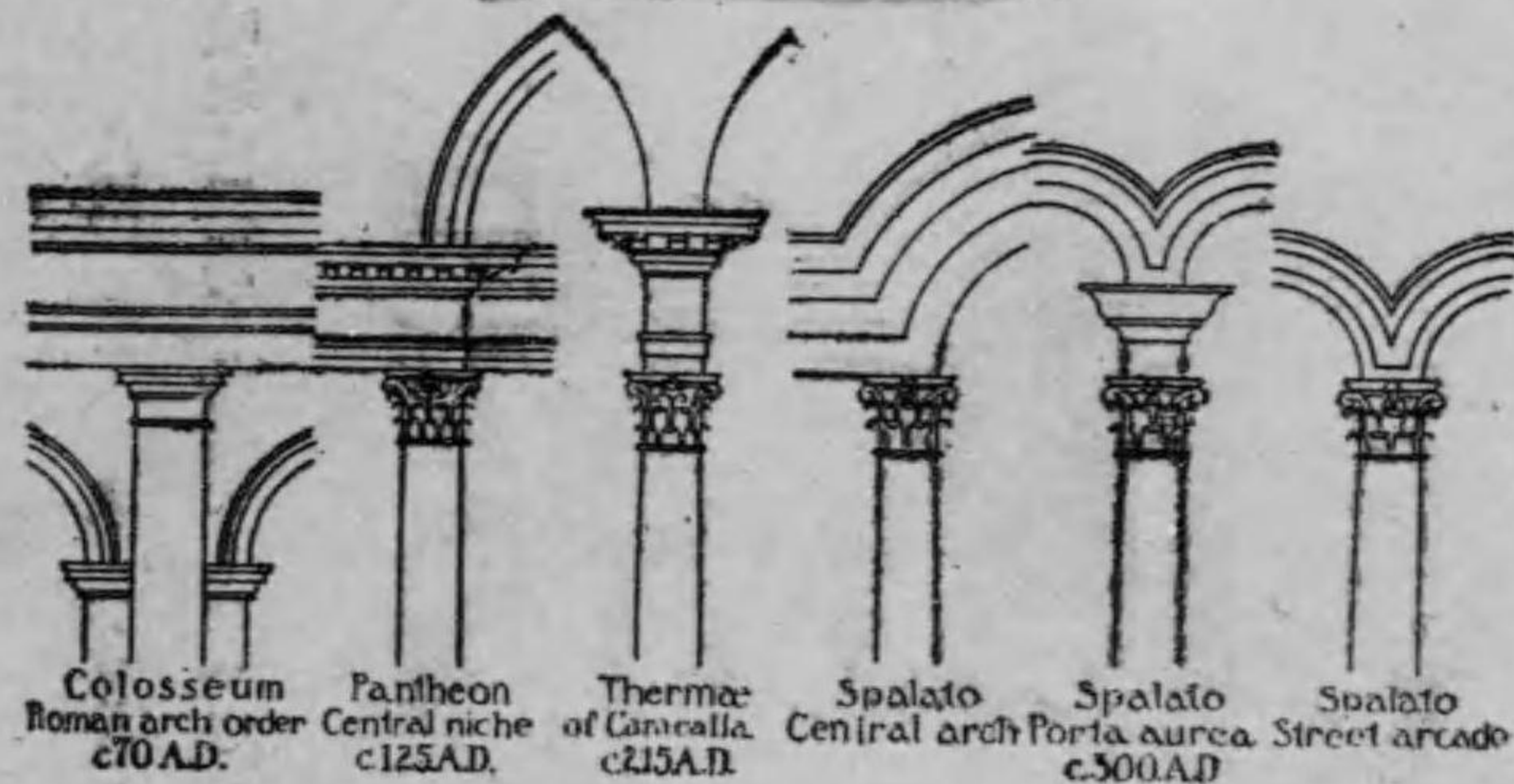
Early

Christian Architecture.

八六 概説

(第七十五圖)希臘がアンテミオン唐草を用ひたるに對し羅馬には寫生的の蔓卷唐草が多く用ひられて居る。一般に希臘のものは高尚なるに反し、羅馬のものは粗野といふことが出来る。

第七十四圖



拱と柱の發達

のオーダーが構造的に使用せられたに對し羅馬の五つのオーダーは多く表面裝飾として使用せられた。又希臘の建築は單層であつたが羅馬建築にあつては時に數層の建築が造られた。  
更らに羅馬建築の特色として拱(第七十四圖)穹窿及び圓屋根を挙げねばならぬ。拱の應用により廣い開口を造ることが出来、又穹窿と圓屋根とによりて大なる面積と複雑なるプランに屋根を蔽ふことが出来たので、更に進んで交叉穹窿法となり、四角或は半圓形のプランの龜は實に羅馬建築の特色であつた。  
線形(第三十九圖参照)は羅馬建築にありては圓、直線等の幾何學的線より成り、希臘建築の線形の輪廓が自在畫的なるとは大いに異つて居る。又裝飾模様の中アカンサスの葉飾にありては希臘の尖銳なるに比較して丸味多

に至り中世紀の建築が完成したことを考ふれば歴史上極めて興味深いものと云はねばならぬ。

八七 宗教及び政治

紀元三二三年羅馬のコンスタンチン大帝は分裂せる國內を統一し、種々の改革を斷行した。大帝は又一千年來の舊都を棄てて歐亞兩大陸の咽喉を扼せるビザンチウムに新都を經營し、これをコンスタンチノープルと名づけた。大帝は又基督教に對し歴代皇帝の迫害がありしにも拘らず、紀元三二三年に斷然其の禁令を解き、各人に信仰の自由を公許した。次いでニケーアに宗教會議を開いて、基督を神とせるアタナシウス説を正教と定めた。是より基督教は廣く帝國内に弘布せられた。  
*Constantine the Great*  
*Byzantium*  
*Nicaea*  
*Athanasius*

コンスタンチン大帝の歿後また帝位の争が起り、波斯、ゲルマン族之に乗じて交々邊境を侵し、國威大いに衰へたが紀元三九四年にテオドシウス帝出でて再び之を統一した。帝は深く内外の形勢に鑑み、翌年帝國を二分して、東部を長子アルカヂウスに、西部を次子ホノリウスに分與し、是より東西兩帝國の對立を見るに至つた。テオドシウス帝は又基督教を國教と定め異教を嚴禁した。斯くて基督教は遂に天下を風靡し、政治、道德、學問より藝術、風俗に至るまで皆其の影響を受け西洋文明の一大要素をなすに至つた。  
*Theodosius*  
*Aradius*  
*Honorius*

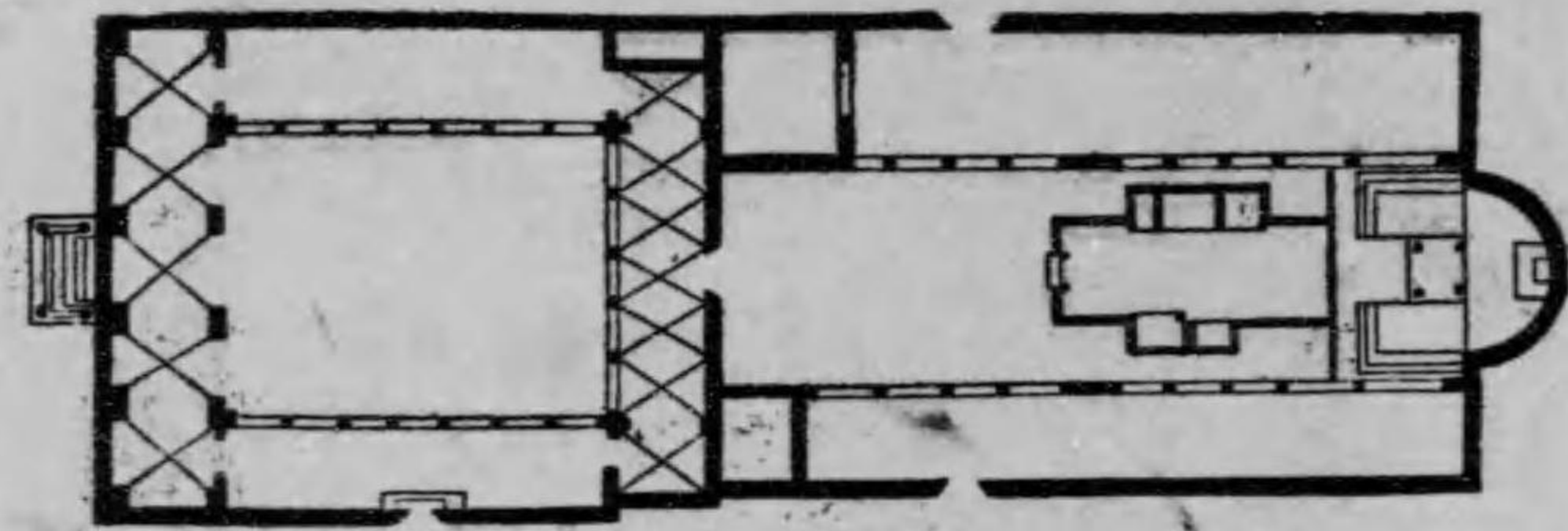
初期基督教時代とは一般にコンスタンチン帝よりグレゴリ大僧正まで即ち紀元三〇〇年より六〇四年までを指し、主として西ローマ帝國の建築である。宗教が中心をなしたため、建築も布教又は教從の集會所としての教會堂が主なるもので、その形式は内部に重きを置き、外觀は殆んど閉却せられて寧ろ貧弱を極めたと稱することが出来る。

八八 バシリカ教會堂 *Basilican Churches*

基督教が迫害せられた當初は、その教徒はカタコムとして知らるる地下の薄暗き塚窟に於て神々へ教を布いて居たが、基督教が公許せらるるや始めてバシリカ教會堂の建築を見るに至つた。その地下時代の壁畫即ちフレスコ繪又は模様等は頗る原始的のものであるが、希臘や羅馬の繼統を受けたもので、初期基督教藝術の特色を示すものである。  
*Catacomb*

バシリカ教會堂のプラン(第七十六圖)(第七十七圖)は多く矩形をなし、内部は三側又は五側の縦の廊に分たれ、中央を身廊、左右の側又は二側を側廊といひ、身廊の正面奥を半圓形に張出し半球屋根を架して後陣となし、祭司の席を設け、其の前方に神壇を設けて居る。又屢々袖廊が出されプランの形が羅旬十字形をなすものがある。側廊は右を男子席、左を女子席とし、その間の廊にコアアアが設けられ、又教壇がつくられた。又屢々正面にナーセクスと呼ぶ  
*Nave*  
*Aisle*  
*Transept*  
*Latin Cross*  
*Choir*  
*Narthex*

第七十八圖



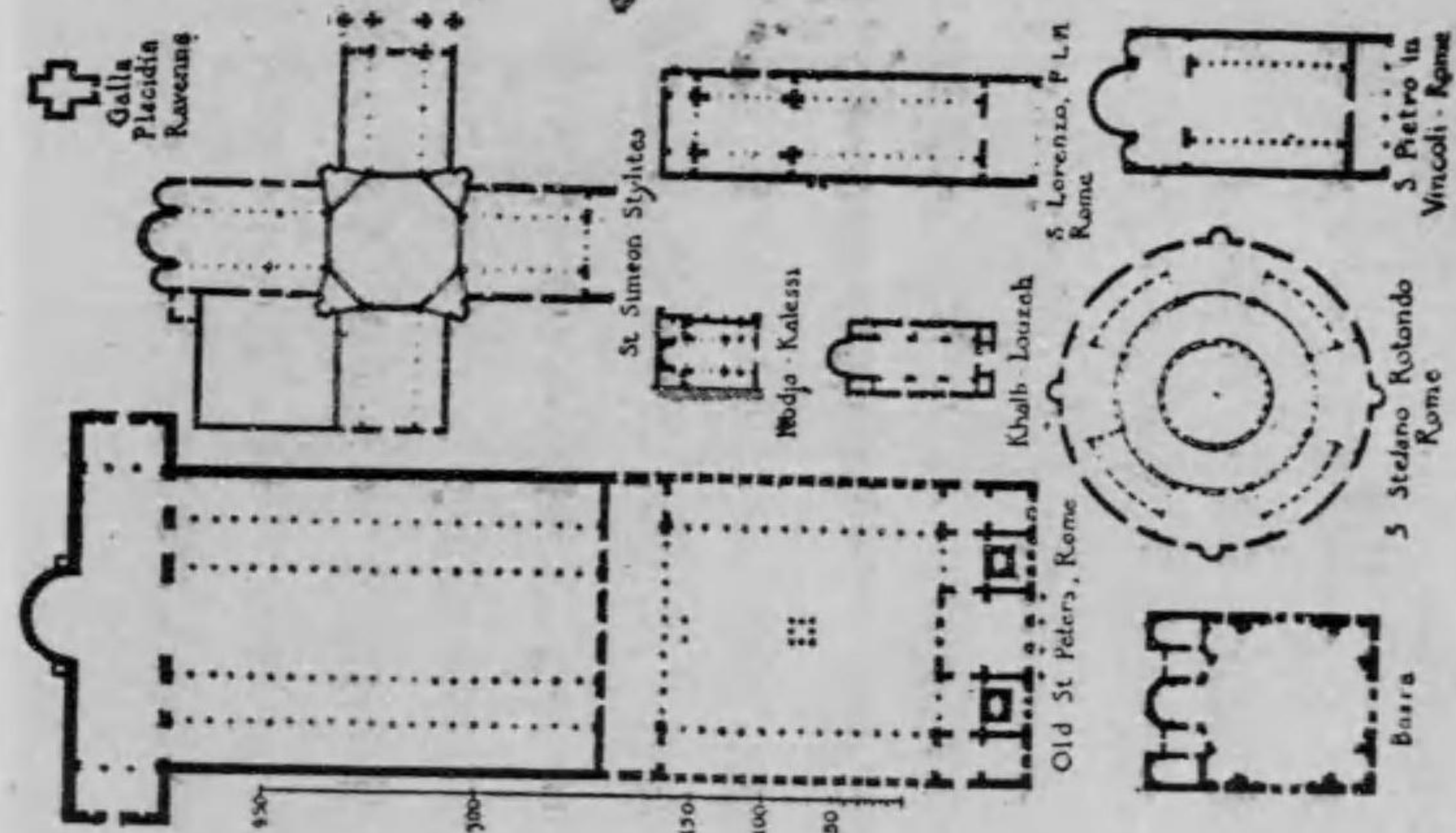
聖クレメントのアトリウム

懺悔人の溜りこ、尙ほその前方にアトリウム(第七十八圖)と呼ぶ列拱にて圍繞せらるる前庭を設け、その中央に井戸を穿ち、教會に入る前に教徒は先づその身體を淨めた。

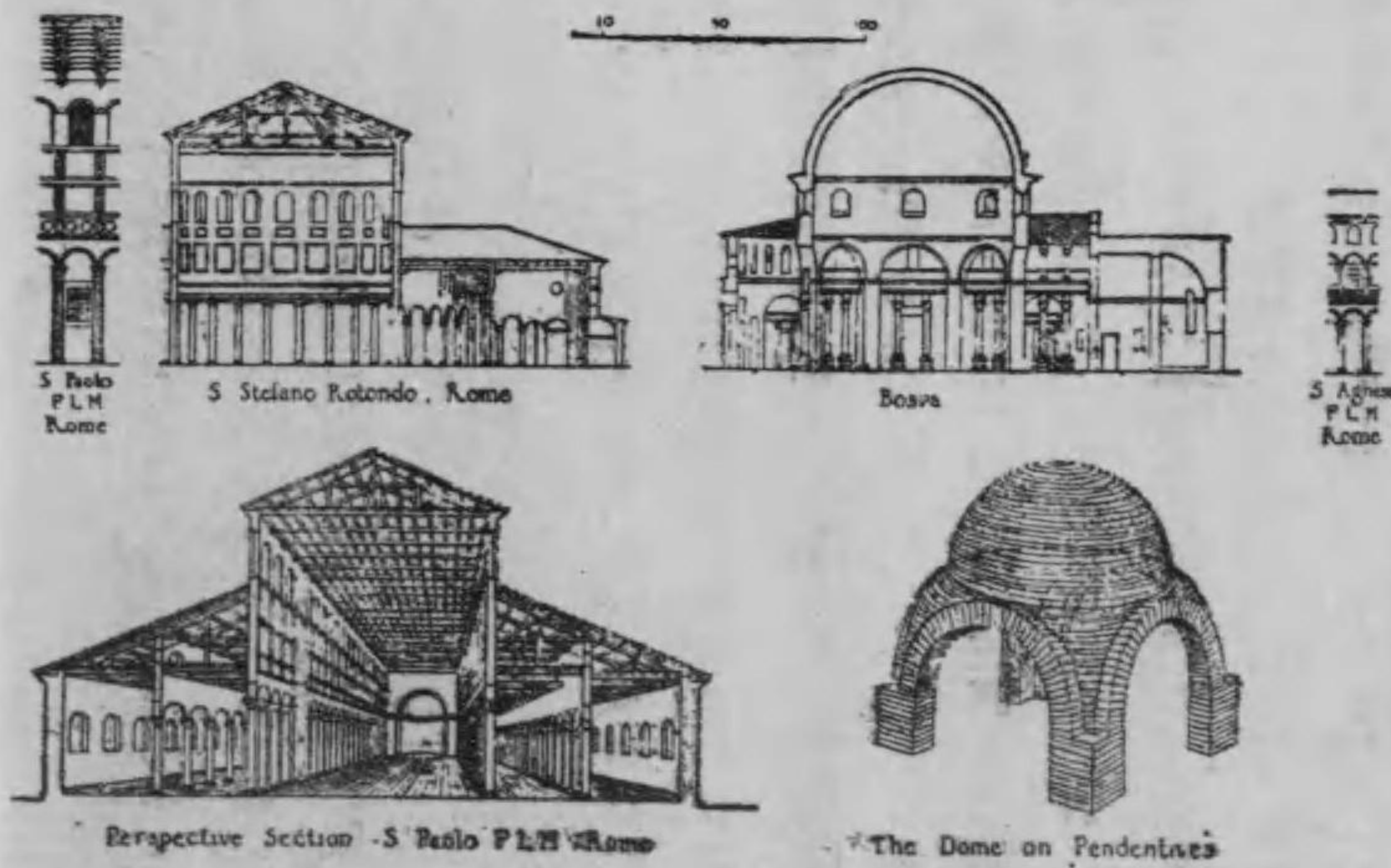
建築材料としては煉瓦、大理石及び古建築より得た古材を使用し、柱等は古建築より流用したものである爲め柱頭の形が異り、礎盤の丈が不揃で補足したものさへある。採光は身廊の上部に小窓を切つてクリアストリーとして取つて居る。

羅馬の聖クレメント(第七十八圖参照)は紀元一〇八四年の改築であるが、内部は第五世紀の創立當時の配置を残し、比較研究上甚だ有益なものである。聖パウル(第七十九圖)は紀元三八六年にテオドシウスの創建にかかり第十九世紀即ちレネッサンス期の再建であるが、バシリカ教會堂が身廊の列柱(第七十七圖参照)と後陣の所謂凱旋門と稱せらるる部分とにより、如何に壯嚴にして華麗であるかを知ることが出来る。尙ほこの外實例が

第七十六圖 教會堂の平面圖



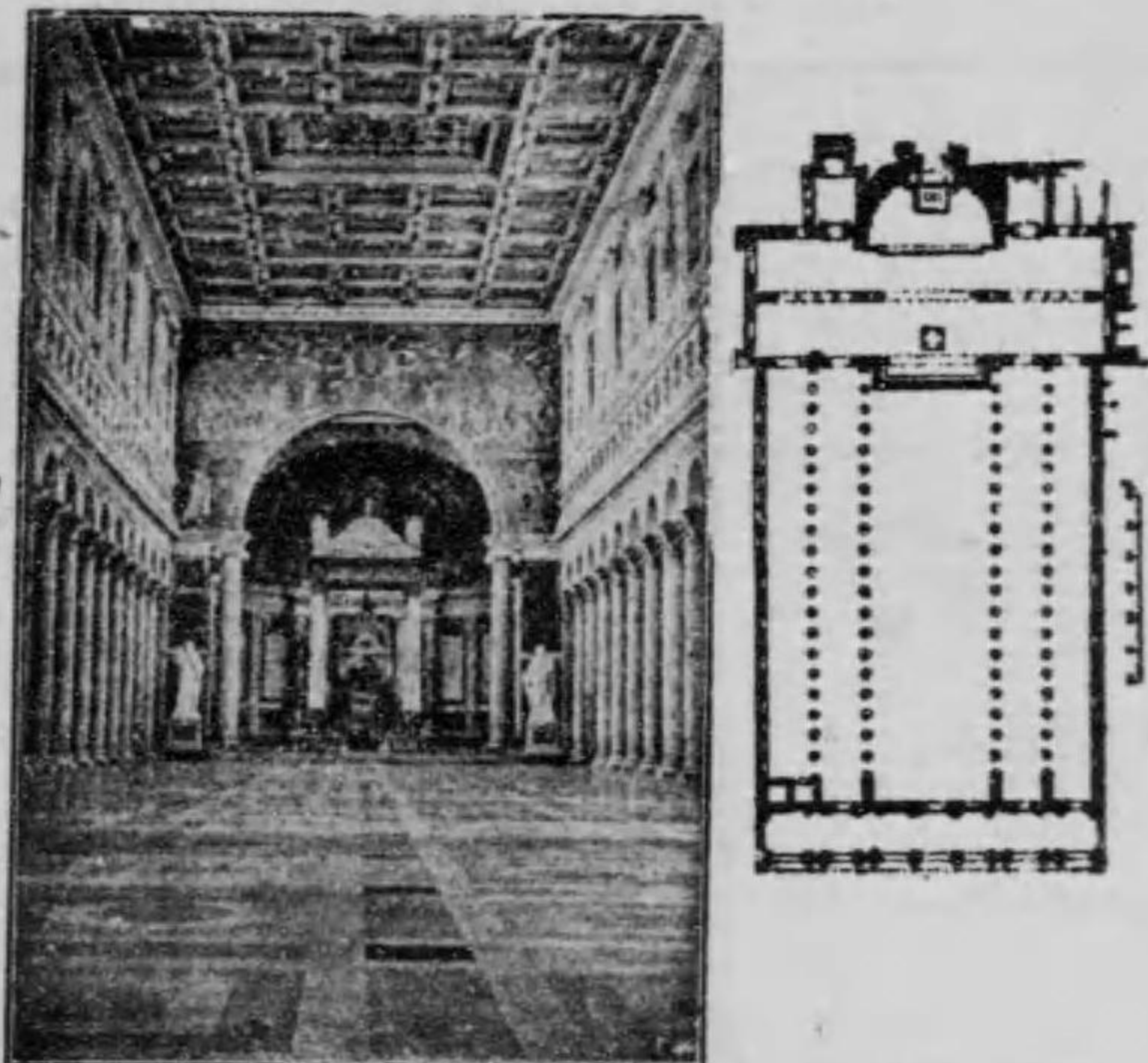
第七十七圖 初期基督教教會堂の立面圖





多い。

第七十九圖



聖パウルの内部と平面圖

のである。

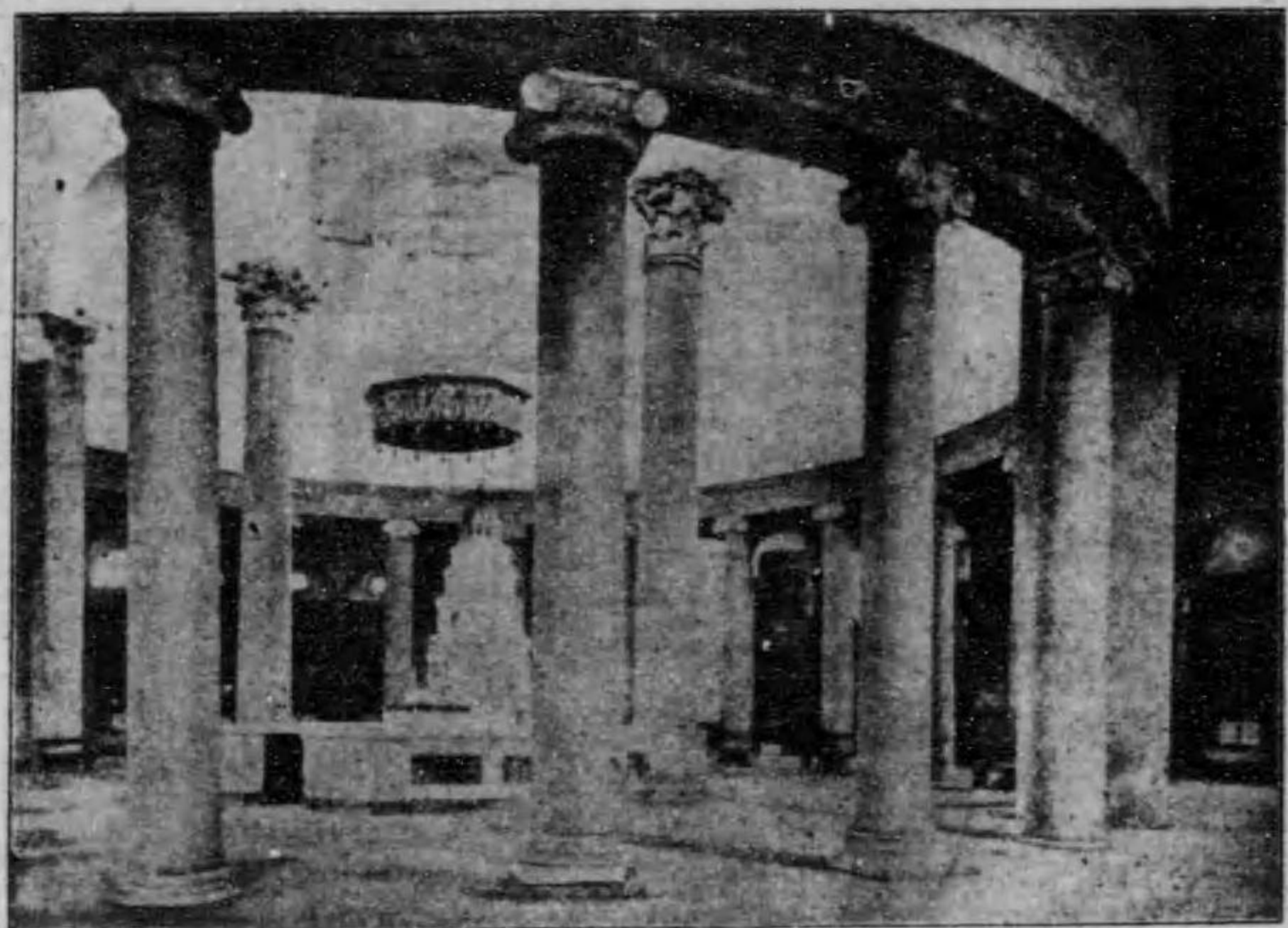
羅馬のコンスタンチンの洗禮堂は八角形で、八本の二重の柱にて障壁を支へ、八角の屋層と

The Baptistery of Constantine

屋根を受けて居る。

サン・ステファノ・ロトンド  
St. Stefano Rotondo

第八十圖



サン・ステファノ・ロトンド

（第八十圖）は洗禮堂ではないが形式を同くする建築で、内部は柱が二環列をなし、悉く古建築より流用したもので、プラン（第七十六圖、第七十七圖参照）の大きさは直径二百十呎である。

### 九〇墳墓

ラヴェンナのガラ・ブラチアの墳墓（第七十六圖参照）は十字形のプランをなし、内部は縦三十五呎横三十呎、交叉部に高き頂塔がつくられ、四個の窓が開いて居る。十字形の各腕には石棺が一個宛安置せられ、内部はモザイクの極彩色裝飾が施されて居る。

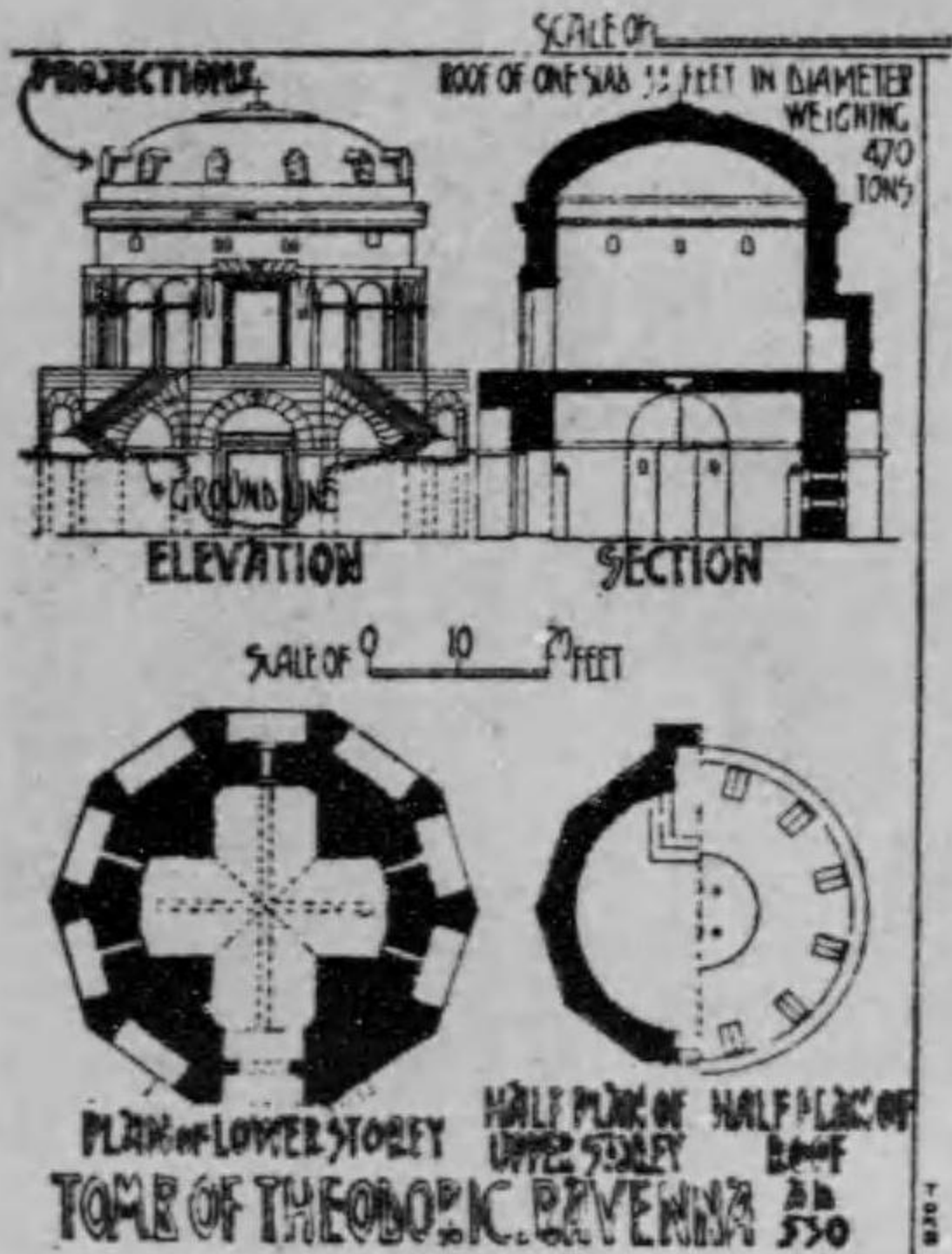
ラヴェンナのセオドリックの墳墓（第八十一圖）は重層、角形で、屋根は丸屋根の形に列つ

た直径二十五呎の一個の石盤より成り、この石盤の縁には造りつけの石の把手がある。これはもとこの重き屋根を据える際に用ひられたものと考へられて居る。

九一 シリア建築 Sirian Architecture

シリアは羅馬が東西兩帝國に分れた時東羅馬の領土となつた。シリアには第三世紀より第七世紀頃までの間の建築に成る多くの興味深い紀念建造物が残つて居る。其後間もなくシリア建築はビザンチン建築の感化を受けるやうになつた。特に有名な

第八十一圖



セオドリツクの墳墓

るものとして、ベスレヘムの降誕教會堂、イエルサレムの昇天教會堂、同じくイエルサレムのソロモン神殿址にある八角形の聖墓教會堂を擧げることが出来る。これらは何れもコンスタンチン帝の建立にかかる。概してプランは矩形又は方形の中に圓形を配置したもので、その隅を

塞ぐために龕を造つた。柱の代りに拱柱を使用し、小なる教會堂の屋根は石盤を以て葺くが普通であつた。

九二 初期基督教建築の特色



カルプ・ロウセーの教會堂

初期基督教建築はバシリカを模範とせる教會堂がその中心をなして居る。羅馬建築に於ては裝飾であつた柱が此の時代には再び構造を兼ねるものとなつたが、その柱は自然に荒廢したか、又は故意に毀つた羅馬の古建築物より流用したもので、其の大き及び意匠が屢々不揃であつた。一般にその建築は豪華壯大の効果を得るために、細部の精巧を犠牲にしたといふことが出来る。建物の内部は色彩を多く使用し華美に裝飾せられた。教會堂の身廊を蔽ふためには真束小屋又は對束小屋の如き簡單なる木造屋根が用ひられ(第八十二圖)、身廊の側廊の屋根より上に、身廊の壁に設けられた。

線形は羅馬の様式の粗雜化したもので、裝飾としてはモザイクが壁面に盛んに使用せられ

其の畫題は多く天使及び聖徒に取り巻かれた基督の像である。床にも色大理石を以て幾何學的模様が表はされ、その多くは羅馬の古い斑岩の柱の切片を以て造つたものである。

### 第八 ビザンチン建築 Byzantine Architecture.

#### 九三 概説

羅馬のコンスタンチン大帝がビザンチウムに新都を經營して以來、帝國は政治上、東洋と西洋とに分るるに至り、次いで又宗教も分離して、ビザンチウムを主都とする東羅馬帝國には又別種のフォーラム、バシリカ等が設けられ、其建築は自然東羅馬帝國の傳統と、東洋特にアッシリア、ペルシア等の影響を受けるに至つた。第八、九世紀の交には偶像破壊運動が起り、彫像は廢棄せられて畫像のみが残さるることとなり、この運動と其他儀式の相違が東羅馬帝國の教會堂建築に大影響を及ぼした。これがビザンチン建築の起りで、西羅馬帝國の建築即ち初期基督教建築と明確に區別することは困難であるが、穹隅の上にかかる穹窿天井を以て其の一大特徴と見ることが出来る。

#### 九四 地理、氣候

<sup>地理</sup> ビザンチウムはボスフォラス海並にマルモラ海が相接する位置に位し、水路は黒海より地中海へ、陸路は亞細亞より歐羅巴に至る、商業上二公道の交叉點に在るので、商業地としても亦重要な地位を占めて居る。

<sup>氣候</sup> 氣候は羅馬よりも暑氣強く、東方に偏するため、此地に移住した羅馬人は異なる氣候と、珍らしき東洋の藝術に接した結果、羅馬藝術の傳統的のものに東洋趣味を混和するに至つたのである。

#### 九五 建築材料

ビザンチウムには良質の建築石材は勿論、良質の煉瓦を造るべき原料を産出しなかつた。けれども地中海の東岸の石山より大量に大理石を産出したため、多くこれを用ひられた。

#### 九六 構造 Construction

羅馬建築との相違はコンクリートの代りに壁體に煉瓦及び石が使用せられた點である。煉瓦は骨組又は化粧用の外石造の建物には穹窿用として使用せられ、石は單獨に用ひられた外、層々煉瓦と層々交互に用ひられた。

穹窿は多く石又は煉瓦にて造られ圓筒穹窿、交叉穹窿が使用せられた。

九七 圓 蓋 Domes

圓蓋は最も重要な構造で、且つ外觀の主要部をなして居る。羅馬建築に於ては圓蓋は圓形のプランの上につくられたに反し、ビザンチン建築に於ては方形のプランの上につくられ、圓

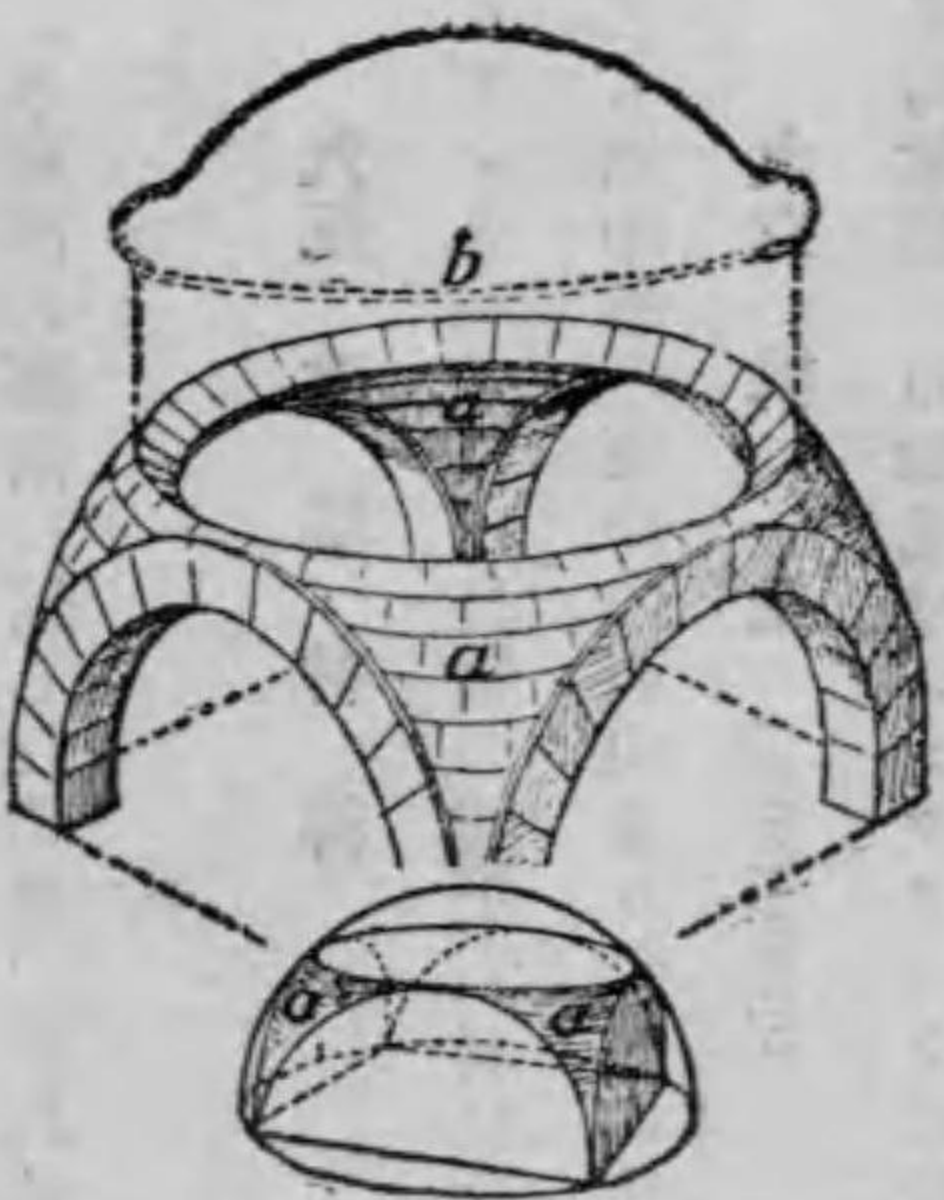
蓋の基底は穹隅(第八十三圖)の上に据へられて居る。後には圓蓋は更らに圓形の高き鼓胴の上に押

上げられ、窓は圓蓋の下又は鼓胴の部分に開いて居る。

穹 蓋と筒形穹窿が他の附加的屋根に蔽はるることなく、外部より明かに認めらるる點である。その外

居る。 居る。

第八十三圖



觀と内容とが、換言すれば立面と断面とが極めて良く一致して居る點である。その構造法は極めて壯重で且つ大膽であると稱することが出来る。

九八 裝 飾 Decoration

ビザンチン建築の裝飾は極めて精巧(第八十四圖)である。貴重なる色大理石及びモザイク

の羽目が使用せられ、又拱及び穹窿より圓蓋に至るまでモザイクが用ひられて居る。床は大理石を用ひて幾何學的模様を表し一面に敷詰められて居る。

彫刻は羅馬風よりも寧ろ希臘風で、主として低い浮彫が行はれて居る。彫刻の特徴は鑿を用

ひず錐を用ひて溝を深くした結果、模様は表面に

附著して居るのではなく、陰刻せられて居る點に

ある。

九九 プ ラ ン Plans

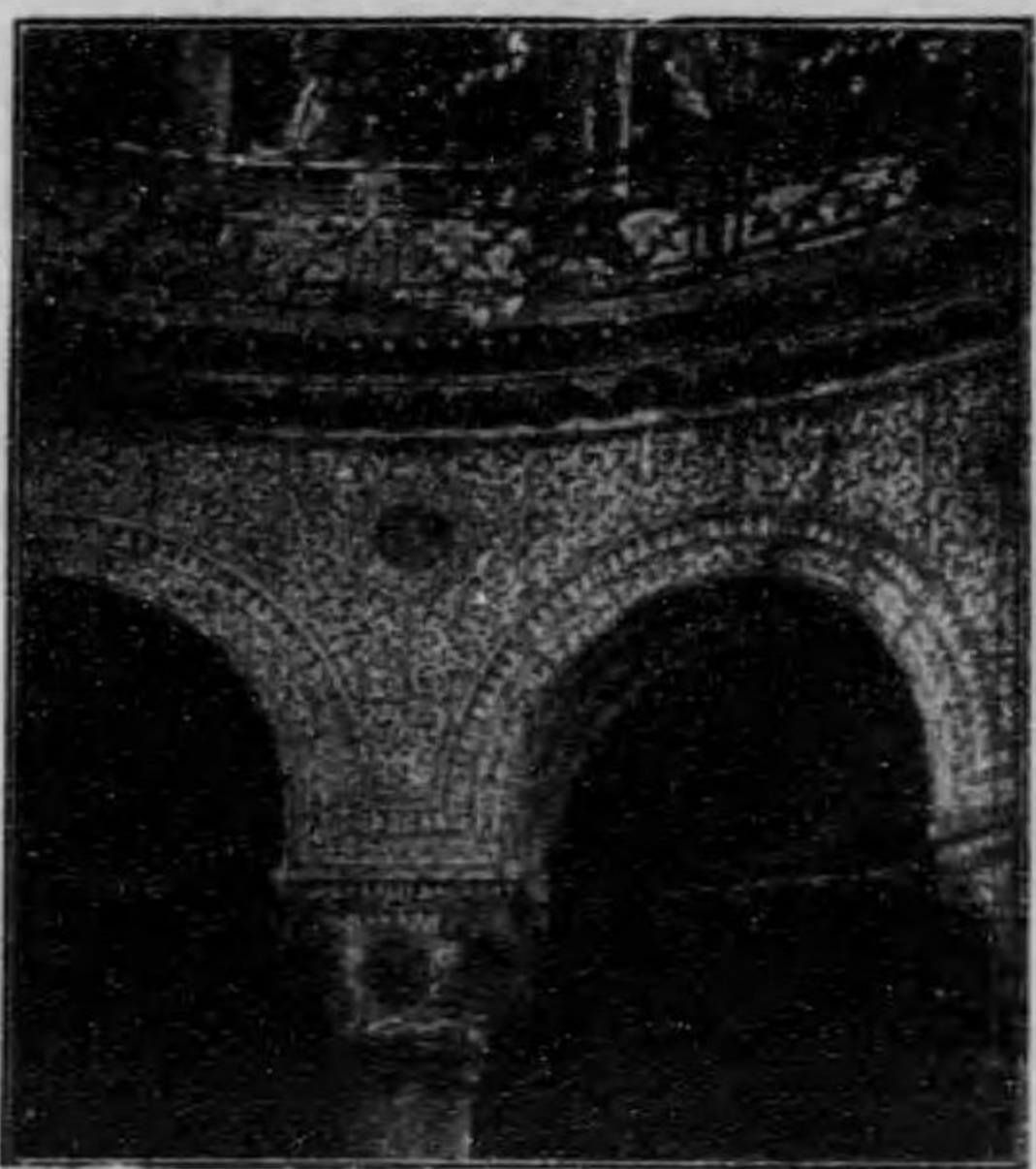
教會堂の圓蓋の据はるプランの形(第八十五圖)

(第八十六圖)には次の如き種類がある。

(一) 圓形のプランの上に圓蓋のあるもの

(二) 八角形のプランの上に圓蓋のあるもの

第八十四圖



ハジア・ソフィアの裝飾

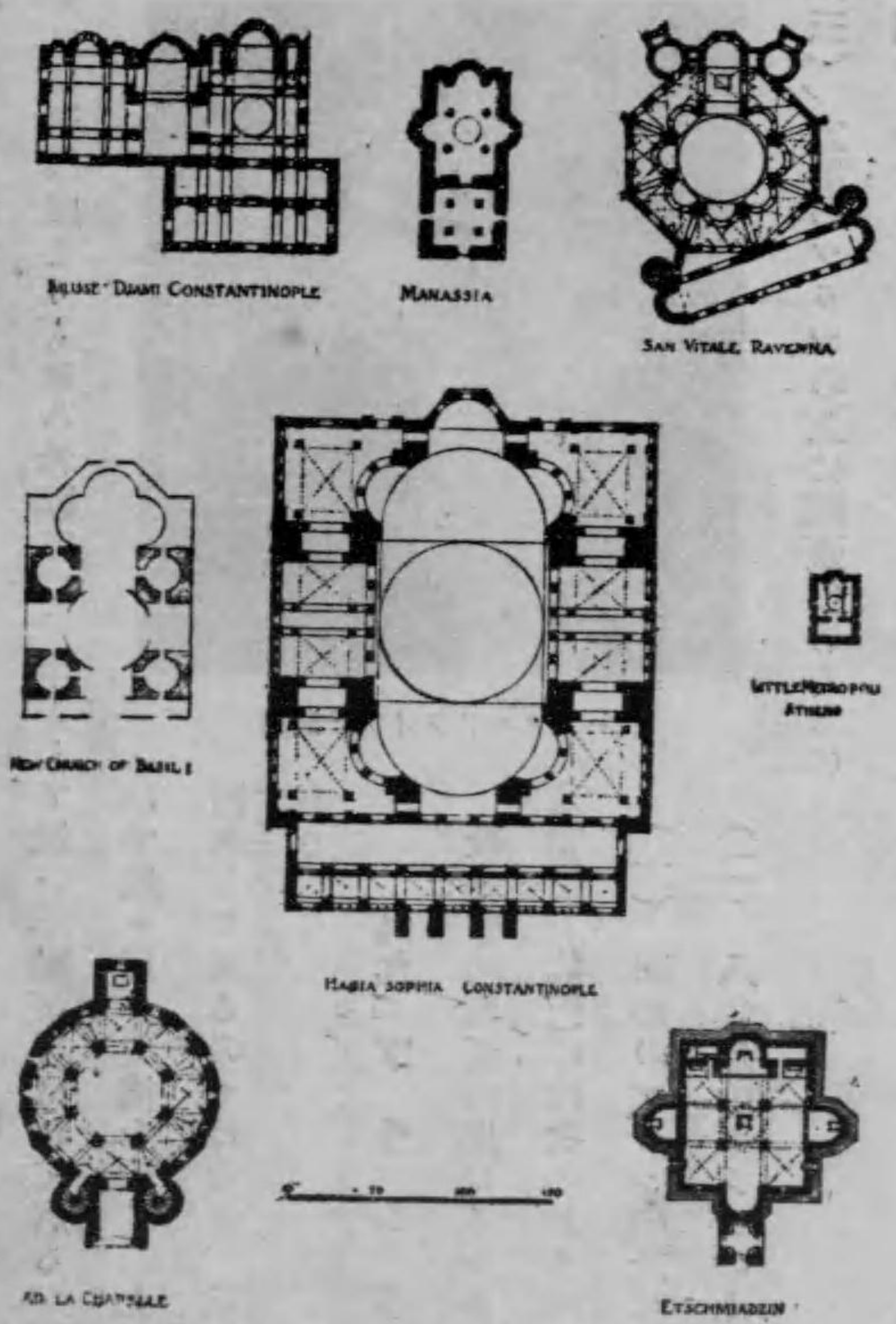
(三) 方形のプランの上に圓蓋のあるもの

(四) 小なる圓蓋を數多有するもの

〇一〇〇 教 會 堂

○コンスタンチノブルのサンタ・ソフィア（紀元五三二年—五三七年）（第八十五、八十六圖 Constantinople St. Sophia 一〇四）

第八十五圖

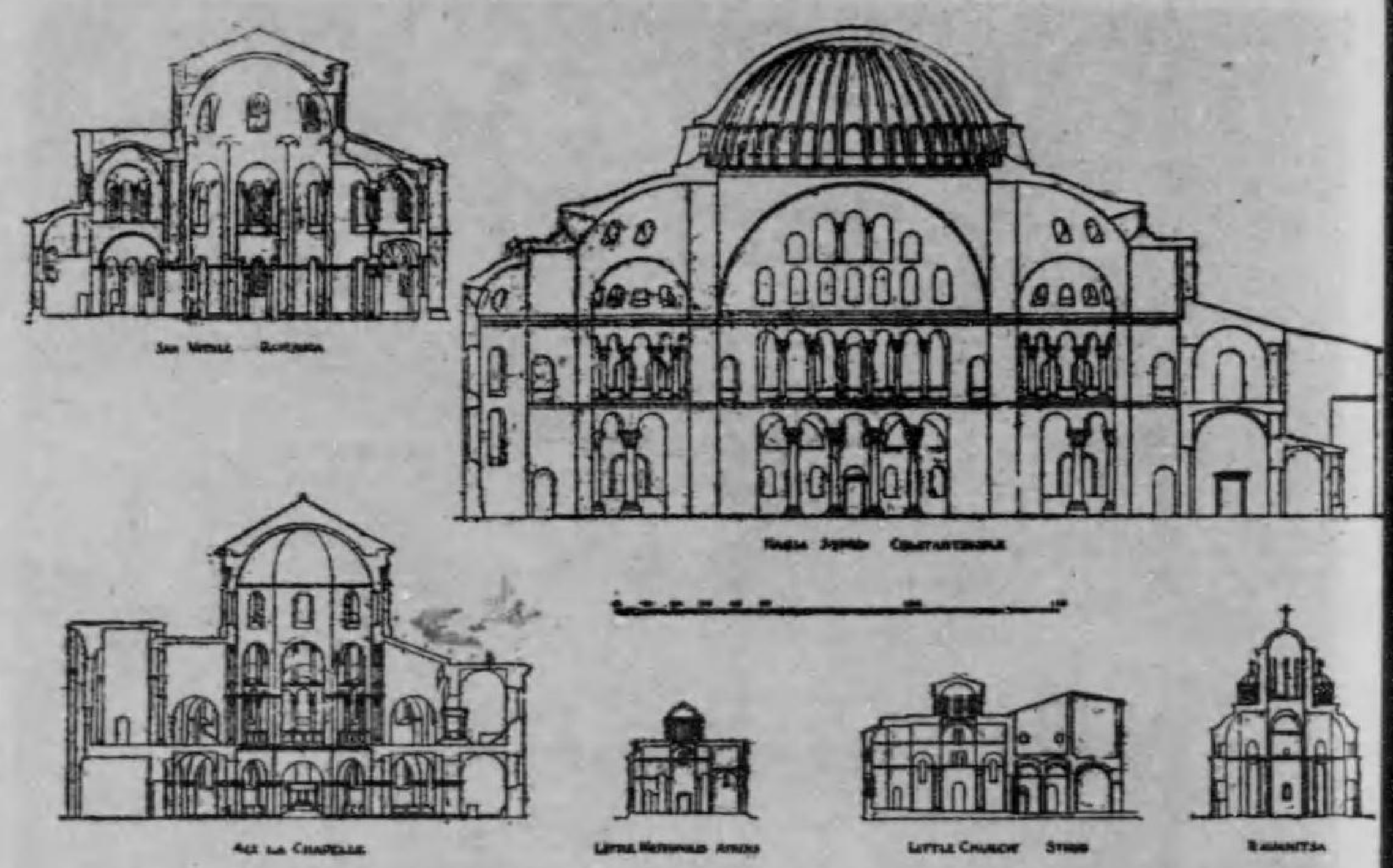


其上に大圓蓋がかかり、其の周囲には更らに半球の小なる圓蓋がある。大圓蓋の下にはこれを七呎平方で、

参照）はチャ  
スタニアン帝  
Justinian  
の建立にかか  
り、プランは  
始め希臘十字  
形であつたが  
後土耳其が其  
の四方に増築  
した爲め方形  
となつた。中  
央の面積は百  
七呎平方で、

ビザンチン教會堂の平面圖

第八十六圖

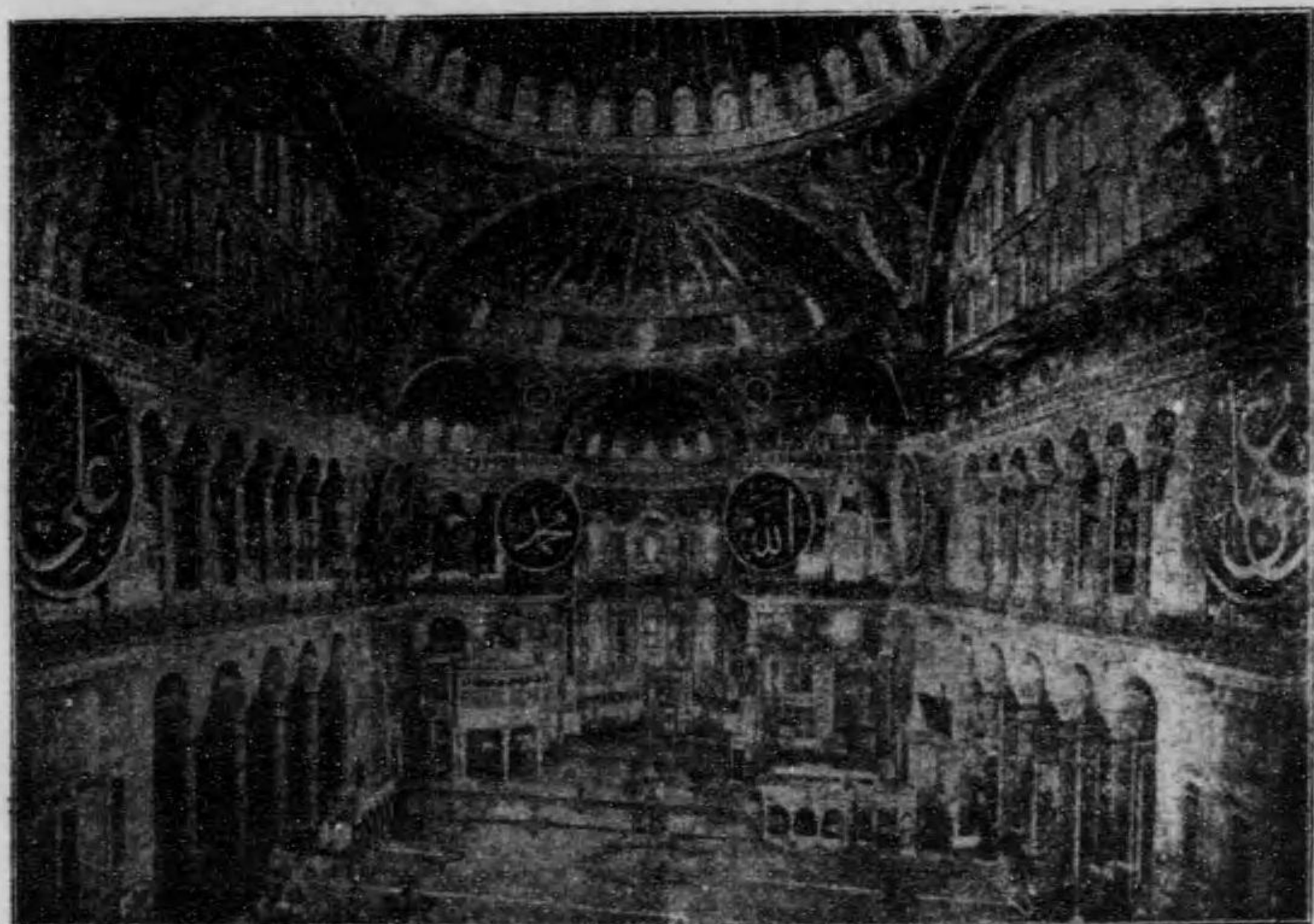


ビザンチン教會堂の断面圖

支ゆる四つの大拱柱があり、これらの上部は平圓拱に依つて互に聯絡して居る。身廊の全面積は長徑二百六十五呎短徑百七呎の大なる卵形で正面には二重のナルセクス、其の外にアトリウムが設けられ、別に洗禮堂が附屬して居る。内部は腰羽目より上の殆んど全部を金モザイク及び色モザイクにて覆ひ實に華麗を極めて居る（第八十七圖）。ビザンチン建築の特徴とするものを悉く備へた代表的の有名なる建築である。（第八十八圖）（第八十九圖）

○ラヴェンナのサン・ヴィターレ（紀元五二六年—五四七年）（第八十五圖及第

第八十七圖 サンタソフィアの内部

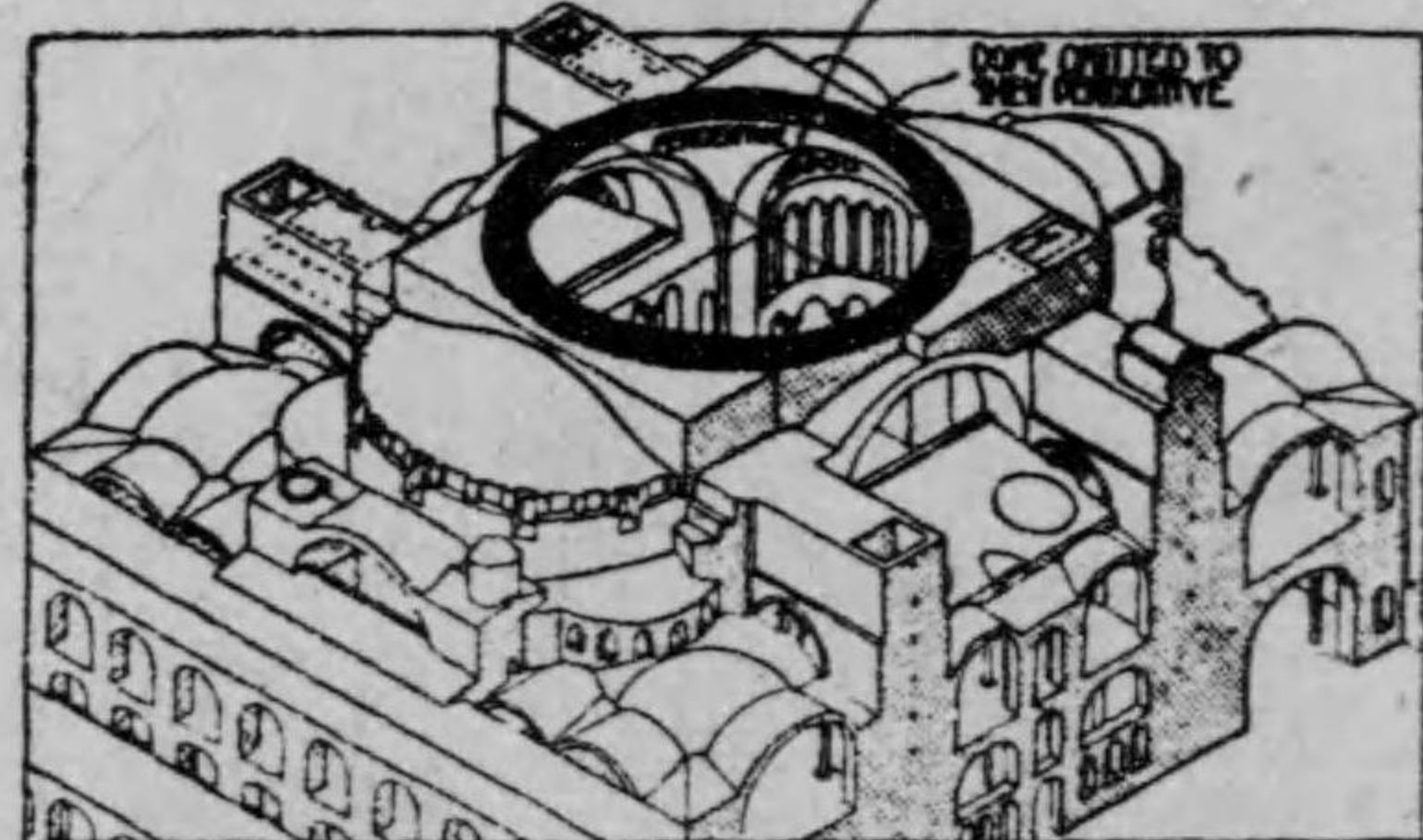


第八十八圖 サンタソフィア



八十六圖参照)はプランが八角形で、直径百十呎の八角形の中に更らに直径五十呎の八角形がある。内部の八角形の中七面に架せらるる拱は、其の支柱が半圓形に配置せられて棧敷を支へて居る。内部は美しくモザイクにて裝飾せられ、圓蓋は土燒の壺を並べて木造屋根に保護せられて居る。

第八十九圖



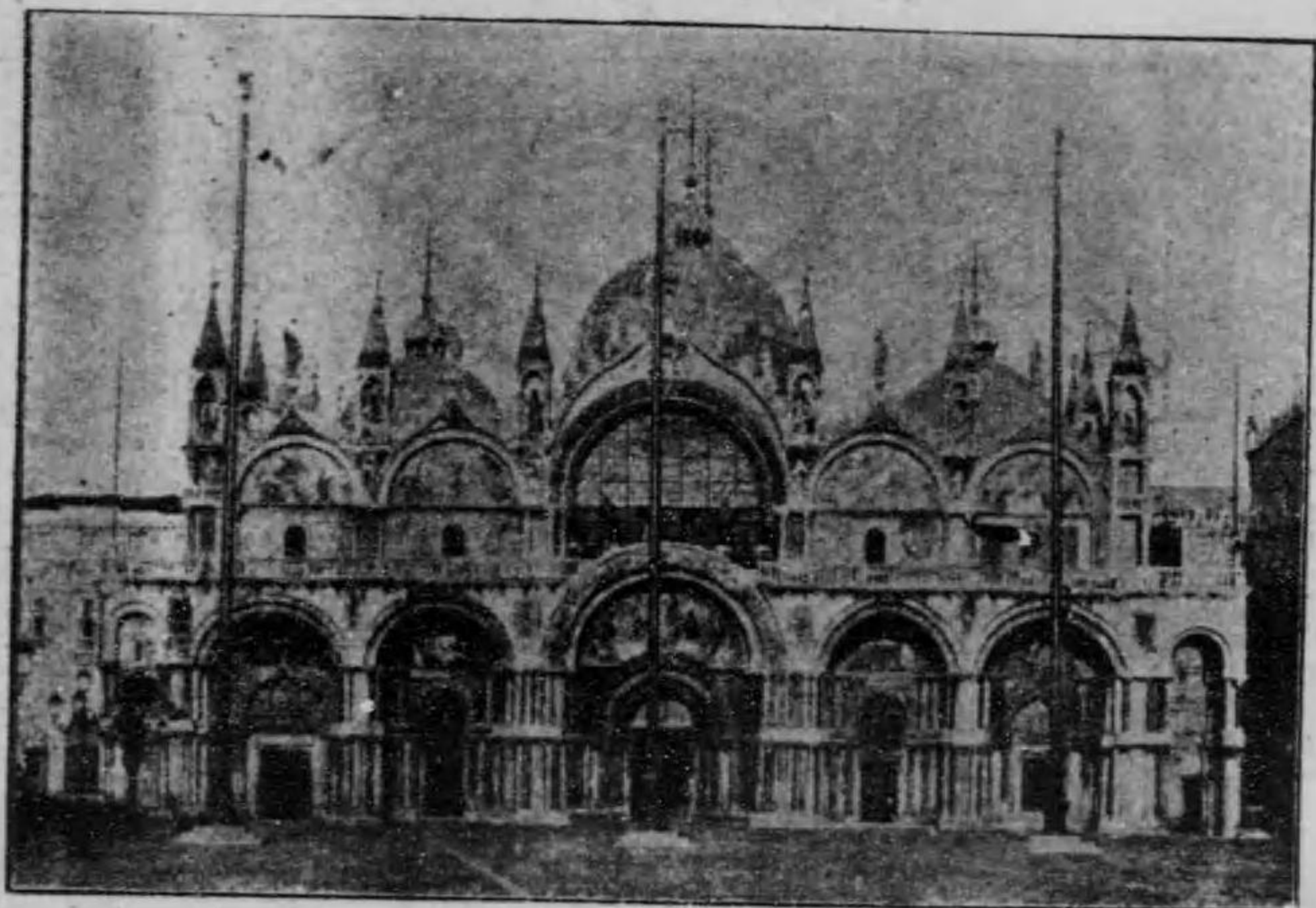
S. SOPHIA CONSTANTINOPLE  
EXTERIOR VIEW (AFTER 1857)

サンタ・ソフィアの透視圖

ヴェニス(第九十圖)は大部分第十一世紀の建築であるが、後に柱と外部の大理石モザイクが増築せられた。プラン(第九十一圖)は希臘十字形で、中央交又部には直径四十二呎の大なる圓蓋が、十字形の腕には小なる圓蓋が夫々架してある。十字形の西腕の周りには玄關廣間が取り巻いて居るので、この部分はプランが方形である。内部(第九十二圖)は大理石

の腰羽目を張り、穹窿、圓蓋は色硝子モザイクにて飾られ華麗を極めて居る。

第九十圖



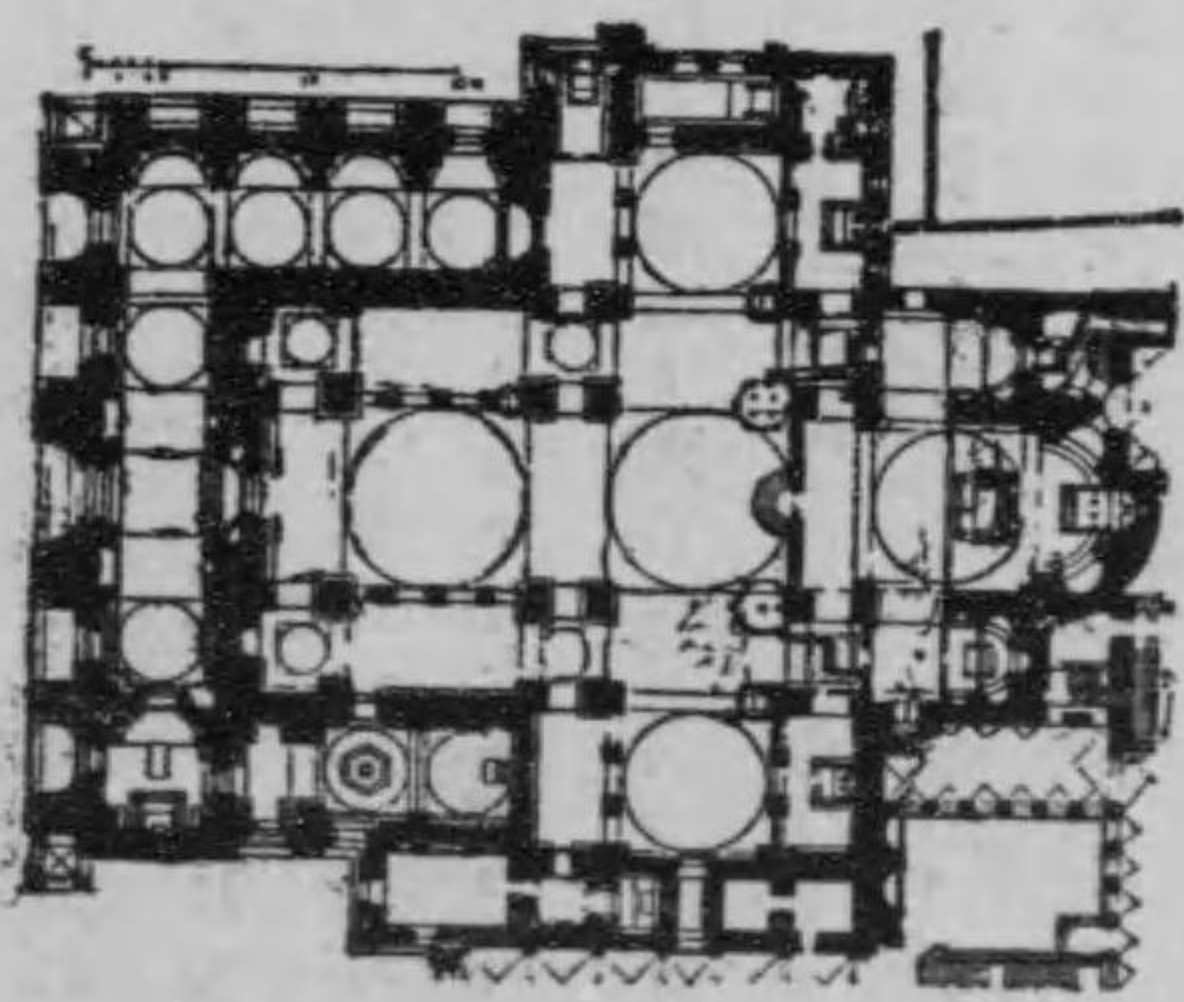
サン・マルコ

一〇一 ビザンチン式の波及

ビザンチン式は第六世紀より第八世紀にか

一〇八

第九十一圖



サン・マルコの平面圖

けて、希臘、露西亞を始め、歐州の諸地方に波及した。シシリー地方にはビザンチン式の

教會堂が今も尙ほ多く残り、希臘に於ては教會堂の定型となつた。小メトロポール寺院、カプニカリアの教會堂は其の例である。  
The Church of the Kapnikarea

The little Metropole Cathedral

第九十二圖



サン・マルコの内部

一〇二 ビザンチン建築の特色

ビザンチン建築の特色はこれを教會堂に見ることが出来る。そのプランは短き腕を有する希臘十字形であるが、更らに拜廊と側面の棧敷とが加つて略ぼ方形となる。建物内部壁體には大理石の張付及びモザイクが用ひられて東洋趣味が發達し、その結果平面裝飾が盛んに行はれて線形は廢れて來た。窓は小さく密集して造られ、圓蓋の下の半圓拱内に列をな

す數多の小窓は實にビザンチン建築の特徵である。穹隅の上につくられた圓蓋については既に述べた通りで、柱の上に直接に拱を架する方法が用ひられ、柱頭の輪廊は普通凸圓形で、更ら

にアバカス様の副柱頭を頂き(第九十三圖)、二層を形つくつて居る。裝飾については既に述べた通りで、アカンサスの葉は一層使化的に變化せられて居る。

第九 サラセン建築 *Sassanian and Mohammedan Architecture*

一〇三 概説

第七世紀にマホメットが回教を布教してより、これに歸依する者次第に多く、遂にその勢力は南歐の一帶より、西は西班牙、南は亞刺比亞、埃及、亞弗利加、東は土耳其より印度にまで及んだ(第九十四圖)。尙ほその文化はシリア、埃及に於けるビザンチン藝術の感

第九十三圖



副柱頭

化を受けて、別にサラセン藝術をつくり、建築に於ても又見るべきものが多い。サラセン建築は地方的に特殊の影響を受けて居るので、形式上これを概説することは困難である。少くとも亞刺比亞式、シリア式、埃及式、西班牙式、波斯式、土耳其式及び印度式に各分類して研究す

第九十四圖



サラセン帝國

る必要がある。けれども其の建築は寧ろ東洋建築史に於て説明する方が適當であるかも知れぬので以下簡単に述べて見る。

一〇四 サラセン帝國の興廢

マホメットは紀元五七一年メッカに生まれた。在來の宗教に嫌らずして四十歳の頃、ヒラ山に上りて斷食冥想すること多時、遂に神託を受けたりと稱し山を下り、眞神アラアの外に神なく、已はアラアの使なりと言ひ布教に從事したが人々に信ぜられず、剩へ危害を加へられんとした爲め、紀元六二二年にマホメットはメヂナに奔つた。メヂナに於てマホメットは勢心に布教した結果歸依する者漸く多くなり、神の爲めに戦ふ者は死後無限の幸



福を天より享くべしと説いて、紀元六三〇年に兵力を以てメツカを陥れ、多くの偶像、殿堂を破壊し、遂に亞刺比亞全土を従へて紀元六三二年に歿した。マホメットの歿後、養父アブベクルが繼ぎてカリフとなつた。其後歴代のカリフは教祖の遺志を奉じ、武力を用ひて布教に努め、信ぜざる者には納貢を強ひ、又戦争を挑んだ。曰くコーランを奉ぜよ。貢賦を納れよ、然らざれば我が劍に當れど。教徒亦熱烈で殉教の決心固く其の鋒の向ふ所風靡せざるは無かつた。即ち東方に向つては先づ東羅馬領に侵入してシリア、メソポタミアを占領し、波斯に入りて其の國都を陥れ、紀元六四一年には其の全土を征服してササン朝の波斯を亡ぼし、遂に印度に入り、又唐の西境に迫つた。西方に於ては先づ埃及を伐ちてアレキサンドリアを陥れ、遂に其の全土を定め、紀元七〇八年には阿弗利加北岸の東羅馬領を侵略し遂にジブラルタル海峡を渡つて西ゴート國に侵入し紀元七二一年にはピレネー山脈以南の地を平定した。斯くの如くしてマホメットの死後未だ百年を出でざるに其の領土は東は中央亞細亞より西は西班牙に至り、歐、亞、阿三大洲に跨る大帝國を建設した。

是より先きサラセン人は東羅馬領を侵して紀元六六八年にコンスタンチノープルを包圍したが、皇帝レオ三世堅城に據りて善く防ぎ、遂に之を抜くこと能はず、圍を解いて退却した。サラセン人は深く之を遺憾とし、紀元七二七年再び海陸の兵を以てコンスタンチノープルを攻圍したが又撃退せられた。西方に於てはピレネー山脈を越へてフランク王國に大舉侵入したが、フランク王の宮宰チャールス・マーテルの爲めに大敗し、爾來東西ともサラセンの兵鋒は頓に挫けた。

紀元七五五年に至りサラセン帝國は東西二部に分裂し、東サラセン國は歴代、通商航海を奨励し又學術を奨励した。首府バグダッドは中古時代に於ける學藝の中心で、文明の進歩は遙かに基督教國を凌いだ。特にカリフ・ハルン・アル・ラシッド(紀元七八六年—八〇九年)の時代はサラセン文化の黄金時代である。其後阿弗利加の北岸に據り、漸次埃及の地を侵略し、紀元九七〇年に都をカイロに奠めファチマ朝を創るや、東サラセンの國勢漸く衰へ、紀元一二五八年蒙古に滅された。西サラセン國も亦學藝商業の振興に努め、其首府コルドヴァは西歐の暗黒時代に於ける文化の一中心であつたが、後國勢次第に衰へて遂に南端に退嬰してグラナダ國となり、紀元一四九二年新興の西班牙に亡ぼされた。

### 一〇五 サラセンの文化

サラセン人とは亞刺比亞人に對する羅馬人の稱呼で、猶太人等と同じくセム種に屬して居

る。國內に沙漠ありて農業に適せざる故、住民の多くは遊牧を業としたが、北部及び海岸の住民は商業に従事した。サラセン人は航海と隊商とに依り東西兩洋の物資と文化とを互に交換傳播した外、希臘羅馬の學術文學を研究して能く之を保存せしのみならず、又其の固有の文學に於て相當の發達をなし、特に數學、理化學、天文學、地理學、醫學に於て獨創の見を加へ、之を歐洲に傳へた。又サラセン建築はビザンチン式の感化を受けたと雖も別に新機軸を出し、其の裝飾は實に絢爛目を奪ふものがある。

#### 一〇六 建築材料

サラセン帝國の領土となつた國々については既に述べた通りである。建築材料は國の異なるに従ひ地方的に相違があつた。従つて大理石、石、煉瓦、漆喰及び木材の總ての材料が應用せられたが、一般に煉瓦を用ひ、内外を漆喰塗とし、印度に於ては石が用ひられた。

#### 一〇七 宗教建築

(一) 禮拜堂 Mosque プランは一般に矩形で、メッカに向つて龕をつくつてある。  
 (二) 光塔 Minaret 禮拜堂には少くとも一つの光塔があり、四つ若くは六つを有すものもある。光塔は禮拜、説教の始めに當り、僧侶が頂上に登て四方に合圖する爲のもので、其の形

は國々に依つて各異つて居る。例へば波斯は圓形、埃及は圓形又は多角形、西班牙は方形である。

(三) 墓 Tombs 墓には獨立せる一つの建築物をなすものがある。そのプランは方形で、中に棺を安置し、上に圓蓋を頂いて居る。カルフの墳墓は其の例である。又禮拜堂の中に棺を安置したものがあつた。其他單に石棺を置いたもの、小なる石碑を立つるもの等がある。

(四) 僧房 Tekieh 僧房のプランは多く中庭をとり、中庭の周圍に部屋が設けられてある。その一方には禮拜堂がある。

(五) 水舎 Sabil 大なる禮拜堂には水舎が附屬して居る。手足を清むるための淨水を具ふる處である。

#### 一〇八 非宗教建築

(一) 宮殿 Palace 宮殿は殊に特色の多い建築で、外部は概して飾りのない壁體を繞らし、屢々これに露臺を設け、内部は一般に熱き地方に特有な納涼的設備を施し、中庭には噴水又は池を造り、色瓦を張り、室内裝飾には鐘乳飾(第九五圖)、アラベスク等を

施し、サラセン式の華麗を極めて居る。

(二) 住宅 Dwelling house 住宅は大體羅馬の住

宅に類似して居る。中庭をとりて噴泉を設

け、中庭の周りに部屋が配置せられて居る。

部屋の取り方は男女を嚴格に區別して東洋風

の特色を示して居る。

一〇九 亞刺比亞サラセン Arabian Saracenic

nic

鐘乳飾

メッカの大禮拜堂は後世の修繕と増築のため、

The Great Mosque

當時の面影がないが、現存のものは五七〇呎に三八

〇呎の廣さの中庭の周りに、尖頭拱形の列拱を繞ら

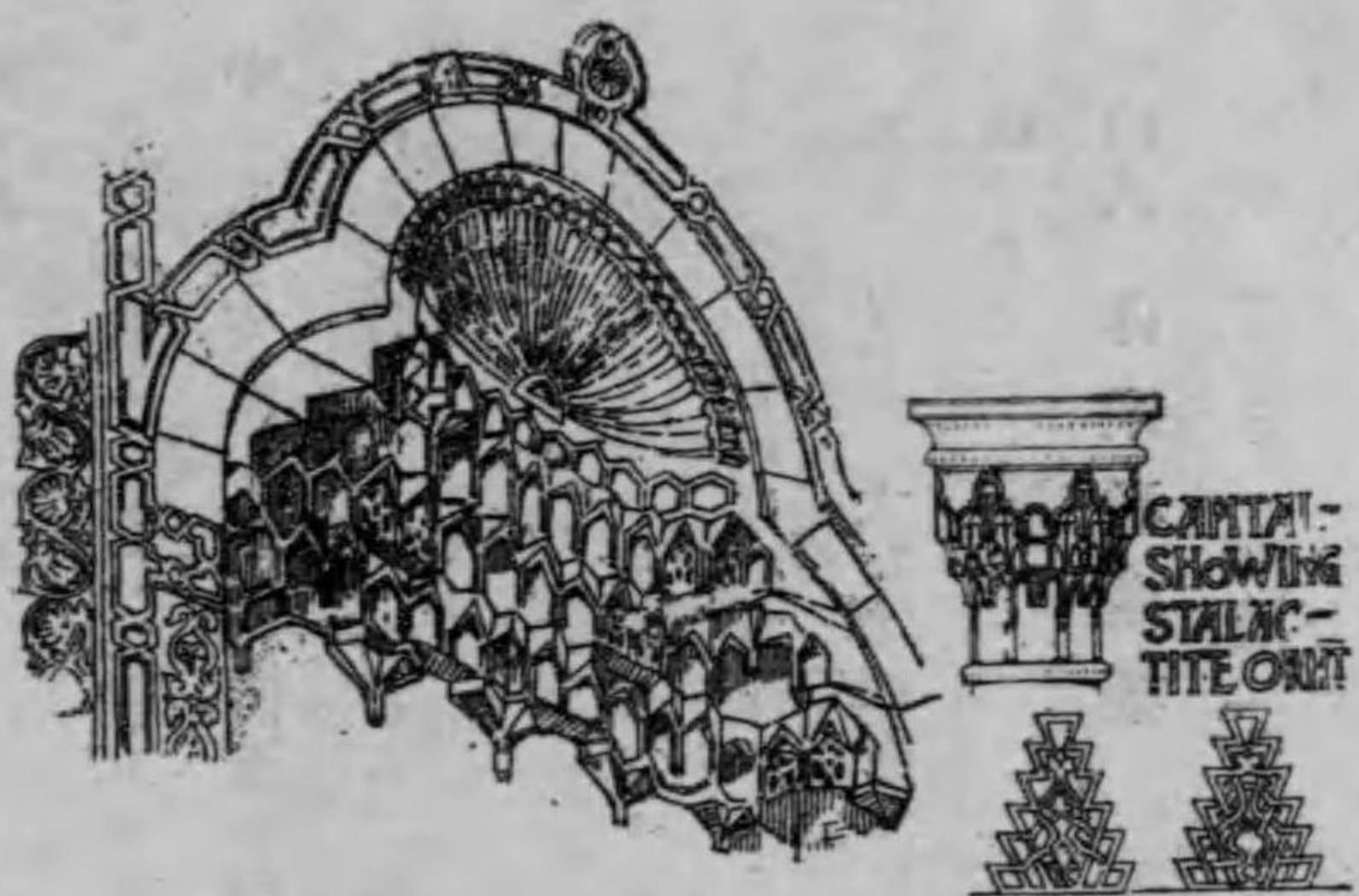
し、その外部の周壁には門と光塔が設けてある。

一一〇 シリア・サラセン Syrian Saracenic

オマールの禮拜堂は大なる岩石の上に建てられ盤石の圓蓋といひ第八世紀の建造で、其後再

The Dome of the Rock

第九十五圖



築、改修せられて居る。プランの中央の圓形の部分に圓蓋がかかり、窓を備へて居る。第十六世紀中、内部は大理石にて、外部は波斯製の彩瓦と大理石とを以て夫々張付けられた。

一一一 埃及サラセン Egyptian Saracenic

カイロのアムルの禮拜堂は最古の建築物の一つで、第七世紀の建造にかかる。中央にある無

Cairo The Mosque of Amr

蓋の中庭の周りには柱の長列が設けられ、その柱は羅馬及びビザンチン式建築より流用したものである。

サルタン・ハッサンの禮拜堂(第九十六圖)は紀元一三五六年に建設せられたもので、十字形

The Mosque of Sultan Hassan

のプラン(第九十七圖)をなし、中央の無蓋の中庭は一一七呎に一〇五呎の面積を占め、四方に尖頭筒形穹窿に蔽はれて居る四角の腕が出て居る。その南の腕には龕が設けられ、更らに其の

奥に建設者の墓がある。墓は約七〇呎平方のプランを有し、鐘乳飾穹隅に支へられて居る圓蓋

を頂き、その兩側には光塔が立ち、その一基は高さ三百呎である。外部には高さ百呎の周壁が

廻らしてある。

カイト・ベアの禮拜堂(紀元一四七二年)(第九十八圖)は小規模ではあるが、精巧な光塔を備へ、埃及サラセン式建築の特色を示し、特に有名である。

The Mosque of Kait-Bey

一三二 西班牙サラセン Spanish Saracenic

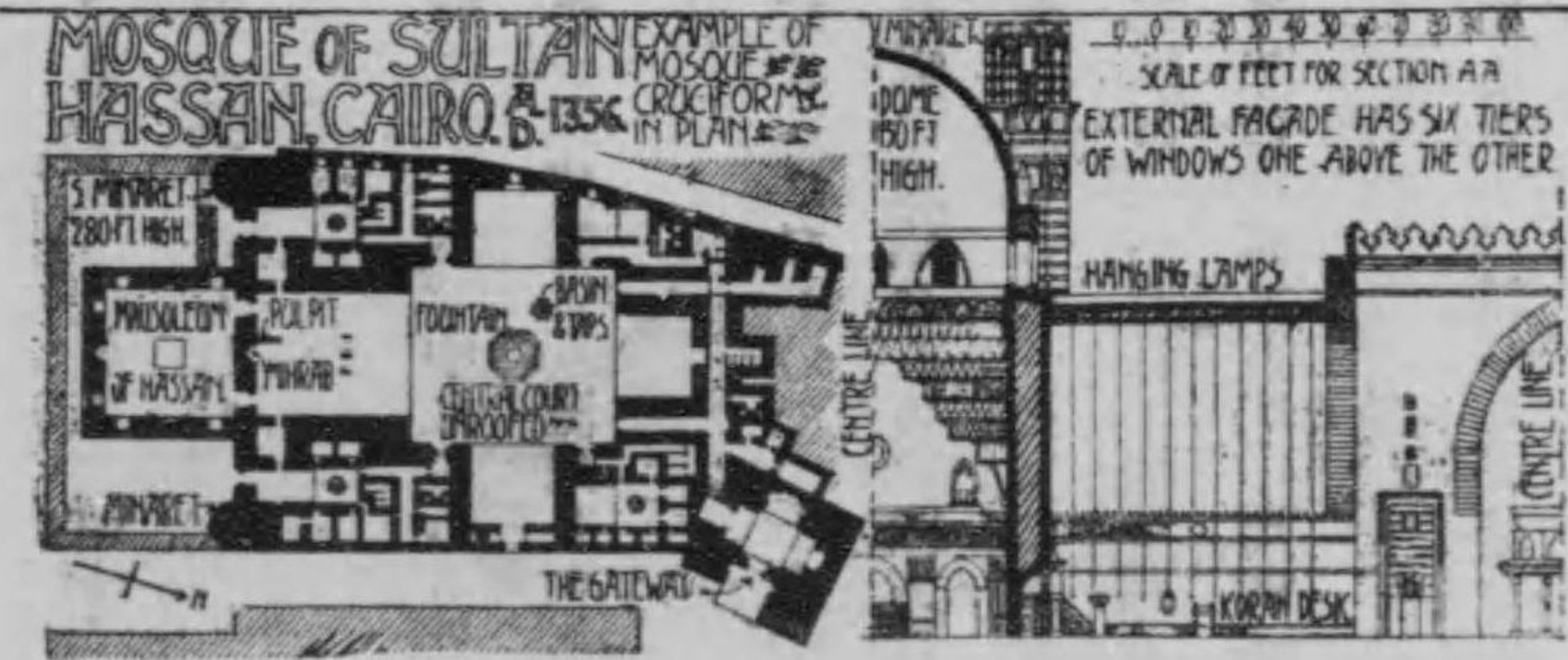
コルドヴァの禮拜堂(紀元七八六年)(第九十九圖)は後年に廣々増築せられたため今日は四二二呎に五七三呎を大さ



サルメン・サツサンの禮拜堂

の平行四邊形のプランな有して居る。意匠の異なる柱を重ねて二層となし、その柱は多く羅馬古建築より流用したものである。上と下の柱に架してある拱は、下が圓形五辨拱

第九十七圖 サルメン・ハツサンの平面及び断面圖



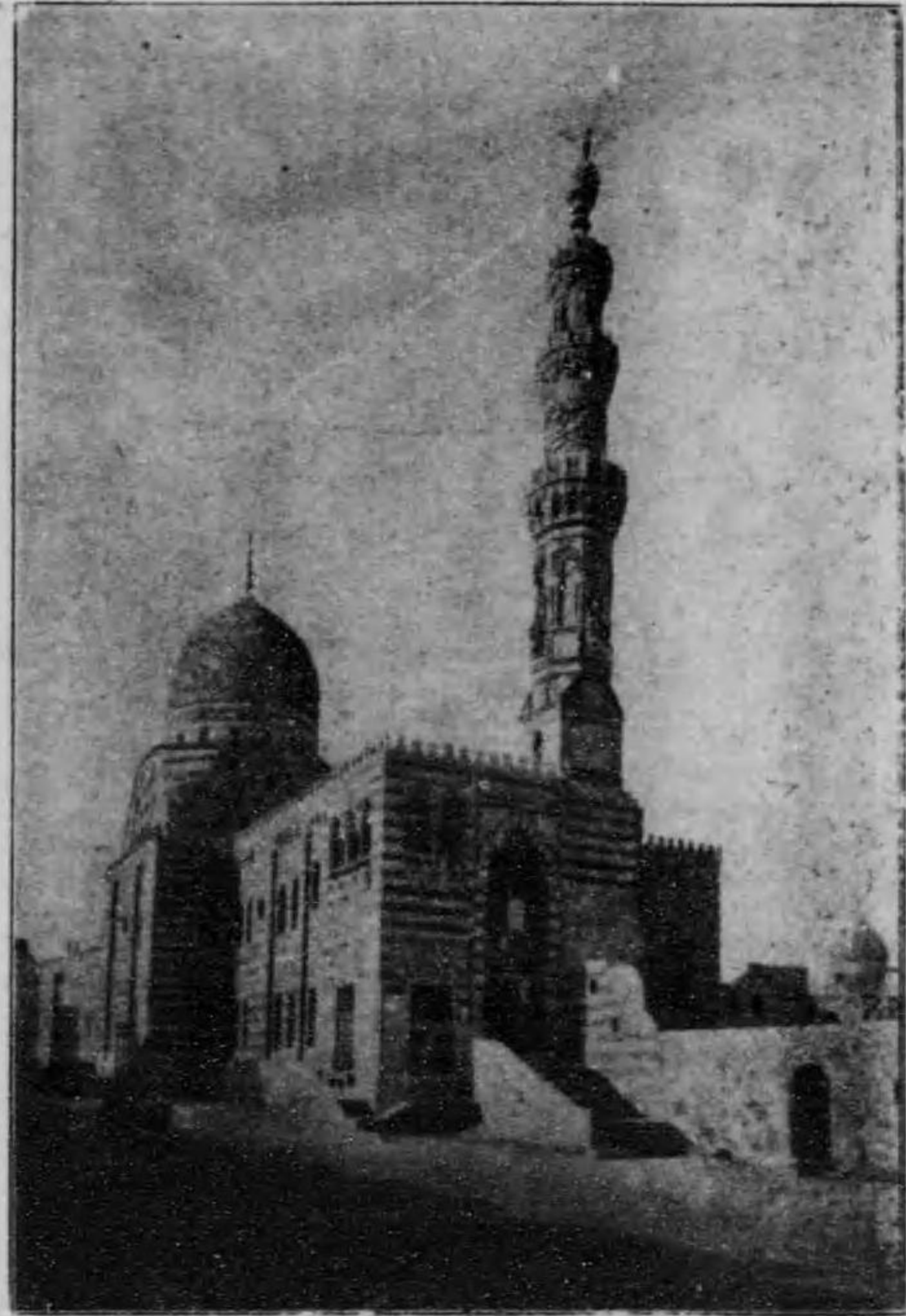
第九十六圖

て、上は馬蹄形である。

グラナダのアルハンブラ(紀元一三〇九年—一三五四年)は宮殿の一部でサラセン建築中最

も有名なるものである。

第九十八圖



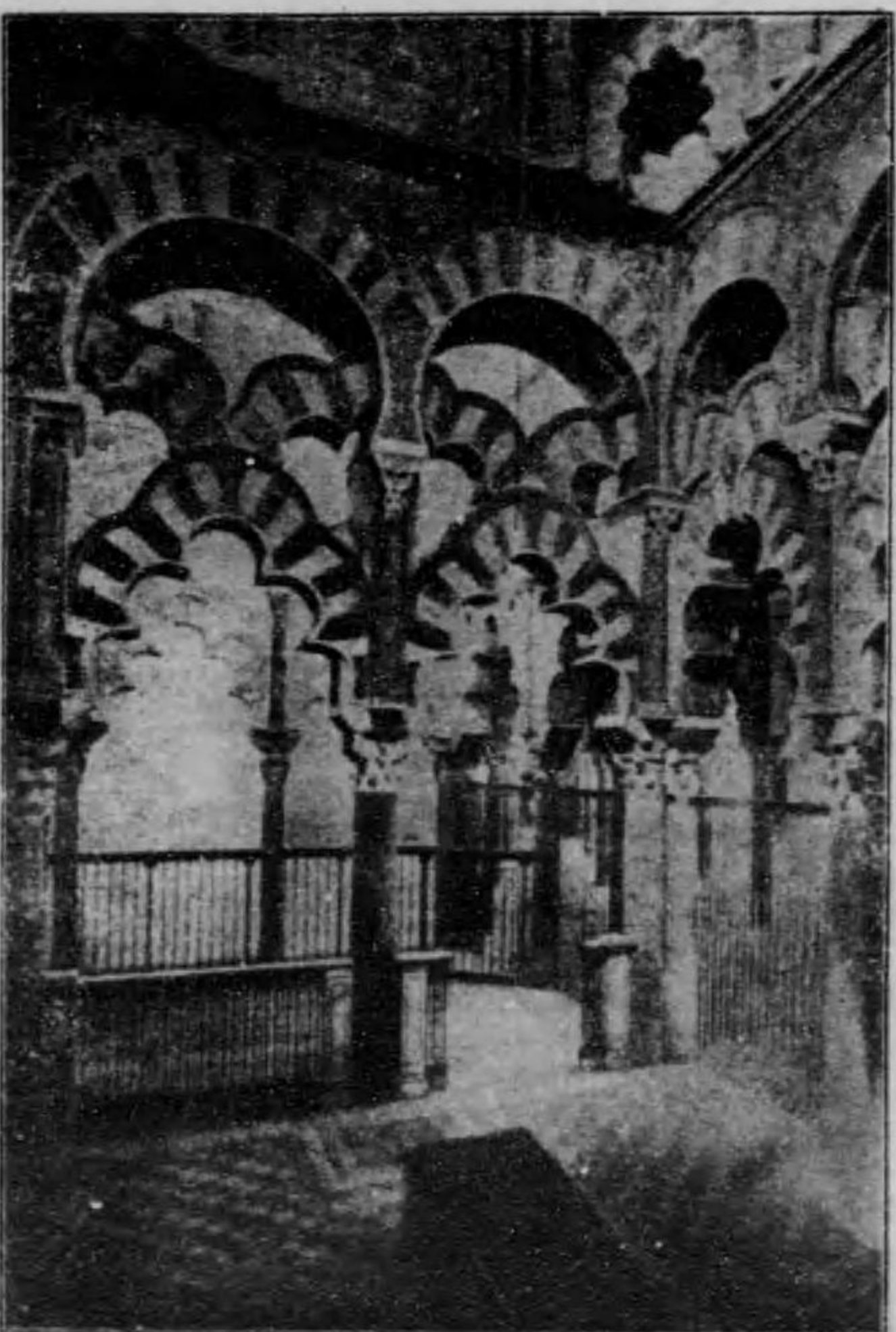
カイトベアの禮拜堂

ルハンブラ特有の柱頭(第百二圖)を備へて居る。この庭の三方に三つの小なる廣間があり、その屋根は何れも鐘乳飾を以て隙間なく裝飾せられてある。第二の庭をアルベルカの庭といひ、

南北に長い長方形で、その北に大使の廣間がある。廣さ三十五呎平方で、深く入り込む窓が三方に開かれ、一眸の下に全市を俯瞰することが出来る。尙ほこの上にはアラベス之裝飾の多角

形の屋根がかかつて居る。

第九十九圖



コルドヴァの拜禮堂の内部

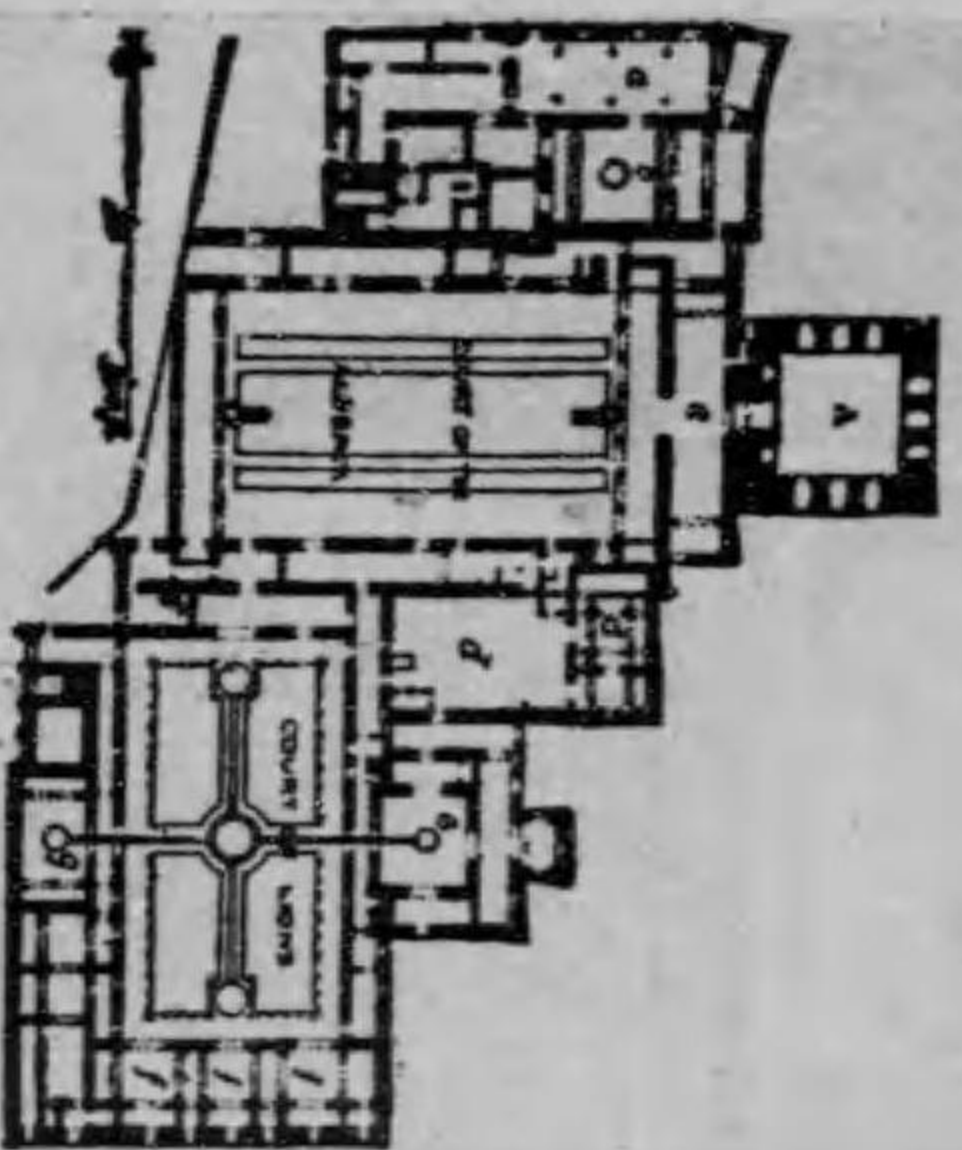
かくの如くアルハンブラは窓、廣間及び中庭より成る一部をなして居るが、その精巧なる効果は他にこれを企及することが出来ない(第百三圖)。

セヴィルのアルカザール  
Seville The Alcazar  
は主として第十四世紀の

宮室で、現在は甚だしく荒廢して居るが正面及び興味深き室等二三の部分を残存して居る。

一一三 波斯サラセン Persian Saracenic

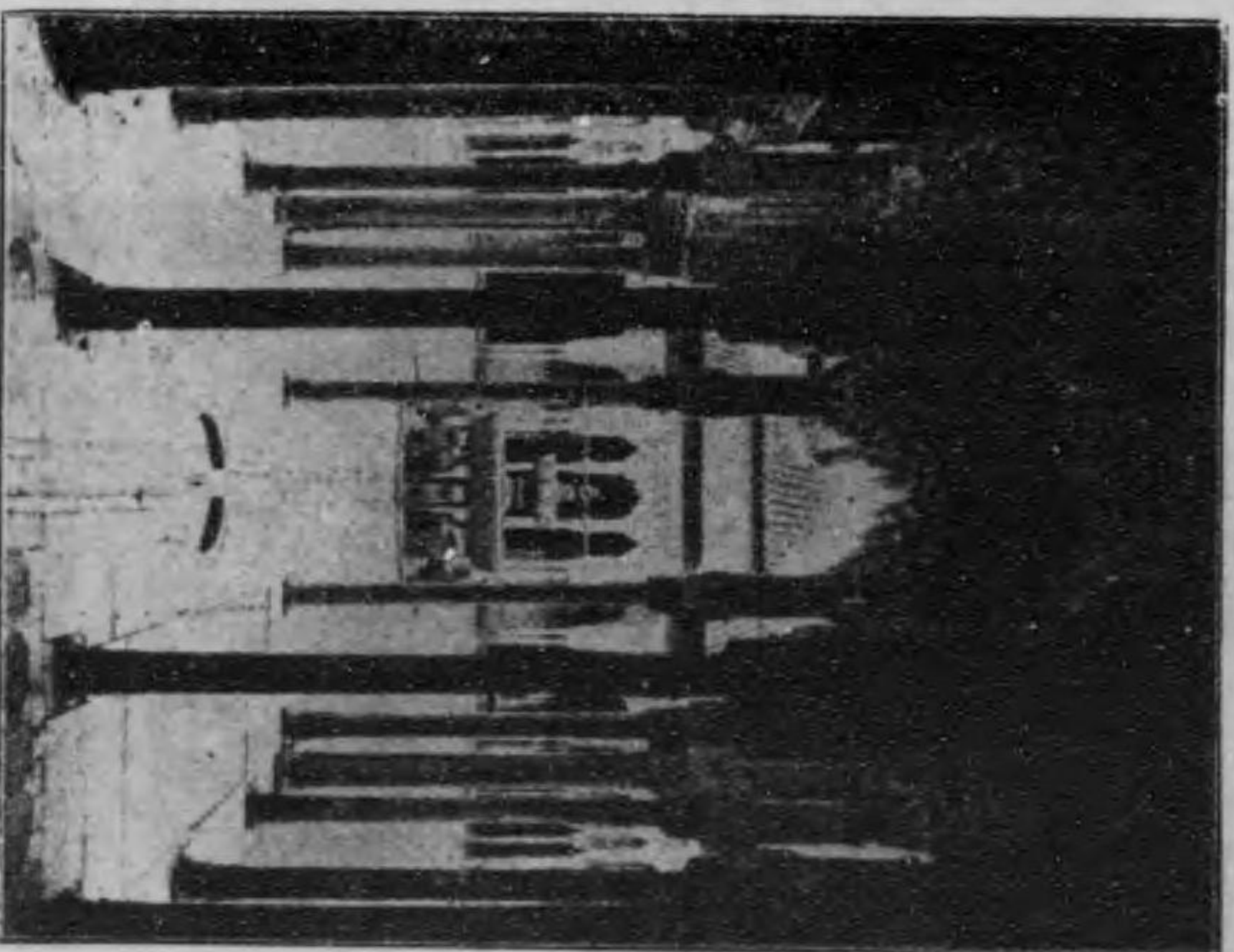
第百圖



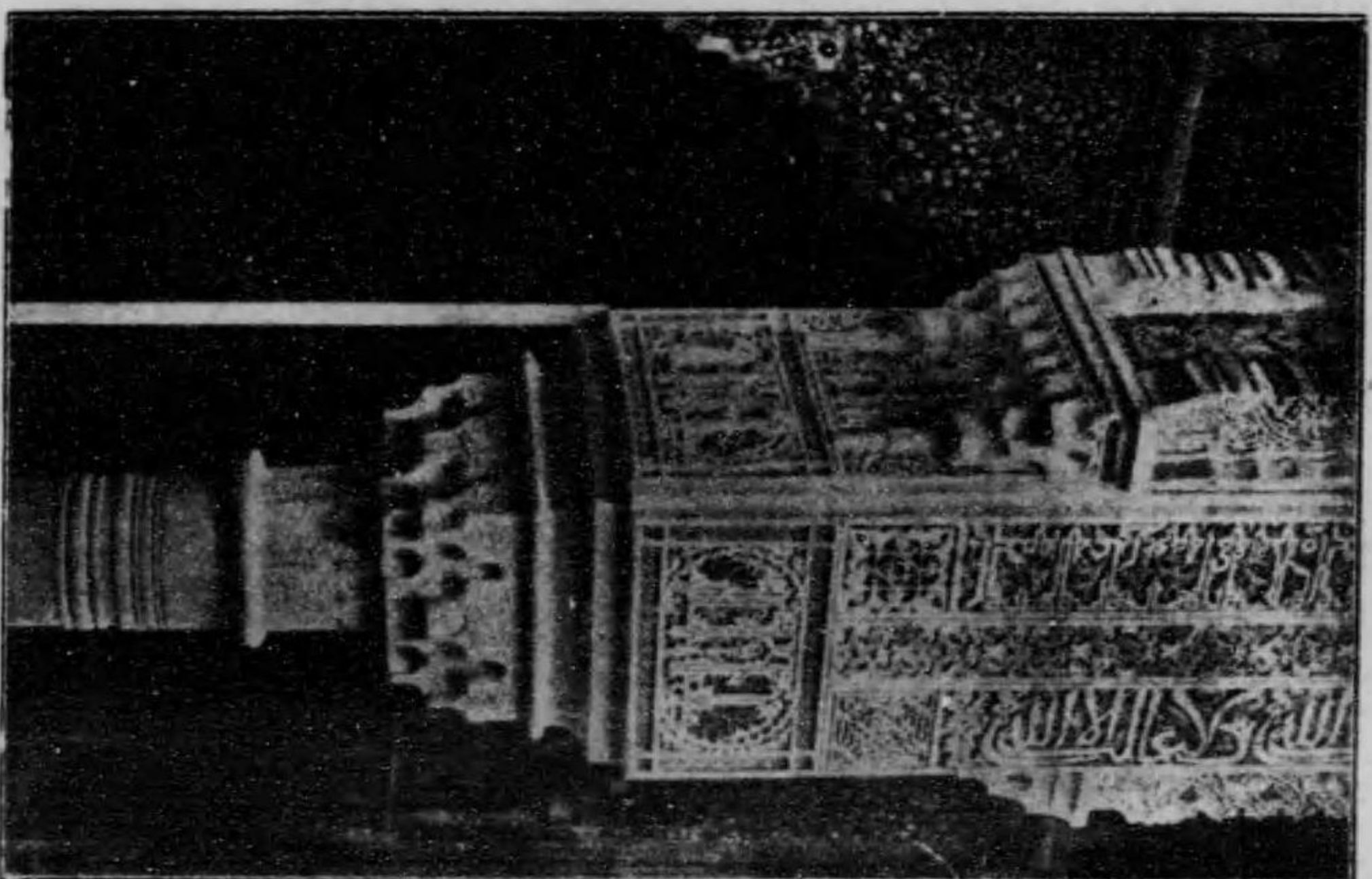
A. Hall of Ambassadors; a. Mosque; b. Court of Mosque; c. Sala della Barca; d. d. Baths; e. Hall of the Two Sisters; f. f. Hall of the Tribunals; e. Hall of the Abencerrages.

アルハンブラの平面圖  
西洋建築史

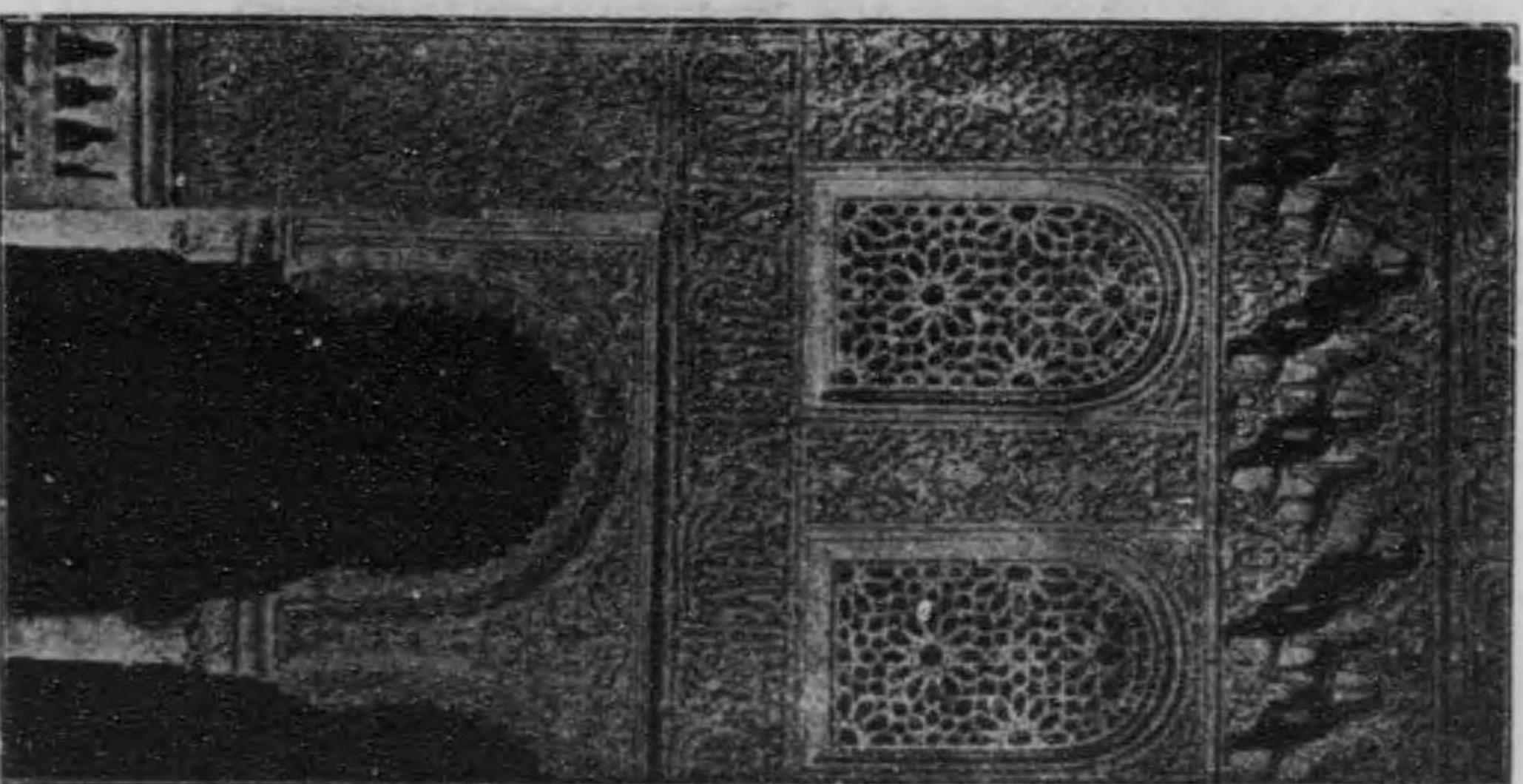
第百一圖



アルハンブラの獅子庭



鐘乳飾の柱頭



アルハンダラの一節詳細



スユライマン一世の禮拜堂

イスバハンの大禮拜堂（紀元一五八五年—  
一六二九年）は二層の列拱に圍まるる無蓋の大  
なる中庭を有し、表玄関の尖頭拱と葱花屋根と  
圓形の光塔が珍らし。

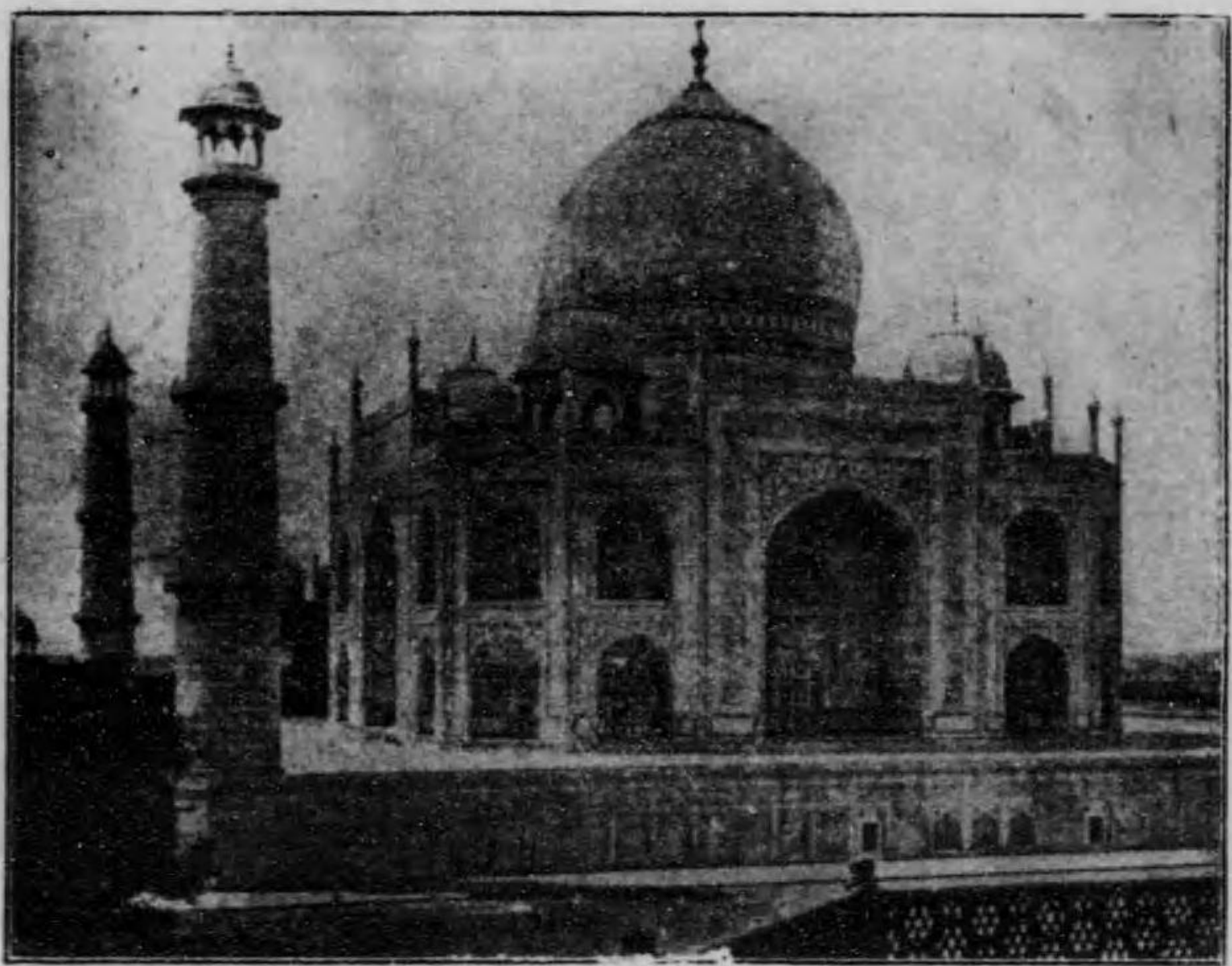
一一四 土耳其サラセン Turkish Saracenic

スユライマン一世の禮拜堂（紀元一五五〇年  
The Mosque Sultanman I. 一五五六年）は幅約二百呎の前庭  
を有し、庭の四方を繞つて小さい丸屋根に蔽は  
るる廻廊が建つて居る。前庭の中央には噴泉が  
設けられ、庭の四隅には光塔が聳へて居る。禮  
拜堂の後方の園には八角形の墓が二つある。

一一五 印度サラセン Indian Saracenic

印度のサラセン建築については、東洋建築史

第百五圖



タージ・マハール

チン建築に見る球形丸屋根は稀である。柱は羅馬及びビザンチン建築より流用したものが多

で述べた方が妥當である故茲には省略するが、何れも宏大にして美しくいものが多い。殊にアグラのタージ・マハール(第百五圖)の如きは世界的の有名な建築で、白大理石を以て造つた皇陵である。

一一六 サラセン建築の特色

サラセン建築の外部は一般に單調で飾がない場合が多いが、内部は極度に裝飾せられ華麗を極めて居る。禮拜堂の上には普通尖頭形又は葱花形の丸屋根を造り、丸屋根は穹隅の上に据わり、穹隅は内部に於て鐘乳飾にて飾られて居る。此丸屋根は一種特別の形狀をなし、ビザンチン建築より流用したものが多

第百六圖



拱の三種

いが、四角の柱頭に長さ頭巻を備へ、アラベスクにて飾つたものが發達した。この柱頭を頂く柱は極めて細い。又柱頭を鐘乳飾で飾るものもある。サラセン建築の拱の形は又特色の一つである。多くの種類(第百六圖)があるが、其の中の主なるものは尖頭形、オデー(船底形)、馬蹄形、多辨形(海扇形)で、之等の組合せもある。又或るものには其の孤形の下に懸華の形を切抜いたものもある。窓は普通、一般に小さく、屢々密集して造られ、時としては幾何學的模様の精巧な大理石及び漆喰塗狭間飾を以て塞いだものもある(第百七圖)。線形は一般に重要でなく、その代りに精巧な表面裝飾が用ひられて居る。表面裝飾はアラベスク及び鐘乳飾等の幾何學的模様又は浮彫より意匠せられたもので、自然物殊に動物は絶対に見ることが出来ぬ。これはコーランの教へに基くもので、又屢々亞刺比亞文字特にコーランから取つた文句を裝飾に用ひて居る。鐘乳飾はサラセン建築の最も特色とするもので、穹隅以外に穹隆の下、窓枠、戸口の上部、柱頭、蛇腹、天井等に用ひられ極めて華麗複雑のものである。幾何學的模様や色彩の應用は實に巧妙を極め、意匠として最も發達し完成したものである。

と稱することが出来る。

### 第十 ローマネスク建築

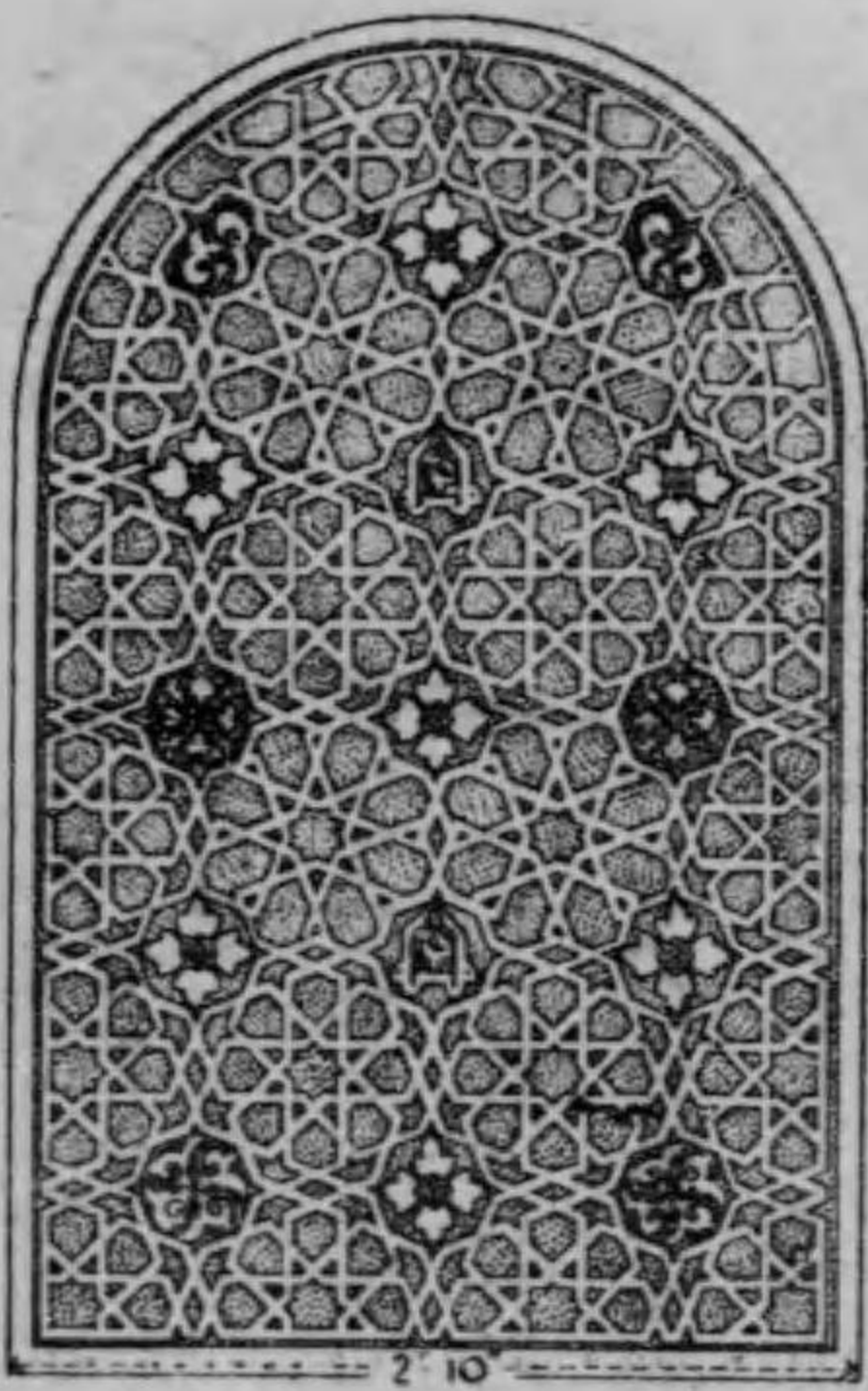
Romanesque Architecture

#### 一一七 概説

ローマネスク建築とは西羅馬帝國の滅亡より、ゴシック建築が起るまで、即ち第十世紀より第十二世紀に掛けて主として歐羅巴の西及び南の地方に行はれた建築である。その中心をなす建築は教會堂(第百八圖)(百九圖)で、これが過渡期のものとなつてゴシック建築を完成するに至つた。その建築は多くの地方的特色を具へて居るので、以下各國の頂に分けて述べて見よう。

(一) 伊太利ローマネスク Italian Romanesque

第百七圖



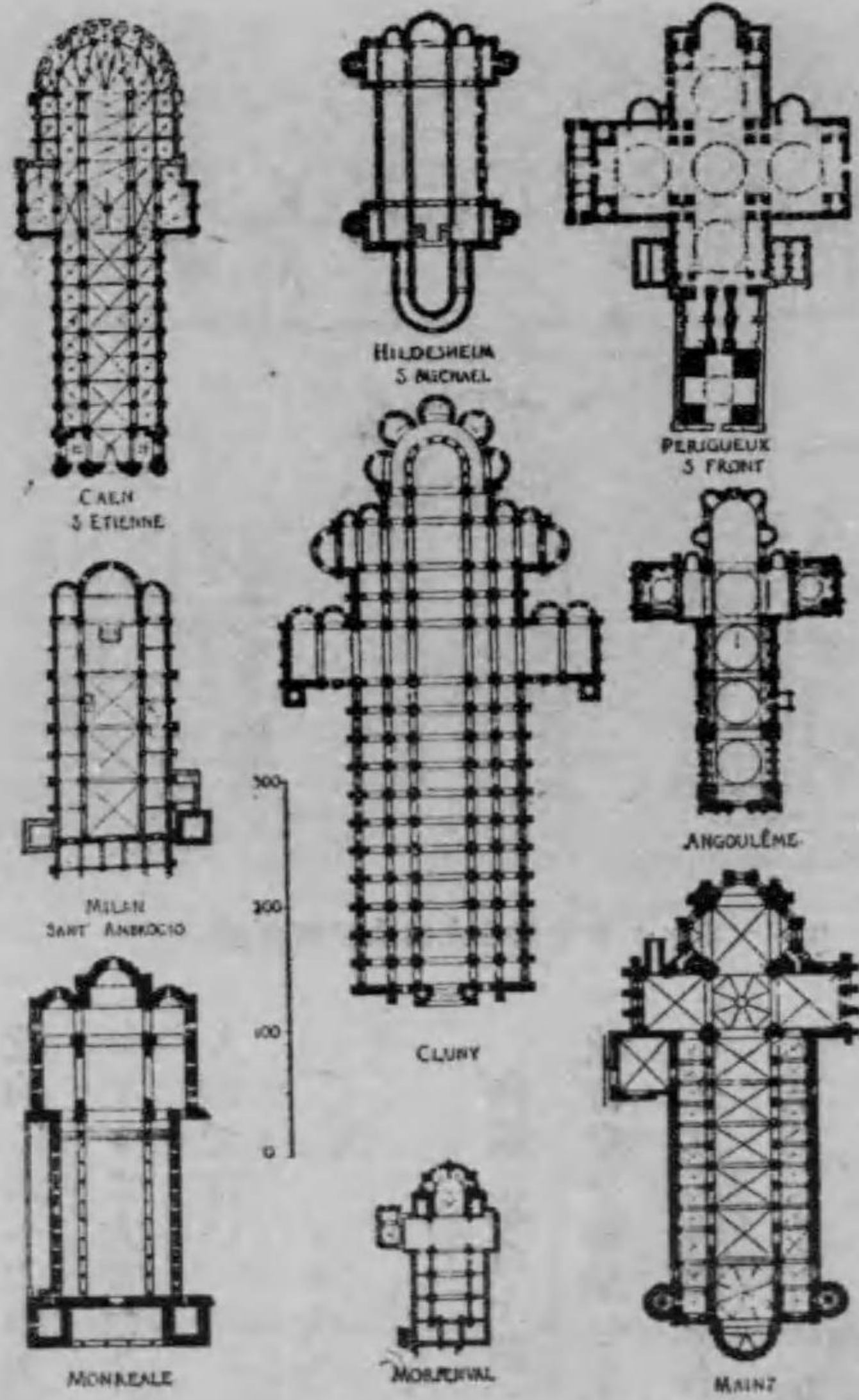
アルハンブラの首窓

て述べて見よう。

#### 一一八 伊太利ローマネスク

伊太利ローマネスクは (一) 中央伊太利 (二) 北部伊太利 (三) 南部伊太利及びシチリアの三つに区分する。のが便利である。

第百八圖



ローマネスク教會堂の平面圖

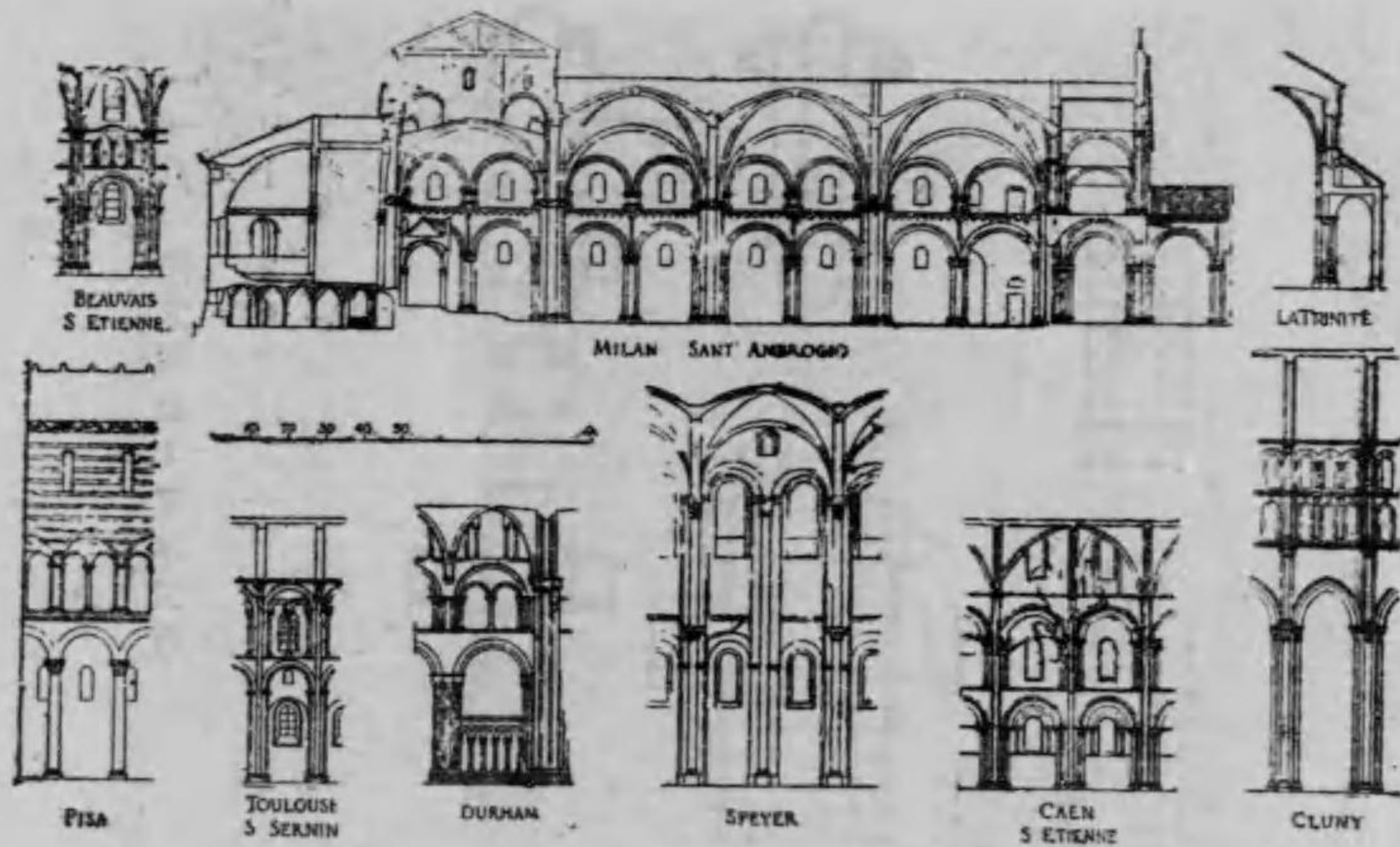
#### 一一九 中

央伊太利  
北はフロレンス及びピサを中心  
に南はネーブルスに及ぶ地方  
で、其の内タスカニイよりは建

築石材を出し、カララは有名な大理石の産地である。タスカニイには第十一世紀に建築を主として述べて見よう。



第九百圖



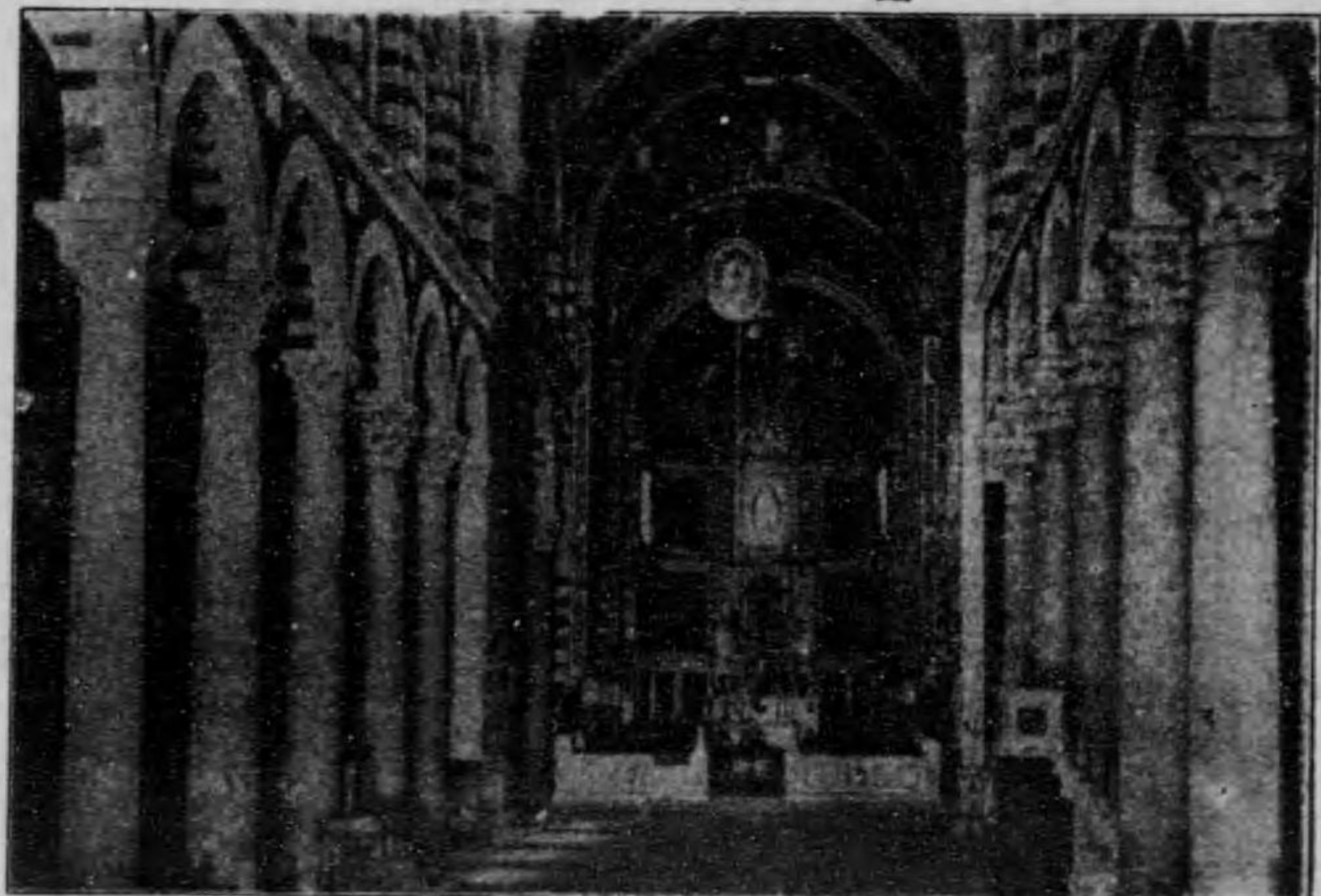
ローマネスク教會堂の立面及び断面圖

する有名な美術運動が起り、これに影響せられて建築の見るべきものが多い。然し一般的に云へば中央伊太利ローマネスクはパシカと大差なく新建築様式と稱する程のものでない。

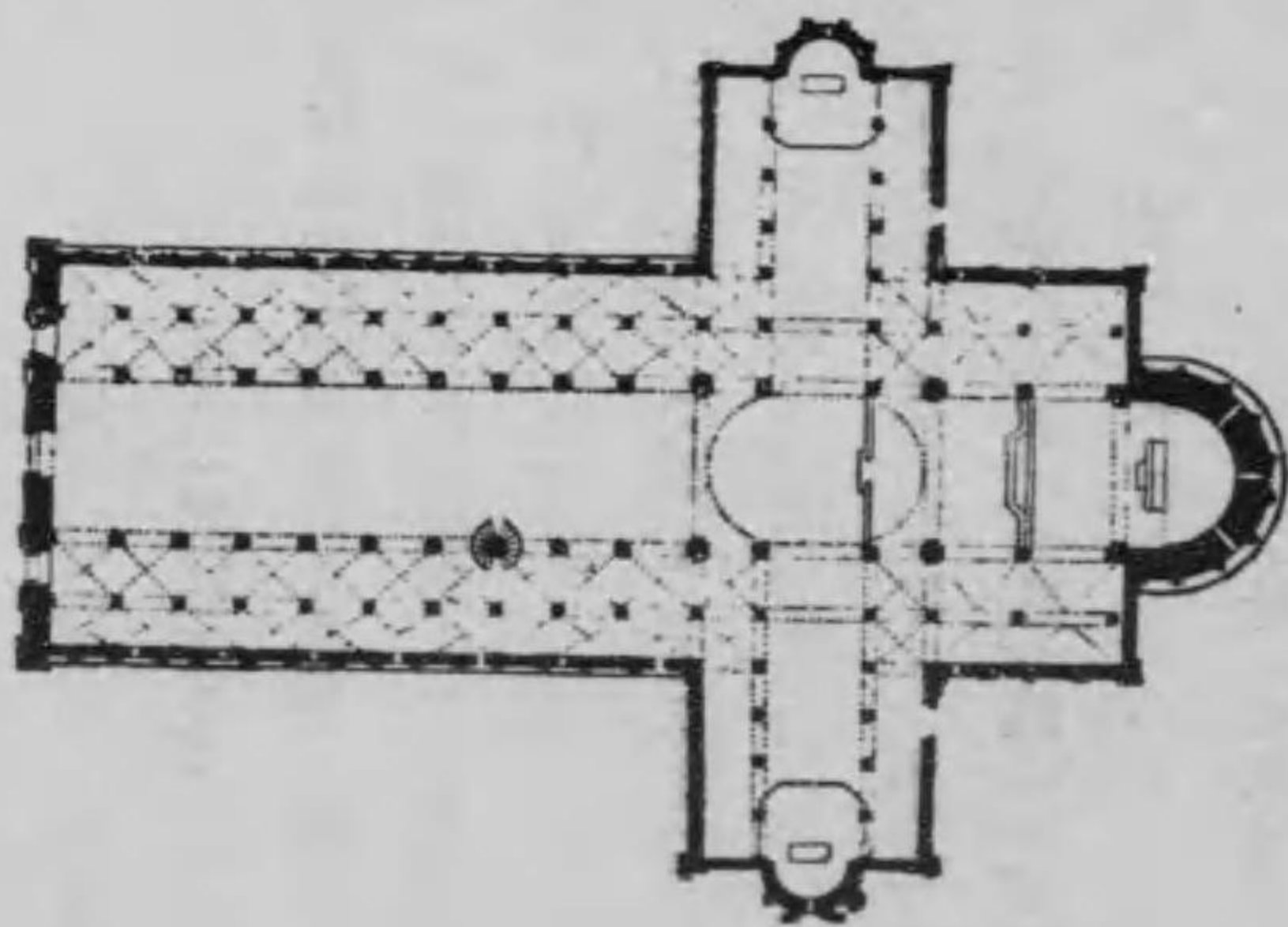
○ピサ大寺 Pisa Cathedral (紀元一〇六三年—一〇九二年)

内部(第九十圖)は初期基督教のパシカ教會堂を聯想せしむる建築であるが、兩端に孤状の後陣を有する袖廊がある點が變つて居る(第九十一圖)。身廊と袖廊の交叉部の上には楕圓形の丸屋根がある。これは後世の建築である。壁體は全部大理石にて造られ、外部正面には赤と白の大理石を帶狀

第十百圖



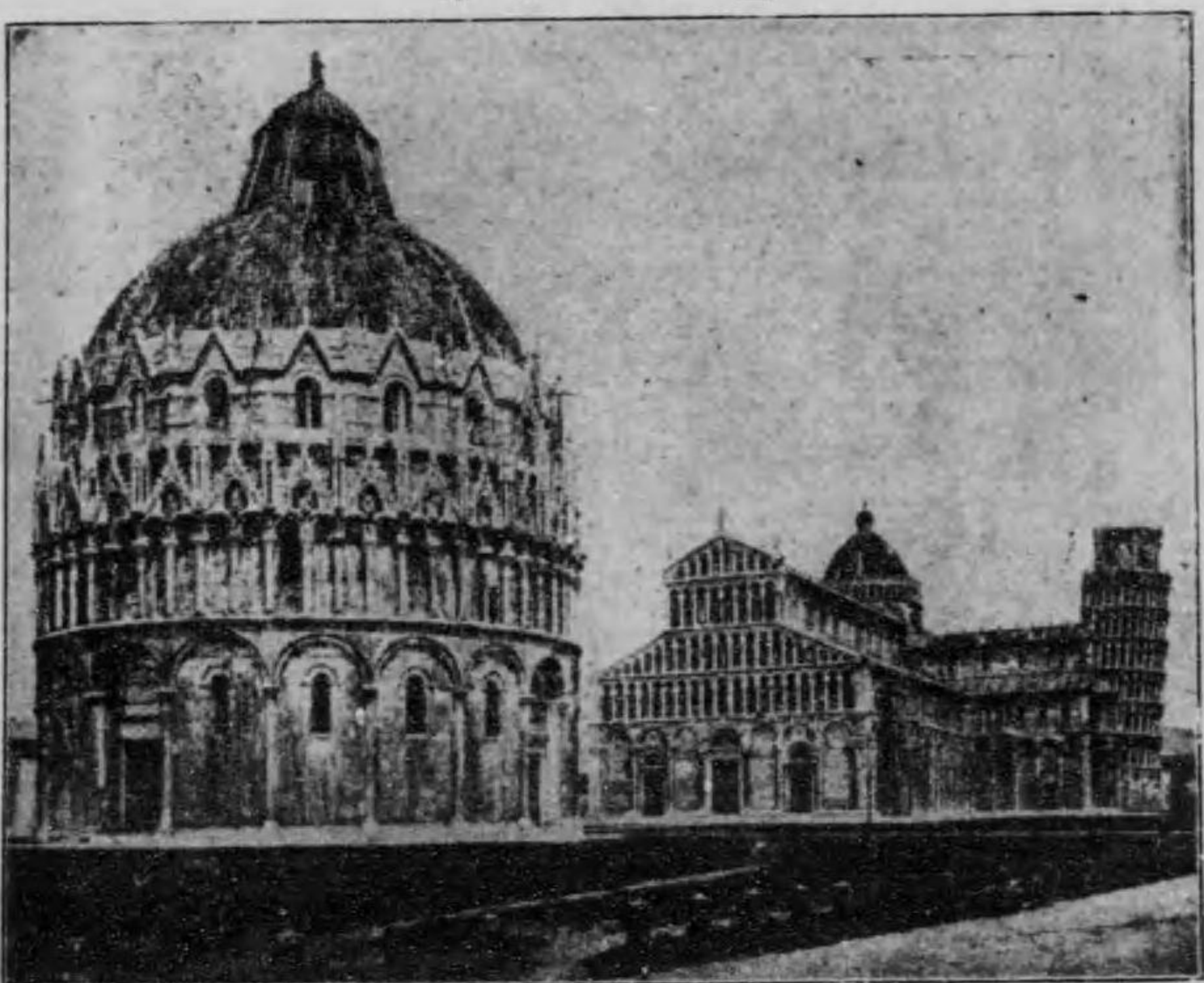
ピサ大寺の内部



第九十一圖

ピサ大寺平面圖

第百十二圖



洗禮堂とピサ大寺と斜塔

に積んで造つた盲列拱がある（第百十二圖）。

(一) ピサの鐘塔(斜塔) The Campanile, Pisa. (紀元一一七二年)

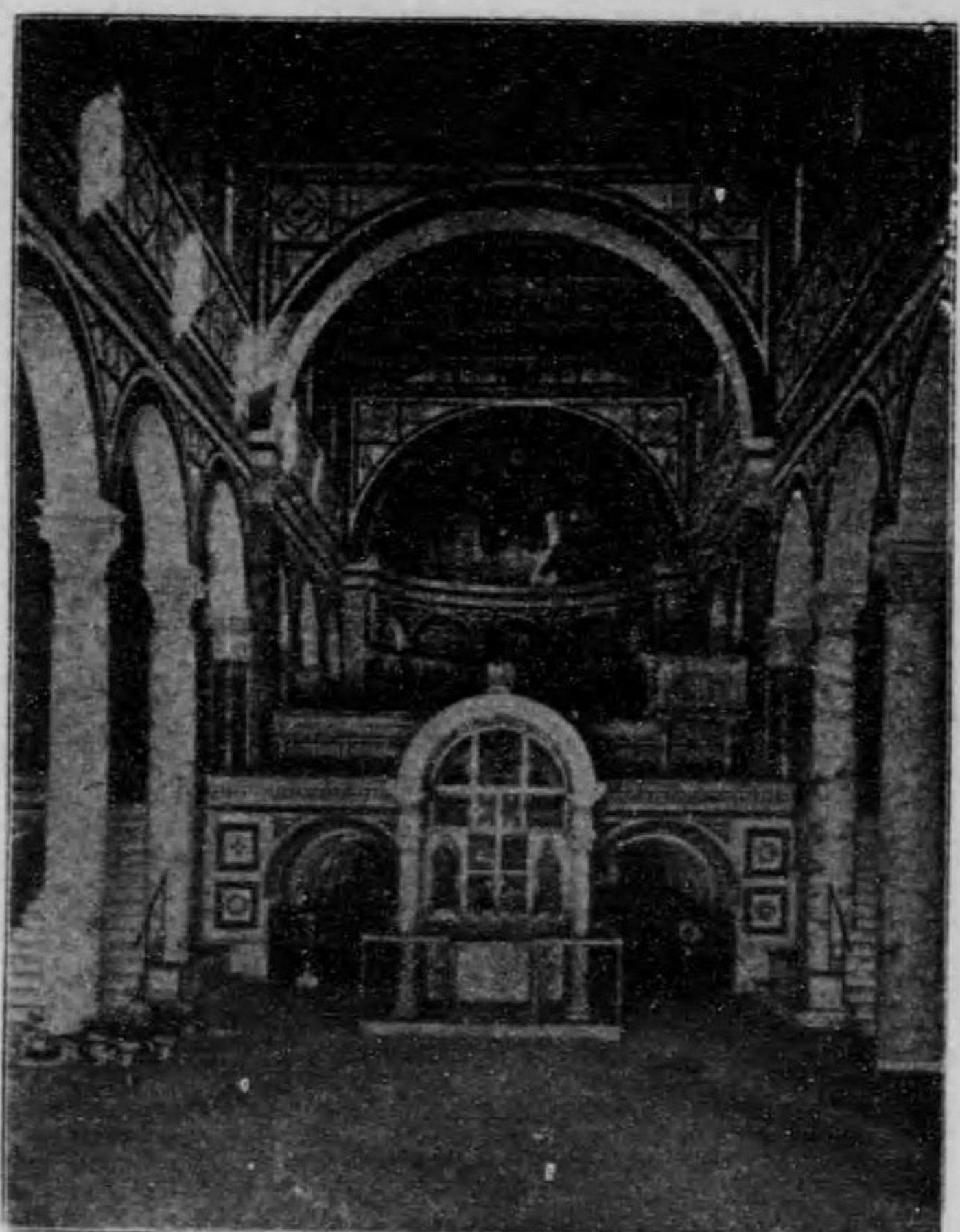
直徑五十二呎の圓形八層塔で建設中に基礎が傾斜したため斜塔となつた。(第百十二圖参照)

(二) ピサの洗禮堂 Baptistery, Pisa (紀元一一五三年)

大理石造、重層の圓堂で（第百十二圖参照）、下層は外部に半柱が繞され半圓拱にて聯結せられて居る。その上に小なる雌柱に支へらるる二層の吹抜列拱がある。上層はゴシック時代の建築である。圓堂

る。ローマネスク式を示すものは其の下層であつて、

第百十三圖



サン・ミニアトの内部

の直徑は百二十九呎で、特種の美しい形を示して居る。

(四) フロレンスのサン・ミニアト S. Miniato, Florence

中央伊太利ローマネスクの最もよき例である。教會堂は本堂を拱柱にて三つの廊に分け、奥陣を一段高くつくつて（第百十三圖）其の下が玄室となつて居る。この教會堂を拱柱にて分ける設計は各部に穹窿を架する方法の濫觴と見做すことが出来、柱の長列又は列拱を有するバシリカ建築に對して明かに新らしい特色である。又金、緑、赤、青等の鮮な彩色を以て飾つた木造化粧屋根が著名である。

一三〇 北部伊太利

西洋建築史

ロンバルディアを中心とする部分で、建築材料としては主として煉瓦が用ひられ、所謂ロンバルディ式を表はし、ヴェニス及びラヴェンナは商業上東羅馬帝國と交通したためその建築にはビザンチン式を認むることが出来る。

教會堂は殆んど穹窿構造のバシリカ式で、側廊を二階とするものもある。外部は正面廣く平坦で、獅子の上に柱を立てた圓拱の車寄と圓華窓が特色を示して居る。鐘塔は獨立して建つものが多いが時には廻廊を以て本堂と聯絡せられて居る。一般にブランは四角で、ピラミッド形の屋根を頂いて居る。

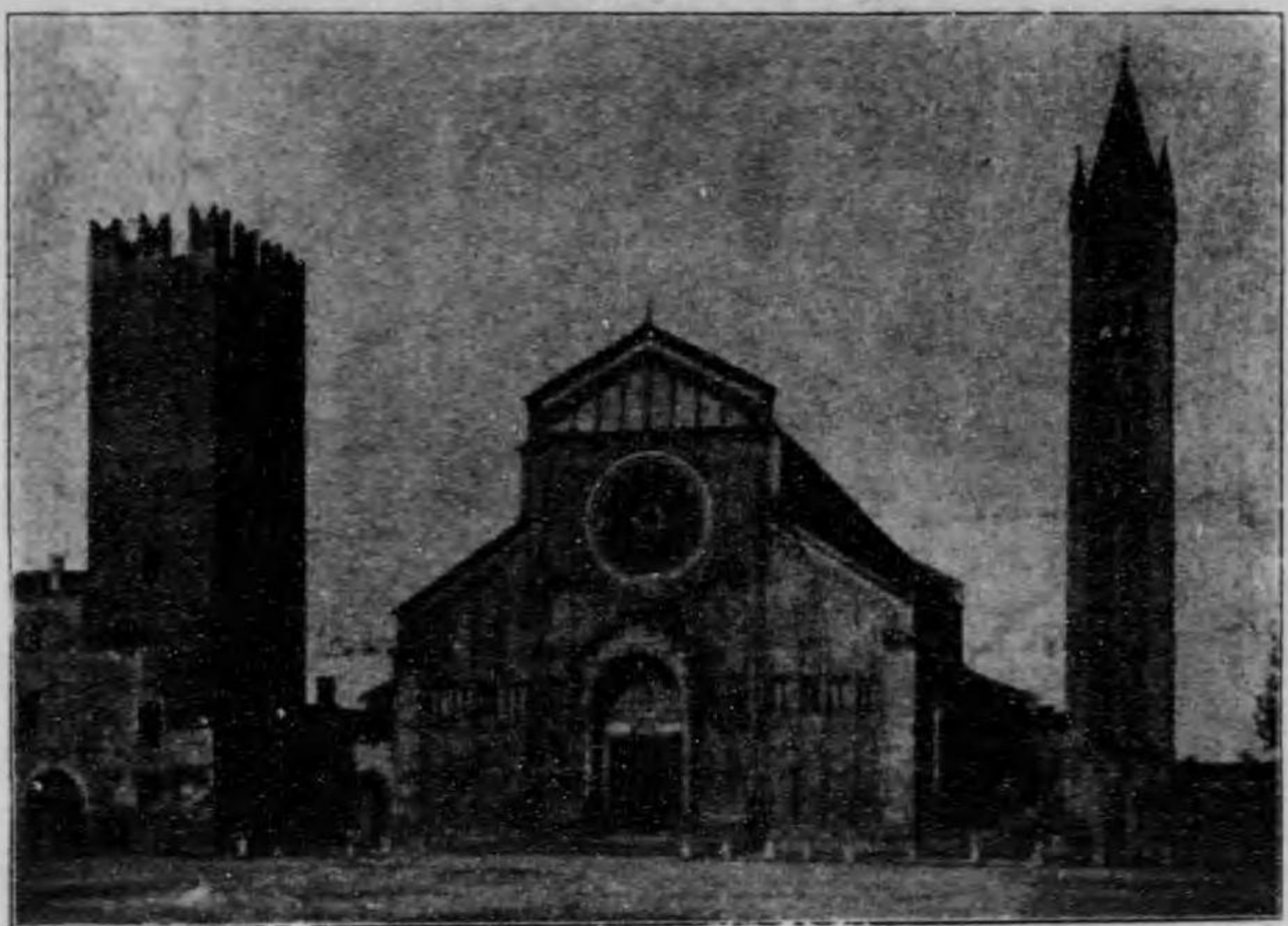
(一) ヴェローナの聖ゼノン S. Zenone, Verona (紀元一一二九年)

臺の勾配の下には、この地方の建築の特徴である、列拱を支へる持送が設けてある。西正面の大圓華窓(第百十四圖)及び戸口の前に張出して居る車寄も亦その特色で、車寄には蹲る獅子の脊上に柱が立つて拱を支へて居る。鐘塔の屋根はピラミッド形の代表的の例である。

(二) バゾニアの聖ミケレ S. Michele, Pavia (紀元一一八八年)

正面の盲列拱の裝飾、重層の側廊及び簇柱形の拱柱等があつて優れた實例である(第百十五圖)。

第百十四圖

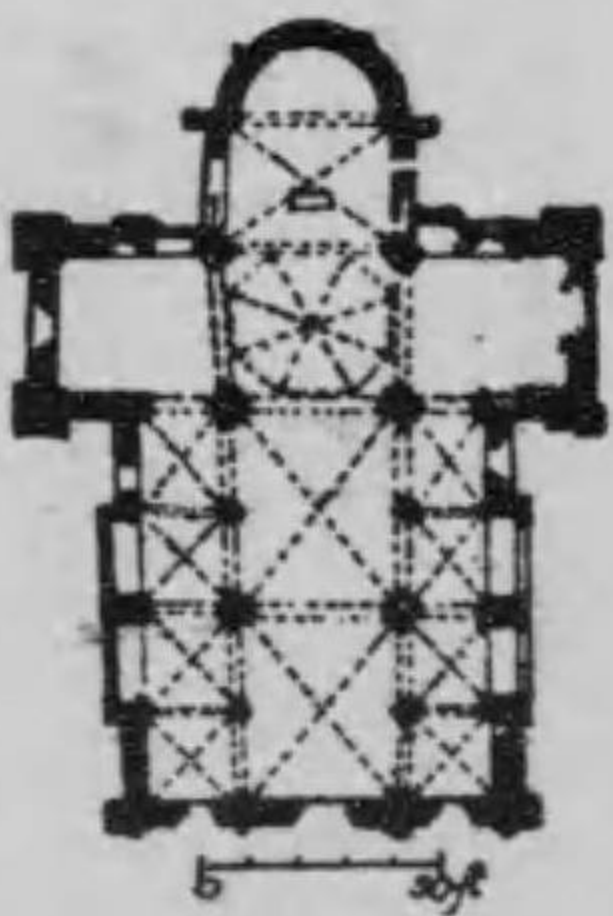


聖ゼノン(鐘塔を見よ)

一一二 南部伊太利及びシシリ

伊太利の南部よりもシシリ島に多くの參考とすべき建築が残つて居る。シシリ島は地中海の中央に、三角形の形狀をなして横は

第百十五圖



聖ミケレの平面圖

る小島で、幾多の政治的變化を受けた結果建築の上にもビザンチン、サラセン、ノルマン等の影響を窺ふことが出来る。

教會堂はビザンチン式の丸屋根又は極彩色

第一百十六圖



モントレーアール大寺

を施せる木造屋根を戴き、穹窿は殆んど用ひられなかつた。建物の外部は黒と淡色の石積で、内部は美麗なる色モザイク又は色大理石を以て化粧せられた。モザイクの應用は極めて巧みで此の時代に宮中にモザイクの養成所が組織せられた。

(一) バレルモのモンレアーレ大寺 *Monreale Cathedral, Palermo* (紀元一二七四年起)

第十二世紀の建築で、ビザンチン及びサラセンの影響を認めることが出来る。プラン(第百八圖参照)は羅馬バシリカに似て、コアイアは身廊よりも一段高く、身廊の柱はビザンチン式の柱頭を有し(第百十六圖)、壁は色モザイクにて飾られ、アラベスクの縁を取り、腰羽目には白大理石を張付けてある。木造化

粧屋根は複雑な意匠を施され色彩を用ひてサラセン式の裝飾が施してある。

(二) バレルモのカペラ・パラチナ *The Capella Palatina, Palermo* (紀元一二三二年)

王宮内に在る小禮拜堂で、天井は鐘乳飾を以て埋められ、サラセンの影響を示して居る。内部の柱はビザンチン風を帯び、壁面と共に金及び色モザイクにて鑲められて居る。

一三三 伊太利ローマネスクの特徴

教會堂の建築は初期基督教會堂の建築に比較して一層發達した。そのプランは袖廊が建て増され、チャンセルがバシリカよりも一層延長したため、十字形に最も近くなつた。又コアイアが高くつくられ、その下に玄室が設けられて、聖徒及び殉教者はここに埋葬せられた。廻廊、鐘塔が設けられた事も其特色である。尙ほ著しき特色は圓華窓(輪窓)が正面の出入口の上につくられた事である。側廊の屋根の下には飛控壁が使用せられ、又建物に盲列拱が裝飾として用ひられた。

彫刻は北部伊太利に於ては一般に粗雑で、奇人怪獸、狩獵等が取り扱はれたに反し、中央伊太利に於ては優雅にして多く古典的裝飾の模寫であつた。南部伊太利に於て見るべきものとしては青銅製の扉と精巧なるモザイク裝飾を擧げることが出来る。

(二) 佛蘭西ローマネスク French Romanesque

二三〇 佛蘭西ローマネスク

佛蘭西にも亦ローマネスク建築の珍らしい例が多い。その主なるものは宗教建築で、大體に於てバシリカ式であるが外観には意匠の卓越したものが少くない。

佛蘭西は建築材料特に石材が豊富で、カン産の石材はノルマンディー一圓に用ひられ又英國へも輸出せられた。又オーヴェルニュの火山地方に於ては、色石の象嵌が壁に施された。

佛蘭西の氣候は北は英國の南方の氣候に似て稍寒冷、西は大西洋に面して溫暖、南は半熱帯で殆んど亞弗利加に似て居る。これら三様の氣候が建築の形式の上に或る影響を及ぼしたことは勿論である。

宗教は基督教の傳播と共に或る一派は教會堂建築に努力し、専ら壯大嚴肅の効果を收むるに つとめ、特殊の穹窿法を試みた。

佛蘭西ローマネスクは、建築の形式の上よりロアー河を境としてこれを南北の二部に分ける ことが出来る。南部佛蘭西は伊太利に接近して居る爲め多く古典系統の感化を受け、一般に正 面に裝飾の多い玄關を構へ、優美な廻廊を設ける點に特色を示して居る。又北部佛蘭西は英國

に近きためその影響を受けてノルマン建築に類似して居る。即ち内部は拱柱と柱とが密接に配 置せられて、大なる穹窿の重い屋根を支へて居る。此の様式はやがてゴシック建築に進む連鎖 を示すもので、實際ゴシック建築の發達は北部佛蘭西より始まり、南方及び各國に傳はつたの で、此間の變遷状態を知るには極めて興味深いものである。

一二四 南部佛蘭西

南部佛蘭西はアクタニア、アーヴェルニュ、プロバンス、バーガンヂの諸州に大別する事が 出来る。更らに夫等の建築が地方的に特色を有する事は勿論で、例へば火山地帯なるオーヴェ ルニュに於ては、建築は種々の色の熔岩で造つた象嵌裝飾の爲に著しく特色を發揮して居る。

(一) ベリグオーの聖フロント S. Front, Périgueux. (紀元一一二〇年)

アクイタニアに在る。プラン(第八八圖参照)は希臘十字形で、ヴェニスにサン・マルコに酷 似して居る。佛蘭西に於ける丸屋根造教會堂の根源で、附屬の石造鐘塔(第十七圖)は、塔身 が方形で、周圍に柱の環列を有し、楕圓形丸屋根を戴いて居る。

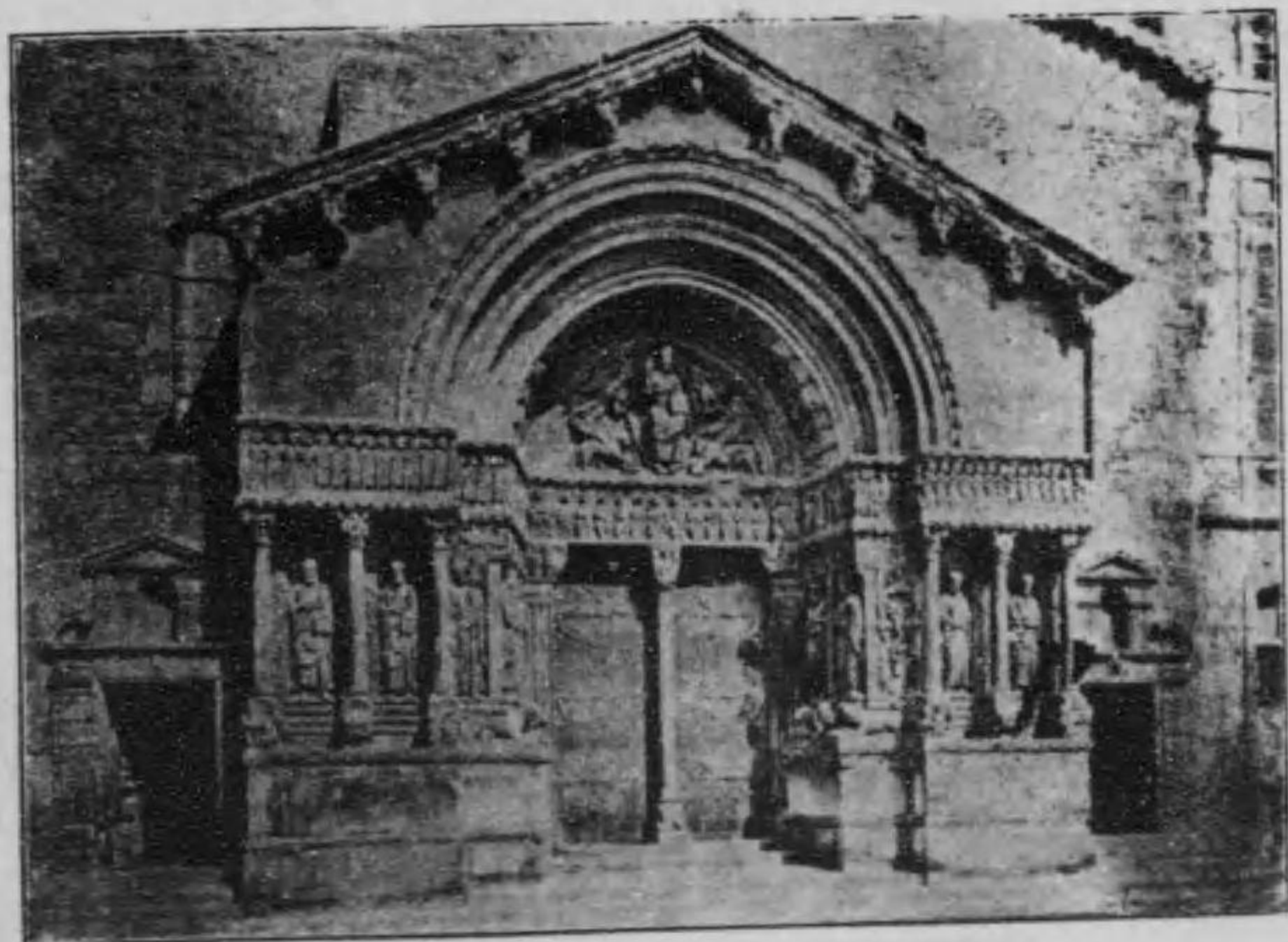
(二) アングーレム大寺 Angoulême Cathedral (紀元一一三〇年)

アクイタニアに在る。プラン(第八八圖参照)は羅旬十字形で、尖頭拱に支へらるる圓蓋を戴

第百十七圖 聖フロント



第百十八圖 聖トロフィム



き、身廊は四個の石造丸屋根に掩はれて居る。

(三) イスワールの教會堂 Church at Issorie.

オーヴェルニエに在る。プランは羅向十字形で、色の異なる熔岩で象嵌裝飾が施してある。

(四) アールの聖トロフィム St. Trophime, Arles.

プロバンスに在る。特に車寄(第百十八圖)は華麗で有名である。

(五) クルニの大アベ・チャーチ Abbey-Church of Cluny(紀元一〇八九年—一二三一年)

バーガンヂに在る。佛國中最長の建築で(第百八圖参照)、もと身廊の左右に二側の側廊と五口の禮拜所を有するシユヅエがあつた。

二二五 北部佛蘭西

北部佛蘭西はノルマンヂ、中部佛蘭西、ブリッタニに大別することが出来る。

(一) カンのアベ・オ・ゾンム The Abbatte-aux-Homes, Caen.

ノルマンヂに在る。プランはスパイレス(獨逸)のローマネスク教會堂に倣つたものの如く、

始め東端は後陣造であつたが後に特色あるシユヅエに改造せられた。其西面はゴシック式正面

の原型となつたもので、二基の方塔が設けられ、八角尖塔形の屋根の四隅には小尖塔がある。

身廊の二間を併せて、方形に似た一つの穹窿とした點は特に注意すべきである。(第百十九圖)

(二) 巴里附近の聖デニのアベ、The Abbey of S. Denis.

中部佛蘭西に在る。紀元一一四四年に建設せられたもので、コアイアと西正面とは當時のま

までであるが、兩者の間の身廊は第十

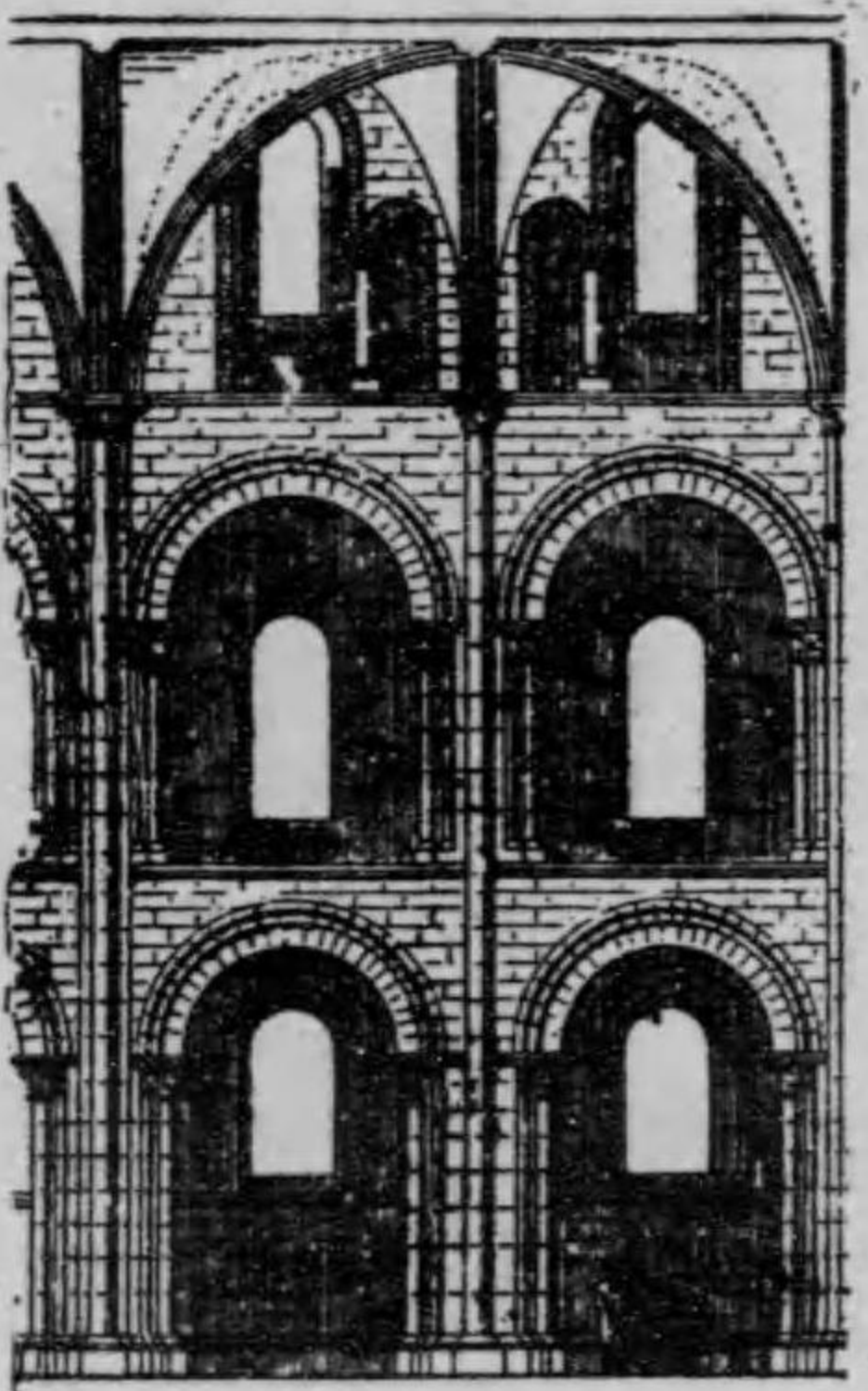
四世紀の建造にかかる。

一二六 佛蘭西ローマネスク

の特色

南部佛蘭西に於ては内部に控壁を、北部佛蘭西に於ては外部に控壁をつくり、壁は一般に大きく野石を

第百十九圖



アベ・オ・デニ

積んだ上を石の化粧張とした。窓は南部佛蘭西に於ては狭きもので十分採光することが出来たが、北部佛蘭西に於ては多くの窓を密集して配置した。屋根は南部佛蘭西に於ては身廊の筒形穹窿が、二階建の側廊の半筒形穹窿に支へられたため、勢ひクリアストリを廢止しなければならなかつたが(第百二十圖)、北部佛蘭西に於ては、身廊に助骨造の交叉穹窿を架し、側廊の屋

根に隠した控壁の拱を以てその荷重を受けた爲めクリアストリの高さを高くすることが出来た。これはゴシック建築に用ひられた飛控壁に一步近づいた方法である。又北部佛蘭西に於ては大窓に用ゆる嵌色硝子が漸次發達した。

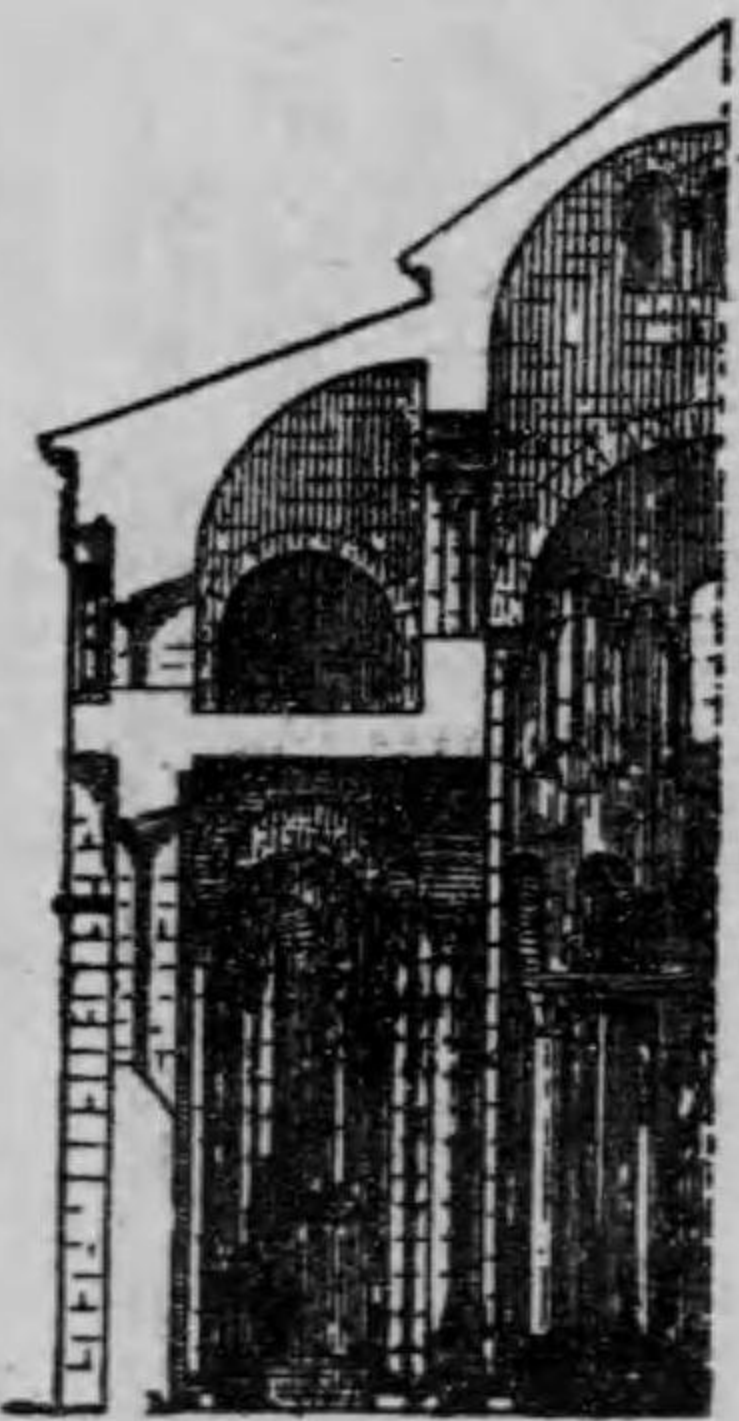
Zained glass

(三) 獨逸ローマネスク German Romanesque

一二七 獨逸ローマネスク

ライン河沿岸及び南部の諸都市は何れも羅馬領時代の建設にかかり、基督教が最初に根據を据えた地であるため、その建築は伊太利殊に北部伊太利ローマネスクと酷

第百二十圖



クレルモン・フェランのノートルダム・デュ・ボルトの断面圖

似して居る。別にライン地方に完全に發達したローマネスク建築がないでもないが、其の様式は佛蘭西に比較すれば、地方的の差別をなす事が極めて少ない。

ライン河流域には石材の産出が多いので、早くよりこの材料を以て穹窿造の教會堂建築が起つた。北獨逸に於ては砂地のため、石材の代りに煉瓦が用ひられた。従つて其の地方の建築は

多少異つて居る。

建築の中重要なものは教會堂である。プランの特色は東と西とに後陣を備へた點で、佛蘭西に見る如き、西の大出入口は存在しない。以下實例について述べて見よう。

(一) ウォルムス大寺 Worms Cathedral (紀元一一一〇年—一二〇〇年)

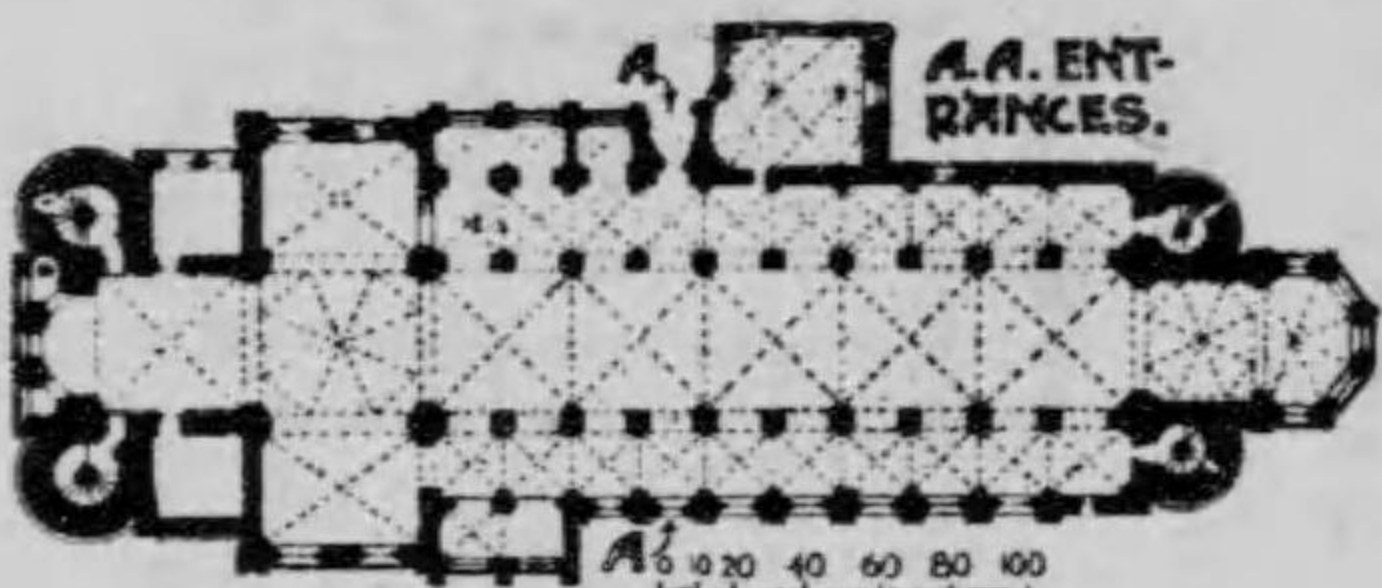
身廊の穹窿の一區は側廊の穹窿の二區に相當し(第二百一圖)、二つとも交叉穹窿である。

圓形の双塔が東と西の後陣に附屬する外、身廊と袖廊と交叉部には低い八角塔がかかり、尖頭屋根を戴いて居る。出入口は側方に設けられ、正面には半圓頭の窓が切つてある。この時代の代表的寺院の一つである(第二百二圖)。

(二) コロンの諸聖徒の教會堂 The Church of the Apostles, Cologne. (紀元一二二〇年—一二五〇年)

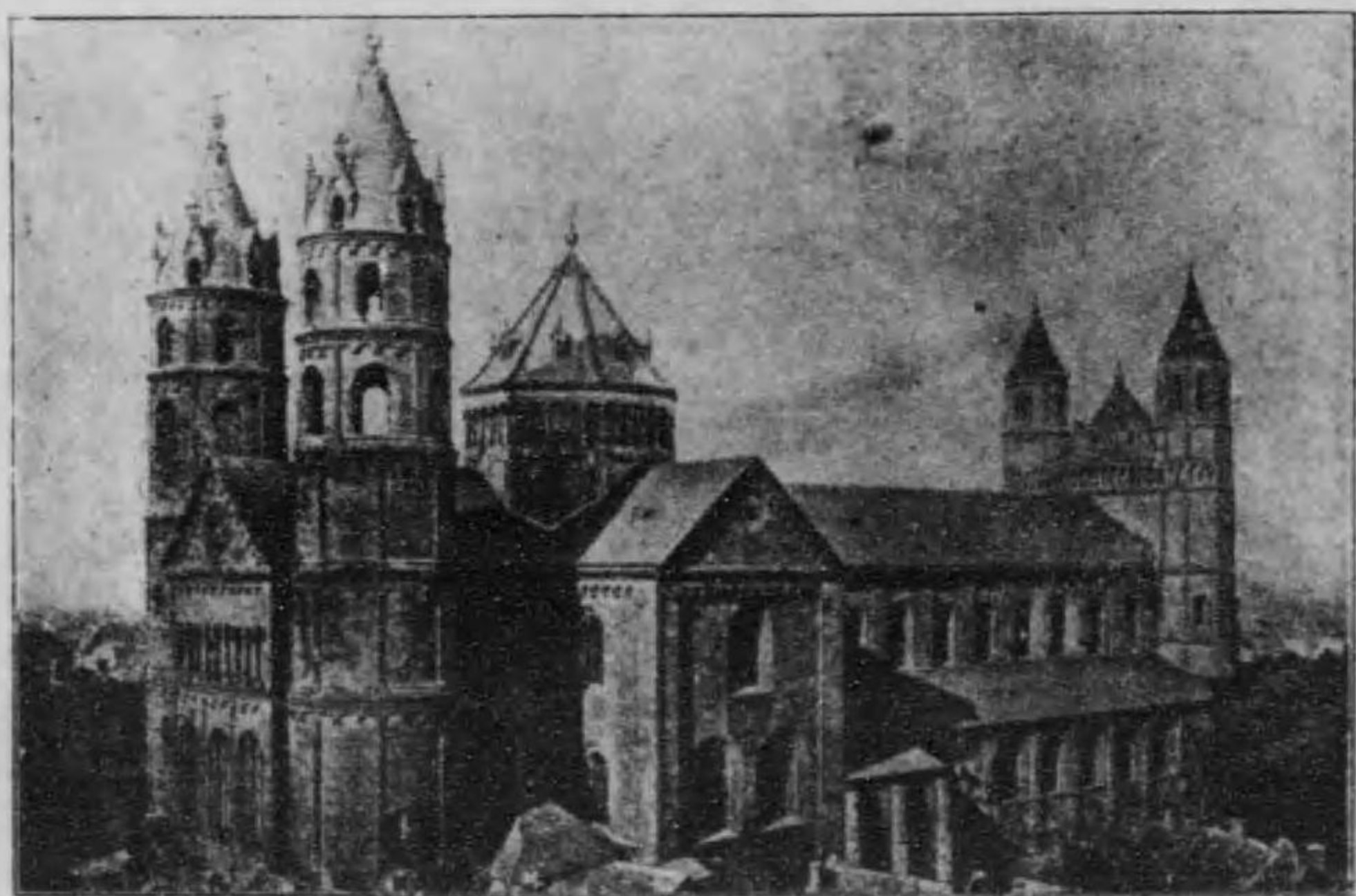
プラン(第二百三圖)は間口の廣い身廊と身廊の半分の間口の側廊とから成り、東の部分には三箇所の後陣があつて、夫々中央の廣間の三面向つて口を開いて居る。この中央の廣間の上には低い八角塔がつくれられ、この部分の重要なことが一見して分るやうになつて居る。外部の屋根の軒下にはその特徴とすべき小拱が並んで居る(第二百四圖)。

第二百一圖



ウォルムス大寺の平面圖

第二百二圖



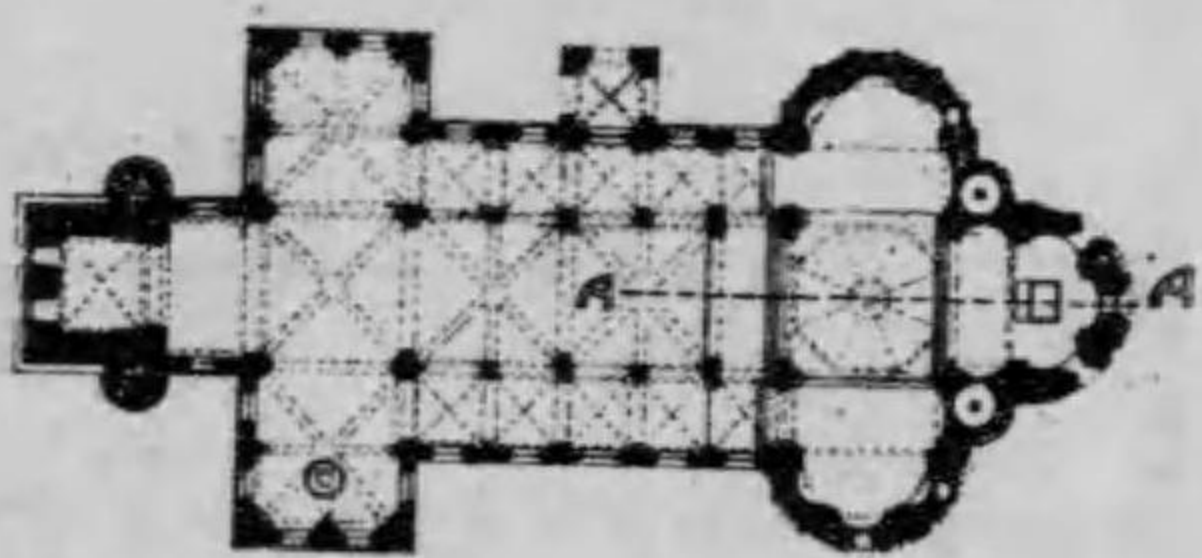
ウォルムス大寺



(三) ルベック大寺 Imbeck Cathedral (紀元一一七三年)

北獨逸特有の煉瓦造の建築である。コアイアと側廊とは紀元一三三五年の増築である。

第二百二十三圖



コロンの諸聖徒の教會堂の平面圖

第二百二十四圖 コロンの諸聖徒の教會堂



(四) ヌレムベルグの二階建教會堂

獨逸には城砦に附屬する二階建の教會堂がある。ヌレムベルグの外ランツベルグ、シュタインフルト等に其例が残つて居る。是等の教會堂は上階が君公及び侍臣の禮拜所で、下階は從僕專

用である。

一二八 獨逸ローマネスクの特色

一般建築の特色は多角形の圓蓋を中心として、多くの圓形及び八角形の小塔が集つて居ることである。軒下には多く列拱造の廊下又は裝飾を設けて賑かな外觀を與へて居る。戸口と柱頭とは最も立派に裝飾せらるるが常で、塔は方形、圓形、八角形等の種々の形のもので、普通東端の後陣の兩側に二基と、西端に二基つくられ、夫々廊下に依て聯絡せられて居る。建築は一般にその輪郭が賑かで、變化に富み、塔屋根と奇形の尖塔とは獨逸ローマネスク建築の特徴である。

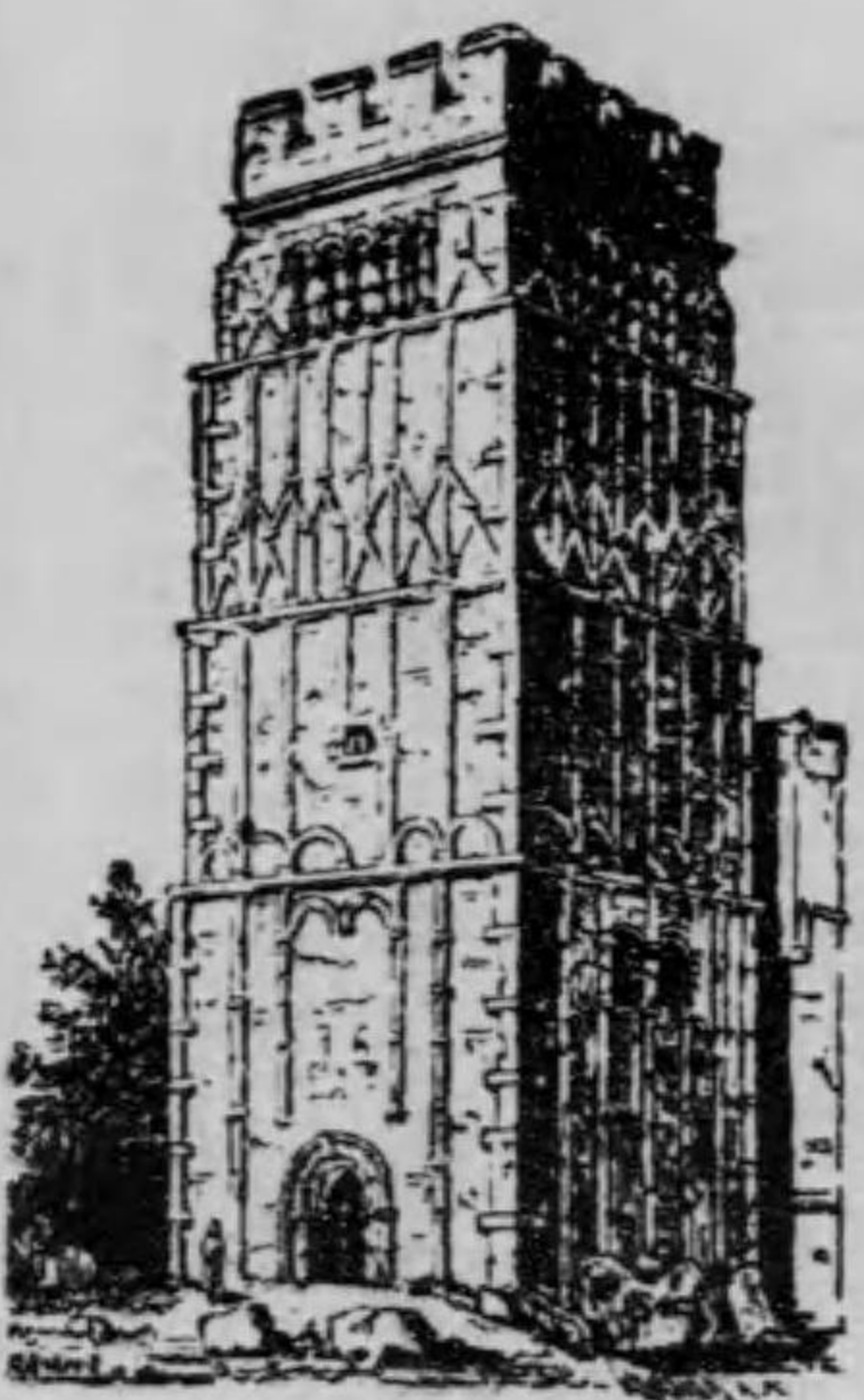
(四) 英吉利ローマネスク English Romanesque (Norman Architecture)

一二九 英吉利ローマネスク

英吉利は歐洲大陸の對岸に位する島國にして、北方に邊在した爲め、建築は獨特の發達を遂げ、他國の影響を受くるは常に約一世紀後であつた。然しながら古羅馬時代にはその領土の一部となり、又佛蘭西のノルマンデーと接近した爲め、尠らずその影響を受けた。英吉利にはゴシック建築の優秀なる實例は極めて多いが、ローマネスク及び其の前期の建築は比較的少い。

いま羅馬時代以後ゴシック建築に至るまでの英吉利の建築を次の二期に分けて、簡単に述べる  
いふとする。

- (一) アングロ・サクソン式 Anglo Saxon style
- (二) ノルマン式 Norman style



アールズ・バートン教會堂の塔

教會堂の塔(第百二十五圖)がある。これは石造ではあるが木造建築の面影を留めた塔で、控壁はない。

一三一 アングロ・サクソン式の特徴

一三〇 アングロ・サクソン式

建築(紀元四四九年—一〇六六年)

主として木造建築であつた爲め、當時の遺跡は極めて稀である。従て建築物の特色を考察することも亦困難である。實例としてはアールズ・バートン Earl's Barton Church

教會堂のプランには二通りある。(一)は單に長方形の二間として設計せられたもので、小拱を以て其の間が仕切られて居る。一方の間のチャンセルはその尾端が四角形となり、身廊より低く且つ狭い。(二)は羅馬のバシリカに似たものである。壁體は多く野石積にてつくられ、開口は上部が圓形若くは合掌形である。線型の種類は極めて少く、虛面又は饅頭線形に限られて居る。

一三二 ノルマン式建築(紀元一〇六六年—一一八九年)

ノルマン式は又英吉利ローマネスクとも稱せられ、ウイリアム一世の時、ノルマンチーより移されたものである。實例としてはイフレイ教會堂(第百二十六圖)がある。

第百二十六圖



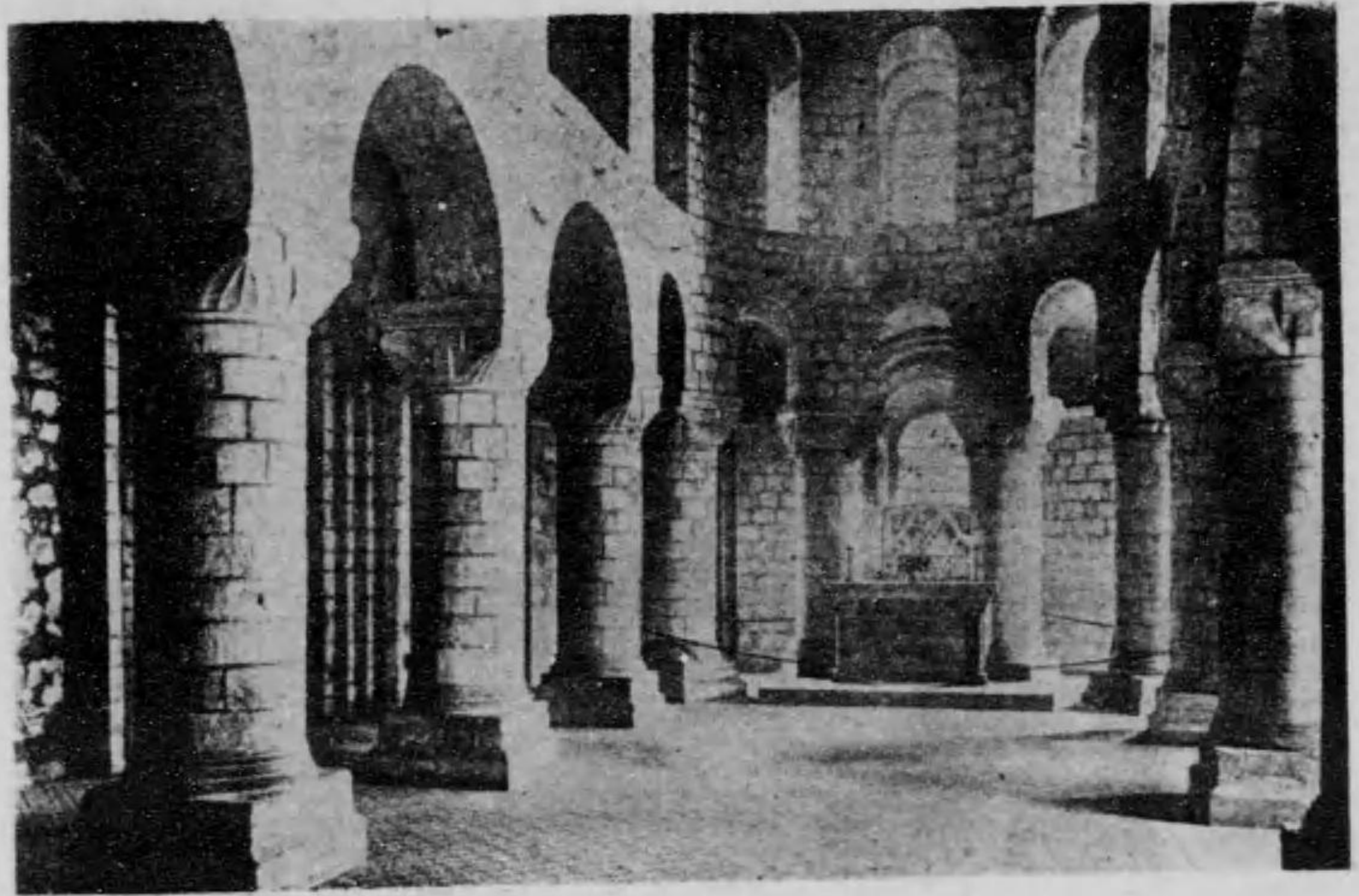
イフレイ教會堂

ゴシック時代の修繕が加つて居るが、其の正面は此の時代の特色を表はして居る。

一三三 ノルマン式の特徴

プランは一般に身廊長く、袖廊が加へられ、この二つの交叉する部分には普通、塔がつくら

第百二十七圖



倫敦塔内の聖ジョン堂

一四八

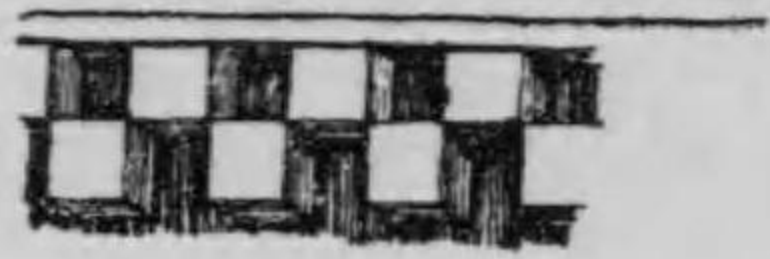
れて居る。壁體は頗る厚く、窓は細長く、普通半圓頭で、深く斜に入込んで居る。出入口も亦深く入込み、小柱を立て半圓拱を架し、山形及び嘴頭飾にて盛んに裝飾せられて居る。柱は短大にて（第百二十七圖）柱身は圓形、柱頭は方圓形及び其の變形で、屢々羅馬建築の遺影と見るべきものがある。線形（第百二十八圖）は其の種類多く、山形、嘴頭飾、千鳥線形、釘頭飾、等で特に山形が最も多く使用せられて居る。

一般に其の建築の特色として、手法の大膽と構造の頑丈とを擧げることが出来る。

一三四 ローマネスク穹窿造法 Romanesque Vaulting

第十一世紀頃には交叉半圓筒又は交叉上心半圓筒が用ひられたが、第十二世紀頃に至り稜肋式穹窿造法が之に代るやうになつた。これは肋骨形を有する交叉穹窿（第百二十九圖）で、先づ肋骨の輪郭を設計した後、穹窿表面の形を之に適合せしめて造る方法である。これを最初に穹窿

第百二十八圖



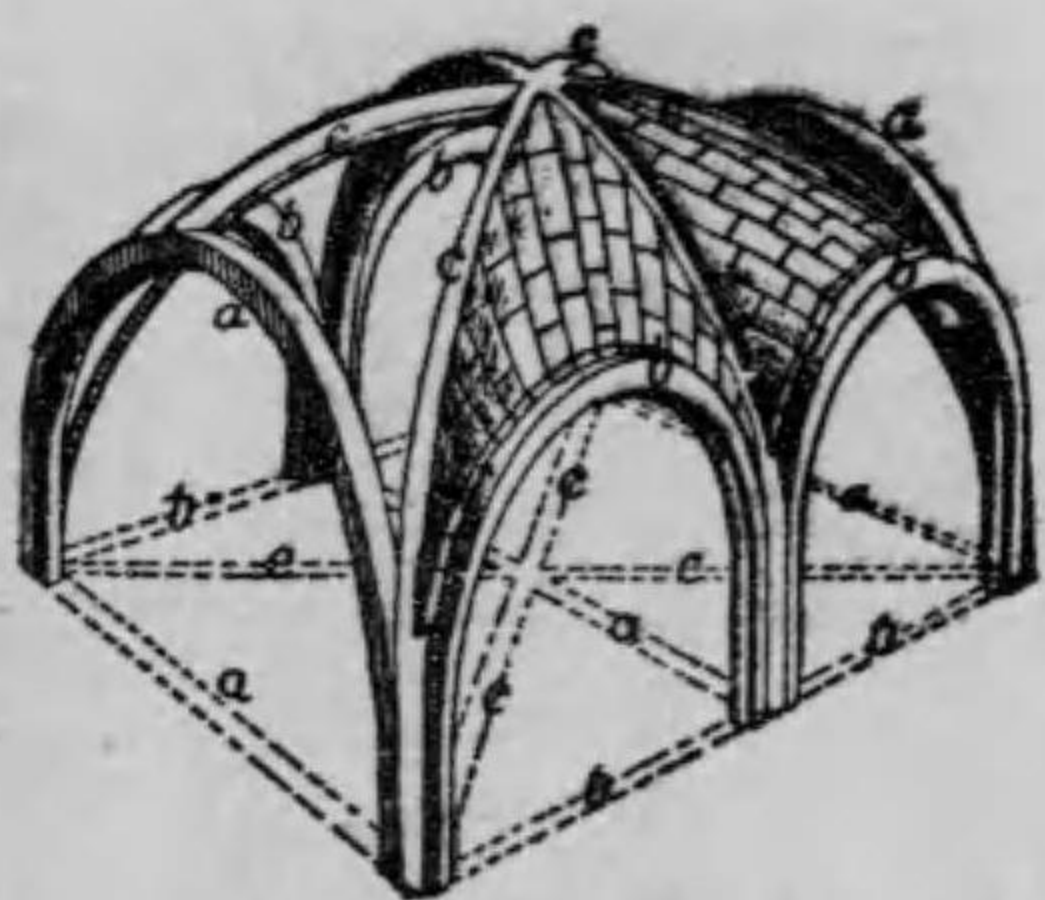
經 形

表面を定めて、穹窿の輪郭は其の自然の結果に任かす羅馬の方法と比較すれば、原理が全然反對である。しかも交叉する穹窿の張間の差から一方は頭を延ばして尖頭拱の形を取るに至り、これらが後に述べるゴシック式の尖頭形の起りとも考へられて居る。

一三五 ローマネスク建築の特色

以上各國に於けるローマネスク建築の大體を述べたから、次に全體としてのローマネスク建築の特色を述べて見よう。

第二百二十九圖



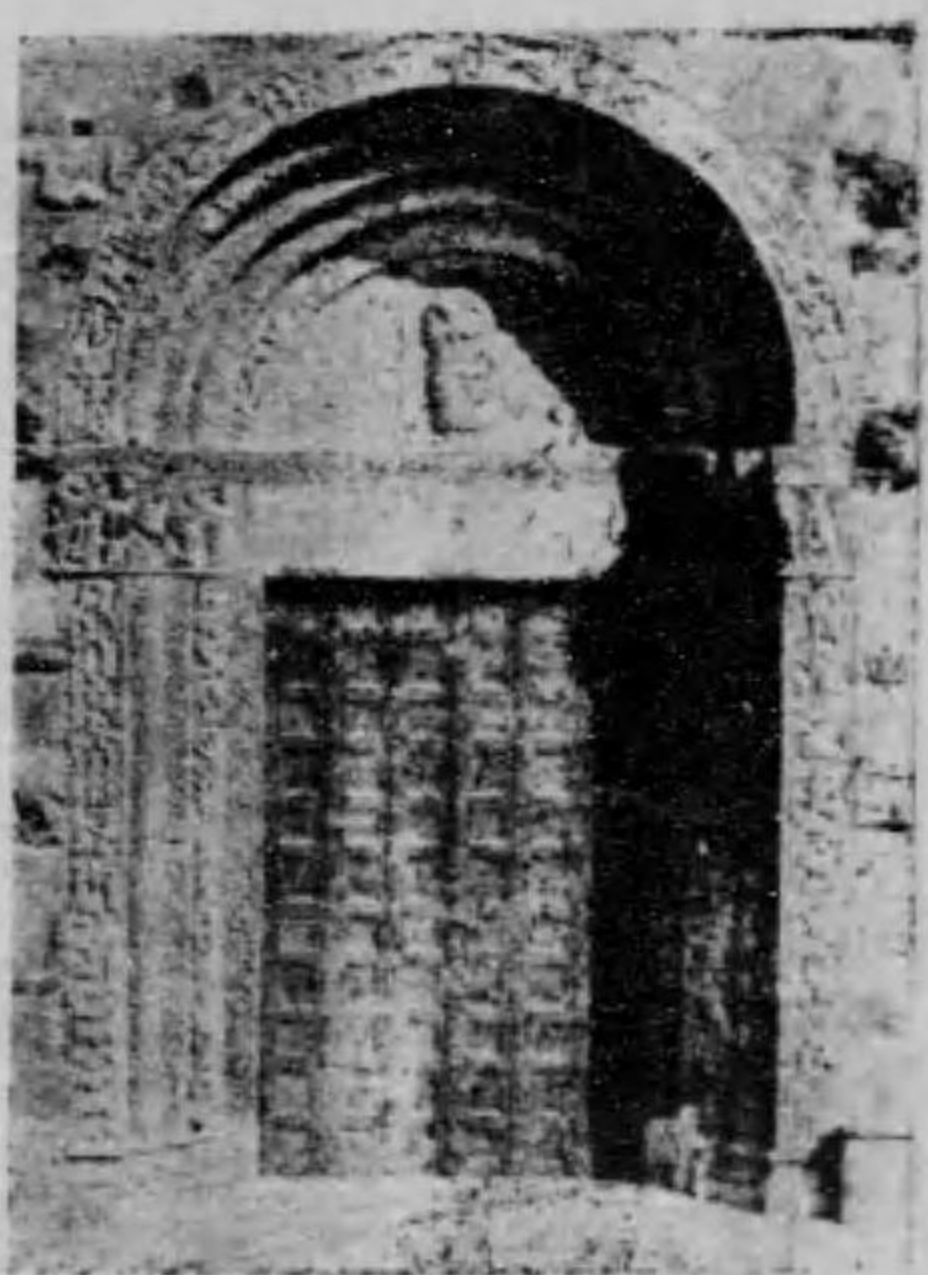
a, a, Transverse ribs (doubleaux); b, b, Wall-ribs (formerets); c, c, Groin-ribs (diagonaux).

稜肋式穹窿

(一) ブラン 教會堂のブランは初期基督教會堂のプランに更らに一步を進めたもので、一層の發達を遂げた。即ち羅馬のバシリカに、袖廊が加へられ、チャンセルが一層東に延長したため羅旬十字形となり、コアイアーは階段を設けて著しく高くなり、その下に玄室が造られ、尙ほ鐘塔を附屬せしめ、廻廊が設けられて居る。

(二) 壁體 壁體は一般に粗造で厚く造られて居る。これは穹窿又は圓屋根を受ける必要から起つたもので、尙ほ出の少ない控壁を壁面より積み出して、壁體を強めて居る。この控壁は上部の軒近くに於て水平の線形又は壁より積み出した持出棚の上に立つ半圓列拱に依

第三百十圖



パヴィアの聖ミケレの入口

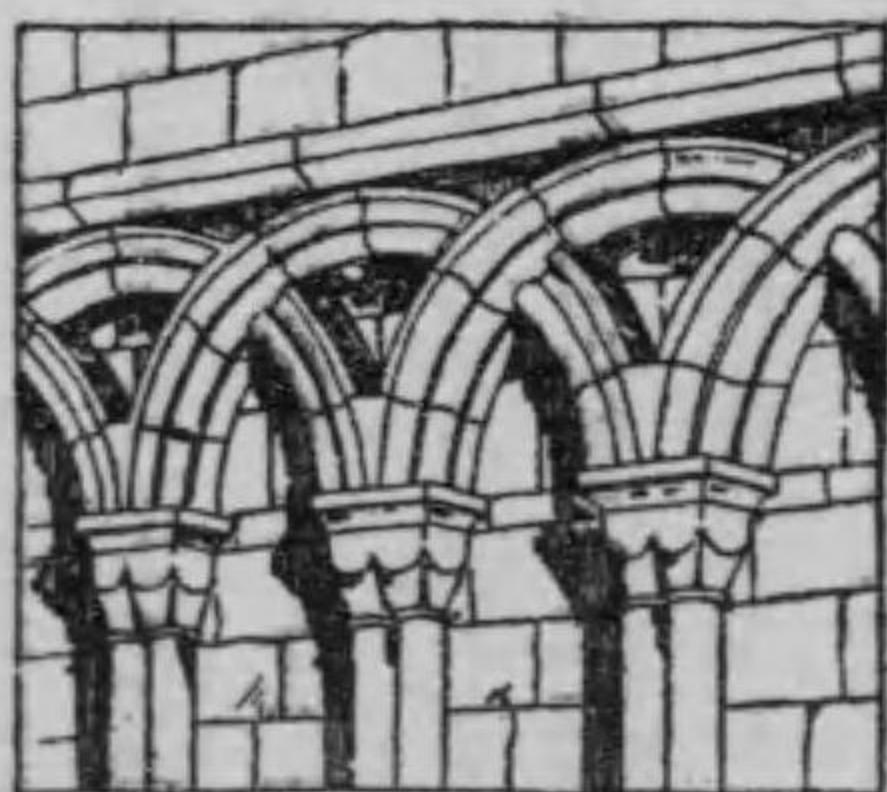
りてその上部を互に聯結せられて居る。開口はその兩側を段形に斜に入れ込み、圓柱を立て、拱も同心圓の輪層に造られて居る(第三百十圖)。建物の上部には半圓化粧列拱又は交叉盲列拱(第三百十一圖)が裝飾として用ひられ、尙ほ西正面の出入口の上には圓華窓(輪窓)がつくられて居る。

(三) 屋根 一般に穹窿が用ひられて居るが、中央の身廊には猶ほ往々木造屋根が用ひられて居る。穹窿造屋根の荷重を受けるために、側廊の屋根の下に飛控壁が使用せられて居る。

(四) 柱 柱は一般に太く短く柱頭には(イ)コリンス式若くはアイオニア式、(ロ)ビザンチン式の影響を受けたもの(ハ)クッション形(第三百十

西洋建築史 Cushion Capital 第三百十圖)

第三百十一圖



交叉列拱

二圖)にて下部の四隅が丸面となるもの等がある。柱身には胡麻殻袂が垂直或は螺旋形或は格子形に造られ、又は全柱身が一面に彫刻裝飾を以て蔽はるるもの等がある。礎盤は一般に古典式の形であるが、又屢々アチツク礎盤が四角の臺石の上に用ひられ臺石の四隅に花形又は獸類の形を彫刻して居るものがある。

(五) 線形 線形は多く精巧に彫刻せられ、種々の形がある。例へば山形、嘴頭飾、等で主として幾何學的模様が用ひられて居る。

(六) 裝飾模様 彫刻及び裝飾模様は植物、動物並に怪獸より多く意匠を取つたものである。建物の内部には普通モザイクよりもフレスコ繪が用ひられ、床には大理石が幾何學的模様に張られて居る。

一三六 僧房建築 Monastery

ローマネスク建築は、以上述べた如く教會堂が主要なる建築であるが、尙ほ此の外に僧房建築が起つて居る。これは次に述べるゴシック建築に至つて完成して居るが極めて重要な建築物である。

僧房は寺院に附屬してつくられ、僧侶の修道及び學問をなすところで、兼ねて寄宿舎の性質

を備へて居る。これは寺院の廻廊より發達したもので、僧房に屬する主なる室は參事院室、事務室、仕事室、共同寢室、食堂、厨房、倉庫等である。

この外に村落又は農家の修道場がある。これも一種の僧房建築である。

第十一 ゴシック建築 Gothic Architecture in Europe

一三七 概説

ゴシック建築は、第十二世紀の終りに佛蘭西の北部に起り、次いで英國に入り、獨逸、伊太利等に波及した宗教建築で、尖拱を盛んに使用した、宏壯、華麗の建築様式である。その様式

は國々に依り少からず異り各特質を有するので、以下各々に就いてその大體を述べることにする。(第三百三十三圖)

(一) 英吉利ゴシック English Gothic

一三八 英吉利ゴシック

英吉利ゴシックは更らに次の三期に分つことが出來

第三百三十二圖



柱頭



MEDIAEVAL EUROPE  
13<sup>TH</sup> CENTURY

中世期のヨーロッパ

西洋建築史

一五四

る。

(一) 古英期 Early English period  
(紀元一一八九年—一三〇七年)

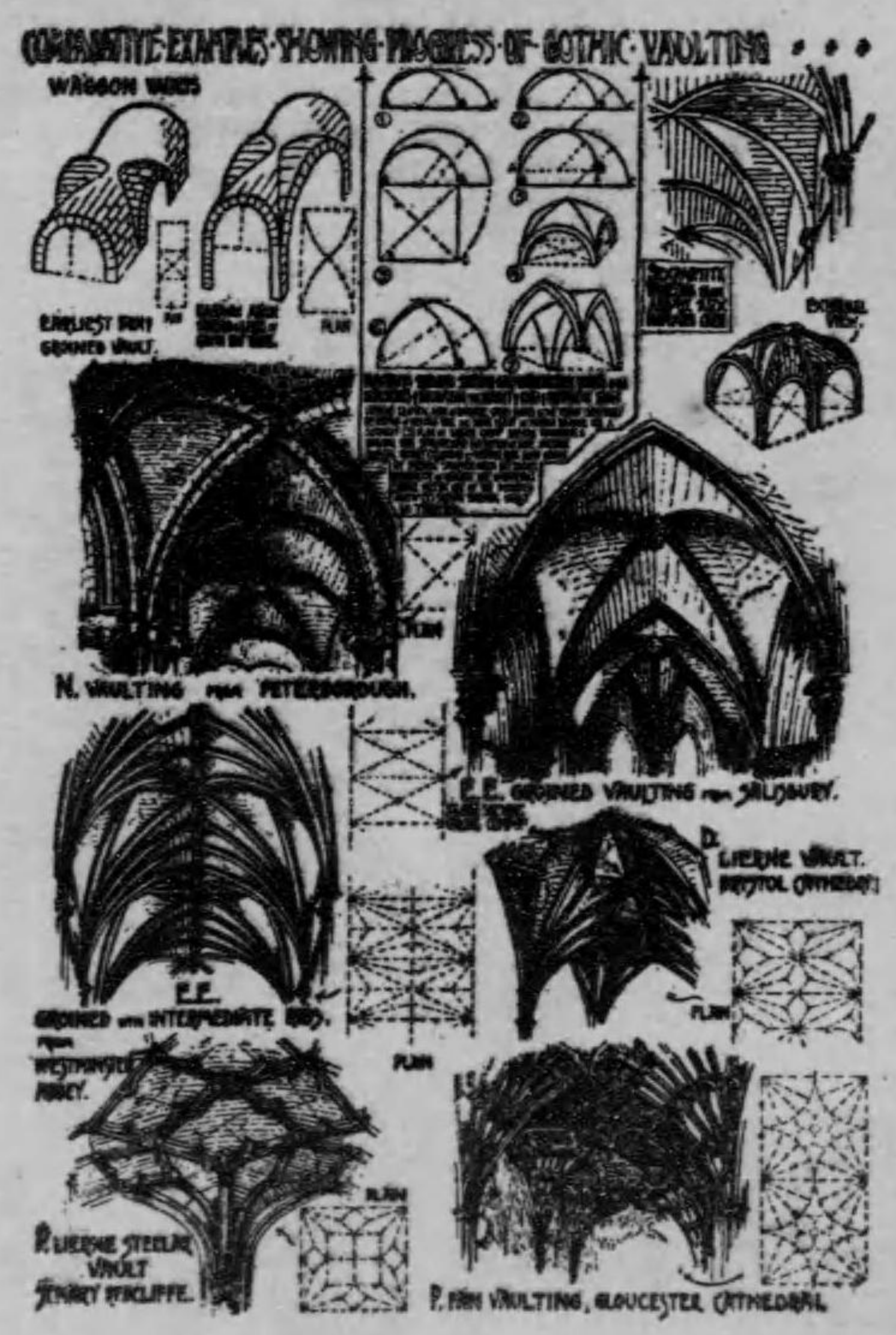
(二) 盛飾期 Decorated period (紀元一三〇七年—一三七七年)

(三) 垂直期 Perpendicular period (紀元一三七七年—一五五二年)

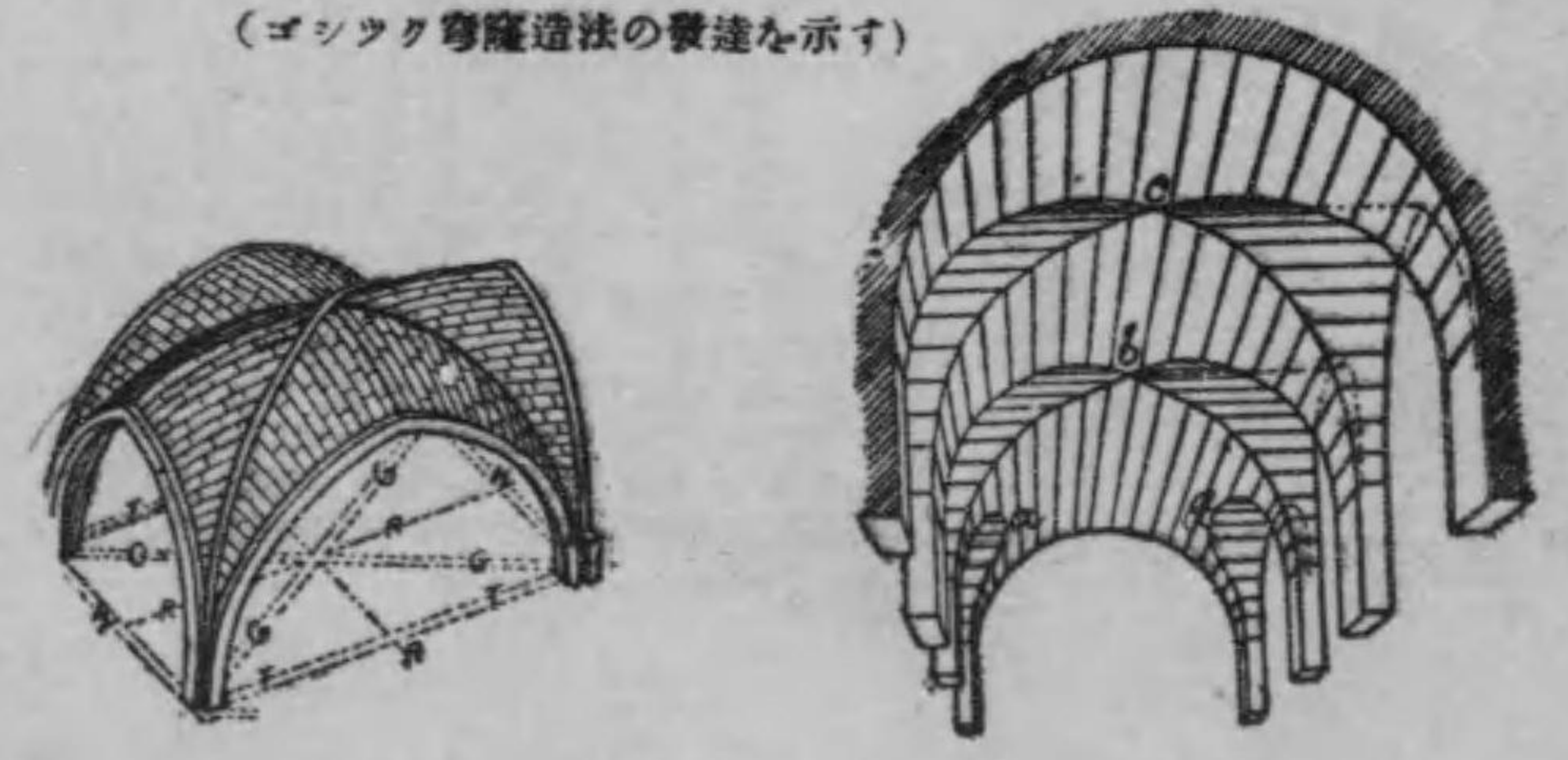
一三九 古英期に於ける特色

この時代の建築は一般に剛健にして、その形は簡單である。

プランはノルマン式と殆んど大差ないが、穹窿造法が進歩して(第百三十四圖)尖頭拱が完成してより後は、以前正方形であつた身廊穹窿區が長方形に變つて居



(ゴシック穹窿造法の發達を示す)



る。

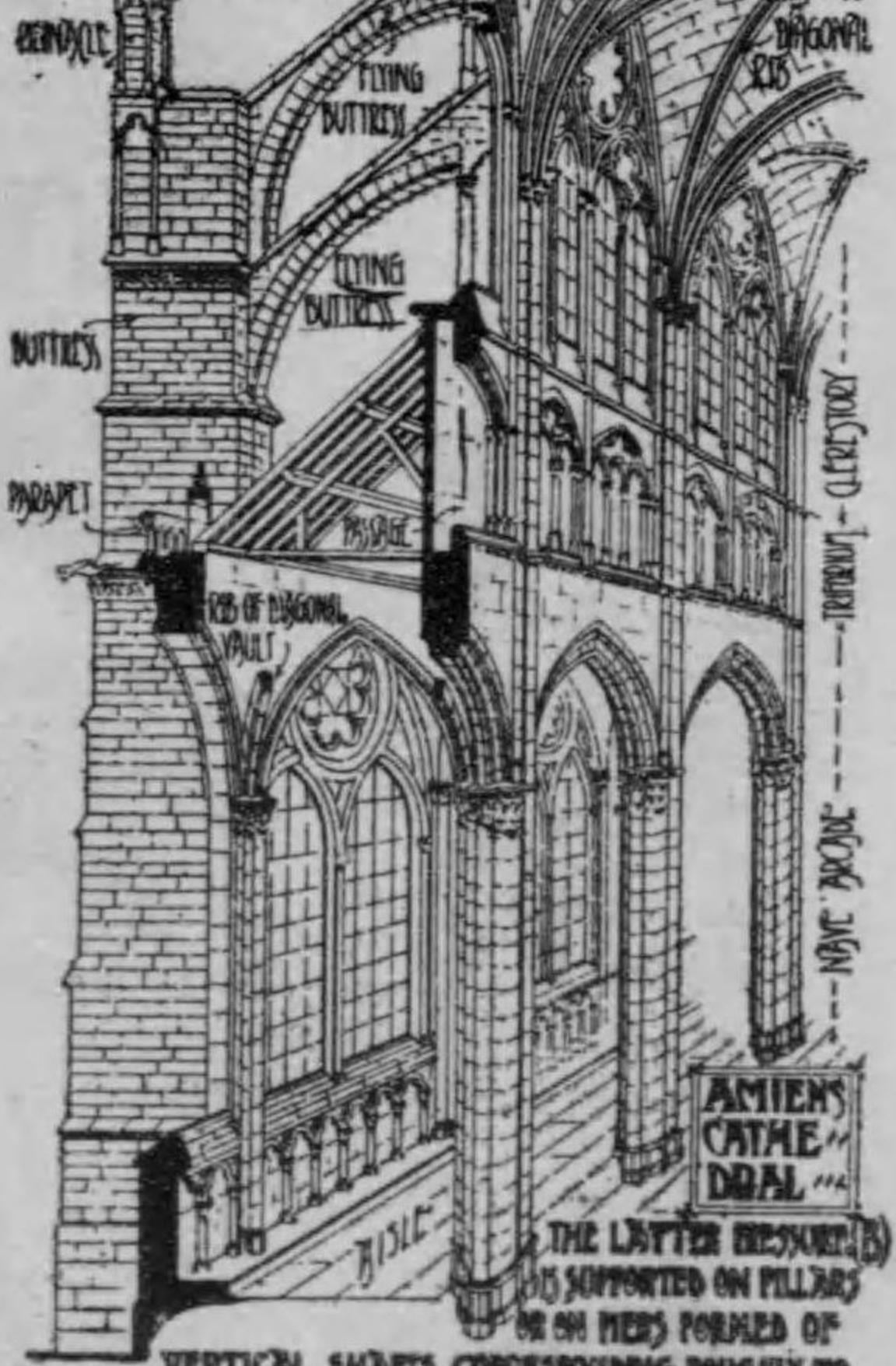
壁體はノルマン式の如く依然として厚く造られて居るが、切石積が多く使用せられ、屋根及び穹窿の荷重を控壁に集中せしむる傾向が起

西洋建築史

一五

### PRINCIPLES OF GOTHAIC

THE CONSTRUCTIVE PRINCIPLES OF A GOTHAIC CATHEDRAL CONSIST IN THE EMPLOYMENT OF POINTED CROSS VAULTS OF STONE. THESE VAULTS ARE FORMED ON A SKELETON FRAMEWORK OF IRON, WHOSE FUNCTION IS TO COLLECT THE PRESSURES OF THE VAULT AND CONCENTRATE THEM ON PIERS OR LEGS. THE PRESSURES ARE OF TWO KINDS (A) LATERAL, OWING TO THE THRUST OF THE ARCH, AND (B) VERTICAL, OWING TO THE WEIGHT OF THE ARCHES.



THE LATTER PRESSURE IS SUPPORTED ON PILLARS OR ON PIERS FORMED OF VERTICAL SHAFTS CORRESPONDING ROUGHLY TO THE VAULT RIBS. THE LATERAL PRESSURES ARE LIKEWISE COLLECTED OVER THE PIERS, AND ARE COUNTERACTED BY ARCHES (FILING BUTTRESSES) LEANING AGAINST THE NAIVE WALL AND SPRINGING FROM PASSIVE BUTTRESSES WEIGHTED BY PINNACLES, PLACED SOME DISTANCE FROM THE BUILDING.

つて居る。控壁はノルマン式に比較して一層顯著となり、壁面よりの出は略、幅と同じで、飛控壁が始めて使用せられて居る。然し其の使用が一般的になつたのは尙ほ後である。(第百三十五圖) (第百三十六圖)

拱(第百三十七圖)は圓形より尖頭形に變化し、

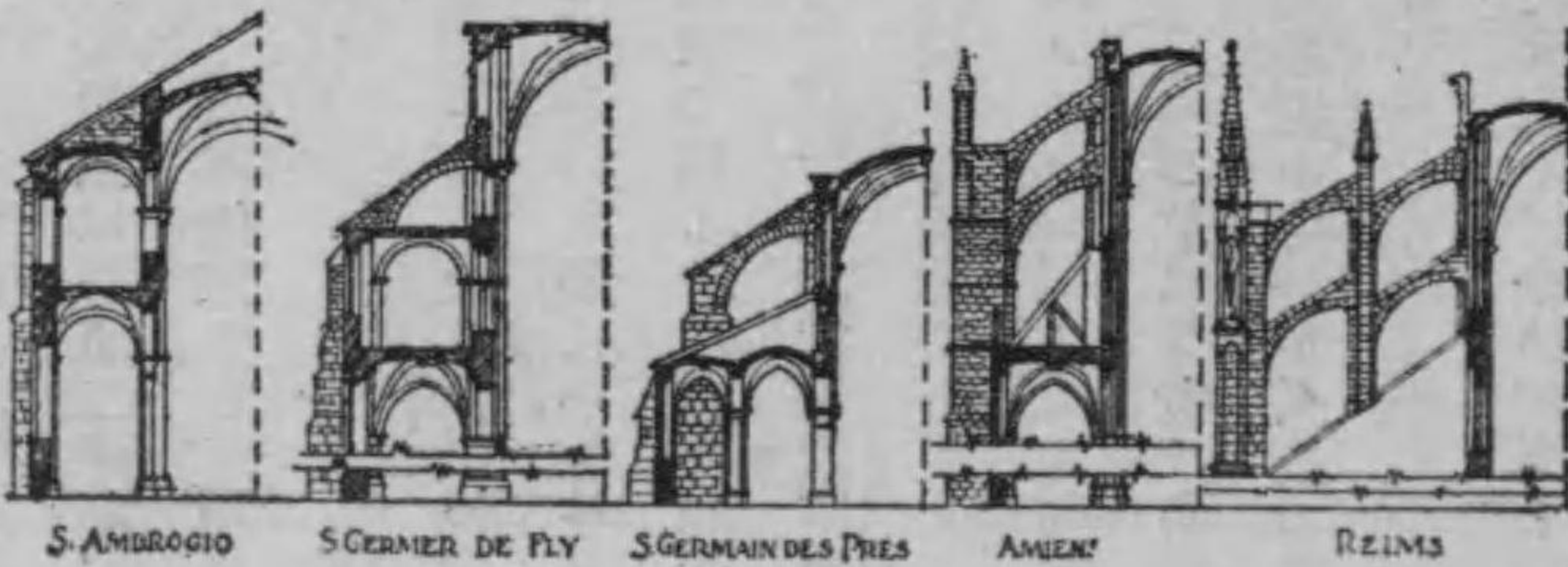
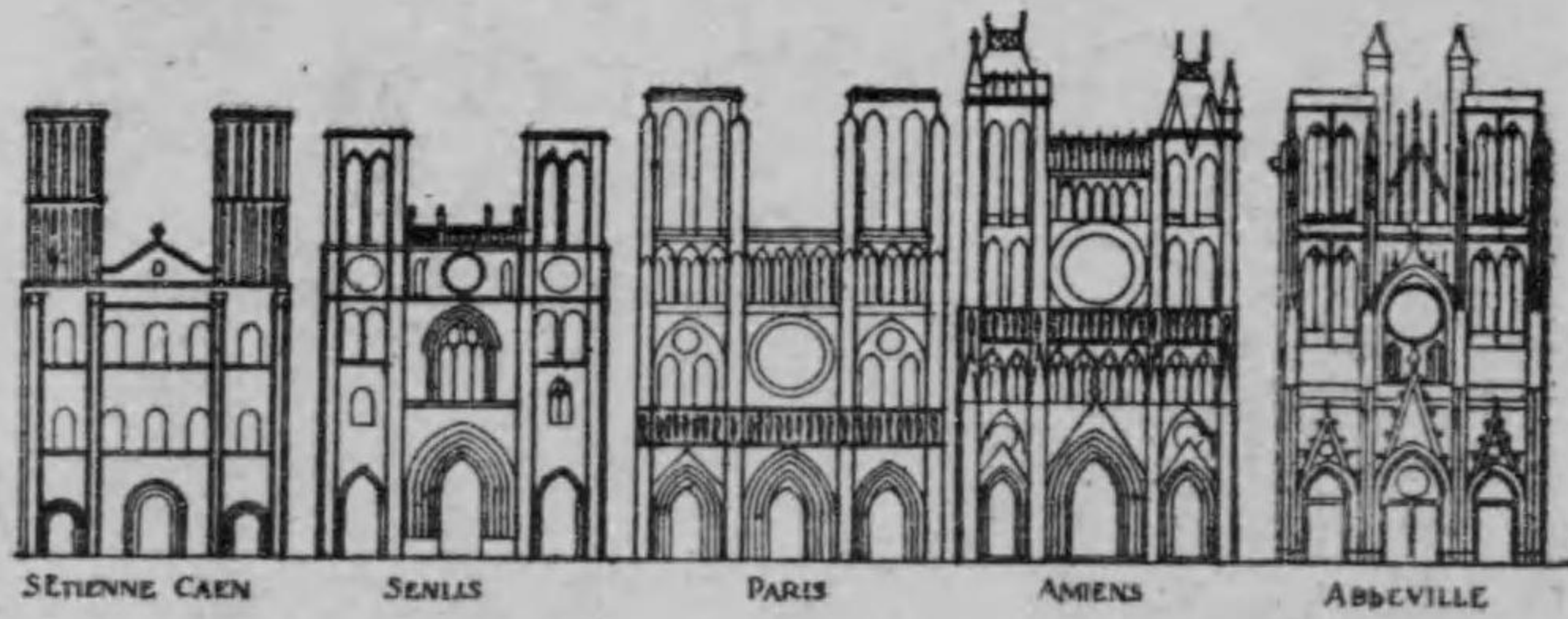


第百三十五圖 ゴシック教會堂の一般構造

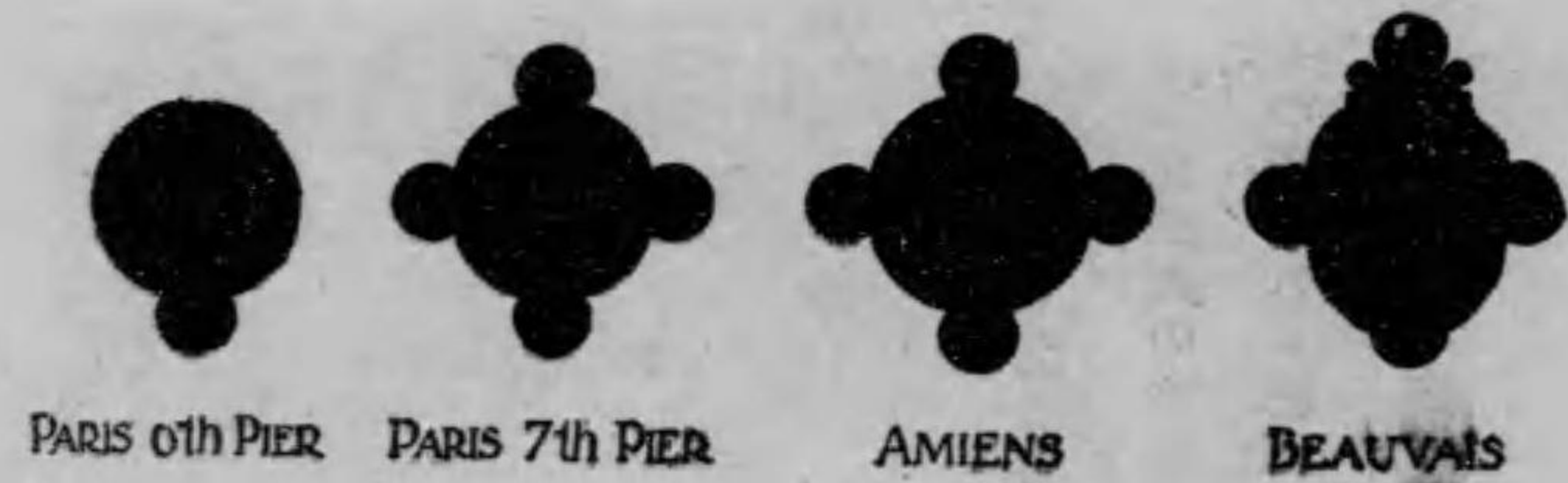
第百三十六圖 初期ゴシックの飛控壁



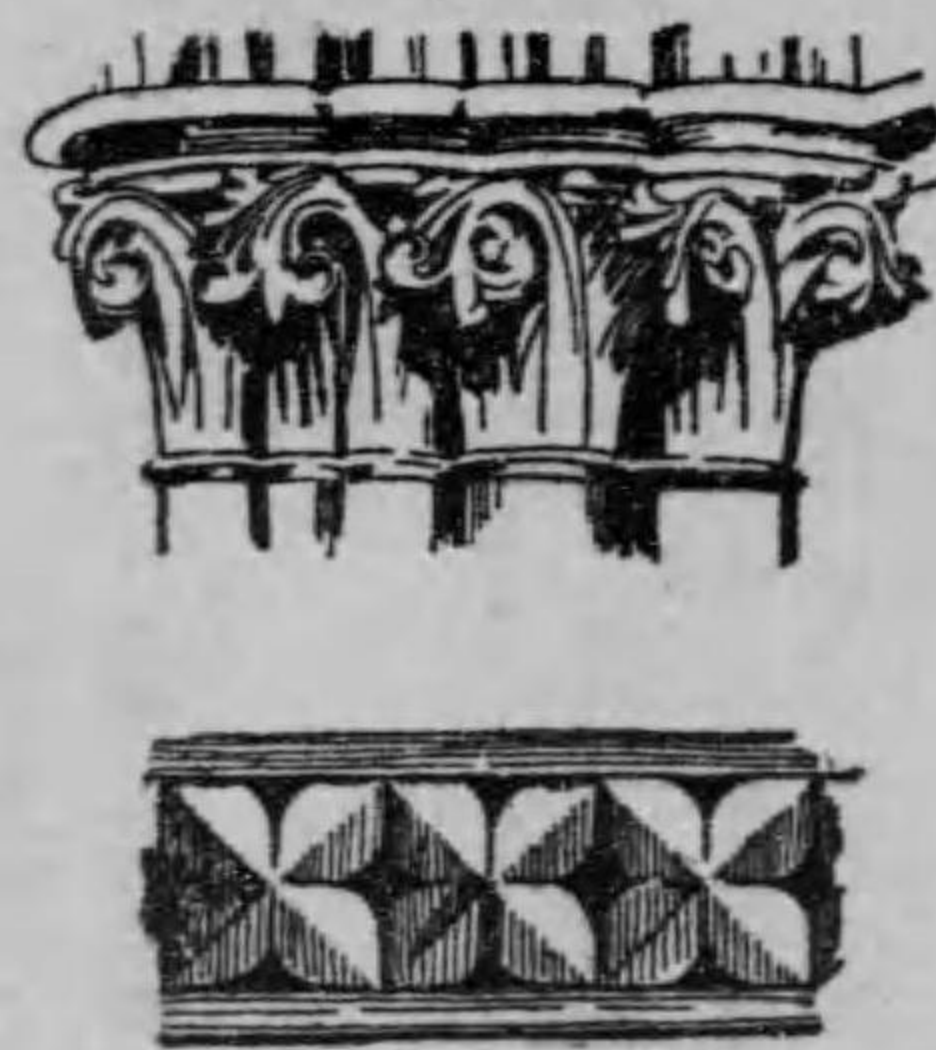
窓の狭間飾が大いに發達して居る。此の時代のものは扁平の石板を透彫にしたもので板狭間飾(第百三十八圖)と呼ばれて居る。狭間飾には尖(第百三十九圖)と呼ぶ突起がつくられ、茨相互間の空處を瓣と名づけ、その數の三、四乃至五等に依つて夫々三瓣、四瓣乃至五瓣等といはれて居る(第百四十圖)。窓はノルマン式よりも一



第百四十一圖 ゴシックの柱の發達の順序を示す



第百四十二圖



古英期の柱頭と犬牙裝飾

(一) ウェストミンスター・アベイ(紀元一二二〇年—一二六九年)

一四〇 古英期の實例

居るが、その取り扱ひは造勢で精妙である(第百四十三圖)。



鑿を以て刻んだ犬牙裝飾が盛んに用ひられて居る。

*Dog tooth*

彫刻唐草は便化せられて

アングロ・サクソン及びノルマン時代より、最近のゴシック時代に至るまでの實例を含んで居る。

コアイアー、袖

第百三十八圖



板 狭 間 飾

第百四十圖

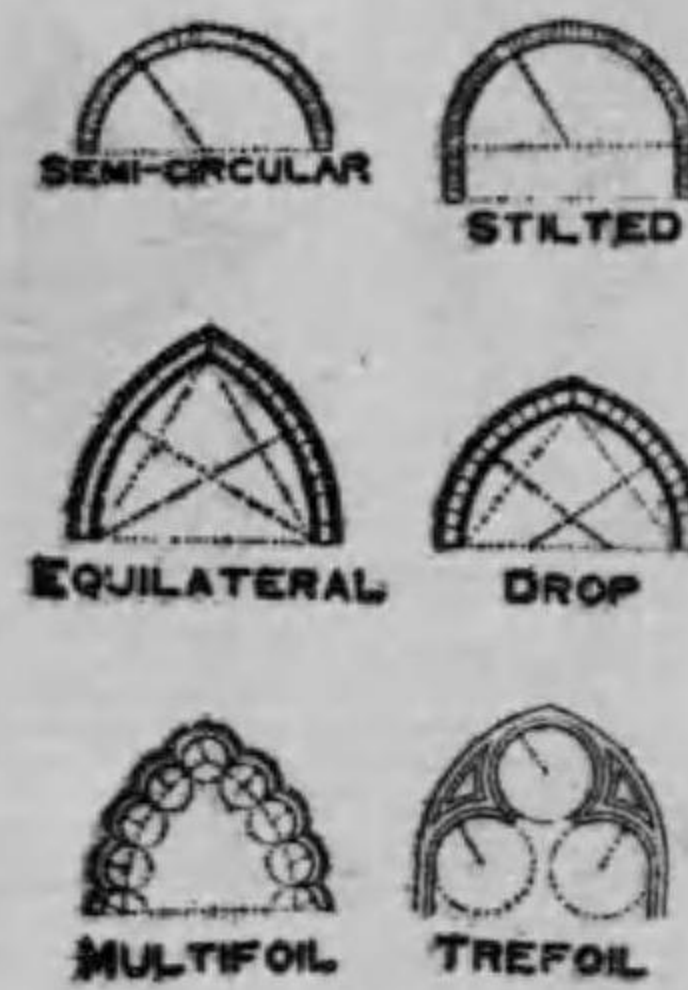


辨 の 各 種

線形は大膽で、咬ひが深く、

*Head Stone*

第百三十七圖



各 種 の 拱

第百三十九圖

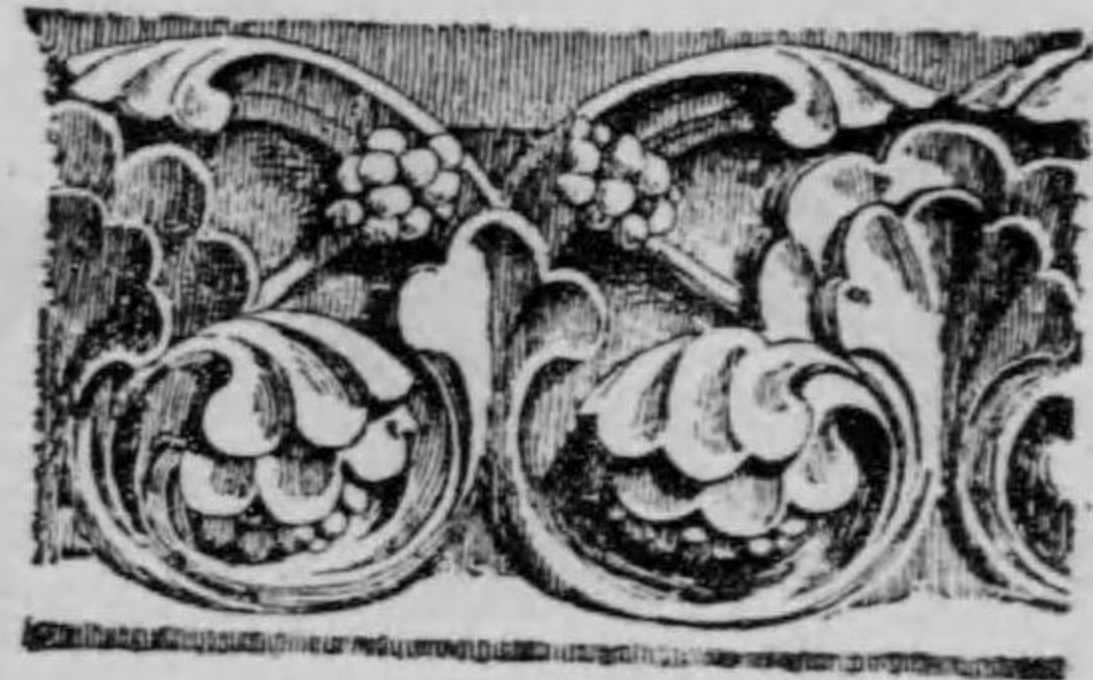


茨 と 辨

層細長で、その形は尖鋭である。この尖鋭窓は普通二連窓、三連窓若くは五連窓として用ひられて居る。

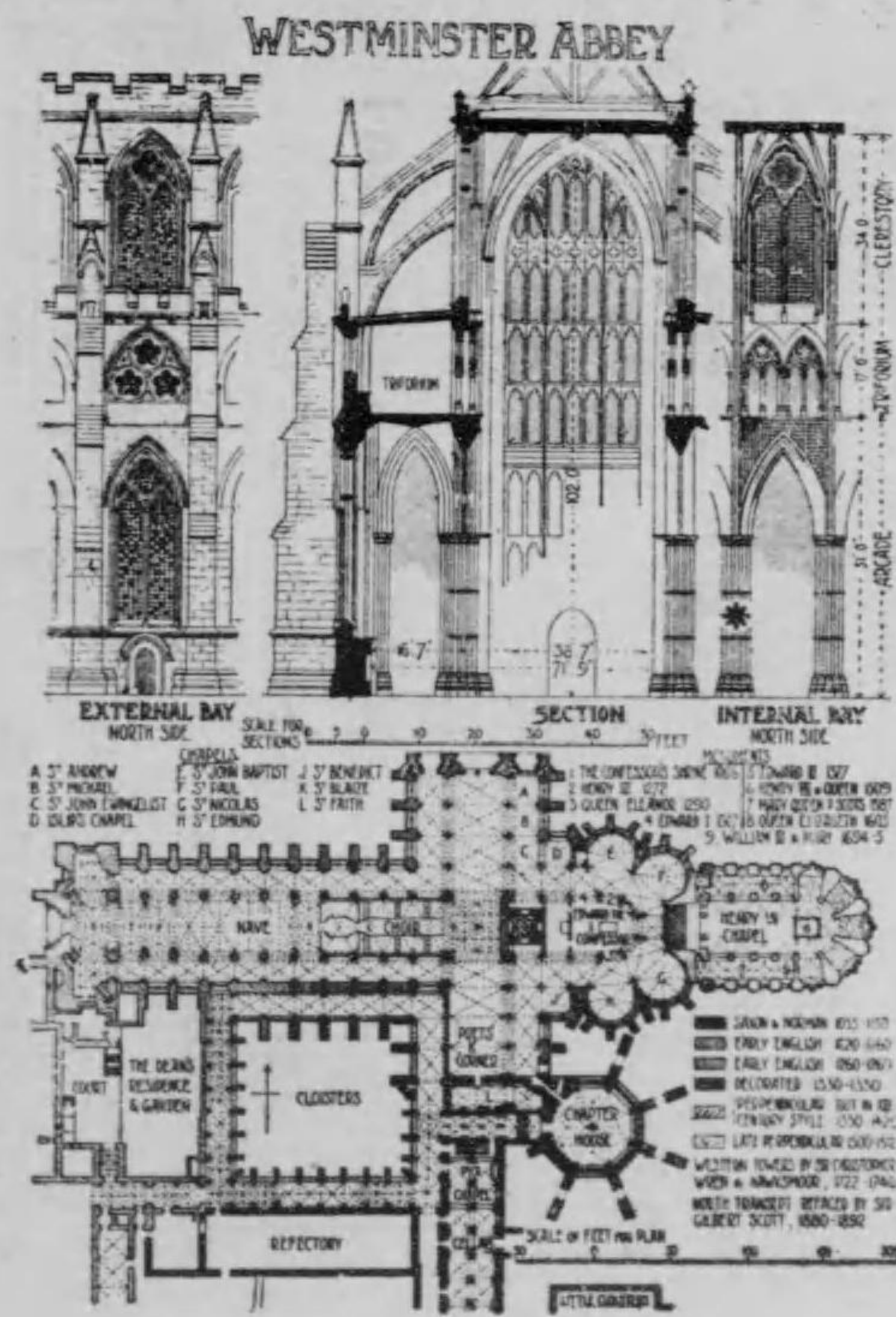


第百四十三圖 初期ゴシックの彫刻



(二) リンコルン大寺  
Lincoln Cathedral  
身廊が此の時代の  
ものである。(第百四  
十五圖)

第百四十四圖 ウェストミンスター・アベイ



廊及び身廊の初めの四區(紀元一二二〇年—一二六九年)廻廊の一部並に復舊せられた僧會會堂が古英期のものである(第百四十四圖)。

第百四十五圖



リンコルン大寺の内部

一四一 盛飾期に於ける特色

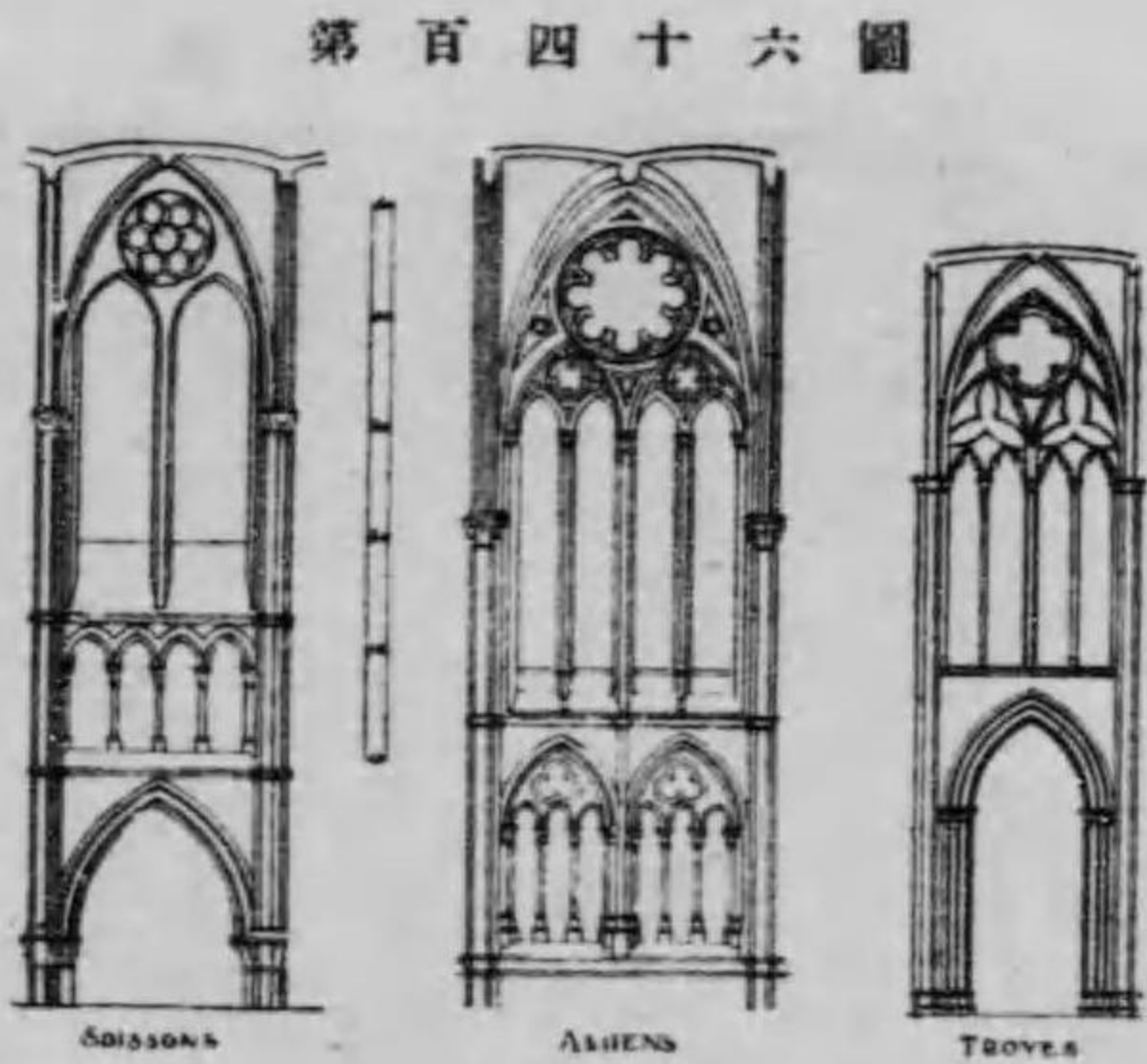
一般に外觀は、裝飾が益々賑かとなつて居る。

ブランは穹窿區を廣くする傾向が強くなつて居る。これは窓を大きく取る必要から來たもので、夫れが爲め穹窿造法が著しく進歩し複雑になつて居る。

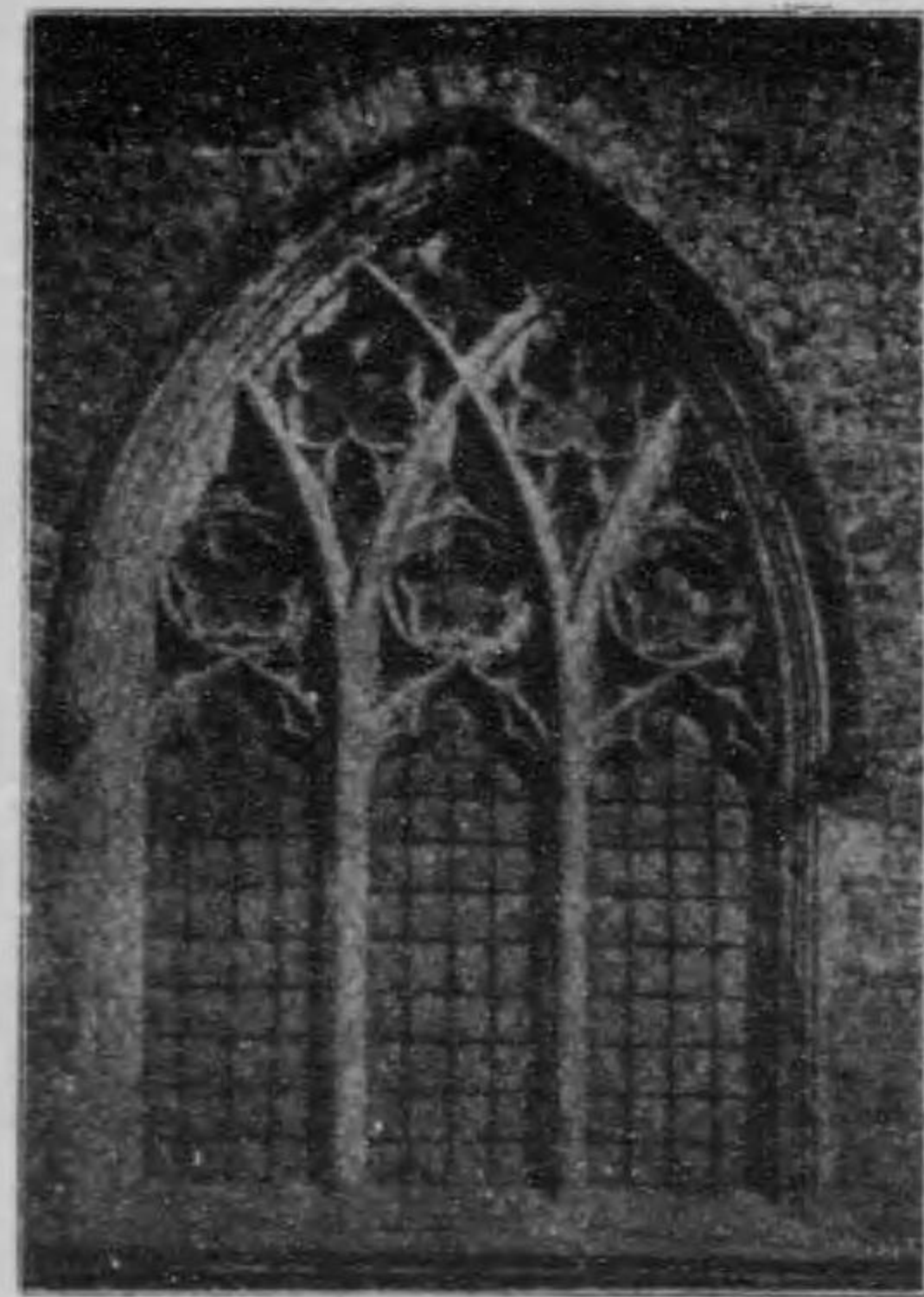
控壁は一層重要なものとなり、數層の段積を具へ、末期には龜さ拳葉飾天蓋にて飾られて居る。又筋違に配置せらるる隅控壁が始めて用ひられて居る。

開口の高さと幅の割合は、古英期に比較すれば、高さが低くなつて居る。窓は大きくなり、中方立にて二區或は二區以上に分

たれ、狭間飾は最初幾何學的の形であつたが、後には曲線形に變つて居る。此の時代の狭間飾は、孔の部分が多く、却て板の部分は極めて僅かで棒狭間飾(第四百十六圖)と呼ばれて居る。



狭間の發達を示す



棒狭間飾

瓣の形は古英期のものに比較すると幾分不規則の感がある。戸口は附柱を立てて裝飾し、抱は古英期のものより深さが浅い。

拱は等邊三角形の二點を中心として引いた圓弧より成る尖頭形であるが、屢々低く潰れた形

を取ることもある。

屋根は普通の勾配で、時としては化粧小屋組のものもある。尖塔は普通八角形で、可成り高く、塔尖は漸次廢れて、隅に小尖塔のある扶壁に變つて居る。尖塔の窓の裝飾には拳葉(Pinnacle)が用ひられて居る。

第四百十七圖



柱頭は線形を施されたものは

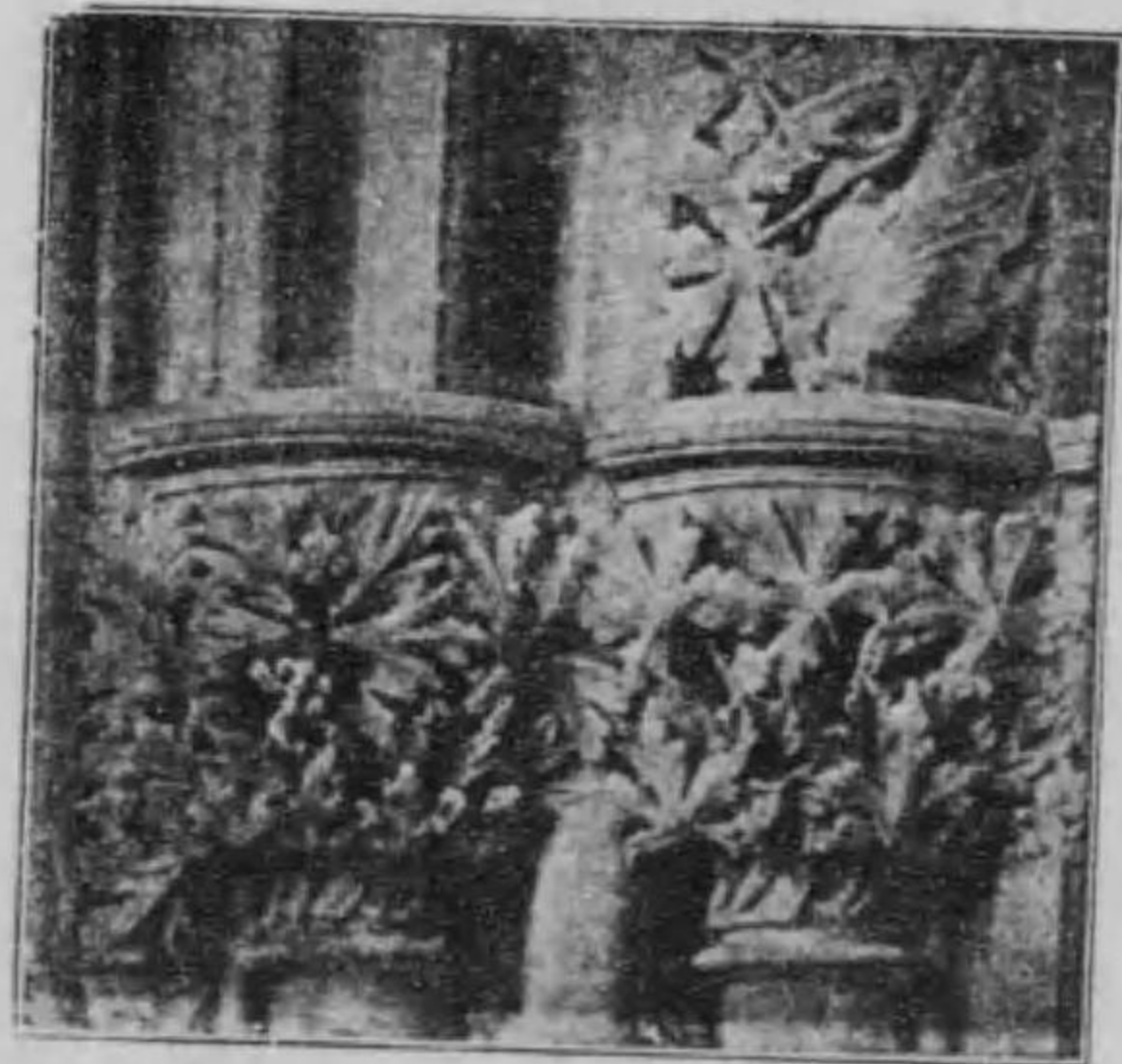
古英期に似て居るが、淺ひは餘り深くなく、彫刻飾を有する柱頭は唐草が一層寫生的となり、一體に力が弱くなつて居る。線形としては花球(第四百十八圖)が多く用ひられ、兩押石はその先端が人首又はグロテス

第四百十八圖



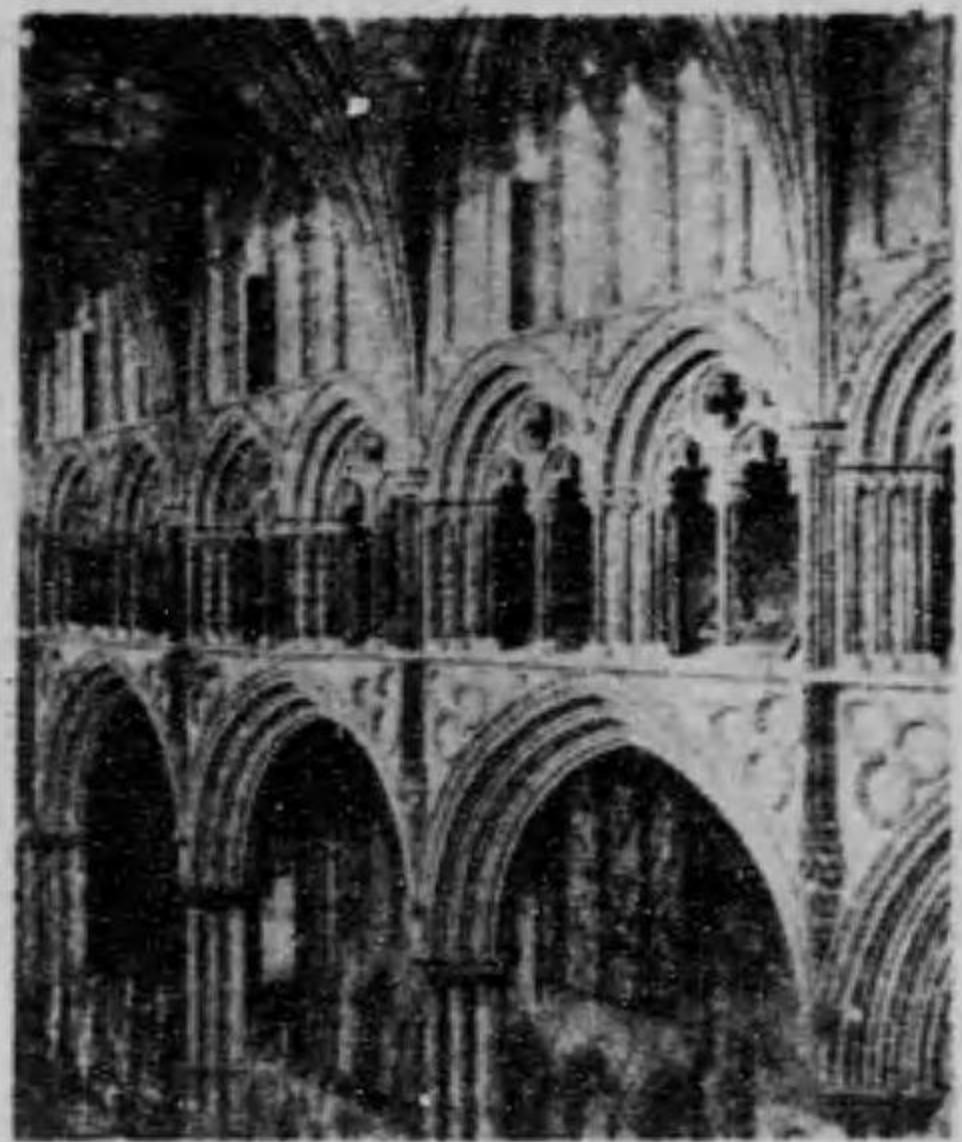
球 花

第四百十九圖



彫刻の飾期

第百五十圖



リンコルン大寺

クとなつて居る。

此の時代の彫刻唐草には樅、蔦、葡萄の葉等が用ひられて居る(第百四十九圖)。

一四二 盛飾期の實例

(一) ウェストミンスター・アベイ Westminster Abbey

東廻廊の三區と多角形の僧會會堂がこの時代のものである。(第百四十四圖参照)

(二) リンコルン大寺 Lincoln Cathedral

身廊及び隅のコーアイアーを含む東端(紀元一二六〇年——一二八〇年)がこの時代のものである。(第百五十圖)

(三) ヨーク大寺 York Cathedral

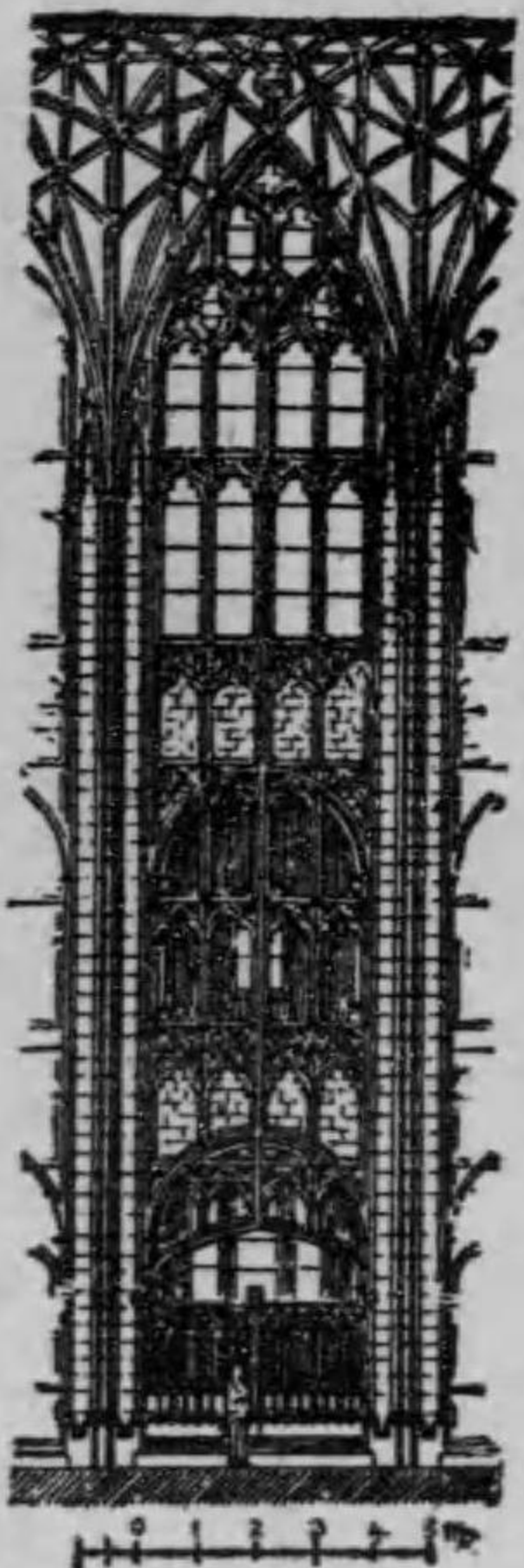
コーアイアー、西正面及び僧會會堂がこの時代のものである。(第百五十一圖)

一四三 垂直期に於ける特色

特に垂直線が多く用ひられて居る。

プランは大體に於て前期と同様である。壁は盛ん パネルを以て裝飾せられ、パネルは窓の狭間飾に類似して居る。軒の扶壁は鋸壁状か又はパネル造である。控壁の出は一般に大きくなり、其のために控壁相互間に禮拜所が設けられたこともある。飛控壁は此の時代には普通に行はれ、屢々彫刻を以て透かしてある。

第百五十一圖



大寺

拱は初期のものは、其の形状が内に正三角形を包含するが、末期のものは平な尖頭形か又は四心拱である。

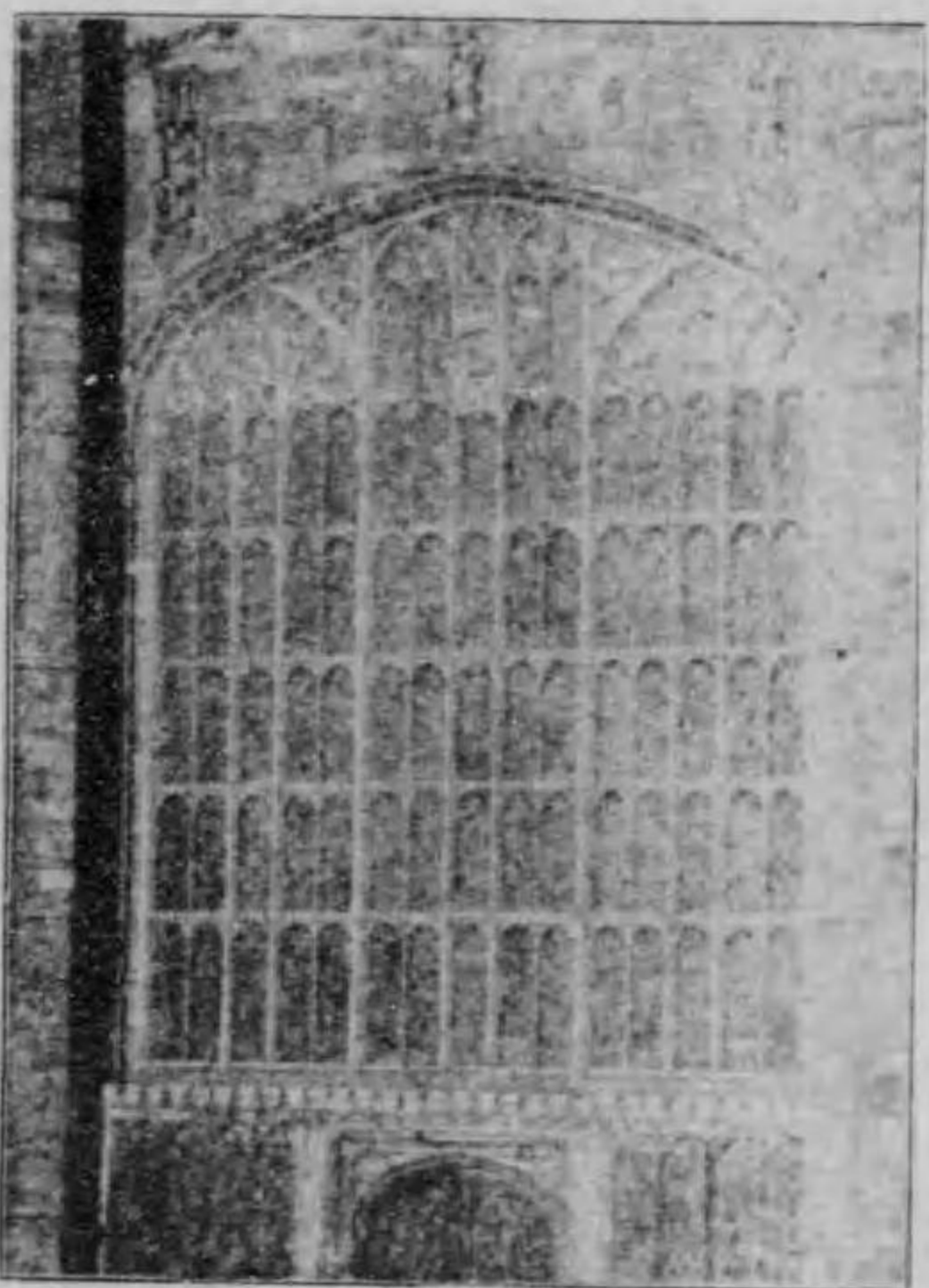
長方形で、南北に長く、菱形に据へられて居る。これは穹窿柱が二つの拱の間から出ないで、拱柱の前に、床から立つて居る爲めである。四本の丸柱から成る獨特の拱柱もある。

Vaulting shaft

柱頭は時として多角形のプランをなして居る。柱頭に施さるる線形は纖弱で、効果が一層劣つて居る。彫刻柱頭に刻まるる唐草は便化せられ、輪郭が四角で、深みなく、淺薄である。

窓は主として大小の中方立を用ひ、極めて垂直線的效果に富んで居る(第百五十二圖)。戸

第百五十二圖



垂直狭間飾

口は普通その拱の上が四角の突出線形を以て飾られ、拱側の三角小間には裝飾が入れられて居る。

屋根の勾配は緩かで、樑梁構造（第百五十三圖）の木造化粧屋根が多く、屢々天使の彫像や透狭間飾を以て華麗に裝飾せられ

て居る。塔は一般に尖塔を備へて居ない。扇穹窿（第百五十四圖）は此の時代の末期に於ける特色である。（第百三十四圖参照）線形は筋違の面に配置せられ、幅廣、淺薄である。蛇腹の線形の上には頂飾が、窓の無目には小形の鋸壁が飾らるることもある。

第百五十三圖



樑梁構造

裝飾模様及び彫刻唐草は普通便化的で、

此の時代の特色ある裝飾はチユードル・ローズ、墜格子及び立花である。Tudor Rose

一四四 垂直期の實例

- (一) ヘンリー七世堂（ウエストミンス Henry VII's Chapel ター・アムイに在る。）

最も完全な實例である。（第百五十五圖）

五圖

- (二) ウインチェスター大寺

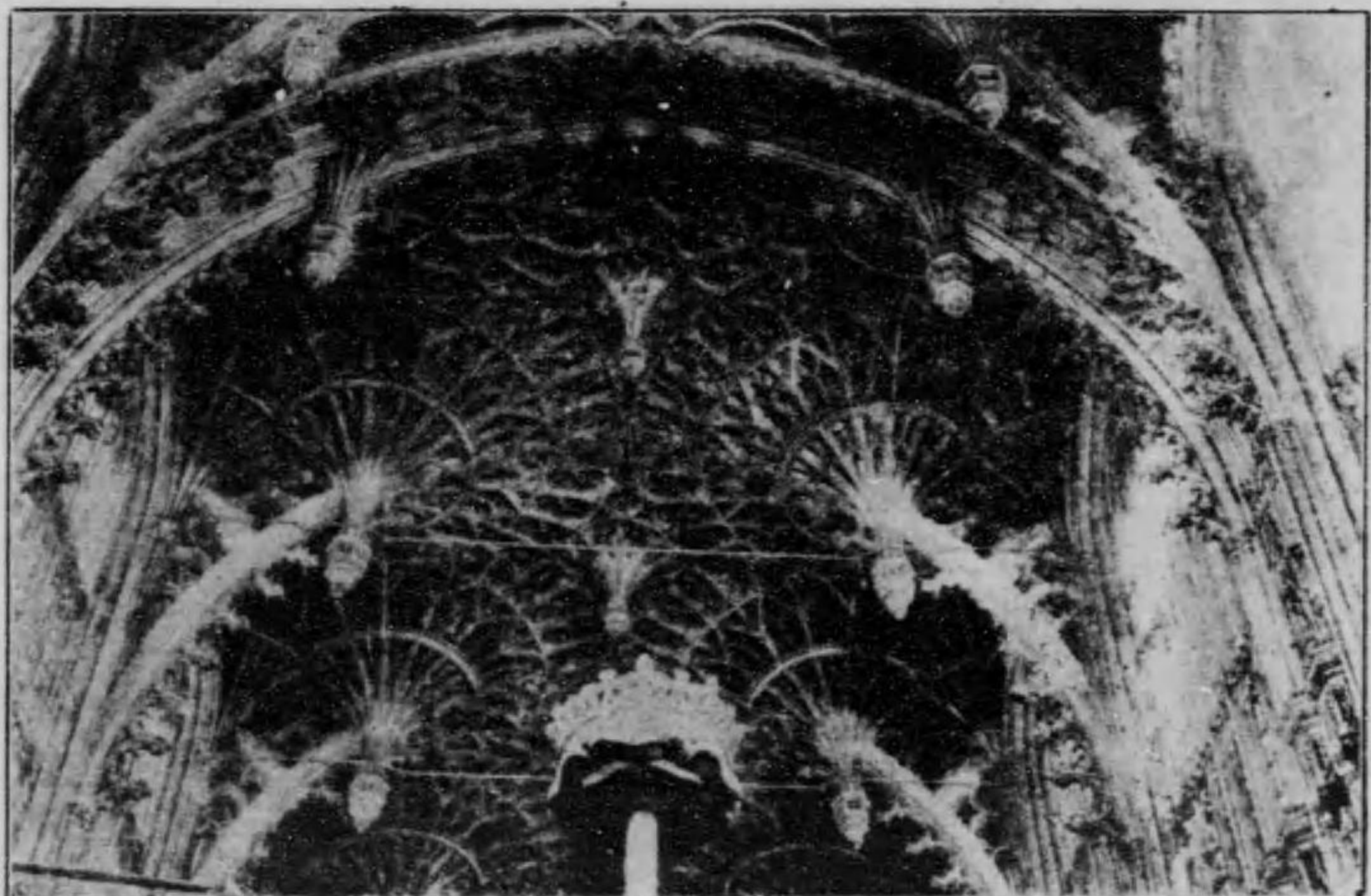
西正面がこの時代のものである。

一四五 僧房

完備した僧房は次の如き部分より成つて居る。

- (一) 廻廊の庭 A Cloister Court

第百五十四圖



扇穹窿（ヘンリー七世堂）

この附近に僧會會堂、聖器室、教會堂、寢室、食堂等がつくられて居る。

(一) 内庭 An inner Court

内庭には病舎、客殿、厨房、従僕室、圖書室、スクリプトリアム等がある。

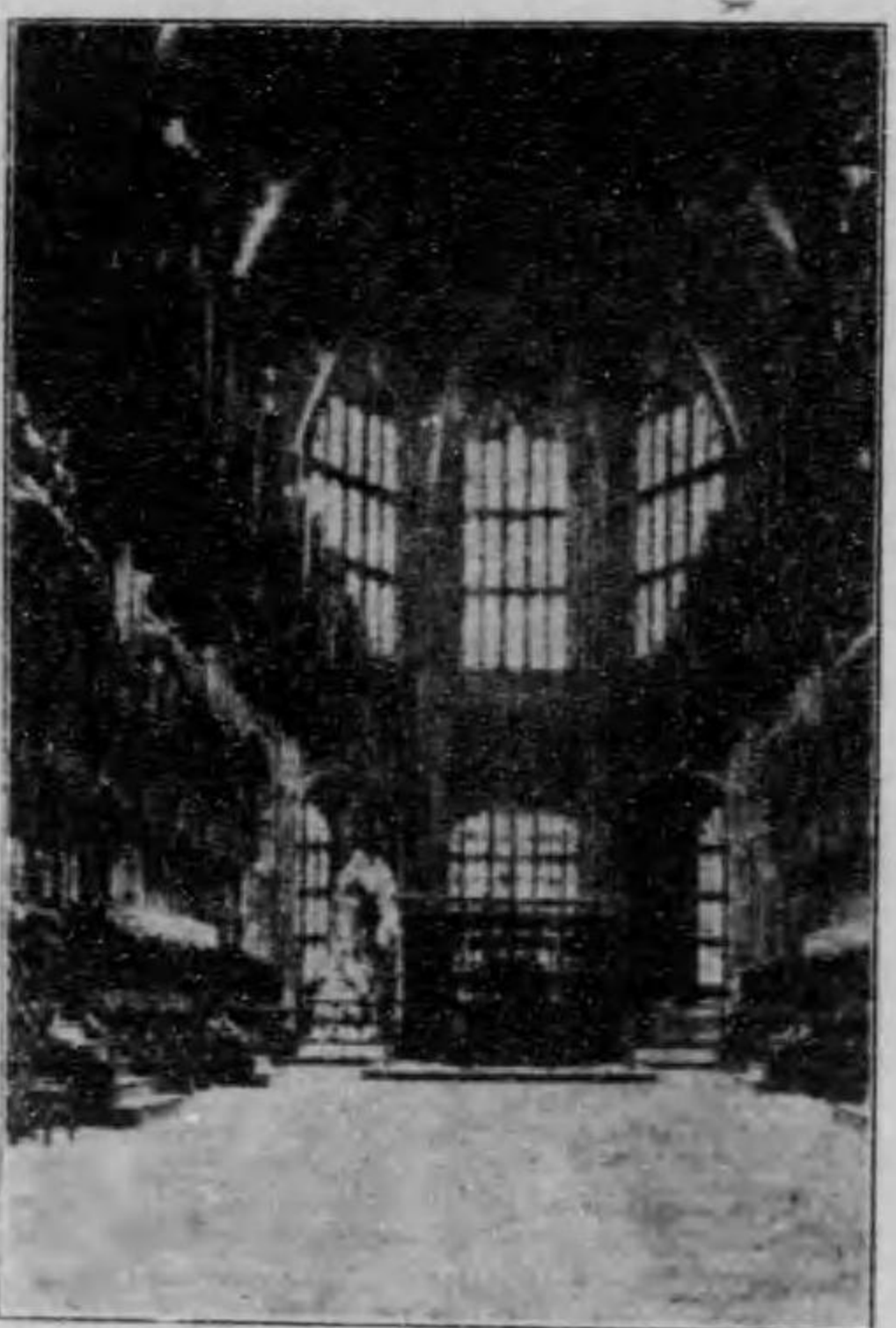
(二) 廣庭 A Common Court

廣庭には車馬を通ずる二口の門がつくられ、その周圍に穀倉、麴麵焼場、貯藏所、従僕室、法廷、獄舎、長老の住宅、納屋等がある。

(四) 教會堂の庭 The Church Court or Close.

これは公開せられて居る。

(五) 水車、仕事場、花園、果實園、池等。



第百五十五圖 ヘンリー七世堂

僧房は僻地に於ては宿屋に代用せられた。

實例としてはウエストミンスター・アベイ及び聖ガール等がある。

一四六 城塞 The Castles

城塞は中世期建築の重要なものの一つで、第十四世紀の末葉まで築造せられて居る。第十

二世紀頃の城塞は敵を防ぐことがその目的であつたが、其後王權の發達と共に城主間の鬭争がなくなり、尙ほ火藥の發明に依つて城塞の周圍にある濠の必要がなくなり、間もなく防備が廢たれて、第十四世紀の城塞は著しく私宅風の傾向を帯ぶるやうになつて居る。

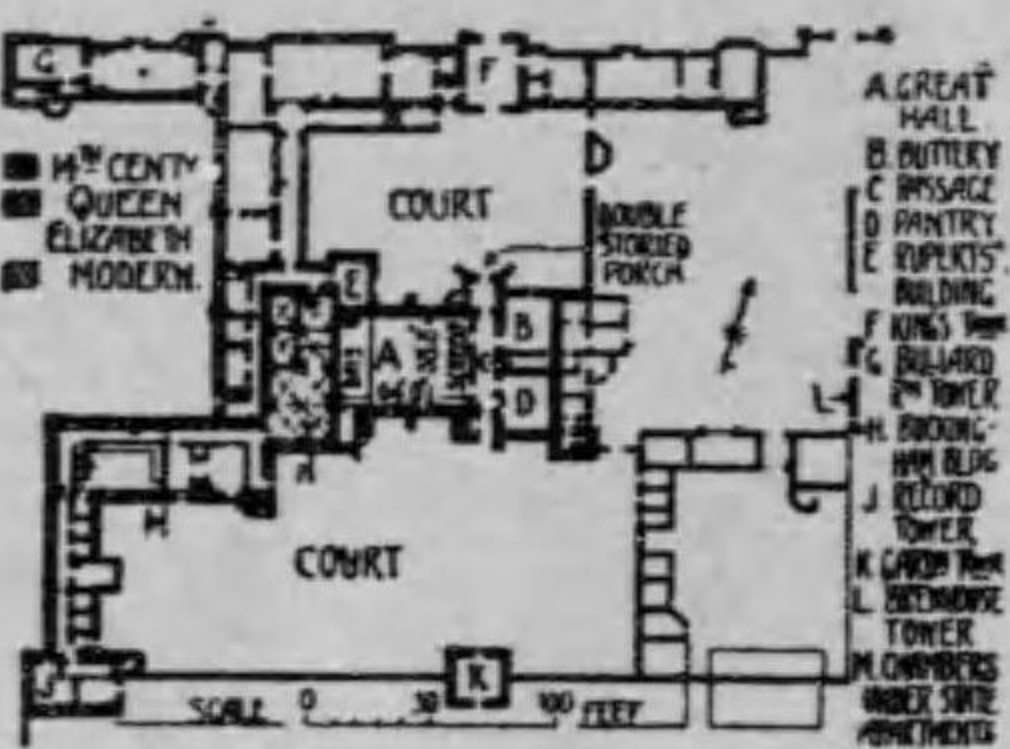
城塞の特色は一般に水を湛へた大なる濠を繞らし、城門の前には揚橋を設け、城塞の周圍には厚大なる壁をつくり、櫓と銃眼とがある。尙ほ要所には塔を建て、天主閣は城塞の中心で、城主の住居に充てられて居る。

London

實例としては倫敦塔(紀元一〇八一年—一〇九〇年)ケニルウォース城等がある。

ケントのペンシャースト・ブレースは紀元一三三五年につくられた私宅風の例で、ホールが主要の建築である(第百五十六

Hall



第百五十六圖

ペンシャースト・ブレースの平面圖

圖)

(一) 佛蘭西ゴシック French Gothic

一四七 佛蘭西ゴシック

第百五十七圖



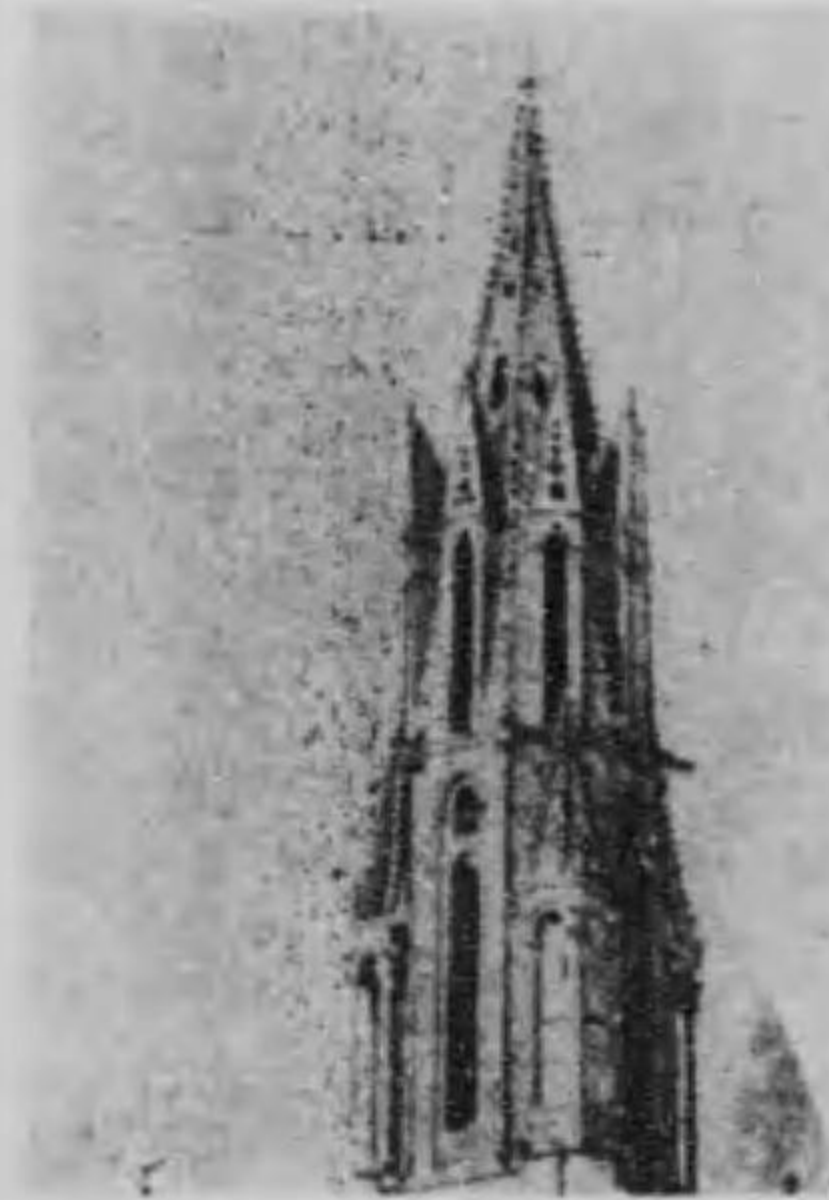
教會堂の断面圖

一七〇  
佛蘭西ゴシックの特色は、上述べたところと大體に於て同様で、(一)室内の天井が非常に高いこと 第百五十七圖 (二)屋根勾配が急なること (三)拳葉にて飾つた尖塔(第百五十八圖)を多數に有すること (四)小尖塔、

飛控壁、高き狭間飾窓の長列等に依り、垂直線的効果の多いこと等を擧げることが出来る。佛蘭西ゴシックは更らに次の三期に分つのが便利である。

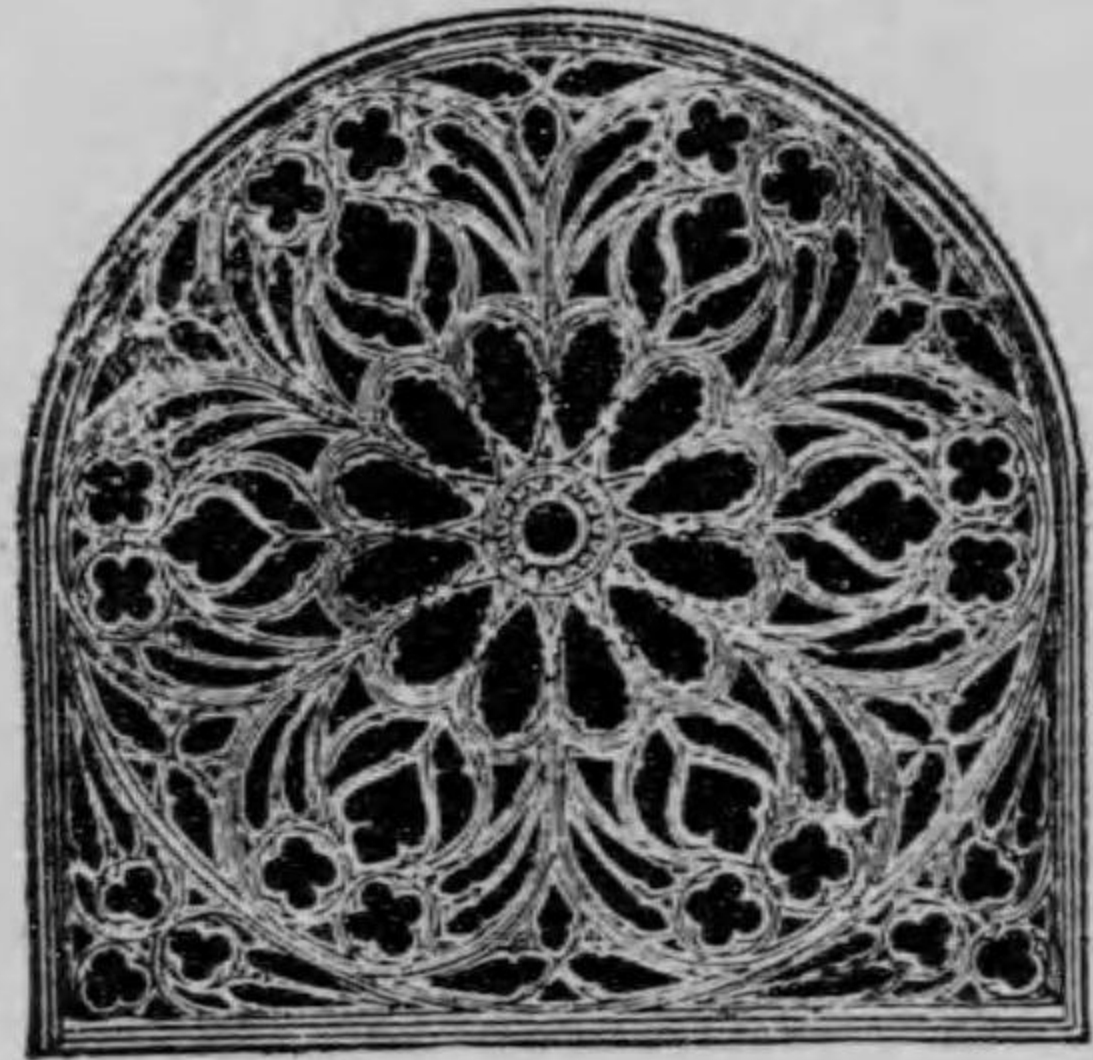
- (一) 第一次 (ゴシック) 第十三世紀  
Primary Gothic
- (二) 第二次 (ラヨナン) 第十四世紀  
Secondary Rayonnant
- (三) 第三次 (フランボーヤン) 第十五世紀  
Tertiary Flamboyant

第百五十八圖



尖塔

第百五十九圖



窓花圖

第一次時代は英吉利ゴシックの古英期に比較すべきもので、その建築は一般に健實なもので、第二次時代は盛飾期に、第三次時代は垂直期に當つて居る。第二次時代には、大なる圓花窓(車輪窓) (第百五十九圖) がつくられ、第三次時代には、火焰の如き狭間飾が用ひられて居る。

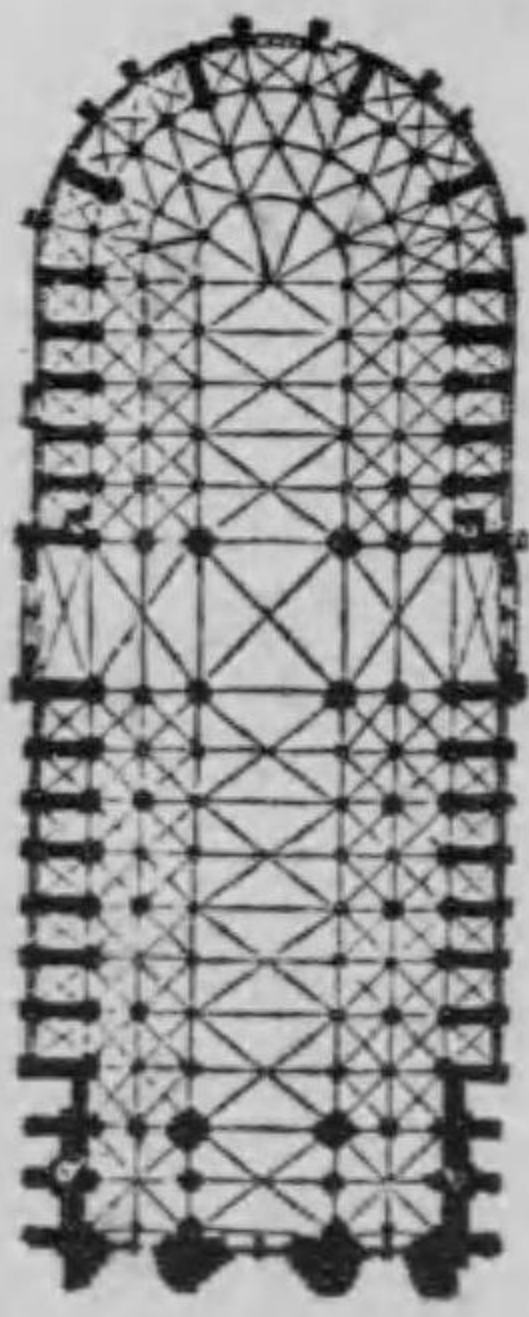
一四八 大 寺 Cathedrals

大規模の大寺が多數残つて居るが、其の中で特に

有名なるものを次に述べて見よう。

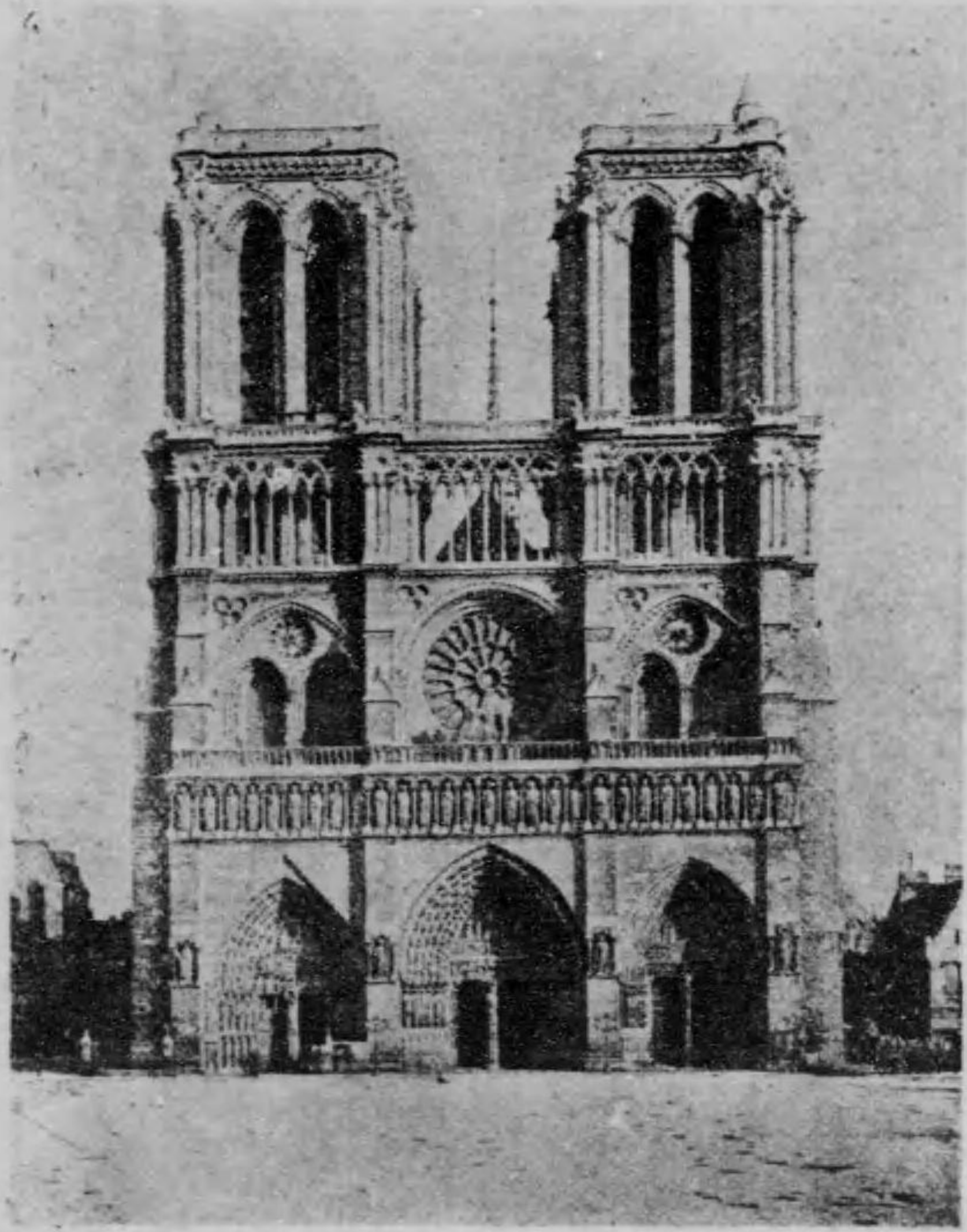
- (一) 巴里のノートル・ダム (紀元一六三三年—二二一四年)  
Paris Notre Dame
- 佛蘭西ゴシック大寺中最も古い一つである(第百六十圖)。西正面は佛蘭西に於ける最も壯大な建築

第百六十圖



ノートル・ダムの平面圖

第百六十一圖



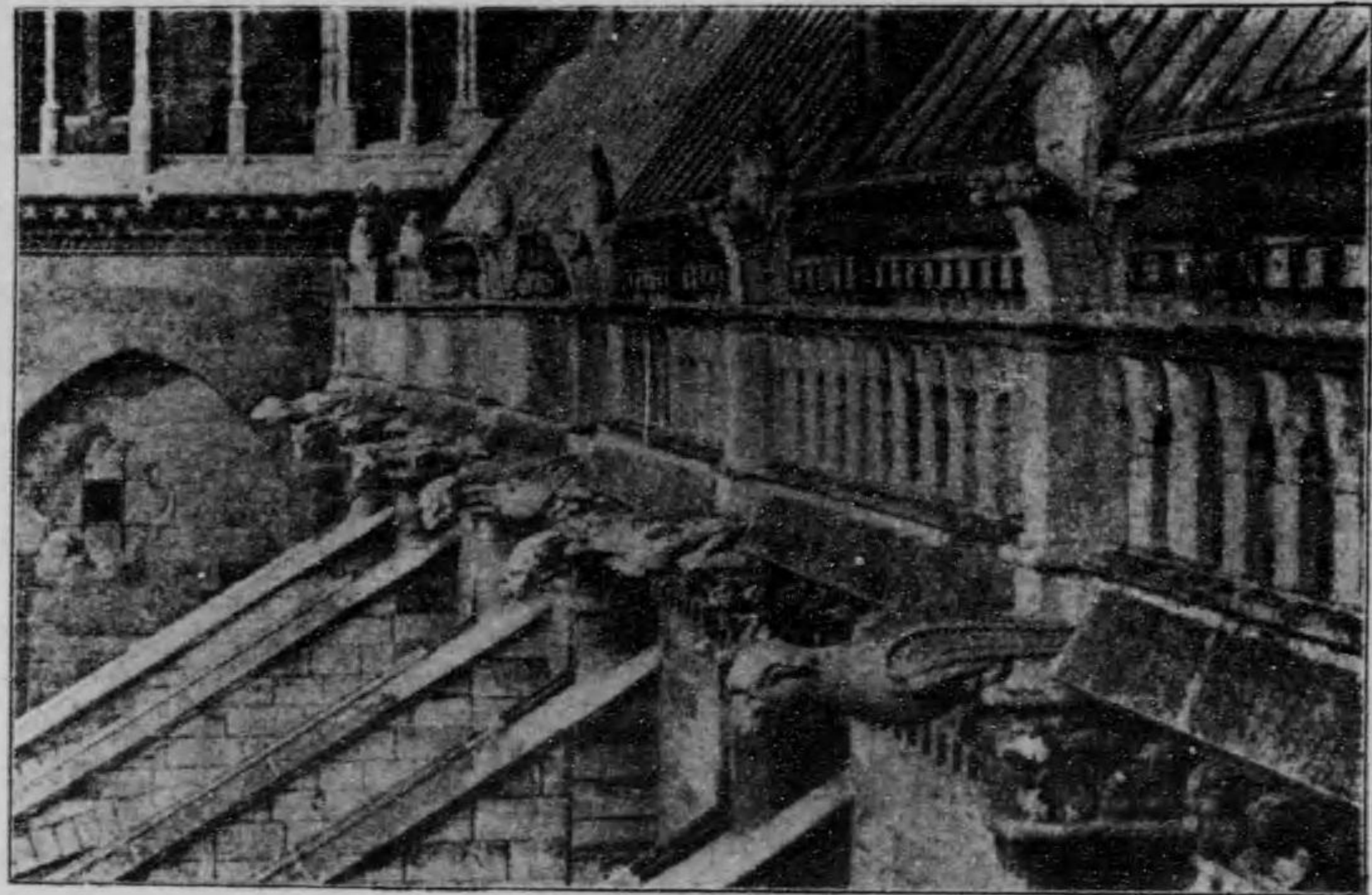
ノートル・ダマの西正面

一七二  
で(第百六十一圖)身廊の薨は西正面の二基の塔を連絡する透造限障で隠蔽せられて居る。奥深く入り込む三口の西表玄関と、龕に安置せらるる彫像の臚列と、圓形の車輪窓とはその特色で、樋嘴怪物も亦有名である(第百六十二圖)。兩側面

の控壁の間には禮拜所が設けられて居る。

(二) シャルトル大寺(紀元一一九四年—一二六〇年)  
Chartres Cathedral

第百六十二圖



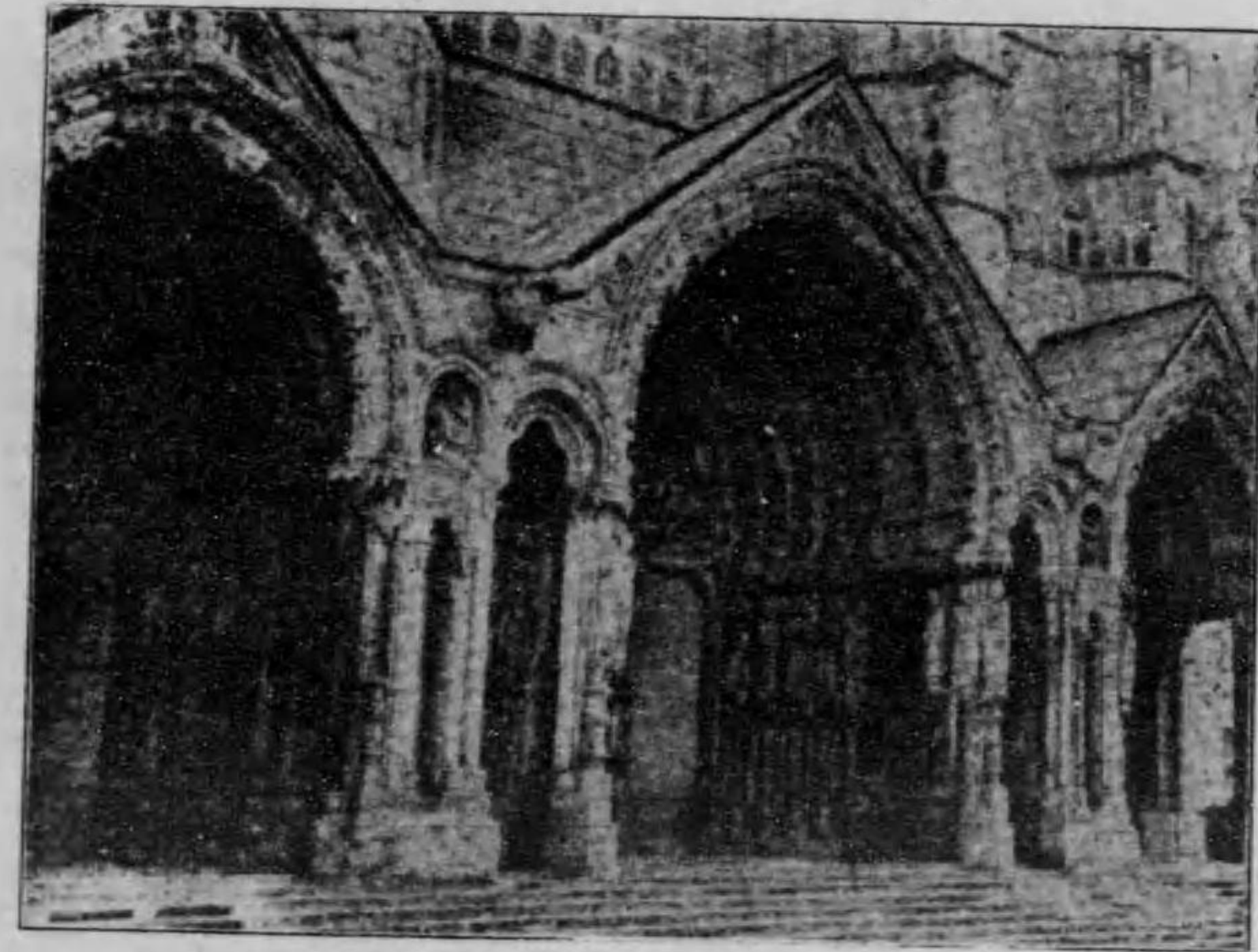
ノートル・ダマの怪動物

南北兩車寄(第百六十三圖)にある彫像と、北の袖廊の圓華窓と、三口の拱より成る飛控壁が有名である。プラン(第百六十四圖)は大なる袖廊を有し、袖廊には各二基の塔がつくられ、更らに二基の西塔と、別に計劃のみに終つた二基の東塔とを加ふれば、塔は八基となる。

(三) ランス大寺(紀元一二二二年—一二四一年)  
Reims Cathedral

西正面の三口の表玄関は、深く入り込んでつくられ、彫刻を以て立派に飾られて居る。飛控壁は二側の側廊を越えて配置せられて居る(第百

百六十三圖

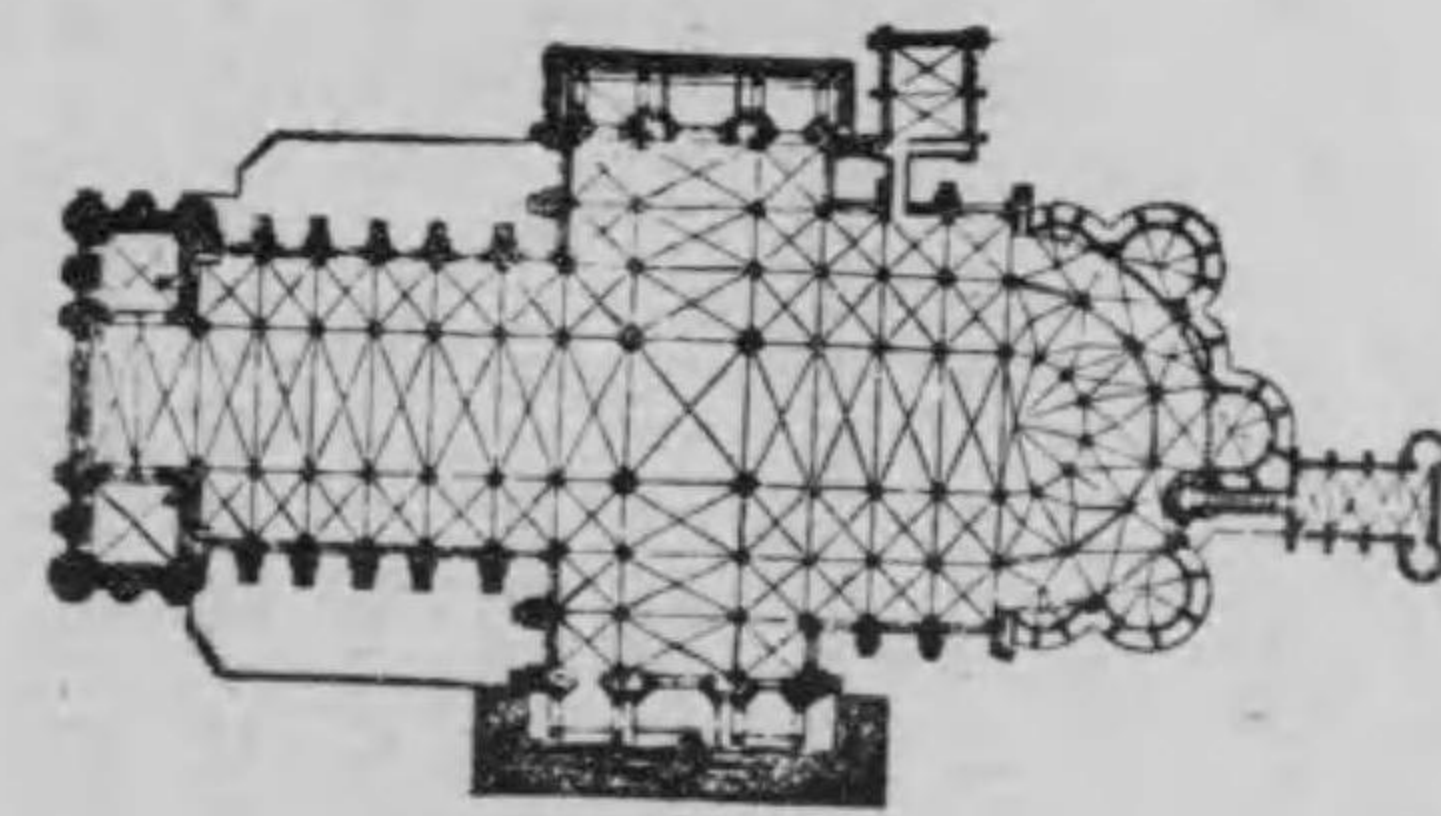


シャルトル大寺の北車寄

西洋建築史

一七四

第百六十四圖



シャルトル大寺の平面圖

第百六十五圖



ランス大寺の西正面

六十五圖

(四) アミアン大寺

Amiens Cathedral

(紀元一二二〇

年—一二八八

年)

佛蘭西大寺の代

表的のプラン(第

百六十六圖)を有

して居る。控壁相

互間に設けられた側面禮拜所は後世

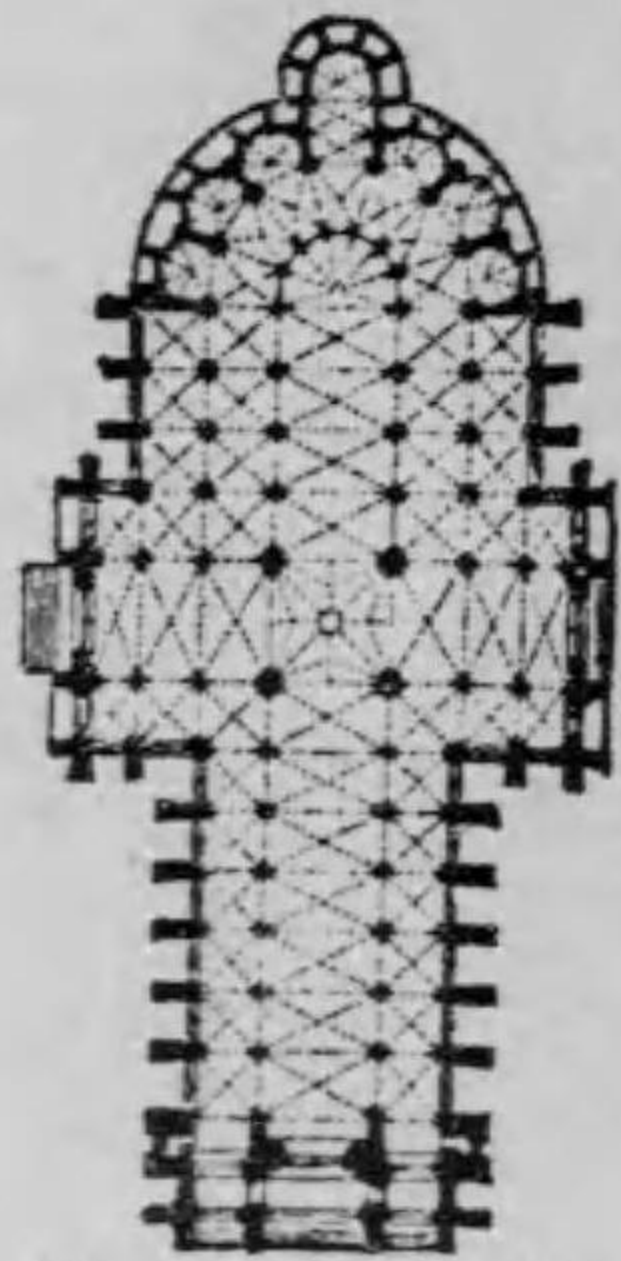
の増築である。内部(第百六十七圖)

は、石造穹窿までの高が一四〇呎で

身廊の屋根の高は二〇〇呎以上に及

んで居る(第百六十八圖)。

第百六十六圖



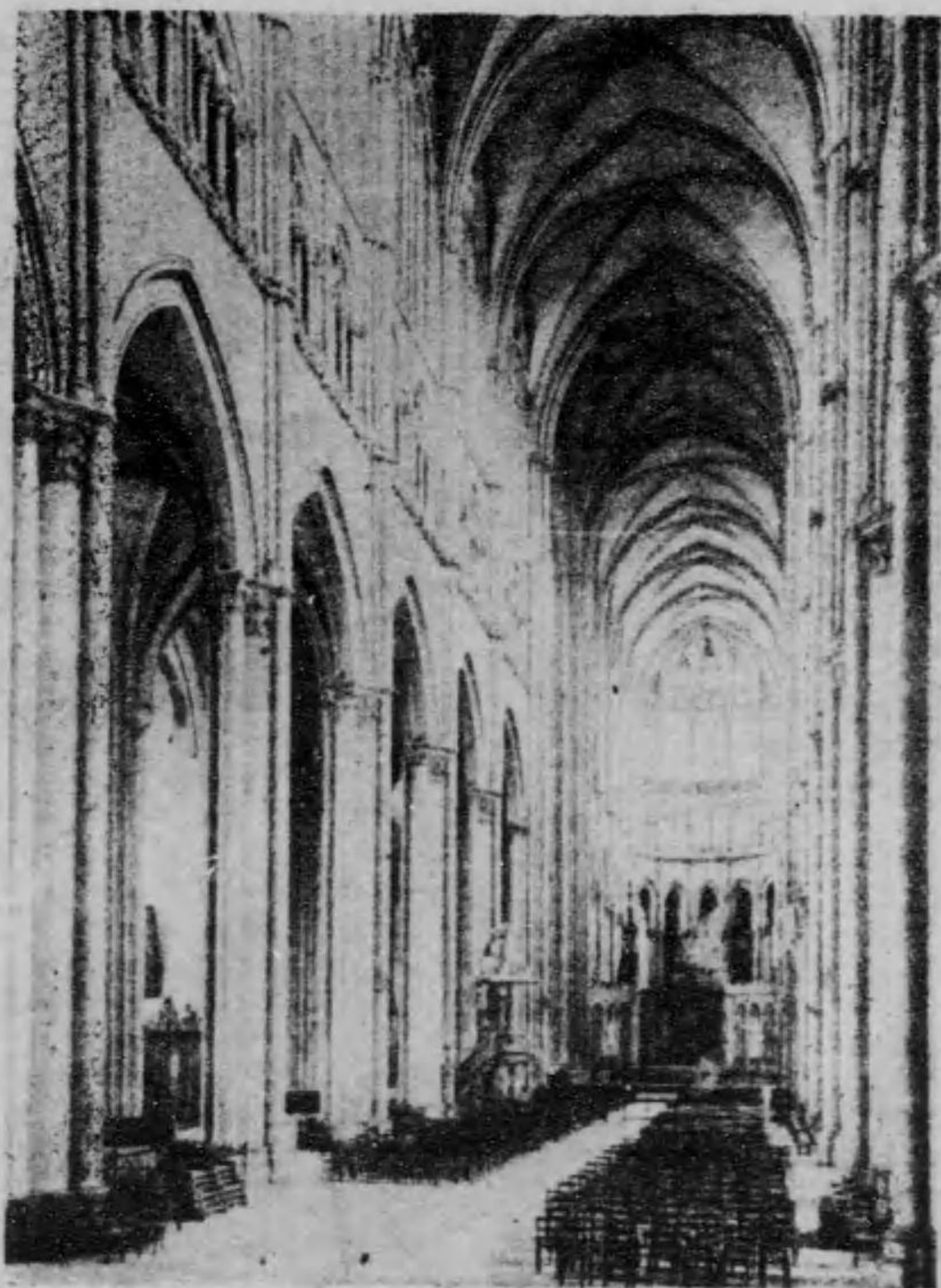
ミアン大寺の平面圖

西洋建築史

一七五



一四九 僧房建築



アミアン大寺の内部

實例としてはノルマンディーのモン・サン・ミシエルの僧房、トゥールの僧房、トウルーズのヤコブの僧房等がある。大體に於て、英吉利ゴシックの僧房建築と同様である。

一五〇 城塞

Chateaux

初めは軍備のためにつくられたもので、城壁(第六十九圖)を繞らし、

鋸壁があるが、後にはこの中に居室を

第百六十七圖

第百六十八圖



アミアン大寺

つくり、更らに一般の住宅に變化した事は英吉利の城塞と同様である。實例としてはピエールフォン城が有名である。グイオレル、デュークが第十九世紀の半に復舊したもので、ゴシックの教會堂とは異り、興味深い建築である。

一五一 其他の建築物

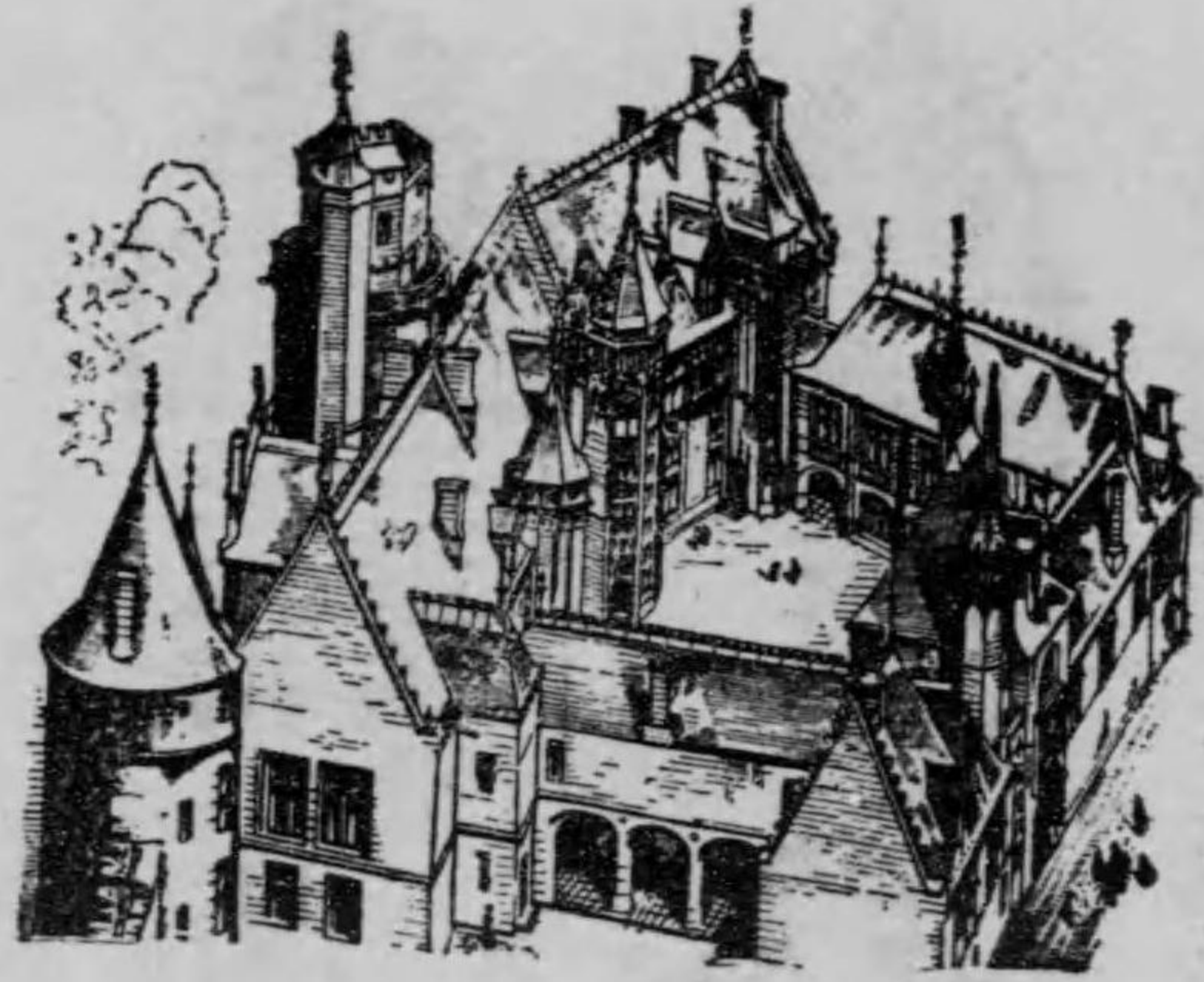
ブルーズのジャック・クールの家は紀元一四四三年の建築にかかり、當時の大豪商の住宅の好實例(第七十圖(一)(二))である。此の建物は一部分市の周壁に沿ひてつくり、中央に中庭を有し、立派な階段塔が立つて居る。

第百六十九圖

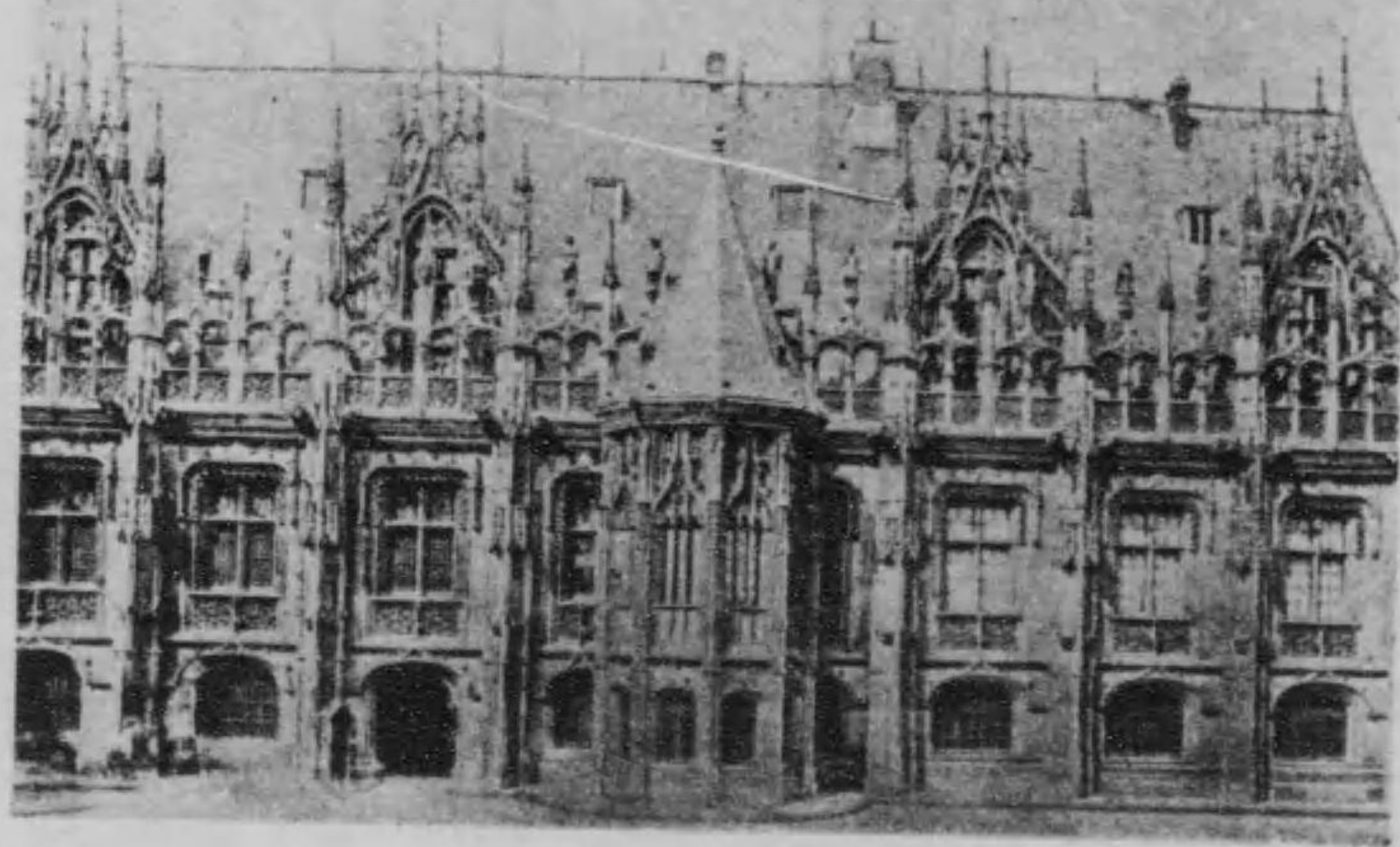


カルカゾンの城壁

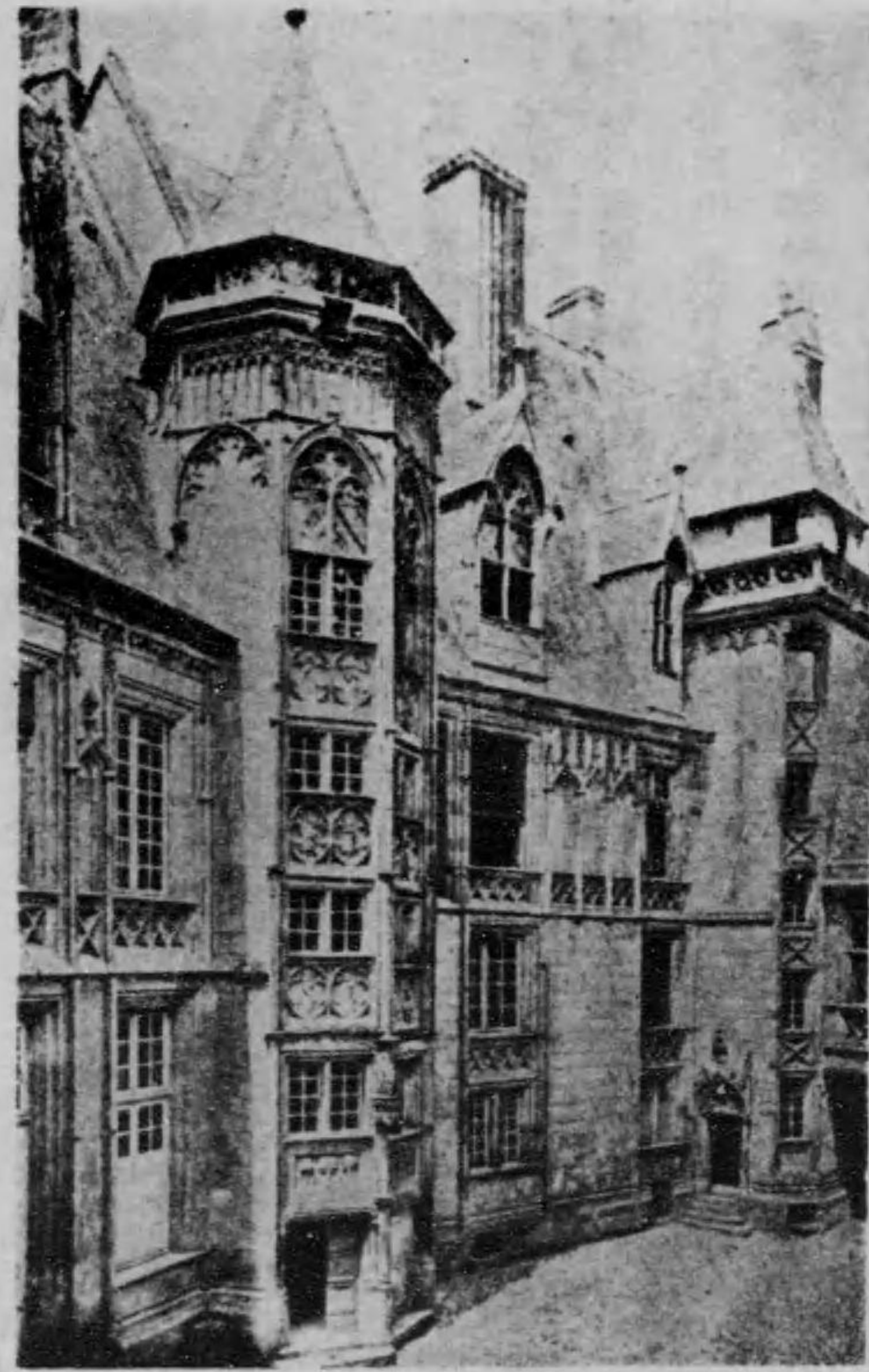
第七十圖 (二) ジャック・カールの家



第七十一圖 ルワンの裁判所



第七十圖 (一)



ジャック・カールの家

ルワンの裁判所(紀元一四九九年—一五〇八年)は佛蘭西の都市建築の非常に立派な實例  
The Palais de Justice, Rouen

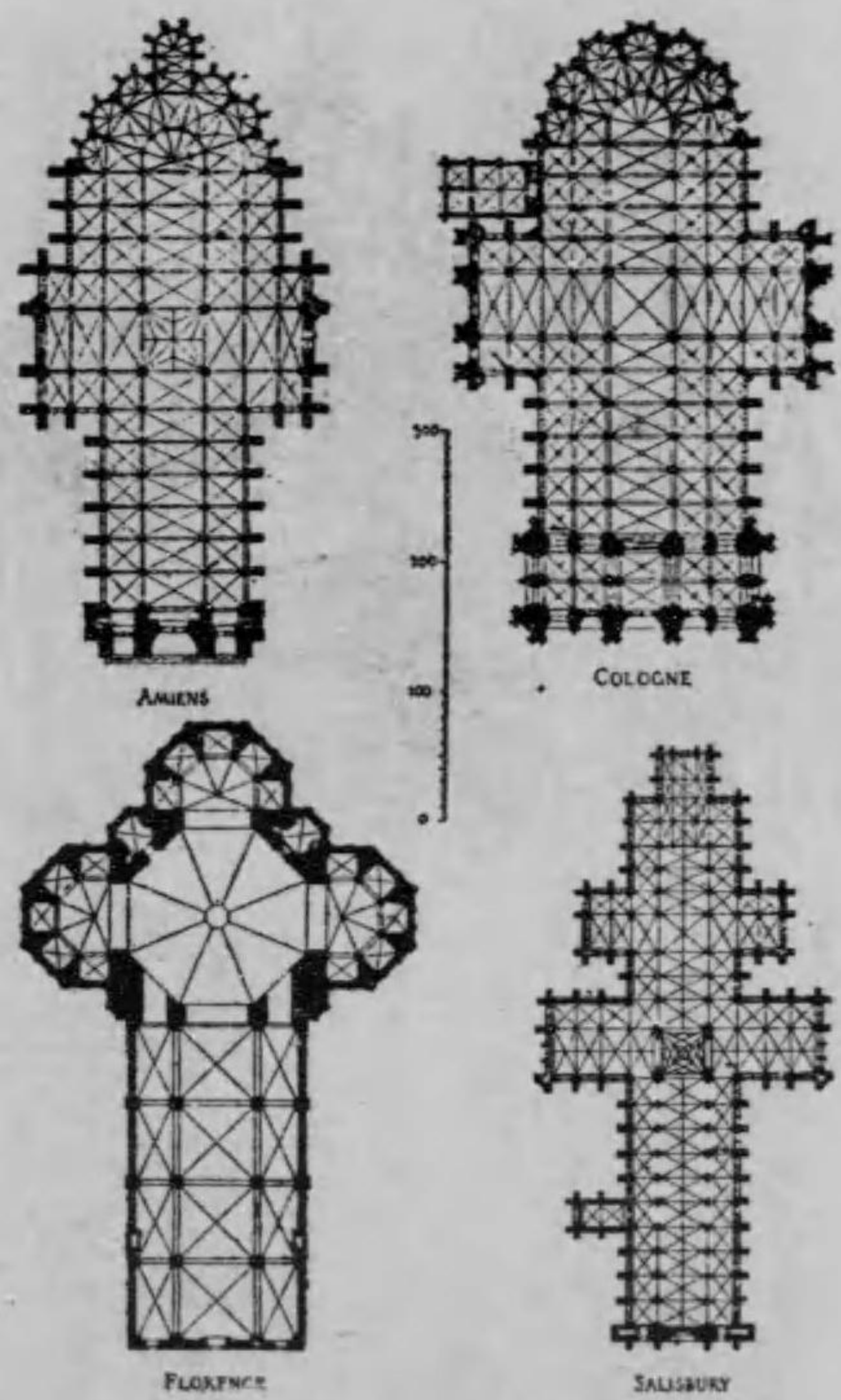
一五二 佛蘭西ゴシックの特色

プランは英吉利ゴシックのプランに比較して、短かく、廣く、一般に高い(第七十二圖)。

(第七十一圖)で、ゴシック建築は宗教上の建築物に限られる事なく、當時のあらゆる建築物に應用せられたことを物語るものである。

袖廊はその出が少く、側面には多数の禮拜所がつくられ、東端の後陣はシユヅエーをなして居る。(第百七十三圖)

第百七十二圖

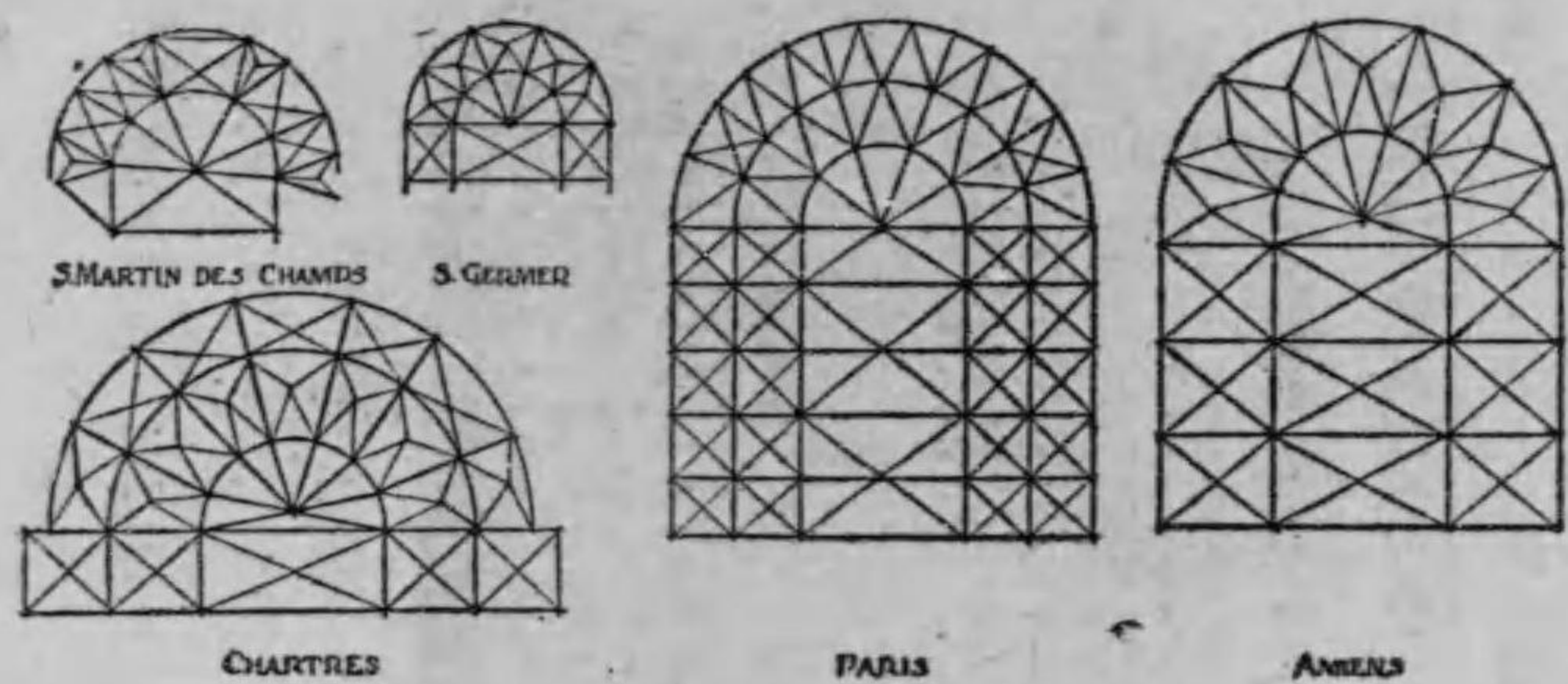


佛蘭西・英吉利・獨逸及伊太利の寺院の平面圖の比較

垂直のものもある。飛控壁は一般に東端多角形の張出を繞りて使用せられ壯觀を極めて居る。扶欄は狭間飾を透してある。(第百七十五圖)

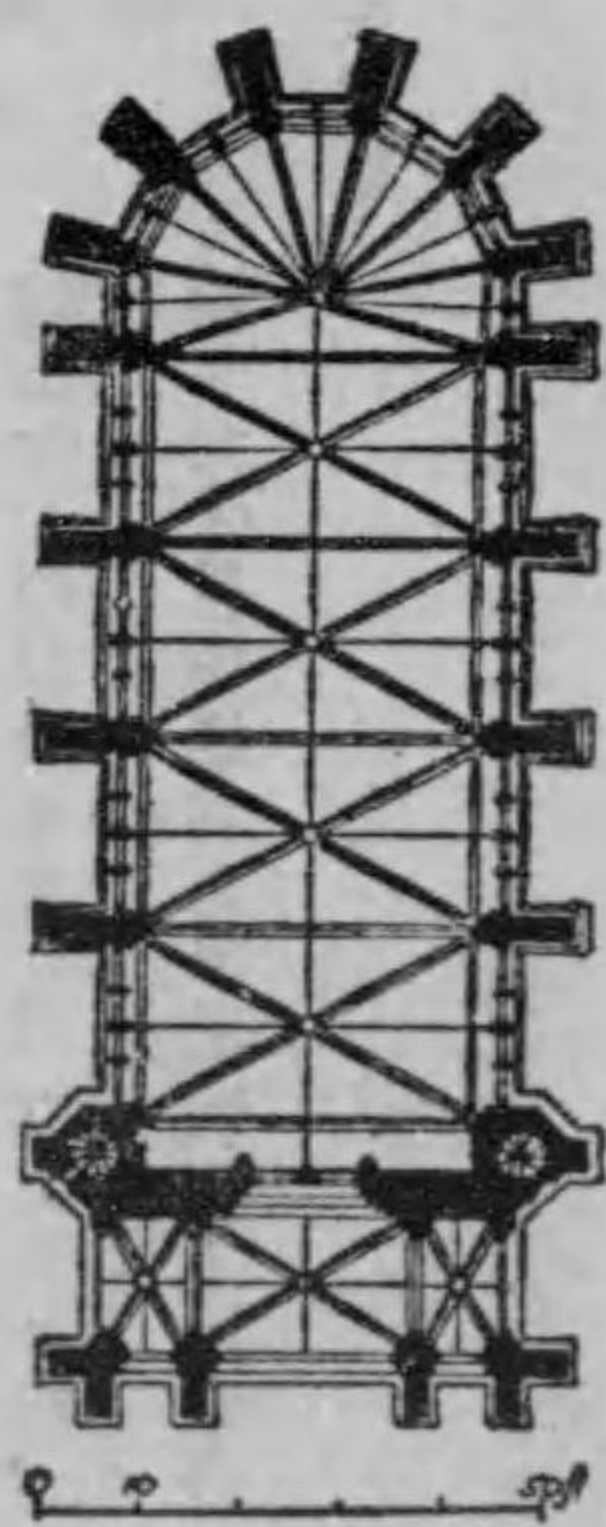
控壁は初期のものはその出が少く、又時として半圓形のものがある。末期のものは出が多く(第百七十四圖)その間に禮拜所が設けてある。控壁は屢々段積につくり殆んど

第百七十三圖



シユヅエーの發達を示す東端部平面圖

第百七十四圖



巴里のセント・シュパールの平面圖

戸口は英吉利ゴシックより大きく且つ優美で、精巧に裝飾せられ、西正面の戸口の入込みは深くつくられて居る。窓には板狭間飾を入れ、末期のものは火焰式狭間飾である。圓窓は西正面と袖廊の妻に設けられ、輻射形又は火焰形の複雑な挟間を入れて居る。屋根は勾配が急で、石盤葺が用ひられて居る。穹窿は佛蘭西ゴシックの特色で、普通圓屋根風である。末期には釣束穹窿が用ひられ、二基の西塔が特徴で

ある。

身廊の柱は無飾の圓柱である。拳葉及び硬き簇葉飾(第百七十六圖)の柱頭が特色である。

第百七十五圖



ルワンの聖マクロ

線形は一般に大きく變化に乏しく、これに反して裝飾的彫像は非常に優秀である。櫛嘴、頂華、拳葉及び持送などの彫刻は花鳥及び動物を以て意匠せられて居る。

嵌色硝子は大いに發達し、その圖案には卓越したものが尠くない。フレスコ繪、これを模した張付壁掛なども美麗なものが多い。

(三) 獨逸ゴシック German Gothic  
一五三 獨逸ゴシック

獨逸ゴシックは第十三世紀頃に始まり、第十六世紀頃には既に失はれて居る。佛蘭西ゴシック

第百七十六圖



佛蘭西ゴシックの柱頭

クに多少の變化を加へた如きもので、その發達の順序は、佛蘭西の如く明かではないが、大體に於て次の五期に分つことが出来る。

- (一) 過渡時代 The Transitional (紀元一一七〇年—一二二五年)
  - (二) 初期尖頭時代 The Early Pointed (紀元一二二五年—一二七五年)
  - (三) 盛飾時代 The Middle or Decorated (紀元一二七五年—一三五〇年)
  - (四) 華麗時代 The Florid (紀元一三五〇年—一五三〇年)
- 一五四 大 寺
- (一) ケルン大寺 (紀元一二二二年)  
Dom zu Köln
- 當時に於ける北歐最大の建築で、長さ四百六十八呎